The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ルーマニア語史概説
Author(s)	ニクレスク, アレクサンドゥル; 伊藤, 太吾
Citation	大阪外国語大学学術研究双書. 1993, 10, p. 1-237
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80080
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪外国語大学学術研究双書10

ルーマニア語史概説

アレクサンドゥル・ニクレスク著

伊　藤　太　吾　訳

1993

大阪外国語大学学術研究双書10

ルーマニア語史概説

アレクサンドゥル・ニクレスク著

伊　藤　太　吾　訳

1993

Publications of Osaka University of Foreign Studies, No.10 1993

Outline History of the Romanian Language

Alexandru Niculescu

Translated by Taigo Ito

© Editura ştiinţifică şi enciclopedică, Bucureşti 1981
This book is piblished in Japan with the permission of the author.

目　　次

訳者まえがき …… 1

1　ルーマニア語のロマンス語学的研究 …… 3

2　ルーマニア人とルーマニア語がラテン起源であることに関する情報と意見 …… 5

3　しかしながら、これらの主張の根底には常にルーマニア人自身がいた! …… 9

4「ルーマニア人」という述語 …… 10

5　ルーマニア語の定義 …… 12

6　ルーマニア語の基層 …… 13

7　ラテン性 …… 22

8　ルーマニア語が出現した地域 …… 30

9　ダキアにおけるローマの連続性 …… 33

10 ルーマニアのローマ性 …… 43

11 ルーマニア語の形成 …… 46

12 カルパチア・ドナウ地域におけるラテン語と非ラテン語世界との接触 …… 50

13 スラヴ族 …… 55

14 スラヴ語とルーマニア語との関係 …… 58

15 共通ルーマニア語 …… 73

16 メグレン・ルーマニア方言とイストゥリア・ルーマニア方言 …… 82

17 移動民族との他の言語的接触 …… 88

18 ペチェネグ人とクマン人 …… 91

19 ルーマニア諸国家の建設 …… 93

20 ルーマニア語におけるトルコ語の要素 …… 97

21 ルーマニア語とギリシア語の接触 …… 101

22 文語ルーマニア語の最古の文献 …… 107

23 16世紀のルーマニア語で書かれたテキスト …… 118
24 1650年頃までのルーマニア語 …… 123
25 16世紀から17世紀中葉にかけてのルーマニア語の特徴 …… 125
26 17•18世紀のルーマニア文化 …… 132
27 17•18世紀のルーマニア語の構造 …… 141
28 トランシルバニア学派 …… 148
29 ワラキアにおけるルーマニア語と
ルーマニア文化のロマンス的西欧化 …… 157
30 18・19世紀におけるトランシルバニアと科学的文化 …… 163
31 1804〜1814年のブダの印刷所における活躍 …… 166
32 トゥドール•ヴラディミレスクの革命時代 …… 169
33 ヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスク …… 172
34 ルーマニア文化の地域間循環 …… 175
35 ルーマニア語の構造(1780〜1840年) …… 179
36 ルーマニアの教養語(1828〜1840年) …… 185
37 ルーマニアの教養語(1840〜1890年) …… 188
38 19世紀における教養ルーマニア語の問題点 …… 198
39 ティトゥ・マヨレスク …… 202
40 20世紀のルーマニア語 ルーマニアの統一時代 …… 206
41 現代ルーマニア語 …… 212
42 結論 ロマンス諸語の中におけるルーマニア語の特異性 …… 225
主な参考文献 …… 231

訳者まえがき

ルーマニア語が系統の異なる種々の言語が行われているバルカン半島の中にあって唯一ラテン語に由来するロマンス語であることを今日何人も疑わないが、ルーマニア語のラテン性を証明するのは実は決して容易なことではなかった。著者のアレクサンドゥル•ニクレスク博士は故ヨルグ•ヨルダン博士の高弟でブカレスト大学文学部ロマンス言語学講座の教授であり、訳者の恩師のひとりであるが、それを実に見事に成し遂げている。 原著(Outline history of the Romanian language, Editura ştiinţifică şi enciclopedică, 1981年)をパリで頂いたのは1982年春のことであった。すぐに訳出を試みたのではあるが、概説書とは言え、ギリシア語•ラテン語•ドイツ語•フランス語•スペイン語•ハンガリー語•トルコ語などがちりばめられていて、しかも内容が文法史に止まらず、政治•社会•文化史にも及ぶ言語史であり、いささか困難を感じざるを得なかった。

原書はチャウシェスク政権下において書かれたものであるが、ニクレスク教授の視点は決して科学的•学問的中立性を崩していなく、満幅の信頼に値するものである。

ロマンス言語学は日本においても幾分の進歩を見てきてはいるが、個別言語、特にルーマニア語に関する知識がないために十分に満足のいくものとはなっていないのが実情であろう。本訳書がロマンス言語学の発展に僅かでも貢献することができることをロマニストとして切に願う次第である。

1993年夏　伊　藤　太　吾

1. ルーマニア語のロマンス語学的研究

ロマンス語圏の他のいかなる地域においても、ルーマニア語圏ほど研究者達がラテン語の存続をしばしば論証する必要性に直面した地域はない。ルーマニア語がラテン語からの継続した言語であるということが一再ならず疑問視され、ルーマニア語が類型学上ラテン系言語であるか否かということが、様々な角度から今までに何回も検討されてきている。

イタリア、ガリア、イスパニア、ルシタニア、あるいは、サルジニアやシシリー島、更に、レト•ロマン地域やフリウランのアルプス地域においてさえ、かつていかなる論証も要求されなかったことが、不思議とダキアに関しては論争の的となった。必ずしも十分に知られていない、必ずしも良く理解されていない、ローマ帝国の東側の地方における、問題の多い歴史を有し、雑多な民族の混住する地域の中にあって、［ラテン的世界からの分離後、「東」から大いに受けた物質的•精神的文化を有する］ルーマニア人が果した類い希な役割は、ルーマニア語がラテン語に由来し、類型学的にもラテン語的であることを、様々な立場の歴史学者達や言語学者達が疑うのに十分な理由となった。

トランシルバニア地方に住むルーマニア人達が1971年に主張した、かの有名な Supplex libellus Valachorum『ワラキア人達の請願書』によって確認されたダキアにおけるロマンス語の継続に関して、ヨセフ•ズルツァー、I. Chr.エンジェル、カール•エデルなどといったオーストリー•ハンガリーの数人の歴史家達は18世紀にさまざまな理由から反論を試みた。彼らは、トランシルバニアの偉大な学者達である、ヨアン•イノチェンツィウ•ミク•クライン（1692〜1768年）、サムエル•ミク（1745〜1806年）、ギョルゲ•シンカイ（1754〜1816年）、ペトゥル•マヨール（約1761〜1821年）などといった言語学者•歴史学者•聖職者達の正当にして、十分に実証された、確固とした逆襲

に会った。その後、19世紀になってからであるが、歴史学者というよりもむしろ作家である、ドイツ人のロベルト・レースラーの意見は、ルーマニア人の歴史学者全員によって論戦が挑まれた。「混交語」という観点から、1893年に "der Beweis, dass Rumänisch eine romanische Sprache ist, ist noch nicht erbracht"(ルーマニア語がロマンス語のひとつであるという証明は、まだ成されていない)［G.ヴァイガント Balkan Archiv I『バルカンの古文書 I』1925年、V頁による］と記したフーゴ・シュヒャルトのような主張をロマンス語学研究の中において我々が目撃してきたのには、実は上述のような理由によるのである。B.コピタル、F.ミクリシ、G.ヴァイガント、K.サンフェルといった---誠意の程は分からないが---ルーマニア語をロマンス語学の面のみにおいてとらえたのでは、安全にして正確な結果は得られないと信じる、バルカン・スラヴ研究の専門家達の但し書きをも、我々は同様に目撃してきている。彼らに対する反応として、セクスティル・プシュカリウ Locul limbii române între limbile romanice『ロマンス諸語の中におけるルーマニア語の位置』［1920年］、W.マイヤー・リュプケ Rumänisch und Romanisch『ルーマニア語とラテン性』［1930年］、E. ガミルシェク Romania-Germanica I II『ゲルマン的ロマーニア I II』［ベルリン-ライプツィヒ、1934-1935年］などといったロマンス語学研究の重要な専門家達の意見を挙げなければならない。上記の専門家達は、ラテン語からロマンス語への発展という一般的傾向を調べることによって、特にロマンス語の通時的現象故に、ルーマニア語をラテン語そのものの骨組の中で記述した。

2. ルーマニア人とルーマニア語がラテン起源であることに関する情報と意見

他方、まず初めに強調しなければならないのは、10世紀中葉のルーマニア人に関する最も早い情報から、18世紀中葉に至るまで、ルーマニア人やルーマニア語がラテン起源であることに何人も疑問を抱かなかったという事実である。このことは、アンドゥレイ•オツェテアの考えを発展させ、広範囲にわたって完璧に資料を熟知した、A.アルムブルステル Romanitatea românilor. Istoria unei idei『ルーマニア人がローマ人の子孫であることについて、ある概念の歴史』[ブカレスト、1972年] によって示された。ルーマニア人がローマ的特徴を有するという考えは、自らがローマ人の子孫であることを意識しているルーマニア人自身によって成された(10〜13世紀)主張から発展し、何世紀もたって国際的な承認 (14世紀) を経て、16世紀に始まるロマンス的西欧(特にローマ•カトリック教会と宗教改革に賛成する諸国家)のオスマン帝国の侵入に対する戦いにおいては、政治的に利用されるようになった。ルーマニア人によって話される言語がラテン語に由来するものであるということが、東ヨーロッパの雑多な地域の中にあって、ルーマニア人の特質を他と区別する特徴であると常に考えられてきた。

ローマ法王イノセント3世が、ヨニツァ美王 [ジョン•カロヤン (1197〜1207年)] に、彼の祖先がラテン人であり、"nos autem audito, quod de nobili Urbis Romae prosapia progenitores tui originem traxerint, et tu ab eis et sanguinis generositatem contraxeris..."(あなたの祖先はローマ市の高貴な家系に由来し、あなたはその高貴な家系から多くを得ていると、聞いている)と指摘したのは意外なことではない[cf.アルムブレステル、前掲書、26頁]。ほぼ同じように、東方を旅行したカトリックの大司教 ---スルタネエのヨハネ[シェルバン•パパコステア Călători străini despre ţarile

române『ルーマニアにおける外国の旅行者達』[I、ブカレスト、1968年]により発見•研究された] ---はワラキアを通過中に、"ipsi ideo jactant se esse Romanos et patet in linguam qui ipsi locuntur quasi Romani"（あたかもローマ人であるかのように話す言葉で明らかなように、ローマ人であることを誇りにしている）ルーマニア人に出会った。

後に、ポッジオ•ブラッチョリーニ（1380〜1459年）は、間接的な情報に基づいてはいるが、その著書 Disceptationes convivales『宴会中の討論』[1451年] において、トラヤーヌス皇帝の時代から居住しているサルマチア人の植民者達が残している幾つかの latina vocabula（ラテン語の単語）を記録した: "oculum dicunt, digitum, manum, panem, multaque alia quibus apparet ab Latinis, qui coloni ibidem relicti fuerunt, manasse eamque coloniam fuisse latino sermone usam"（植民者として残り、ラテン語を使用するのに慣れたラテン人特有の "目"、"指"、"手"、"パン" その他多くの単語を彼らは口にする)。

厳酷にして極めて重大な危険に満ちた、数世紀にわたる対オスマン帝国戦において、ルーマニア人によって用いられた言語がラテン語を保持しているということは、歴史に忠実な行為であり、永続力と生き残る意欲の証として、西欧世界から評価された。ナポリ王でもあるアラゴン王アルフォンソ５世（1416〜1458年）が "vulgari communique gentis suae more dicunt, rusticam male grammaticam redoleant latinitatem" （平民は平民なりの話し方をし、その粗野な文法はあまりにもラテン語的である） と言うのを聞いたフラヴィオ•ビオンド（1388〜1463年）はアルフォンソに対してローマ起源の Ripenses Daci sive Valachi（河岸地帯のダキア人すなわちワラキア人）が "quam ad decus prae se ferunt praedicantque romaneam"（ラテン語を栄誉とし、ラテン語をローマ風言語と呼んでいる）と言っている。

エネア•シルビオ•ピッコロミーニは、ローマ法王ピオ２世（1458〜1464年）になってからも、イタリア語に似たロマンス語を話す複数の民族の歴史並び

に語源の説明を "pro Flaciis Valachi appelati"（ワラキア人と呼ばれるフラキア人のために）試みさえした:"Valachi lingua utuntur Italica, verum imperfecta et admodum corrupta; sunt qui legiones Romanas eo missas olim censeant adversus Dacos, qui eas terras incolebant."（ワラキア人は、不完全にそしてとても乱れてはいるが、イタリアの言葉を話す; ワラキア人とは、ローマの複数の軍団が送られて、ダキアとして承認された所に住む人達のことである)。同じころ、パドアの学者アンドゥレア•ブレンタは、アテネのデメトゥリウス•カルコンデュラスという恩師から得ていた情報に言及していて、サルマティアのスキティアには "nobilissima et potentissima"（非常に堂々としていて非常に強力な）要塞があり、その中では、"ita verba nostratia sonant, ut nihil suavius sit quam illos antiquo more romano loquentes audire"（旧ローマ風に彼らが話すのを聞くことほど他に楽しいことがない程、彼らの言葉は我々の言葉と同じように響く）と言っている。

ルーマニア人の隣人達は、ルーマニア人に対して、ほぼ同じような考えを持っていた。15世紀には、ハンガリー王マシアス•コルビヌスの宮廷お抱えの多くの人文主義者達［彼らの中には、アレッサンドゥロ•コルテージやアントニオ•ボンフィーニがいる］は、「ワラキア人」がローマの子孫であるという事実を証明して、"Valachi enim e Romanis oriundi, quod eorum lingua adhuc fatetur, quum inter tanta varias Barbarorum gentes sita adhuc extirpari non potuerit"（ワラキア人はローマ人の子孫であり、まだラテン語を話している。ワラキア人の周囲には数種の民族がいるが、ラテン語は根絶していない）と言っている。ルーマニア人がトランシルバニアにおけるローマ人の子孫 "Blachi, pastores Romanorum"（ローマ人の羊飼い、すなわち、ブラック人）であることを最初に確認したのはハンガリー王の宮廷からである。このことは13世紀のハンガリー王ベラ４世の匿名の書記や別の書記であるシモン•デ•ケザによって記録されている。1490年、ポーランドの王の政治顧問であるフィリッポ•ブオナコルシ•カリマコは、ローマ法

王イノセント8世の前で読まれるはずの演説を起草したが、その中で、ルーマニア人とルーマニア語がローマの子孫であるということが主張された: "eadem ubique lingua et praeter Romanorum coloniam Valachiam gentes omnes eadem primordia profitentes"（あらゆるところで同じ言葉が話され、その上、全ての人達がワラキアが初めからローマ人の植民地であることを認めている)。クラクフの枢機卿ズビグニューが、歴史に関する議論の中で、ワラキア人がローマの植民者達の子孫であるということを忘れずに言ったのは、ほぼ同じ頃のことであった。

主としてカトリック系のヨーロッパの知識人達によって13〜15世紀に広められた上記の正しい考えは、16世紀の宗教改革の時まで発展し続けた。プロテスタント系•カルヴァン系のヨーロッパの国々では、バーゼルのセバスティアン•ミュンステルやヨハンネス•ホンテルス---ブラショヴ（トランシルバニア）に住んだ最大の文化人---といった主要な知識人達が、自分達の書いた『宇宙地理学』を通じて、ルーマニア人の起源は 「かつてダキアを支配したゲタエ人とフラックスの指揮下にあったローマ人」にあると、全世界に向かって言った［Flachia, Valachia, Vlahia, Blahia などという名前の起源に関しては、前述のことや後述のことを参照されたい］。セバスティアン•ミュンステルは、「ある人達は、ワラキアの数カ所ではローマの言葉が変化せずに残っていると書いている」と付け加えている［cf.アレクサンドゥル•ニクレスク România literară『文学的ルーマニア』51号、1977年、8頁］。チュービンゲン大学の著名な言語学者エウジェニウ•コセリウは、ルーマニアの事情に精通したヨーロッパ人達を通じてそのような情報が西欧に伝わり、その結果としてアンドゥレス•デ•ポサ、ピエール•セルジャン、ジルベール•ジュヌブラールなどといったスペインやフランスの文化人達がルーマニアの現実に精通することができた、と数多くの重要な研究の中で述べている。

3. しかしながら、これらの主張の根底には常にルーマニア人自身がいた！

西欧の知識人達が自分達が接触したルーマニア人達から学んだルーマニア語がラテン語に由来するということについての所説を広めたという考えをエウジェニウ•コセリウが強調したことは正しい。ルーマニア人のラテン性は、イタリア人やドイツ人や他の外国の知識人達によって「発見」されたのではなく、エウジェニウ•コセリウが言うように、「イタリア人やドイツ人や他の外国の知識人達に伝えられた」のである。ルーマニア人は、いつでもどこでも、自分達がラテン起源であることに気付いていたし、自分達がローマの子孫であり、ラテン語の話者であることに気付いていた。このことは、取りも直さず、ルーマニア人が常に伝統の保持者であったということを意味する。ルーマニア人は、ラテン起源でラテン的構造を有する自分達の言葉を、世代から世代へと大切にしてきたので、ヨーロッパのこのようなところにあって、国家としての主権を勝ち取り、ヨーロッパの注目をあびる役割を果すことができたのである。

4. 「ルーマニア人」という述語

東ヨーロッパのこの地域のどこにルーマニア人がいようとも、ルーマニア人という単語は romanus（ローマ人）と同等もしくは、romanus に直接由来するものであると考えられてきた。古ゲルマン語の *Wlahos は後に古スラヴ語で vlah、voloch と成り、ルーマニア人を呼ぶのに Vlahi、Vlasi、Valahi（ワラキア人） と言っていたが、これらは元々は、ローマ人を指していた。român（ルーマニア人）［「o」の綴りに注目されたい］という単語は、ルーマニア語では1581年の Palia de la Orăştie『オラシュティエの旧約聖書』［旧約聖書の最初の２書］に初めて現れた。17世紀からディミトゥリエ•カンテミール（1673〜1723年）やサムエル•ミク•クライン（1692〜1768年）に至るまでのルーマニア人の書記の伝統は、rumân（「ルーマニア人」並びに「農奴」）と roman（ローマ人）という２つの単語の緊密な、あるいは、同一の実態を示していた。rumân という単語は、コレシ補祭が16世紀に発行した Apostol『使徒行伝』に現れている［cf.G.ジュグレア、Biserica ortodoxă română『ルーマニア•オーソドックス教会』LIII、1935年、5-6頁、226-228頁］。rumânilor-rîmlenilor（ルーマニア人達）という形態は、ミハイル•モクサの Cronograf『記秒時計』[cf.アレクサンドゥル•マレシュ SCL、XXIII、1972年］に現れている。rumân（「ルーマニア人」並びに「ローマ人」）という形態は、サムエル•ミク•クラインの Scurtă cunoştinţă a istoriei românilor『ルーマニア史便覧』［cf.Şcoala ardeleană『トランシルバニア学派』---F.フガリウ編、I、150-151頁］に現れている。そして、ディミトゥリエ•カンテミールは、Hronicul romano-moldo-vlahilor『ローマ•モルドヴァ•ワラキア年代記』を書いた。român という単語の歴史は、V.アルヴィンデの Cronica『年代記』［22号、1-3頁、ヤシ、1976年］に詳しい。同様に、歴史家グリゴレ•ウレケ（1590〜1647年）の "de la Rîm ne

tragem”（我々はローマより来たれり）とミロン•コスティン（1633〜1691年）の ”de la descălecatul cel dintîi carele au fostu de Traian Împăratul”（トラヤーヌス皇帝による最初の建国以来）という、ルーマニアの歴史書の中に見られ人口に膾炙された主張によっても、「ルーマニア人」という単語の歴史が良く説明されている。そして同様に、ディミトゥリエ•カンテミールは、ルーマニア人の言葉がラテン語起源であることを理解し、”românii din Dachia, carii astădzi sînt moldovenii, muntenii şi ardelenii, sînt de niamu lor hirişi romani de la Italia, de Traian împărat pre aceste locuri aduşi”（ダキアのルーマニア人は、今日モルドヴァ人•ワラキア人•トランシルバニア人と成っているが、起源的にはローマ人であり、トラヤーヌス皇帝によってイタリアからこれらの地に連れて来られたのである）[『ローマ•モルドヴァ•ワラキア年代記』38頁] と言っている。

以上のこと全てによって、ルーマニア人が常に---中断することがあったけれど---自分達はローマ人と結合していて、ローマ人からの不断の存続であるということを意識していたということが証明される。存続という概念は、人文主義の学者達が後世になって捏造したことではなくて、自分達はローマ人からの直接の子孫であると常に変わることなく意識していた事柄である。

5. ルーマニア語の定義

従って、ラテン語を通してルーマニア語を定義することは、方法論において絶対に欠くことのできない基本的な真実となる。A.メイエの考えを応用して、系統的な観点からルーマニア語を、「ローマ化されたドナウ諸州［ダキア、南パンノニア、ダルダニア、上下モエシア］を含むローマ帝国の東部において、ラテン語の侵入時から今日まで中断されることなく話し続けられたラテン語である」［Istoria limbii române『ルーマニア語史』1978年、77頁］と特徴付けたのは、A.ロセッティ［1895年生まれ］であった。この言わんとするところは、その発展のいかなる瞬間においても、複数の非ラテン語［主として、スラヴ語、ギリシア語、ハンガリー語、トルコ語、などの地方語］との接触によってもその本体が変わることのなかった、良く定着した体系の中で、ラテン語は自己に忠実であったということである。「ドナウ河の流域地方において、子々孫々にわたってラテン語を伝えて来た人達は、唯一つの言葉すなわちラテン語を話しているということを常に意識していた」［A.ロセッティ『ルーマニア語史』］。

ルーマニア語を上のように定義したからといって、ルーマニア語が独特な発展をしたことによって、類型学的にラテン語とは異なる言語であるという事実を隠匿しようとするものではない。他の言語［フランス語、イタリア語、サルジニア語、スペイン語、ポルトガル語、カタルーニア語、プロバンス語、フランコ•プロバンス語とレト•ロマン語の諸方言及び今は消滅したダルマチア語の諸方言］同様に、ルーマニア語はロマンス語である。ルーマニア語は、ラテン系ヨーロッパの東部で発達した唯一のロマンス語である。

6. ルーマニア語の基層

ラテン語は、ダキアで原住民たるトラキア・ダキア人によって採用された。ex toto orbe romano（ローマ世界のあらゆるところから）来たローマ化の履行者達［商人、ローマの軍隊、退役軍人、行政官、農夫達］によって、カルパチア山脈やドナウ河に齎されたラテン語がルーマニア語である。それは、ラテン的世界の下層・周辺に位置する社会・文化的環境に属していた、あまり教育程度の高くない人達によって話されていた同質異像のラテン語であった。この「俗なる」ラテン語と幾つかの社会・文化的多様性［sermo castrensis（軍人言葉）、sermo plebeius（平民言葉）、sermo rusticus（田舎言葉）、sermo quotidianus（日常の言葉）など］が、土着の言語的特徴をなお保持し続けるトラキア人やダキア人によって採用された。

自らの言葉を放棄してラテン語を採用した後に消滅してしまった民族の言語を特定化することは、非常に困難なことである。H.シュヒャルト自身ルーマニア語の基盤になっているラテン語は、"nur der Kürze wegen"（ただ簡潔さのために）ダキア語であると彼が考える土着語の "vielen tiefen Spuren"（多くの深い痕跡）によって特徴づけられると考えた［cf.Der Vokalismus des Vulgärlateins『俗ラテン語の母音組織』III、1968年、43頁: "Dakische Bestandteile als solche in der walachischen Sprache nicht nachweisbar sind"（ワラキア語におけるダキア語の構成要素は証明不能である)]。トラキア・ダキア人が話していた言葉を知る材料は、実に貧弱である。まず最初に、BC５世紀のものとして、ブルガリアはエゼレヴォで発見された指輪に刻まれた銘刻があり、P.ケレチュメル、D.デチェフ、H.ヒルトといったトラキア学の専門家達が指輪の上の連続した銘刻文の解読を試みたが、満足のいく解釈はできていない。その他に、ギリシア語の辞書編集者達によって70〜80の単語が収められているが、それらは植物名や人名であり、

印欧語の語源学者達や比較言語学者達は、それらを部分的にしかも用心深く利用することができるだけである。この語彙の問題に関する慎重な研究者の1人としてルーマニア人のトラキア学者 I.I.ルスがいるが、彼の著書 Limba traco-dacilor『トラキア人とダキア人の言語』[1959年] と Elemente autohtone în limba română『ルーマニア語における土着語の要素』[1970年] は、ルーマニア語彙の基層の研究にとって基本的なものである。I.I.ルスは、カルパチア山脈の周囲やドナウ河流域のラテン語には、「服従させられた複数の民族の固有語に由来する孤立した単語があり、それらはルーマニア語のラテン的主要部内に単なる異質の断片として残っているだけであり、"蛮族" の言語は、威信がはるかに高く公用語であるロマンス・ラテン語によって（二言語併用という中間段階の後）排除された。他方、公用語であるロマンス・ラテン語は、基層語から多くの語彙的影響を避けることができなかった。基層語は、そのような訳で、属州のローマ化された人達のロマンス語の中に語彙の一部を "貯金" した」[『ルーマニア語における土着語の要素』111-112頁] という事実に注意を促した。

興味深いことに、ダキア語の植物名がディオスコリデス [AD 1 世紀] の薬草学書に現れているとのことである [cf.H.ミハイエスク、Dioscoride Latino, De materia medica『ディオスコリデスによるラテン語の手引、医学について』I、ヤシ、1938年]。そして、ダキア語の植物名のダキア・ラテン語への編入は、多分 3 世紀に完成したであろう。

土着の単語の在庫は、どの程度豊富であっただろうか。I.I.ルスは、「明確に印欧語起源であるということが分かり、スラヴ的要素よりも遥かに古く、ラテン的要素と同時代のサテム系印欧語に属する単語」という規準に従って、ルーマニア語におけるトラキア・ダキア起源の語彙的要素を160と断定した [『トラキアとダキアの言語』130頁]。それらの130の単語のうち、68ないし70の単語がアルバニア語にも同様に見られ、約80〜90の単語はアルバニア語には存在しない [『ルーマニア語における土着語の要素』91頁]。アルバニア語と共通の単語が多いということは、両言語に共通性があった時代の基層語

から伝えられたものに違いないということが、数多くの規則的音韻変化の一致によって証明される。

これらの単語の語源の一部が論争の的になってきた。そして、幾つかの単語に対して反論や制限が加えられてきた。それでも尚、次に見られるような単語に関しては、数多くの研究者達によって、トラキア・ダキア語起源であることが確認されている: abure（蒸気）、argea（織機）、baci（牧童頭）、balaur（大蛇）、balegă（家畜の糞）、baltă（沼沢地---スラヴ語の影響も見られる）、barz(ă)(コウノトリ)、bască（毛を刈った）、brad（樅の木）、brînză（チーズ）、brîu（男性用の広いベルト）、brustur(e)(ゴボウ)、buc（麻くず）、bucura（喜ばせる）、bucurie（喜び）、bunget（茂み）、buză（唇）、căciulă（毛皮の帽子）、călbeză 又は gălbeză （羊痘）、căpuşă（ヒツジシラミバエ）、căpută（靴底）、cătun（小村）、ceafă（うなじ）、cioară（烏）、cioc（くちばし）、ciucă（頭）、ciuf（房）、 ciump（切り株）、ciupi（つねる）、ciut 又は şut（角のない）、copac（樹木）、copil（子）、curpen 又は curpăn（蔦）、cursă（罠）、daş（子羊）、droaie（無数）、druete（幻）、fărîmă（一片）、fluier（笛）、gard（垣根）、gata（用意ができた）、ghimpe（刺）、ghionoaie（キツツキ）、ghiuj（老人）、gogă（カカシ）、grapă（まぐわ）、gresie（砥）、groapă（穴）、grumaz（首）、grunz（塊）、guşă（餌袋）、hameş（貪欲な）、jumătate（半分）、mal（川岸）、mazăre（エンドウ）、măgură（丘）、mărar（イノンド）、mînz（若駒）、moş（老人）、mugur（芽）、murg（鹿毛の（馬））、muşcoi 又は mîşcoi（小さなロバ）、năpîrcă（マムシ）、noian（大量）、pîrîu（小川）、pupăză（ヤツガシラ）、rînză（砂袋）、searbăd（味気のない）、scăpăra（火花を発する）、scrum（灰）、sîmbure（果物の種）、spînz（ヘリボー）、spuză（温かい灰）、sterp（不妊の・不毛の）、strepede（チーズにつくウジ虫）、strungă（羊小屋の入り口）、şale（腰）、şopîrlă（トカゲ）、ţap（牡の山羊）、ţarc（囲い）、ţeapă（棒）、urdă（羊乳軟チーズ）、vatră（かまど）、viezure（アナグマ）、zară 又は zăr（バターミルク）、zgardă（犬の首輪）[cf.A.ロセッ

ティ『ルーマニア語史』271-283頁; I.I.ルス『ルーマニア語における土着語の要素』131-216頁]。

I.I.ルスは土着語起源の単語として、a curma（断ち切る）、a dărîma（破壊する）、măturǎ（ほうき）、păstaie（豆のさや）などを挙げてはいるが、他の語源学者達が一様に認めている訳ではない。

ある種の接尾辞と語彙的派生辞の中にも同様に、土着語起源と思われるものがある。A.グラウールは、Romania『ローマニア』[53号、539頁以降]で、名詞から形容詞を派生させる語尾 -esc はトラキア語の可能性があるという説を主張している［一方、G.ボンファンテは、-esc はイルリア語かトラキア系イルリア語であるとしている]。ルーマニア語の uşor（軽い•簡単な）[＜ ラテン語の levis-levior] に見られる接中辞の -ş- ［アルバニア語の -sh-] は、coacăzǎ（スグリ）、pupăzǎ（ヤツガシラ）に見られる接尾辞 -zǎ ［アルバニア語の -zë] 同様に、アルバニア語にも見られる。

他方、アルバニア語と共通に有している諸要素を、土着語であるとか古いものであると考える過ちを犯してはならない。しばしば指摘されたように、19世紀以来バルカン諸語［ブルガリア語、アルバニア語、現代ギリシア語]は、ルーマニア語と類似した数多くの語彙と構造を示してきている。Wiener Jahrbücher der Literatur『ウィーン文学年鑑』[XLVI、1829年、86頁] で B.コピタールは、"so dass also, noch bis auf dieser Stunde nördlich der Donau in der Bukowina, Moldau und Walachey, Siebenbürgen, Ungarn, ferner jenseits der Donau, in der eigentlichen Bulgarey, dann in der ganzen Alpenkette des Hämus, in der ausgedehntesten alten Bedeutung dieses Gebirges Macedoniens, im Pindus und durch ganz Albanien nur eine Sprachform herrscht, aber mit dreyerlei Sprachmaterie"（つまり、それ故に、なお今日に至るまで、ドナウ河の北のブコヴィーナ、モルドヴァ、ワラキア、北部地方、ハンガリーにおいて、更に、ドナウ河の向う側の元々のブルガリア、マケドニアの山脈の最も拡大した古い意味でのジナルアルプスの全山脈、ピンドゥス山脈、そ

して全アルバニアにわたって、唯一の言語形態が支配しているのである。ただし、3種の言語素材をもつ言語形態ではあるが）と、幾分誇張ぎみに主張している。K.サンフェルは linguistique balkanique（バルカン言語学）という述語を考案し、1938年には N.S.トゥルベツコイが Sprachbund（言語の束）---すなわちバルカン言語連合---という述語を創造した。

ルーマニア語とアルバニア語の言語的関係についての深い徹底的な分析は、Originea românilor II『ルーマニア人の起源 II』、Ce spun limbile română şi albaneză『ルーマニア語とアルバニア語から何が推断されるか』［ヤシ、1927年］の中で、A.フィリピデによって成されている。T.カピダンは、1936年にルーマニア•アカデミー会員に選出された際の演説［cf.Limbă şi cultură『言語と文化』ブカレスト、1943年、175-215頁］の中で「バルカン的ローマ性」ということに細心の注意を払った。

Trace et latin dans l'Europe de sud-est pendant l'antiquité『古代における東南ヨーロッパのトラキア語とラテン語』［Revue Roumaine de Linguistique XXIV、1979年5号に収録］において、A.ロセッティは、バルカン諸語からの相互影響や借入によってルーマニア語が有している諸要素を、基層語に基づいているものとは別に、非常に明瞭な方法で選り出した。『バルカン言語学』の中でサンフェルが記述した、アルバニア語と他のバルカン諸語との一致は、数多くの統辞的構造同様に、特に音韻的現象や語彙の面に関係している。バルカンの全ての言語は、ギリシア語［中世ギリシア語、ビザンティウムのギリシア語、現代ギリシア語］の単語、ロマンス語［古代ラテン語から発達したラテン系言語、並びにビザンティウムのラテン語、更に、中世イタリア語---特にベネチア語、そして最後に、ルーマニア語］の単語、並びに、アルバニア語、スラヴ語及びトルコ語の要素を示している。

殆ど同じように、バルカンの全ての言語は、複数の相似した固有語の出現の原因となり相似した、又は、共通の意味的発展の多くの例を提供している［ペレクレ•パパハジ、Parallele Ausdrücke und Redensarten im Rumänischen, Albanesischen, Neugriechischen und Bulgarischen『ルーマニ

ア語、アルバニア語、現代ギシシア語、及びブルガリア語における相似した表現と慣用句』; A.フィリピデ『ルーマニア人の歴史 II』[691頁以降] ; E.サベージュ Parallele Ausdrücke und Redensarten in den Balkansprachen『バルカン諸言語における相似した表現と慣用句』[Revue internationale des études balkaniques II、1933年、226頁以降に収録] ; セクスティル•プシュカリウ、A.グラウール、Gr.ブルンクシ、その他複数の人達による研究]。ルーマニア語の cu sufletul la gură [逐語的には「口に魂を」、転じて「我を忘れて」•「逆上して」の意]、a se apăla pe ochi [逐語的には「自分の目を洗う」の意]、unul şi unul [逐語的には「ひとつずつ」、転じて「良く選ばれた」の意]、a scoate sufletul [逐語的には「人の魂を引き抜く」の意、転じて「人を疲れさせる」の意]、te mănîncă spinarea [「打たれて、君の背中が痛む」の意]、a se apuca de ceva [逐語的には「何かを捕える」、転じて「何かに取り掛かる」の意] などの表現は、他のバルカン諸語にも見られる [cf.A.ロセッティ『ルーマニア語史』284-286頁]。A.フィリピデは、他のロマンス諸語には属さずに、もっぱらバルカン諸語にのみ属する対応例を挙げている [cf.前掲書 692頁]。

ルーマニア語とアルバニア語との関係については、より多くの対応する資料を挙げる必要がある。音声面においては、類似した音声環境において、/ə/型の母音 [ルーマニア語の ă、ブルガリア語の ъ、アルバニア語の ë] がルーマニア語、アルバニア語、ブルガリア語において発展したのは偶然ではあり得ない。ルーマニア語とアルバニア語においては、/ə/は 非強勢の時もあれば [ルーマニア語の cămașă、アルバニア語の këmishë、共に「シャツ」の意]、強勢を帯びる時もある [ラテン語の「 a + 鼻子音」: ルーマニア語では cîntec、アルバニア語では këngë [< ラテン語 CANTICUM「歌」の意] ;アルバニア語のゲグ方言では、ë は非強勢の位置でしか現れない]。W.マイアー•リュプケは、Rumänisch, Romanisch, Albanesich『ルーマニア語、ロマンス語、アルバニア語』[Mitteilungen des Rum. Inst. zu Wien I、1914年、40頁] の中で、ルーマニア語の母音/ə/は、ラテン語の非

強勢の a を閉じる［cf.ポルトガル語 casa「家」、南イタリア語 casə「家」］というロマンス諸語の一般的傾向でも説明可能であると考えている。それにも拘わらず、母音/ə/の分布はルーマニア語においては異なり、強勢位でも現れ［mîncă「彼は食べた」］、語頭でも現れることがある［ăla「あの」•「あれ」、ăsta「この」•「これ」---指示形容詞•指示代名詞---］し、数は少ないが、語中に現れることもある。しかしながら、ルーマニア語の ă の処理と分布は、特別な発達の結果として生じたものである。

ルーマニア語がアルバニア語と共有する別の音声的現象は -n- のロータシズムである。アルバニア語においては、ロータシズムはトスク［北部］方言のみに現れ、他方、ゲグ［南部］方言においては、先行母音の鼻音化が見られる。-n- のロータシズムは、ルーマニア語においてはラテン的要素のみに現れるが、アルバニア語においては、スラヴ語起源の単語や現代ギリシア語起源の単語にさえ見られる。このことは、アルバニア語が複数の方言に分かれた後の新しい現象であるとする A.ロセッティ［Études sur le rhotacisme en roumain『ルーマニア語におけるロータシズムの研究』［パリ、1924年、 43頁以降］の説を確証するように思える。ラテン語の -n- から -r- への変化は、基層語の影響やルーマニア語とアルバニア語との接触ということでは、説明がつきにくい。

ラテン語の子音結合 ct, cs ［＞ ルーマニア語 pt, ps、アルバニア語 ft／it, fš／š］の処理は、両言語の類似性を示すものである。我々は、Latinitatea limbii române. Probleme de cronologie relativă. Cursurile de vară ale Universităţii Bucureşti『ルーマニア語のラテン性、相対的年代の諸問題』［ブカレスト大学夏期講習、1979年、11-14頁］において、アルバニア語における二重の母音処理は異なる時代に属するものであり、他方、ルーマニア語の pt, ps は一般的かつ原則的で、非常に少ない例外しかないということを示した: a lăsa（させる•許す ＜ LAXARE)、masea（臼歯 ＜ MAXILLA)、a ieşi（外出する ＜ EXIRE)、leşie（灰汁 ＜ LIXIVA); 子音結合 CS に関して、例外は、coapsă（腰)、frapsăn［現在は frasin］

(トネリコ)、a flutura (振る)、a derecta (整頓する)、a arăta (示す)、などであり、CT という子音結合に関しては、luptă (戦い)、cuptor (かまど)、opt (8)、などを例外として挙げることができる。

以上の事柄によって、ルーマニア語の全ての方言における唇音化は、アルバニア語の唇音化と部分的でしか一致しないということが証明された [cf. サンフェル『バルカン言語学』126頁:"la conexion entre roum. pt, ps, et alb. ft, fš, dépend de la manière dont on se représente le développement" (ルーマニア語の pt ps とアルバニア語の pt fš との関係は、その発展を想像する態度によって異なる)]。ルーマニア語においては、この現象は方言への分化以前に現れたことであり、その結果全ての方言において認めることができる。

形態•統辞面において、バルカン諸語は (定) 冠詞の後置という現象を共有する。ルーマニア語とアルバニア語においては、冠詞の後置は限定形容詞の後置と協調している: ルーマニア語の omul bun [英語に直訳すると、man the good] (その良い人)、アルバニア語の njeriu i dijshën (その賢い人) はラテン語の homo ille bonus (その良い人) に対応している [cf. ハシュデウ Cuvente den bătrîni『古い民話』II、611頁以降; A. フィリピデ『ルーマニア人の起源 II』596−598頁、A.グラウール Romania、LV、1929年、A.ロセッティ『ルーマニア語史』、257-260頁; A.ニクレスク Individualitatea limbii române II『ルーマニア語の特異性 II』208-210頁]。

ほぼ同じように、ルーマニア語とアルバニア語は、前置詞句を作る時に、冠詞を名詞に付けない: アルバニア語 vate në pallát、ルーマニア語 s-a dus la palat [英語で逐語的には he went to palace] (「彼はその宮殿へ行った」の意)。

第3人称の女性代名詞は、単数•複数とも、ルーマニア語においてもアルバニア語においても、中性として用いられる [cf.サンフェル『バルカン言語学』132-133頁]。以上のような、ルーマニア語とアルバニア語が共有している音声的、形態•統辞的特徴を、両言語の起源、すなわち、両言語が誕生

した（と思われる）地域の同一性のせいにすることは殆どできない。アンドレ・デュ・ネイが The Early History of the Rumanian Language『古ルーマニア語史』［ジュピター・プレス、イリノイ、1977年、50頁］の中で最近主張したように、アルバニア人の祖先がローマ化のために自分達の言語を失ったという主張に基づく、アルバニア人とルーマニア人がドナウ河以南において共通の起源を有する、という仮説を確かめることは殆ど不可能である。事実はむしろ、同一とまではいかなくても、関係のある、もしくは、共通の土着的背景を基礎とした、接近した地域における発展を示唆している［cf.Revue roumaine d'histoire『ルーマニア歴史論評』1980年3号におけるデュ・ネイの著書に関する我々の論評:「ルーマニア語の基層は、アルバニア語の基層と関連性はあるが、同一ではない。アルバニア語とルーマニア語は、異なった発展をして来た」。

7. ラテン性

ラテン語とゲト・ダキア人の言語との接触によって、ローマ人の征服者達が話していた言語[すなわちラテン語]が、土着民の言語に取って代わった。換言すれば、ゲト・ダキア人は、自らが話すラテン語に数多くの土着の語彙的・音声的要素を保存しつつも、ラテン語を学んだのである。それらの古い要素の主要な特徴は、人体・生活・動物・植物・放牧・地形などといった「＋ 具体的」特徴を有するものや幾つかの動詞を含んでいるが、ルーマニア語の全ての方言[ダキア・ルーマニア語が最も多いが]に認められる[cf.I.I.ルス『ルーマニア語における土着語の要素』103-104頁]。

しかし、全てこれらは1つの言語の遺物に外ならない。いかなる文法的道具、文法的構造を構成するいかなる要素[代名詞・接続詞・前置詞・動詞の活用語尾]、すなわち、一言語の一貫性を確実にする何物も、ゲト・ダキア人の言語から我々には何も伝わっていない。それ故に、その言語を使用していて後にラテン語を採用した人達の言語意識の衰退と消失を認めざるを得ない。一言語の消失は全く自然な現象であり、それは、征服者の言語の文化的・政治的・社会的威信によって説明することができる。

ほぼ同じようなことが、ローマ帝国の他の地域でも起こった: ガリアにおいては、ケルト語を話す土着民が自分達の採用したラテン語に、植物・鳥類・樹木・果物・農具・家具などの具体名詞を貸与した。I.I.ルスは『ルーマニア語における土着語の要素』[115-116頁]で、フランス語に保存されているケルト語の要素の数［180］は、ルーマニア語におけるゲト・ダキア語の要素の数［160］と同じであることを指摘している。ほぼ同じように、イベリア半島のラテン語は、数に限りがあるとはいうものの、基層語であるイベリア語、ケルト語、ケルト・イベリア語の要素［地名・食物・動物・衣類などの名前］を吸収した。

ゲト・ダキア基層語の要素と、ローマ帝国の他の地域のラテン語に吸収されたラテン語以前の諸言語がたどった運命には、いかなる差異も認められない。ラテン語は、土着民の文化・文明に勝るローマの文化・文明の道具であったので、信望のある言語が求める全ての必要条件を満たしていた。土着民のローマ化がその結果であり、その証拠であった: ローマに征服された殆ど全ての場所において、ローマ人の言語と文化は自己主張をした。

ローマ人によるダキアの征服は、ローマ帝国が最大版図に達し、既に征服・植民・ローマ化を達成し、物質・精神の両面におけるラテン的文化が最高潮に達した AD 2 世紀に成された。ダキアは、中央ヨーロッパと南ヨーロッパを、大西洋と黒海を、地中海とライン河とドナウ河を結ぶ［物質的でもあり、精神的でもある］言語と文化によって侵略されたのである。

しかし、ゲト・ダキア世界とラテン語との接触は、もっと前に始まっていた。考古学的発掘によると、ローマ人によるダキア征服の 2 世紀も前にラテン文化がドナウ河の北に既に広まっていたということが分かる。その証拠は、ローマ時代の硬貨[BC 1 世紀にさかのぼる、チェタツェニ・ドゥンボヴィッツァで発見されたものは、ラテン文字で PETR という銘刻がある]や、破損した陶磁器[BC 1 世紀にさかのぼり、BURIDAVA, BUR, REB などの銘刻があり、ブリダバの要塞跡で発見されたもの]によっても得られる。Începuturile vieţii romane la gurile Dunării『ドナウ河口におけるローマ人の初期の生活』［ラドゥ・ヴルペ編、ブカレスト、1974年］において、歴史学者のヴァシレ・プルヴァンは、早くもAD 1 世紀のダキアにおける幾人かのローマ人の存在が確認されるということを証明した。ティベリウス帝の治世中［AD14〜37年］、小スキティア［現在のドブロジア］を防御するために本営を築いた。モエシアの知事の命令で praefectus orae maritimae（海岸地区総督）が就任した。クラウディウス（AD45〜54年）は、軍隊をドナウ河畔［カピダウァ、トロエスミス、カルシウム並びにドゥロトロム］に配置した。その結果、東西の接点であるドブロジアとダキア人・スキティア人の住むドナウ平野において、ローマ人の植民者達が農業に習熟すること

によって、ダキア・ローマ風の共同生活が開始された。

以上が、ローマ化しつつあるダキアにおいていかに基礎が築かれたかの概要である。実際、ローマ化の過程は、ローマ化された諸地方からのローマ人の商人達[と、当然のことながら、ラテン語を話すギリシア人の商人達]がドナウ河の北部に侵入したAD１世紀前半に始まっていた。ダキアが行政的にローマ帝国に従属［106〜271年］し、隣接する諸州［上下モエシア、トラキア、パンノニア及びダルマチア］や東部諸州[小アジア、シリア、エジプト]、そして、ガリアやレティア、更に、遥かなるアフリカから---つまり、ローマ世界のあらゆる所から［ex toto orbe romano]---ローマ人の植民者達がダキアに定住した時に、ローマ化ということが重要な意味を帯びてくる［cf.A.フィリピデ『ルーマニア人の起源 I』333-349頁; C.C.ジュレスク、D.C.ジュレスク Istoria românilor『ルーマニア人の歴史』1971年、80-81頁]。

更に、ダキアをローマ化するに際して最も実質的な役割を果したのは軍隊であった: 第13ゲミナ軍団がアプルム［現在のアルバ・ユリア］に駐屯し、第５マケドニカ軍団がドブロジアのトロエスミスに、そして後に、トランシルバニアのポタイサに駐留し、その他に複数の補助軍隊があり、多くの州から兵士を募集していた。やがて、ダキア人は10の軍隊［歩兵隊・騎兵隊］を有するようになり、ローマ市民となってローマ市民権と財産を獲得した後に、退役兵となった。ローマ人の言語と文化によって、ダキア人はダコ・ローマ人［＝ダキアのローマ人］となった。

ダキアをローマ化するに際して、別の大きな役割を果したのは、都市化であった。ローマ人は際立った都市型の文化を示していた。各々の都市の中心の周囲には田園があり、そこにもローマ風の生活様式とラテン語が広まっていった。行政・司法関係に採用されたローマ市民は、商人・旅行者・植民者達と同じく、ローマ化の執行者となった。しかしながら、田舎においても、ローマ市民の別荘の周囲には広い地所があり、それらの土地を耕作する人達［植民者・奴隷・解放奴隷・土着農民］がラテン語の農業用語を学ぶ必要があったということを忘れないでおきたい。

ローマ化されたダキアのそのような状況下で話されたラテン語の社会的•文化的地位はどうであっただろうか。手元の資料が不足しているので、ラテン語の構造に関して多くを断定することはできない。3,000のラテン語の碑文［かろうじて36に達するギリシア語の碑文に対して多い］によって、他のローマの諸州におけるラテン語と同じ程度に正しいラテン語がダキアで行われていたということが証明される。

ラテン語とラテン•アルファベットがダキアの王達の宮殿で既に用いられていたということは、かなり確かなことである: グラディシュテア•ムンチェルルイの要塞跡で発見された容器に DECEBALUS PER SCORILO(デケバルスはスコリロスのために)という銘刻が見られる［AD 1 世紀末］が、これは［『ルーマニア史』38頁において C.ダイコヴィチウによって指摘されたように］ダキア人が既にラテン語を用いていたことを証明していると考えられる。考古学によって、ラテン文字の証跡が明らかにされている。複数の初等学校を創立したであろう文法家達（litteratores）や書記達（scribae）をダキアが誇りにしていたように思われる。ドゥロベタ、スキダウア、サルミゼゲトゥサ、ポロリスムスで発見された数多くのレンガには、兵士達や一般人達が綴り字の練習をしていた跡が認められる; ある柱（stela）は尖筆（stylus-styli）を持った一人の少年の像を表しているし、アルプルヌス•マヨールで発掘された「蝋板」には書記が明らかにラテン語やギリシア語で書いた跡がある。

他方、ガリアやイベリアにあったと同じ種類の学校がダキアにもあったという証拠はない［C.ダイコヴィチウ Istoria Românei『ルーマニア史』436頁; C.C.ジュレスク、D.C.ジュレスク Istoria Românilor『ルーマニア人の歴史』130-131頁］。ルーマニア語の語彙における動詞 scribere ［ラテン語で「書く」の意］の存在は、ただラテン語とルーマニア語におけるその動詞の表す意味が同一であることが確認されれば、書くということが連続して行われていたということが証明されることになる［ルーマニア語で "a scrie" は「引く」•「地面を掻いて穴を掘る」•「書く」を意味する］。他方、ラ

テン語の "schola" という単語がルーマニア語に存在していた可能性があるという仮説［C.C.ジュレスク Formarea poporului român『ルーマニア人の形成』1972年、87頁］は、厳密な語源的理由［ロータシズムでラテン語の schola はルーマニア語では *scoară になるはずであるが、この単語は存在しない］のみならず、特にルーマニアの文化史が提供する資料によっても、棄却されなければならない。

しかしながら、ドナウ河地方のラテン語の碑文も又「都市型の、抽象的な、堅苦しい」特徴、従って「僅かながらも上流階級の人達」がいたということを示している H.ミハイエスク Limba latină în provinciile dunărene ale Imperiului Roman「ローマ帝国ドナウ河諸州におけるラテン語』［279頁］の研究を考慮しなければならない。しかしながら、ルーマニア語そのものから得られる資料から、ダキアに齎されたラテン語はより古風［cf.lingula ＞ lingură（スプーン）、equa ＞ iapă（雌馬）、furca ＞ furcă（熊手）］で、より大衆的［cf.西ロマンス語がギリシア語の語源により近く、fícatum（肝臓）であるのに対して、ダキアでは ficátum ＞ ficat］であり、非抽象的概念［cf.veteranus（退役兵）、pavimentum（舗装）］が多いように思える；実際、社会•文化的観点からすると、ダキアのラテン語は、西ヨーロッパに広まり教養階級で用いられたラテン語に劣るものであった。そのようなラテン語が、バルカン半島で誕生したギリシア語やイルリア語の要素を含んでいたと推論するのは合理的なことである。と言うのも、バルカン半島から多くの植民者達がダキアに来ていたからである。他方、ダキアのラテン語にも高度な社会•文化的特徴が時として含まれていた。

しかしながら、他の全てのロマンス語に見られるにも拘わらず、ルーマニア語には見られない単語が幾つかある：Elemente latine dispărute din limba română『ルーマニア語から消失したラテン語の要素』1932年の中で I.A.カンドゥレアが発表した考えを要約して I.フィシャーが Panroman sauf roumain『ルーマニア語を除外した汎ロマンス的』［Revue Roumaine de Linguistique IX、1964年、6号、595-602号］と呼んだ例としては、

amor（愛）、causa（原因）、color（色）、gaudium（喜び）、jungo（私は軛をかける）、laborare（働く）、mater（母）、pater（父）、などがあるが、この種の単語が高尚で、抽象的で、文学用語であり、ドナウ河地方のラテン語に典型的な社会•文化的階級で殆ど、もしくは、全く用いられなかったという単純な理由で、あの数多いダキア人の大部分の人達に知られることにならなかったのであろう。それでも尚、教養階級の限られた人達の間で通用していたそれらの単語が消失してしまったということは、極めてあり得ることである。ルーマニア語に成るべきラテン語とラテン語化されたヨーロッパにおけるラテン語の構造上の差は、周辺の孤立化した地域と革新的な中央部という対立［cf.M.バルトリ］のみならず、ラテン語そのものの内に存在していた社会•文化的差異にもよる。ローマ化されたダキアにおけるラテン語は、ローマとの文化的接触から利益を得ることはできなかった。考古学によれば、ダキアがローマ化されていた時代に、ローマ風建造物［円形演技場、神社、公衆浴場、郊外•田園の別荘、西欧型の種々の記念建造物］や芸術品［小彫像、宝石］が残されたということが証明されるというが、文字に記された文化の痕跡は認められない。韻文の碑文がジェルミサラで発見されているし、まだ発見されていない韻文の碑文が存在していた可能性があるが、ルーマニア人の歴史家達が認めているように、このことに関して、我々は明確な証拠を有してはいない。

更に、ダキアのローマ化も一様ではなかった。都市の中心部が集中していたトランシルバニアの西部、バナト地方の東部やオルテニア地方においては、ローマ化の度合がより強かった。更に、オルト川とリーメス•トゥランサルターヌスと呼ばれる防備線の間のムンテニア地方西部が加えられねばならない［Istoria României. Compendiu『ルーマニア史提要』シュテファン•バスク編、1974年、73頁］。当然のことながら、ドブロジア地方やドナウ河は常に強度にローマ化された地域であった。南モルドヴァ地方は、バルボシとアウグスティアの駐留地を通じて、下モエシアに属するローマの領土の中心を形成していた。しかし、ローマの影響は、コストボキ族とかカルパエ族と

呼ばれるトラキア族の居住する地域や「自由ダキア人」の居住する地域にも広まっていった。自由ダキア人は、3～4世紀にローマ化された。

ローマ化は、アプセニ山脈［西カルパティア山脈］の鉱山の周辺で、経済的に発展した都市部や軍隊の野営地の周辺の方がより強く、より速かった。軍隊の野営地は、ローマ的生活様式やローマの物質•精神文化並びにラテン語を普及させる真の中心地であった。 ルーマニア語の基礎となるラテン語の話をする時、ある一定の時期以降、通常「東」ラテン語［南イタリアのラテン語、ダルマチアのラテン語、アルバニア語やギリシア語のラテン的要素を含む］とか、「バルカン」ラテン語［南イタリアのラテン語を除くラテン語の後の局面: 独自の構造を保ちつつも、東南ヨーロッパの北部で、他のラテン語地域［ダルマチア語域とアルバニア語域］と接触しつつ発展したカルパチア•ドナウ地方のラテン語］とか呼ばれるものとは、もはや一致しない種類のラテン語であると考えがちである。

以上のことで読者はお気付きのこととは思うが、東南ヨーロッパにおけるラテン語は均質ではなかった。E.バンフィは Aree latinizzate nei Balkani e una terza area latino-balcanica『バルカン半島におけるラテン語化地域とラテン語化されたバルカン半島の第3地域』［1972年、215-217頁］において、ローマ帝国のドナウ河•バルカン半島諸州内には3つの "aree maggiormente latinizzate"（主にラテン語化された地域）: 1.ダルマチア地域、2.マケドニア•モエシア地域 ["il limes del Danubio, grazie alla sua importanza strategica fece affluire constantemente elementi latini o latinizzati (direttamente dell'Occidente fino al sec. IV, da Constantinopoli in seguito) e forma il nucleo più vitale della zona"（ドナウ河境は、その戦略上の重要性からして西欧から直接4世紀まで、次にコンスタンチノープルから、ラテン的要素やラテン化された要素を流入せしめ、その流域の最も活力のある中心を形成している］［同上書、217-218頁］、3.［いわゆるエグナティア道沿いにある］ディラキウム•アポロニア地域、があるということを指摘している。これら3つの地域の中で最も重要な

のはダキア•モエシア地域で、引き続く2世紀［5〜7世紀］の間に、徐々にその力を北部と東北部に向けて行った。

この型のラテン語は、ローマ世界との接触•関係を決して断たなかった。確かに、カルパチア山脈•ドナウ河地域のラテン語が西ヨーロッパの中世ラテン語との接触で利益を受けるということはなく、むしろ、7〜8世紀に至るまで都市生活を続けた小スキティアやドナウ河下流域の複数の要塞を通じて、ビザンティウムのラテン語との関係が続いていた。N.ヨルガが1939年3月に Ce e Bizanţul（ビザンティウムとは何か）という講演の中で指摘しているように、ビザンティウムは東ローマ帝国に浸透していたラテン的精神を背景に、ダキアのローマ人達が常に自己認識をするローマの基地であった［cf.E.ロソバン Romania I、1968年、ラ•プラタ、157頁 "nutrido de espíritu romano"（ローマ精神で養われて）ビザンティウムは "un sustituto lingüístico latino dinámico que, durante cierto tiempo fue capaz de apoyar los romanos orientales"（一定の期間、東方のローマ人達を支えることが可能な、活力に満ちたラテン語の代行者であった）］。このような状況下において、ダキアに移植されたラテン語は、激動の時代にラテン語を進展させ受け入れたその構造故に、ラテン的ビザンティウムの行政的用法を信頼することができた。スキティアが16世紀に至るまでラテン語使用国であったということは、一般に良く知られている。

8. ルーマニア語が出現した地域

ルーマニア語となるべきラテン語は広い範囲に広まっていた。オヴィッド•デンスシアーヌ、セクスティル•プシュカリウ、アレクサンドゥル•ロセッティなどのルーマニア語史の専門家達は、ローマの属州となったダキア、上モエシア、下モエシア［そして、多分ダルマチアの東北地方と上パンノニアの東南地方が含まれるであろう］をそのような領域と考えている。セクスティル•プシュカリウは Limba română I［1976年、254頁］で、上の領域を更に広げて「ルーマニア人の "発祥地" 又は "中心地" を小さな地域に求めようとする人達は、古のルーマニア人の言語的統一に関する誤った意見に端を発している...ルーマニア人は、侵入した蛮族達との戦争で滅亡せず、帝国国民としての性格を失わずに、周囲に定着した若い民族と融合した東南ヨーロッパのローマ人の残存者達である。彼らの最初の故国は...ラテン語国民が様々な時代により濃密な、又は、より希薄な網状組織を形成したアドリア海と黒海の間、ドナウ河岸やその多くの支流に求められなければならない」と述べている。そして、A.フィリピデは『ルーマニア人の起源 III』［384-386頁］で、ルーマニア語の均一性［「最小限の方言的差異と遠い昔の方言群との間に存在する緊密な関係のお陰で確立されているルーマニア語の大統一」383-384頁］から出発し、ドナウ河の南と北に居住するルーマニア人の間の関係について、次のように説明している:「そのような結果に達するには、バルカン半島のみにおいて可能な、地理的にも政治的にも最大限に緊密な共同生活が存在する必要があった」［385頁］。しかしながら、方言差は共通ルーマニア語にも現代のルーマニア語の方言［ダキア•ルーマニア語、マケドニア•ルーマニア語］にも存在する。セクスティル•プシュカリウは、上に引用した Limba română I［208頁］で、そして、E.ペトリヴィッチは Repartiţia graiurilor daco-române『ダキア•ルーマニア語の分布』と Limba română

III［1954年、3-17頁］において繰り返し、トランシルバニア［特にクリシャナ地方］は実に多様な地方地方の固有語の多いことで特徴づけられるとし、A.フィリピデの時代には決して成され得なかったような、方言の差異が厳密な構造分析によって明らかになってきている、としている。ルーマニア語の均一性とは相対的なものであり、伝達の問題である。方言の差異が様々な話者の構成する社会間の伝達を妨げてきた訳ではない。その訳は、話者達が常にどこでも地域間の相互接触の可能性を確実なものにしてきたからである。社会•文化的同質性が十分にそのことを証明している。

このことに関して、セクスティル•プシュカリウは注目すべき見解を有している: ローマ帝国の東側では、西側にあったような、周辺の人々の生活と利害を結び付けることができるような各州間の団結というものが、都市の周囲にはなかったということを指摘した:「もしダキア•ノウアが首都をスクピに有し、新しいロマンス語民族が誕生する中核となる細胞であったならば、我々の名前は、地理的概念とは何ら関係の無い、しかしながら、西ヨーロッパにおける我々の兄弟にあたる民族がイタリア人•スペイン人•フランス人と呼ばれているのに極めて類似した方法で、曖昧にもルーマニア人と呼ばれることはなく、むしろ、モエシア、ダキア［•アウレリアーナ］、又は、ダルダニアから派生した名前で呼ばれているであろう。我々のみがすべてのロマンス語国民と異なって、蛮族に対してローマ人という名前を保存しているという事実、及び、ブラック人という同様に一般的な名前で我々を識別しようとしていたという事実は、我々と関連する事態が西ヨーロッパとは異なっていたということを証明するものである」［Limba română I 1976年、253頁］。

ルーマニア語が形成された領域は広い。A.ロセッティは『ルーマニア語史』［1978年、215頁］で「ルーマニア語は、ドナウ河の北と南、しかも、その南部ではドリナ川の西の流域部、スコピエの南、ブルガリアの西南、黒海に向かってのドナウ河沿いの地域、バナト地方、トランシルバニア地方、オルテニア地方及びモルドヴァ地方、換言すれば、上下モエシア州、ダキア及

び下パンノニアと以前に呼ばれていた地域で話されていた」と言っている。これらの地域にドブロジア［＝小スキティア］を加えなければならない。

更に、ローマの支配という行為の下に、最初にローマ化された地域と後にローマの言語とルーマニア人が広がって行った地域とを区別しなければならない。A.ロセッティは『ルーマニア語史』［214-216頁］で、ルーマニア語を話す人達の移動性と、最初にローマ化された地域よりも遥かに広い地域への後の移住を指摘している。バルカン半島におけるブラック人の存在は、ドナウ河以北におけるダキア•ローマ人の存続を除外することにはならない。ドナウ河の北におけるローマ人の生活は、ドナウ河の南のローマ人の生活によって支えられていた。ダキアのローマ人とドナウ河の南のローマ人との接触は、「旧ダキア州の帝国への再編入」を試みたコンスタンチン大帝［306〜336年］の時も続いていた。同じ方向は、カルパチア山脈からバルカン半島にかけて、ドナウ河沿いに話されていたルーマニア語の発展によっても推定することができる。この地理的な枠組の中において、ドナウ河はルーマニアのラテン語の軸として現れる。

9. ダキアにおけるローマの連続性

早くも18世紀に提起されたルーマニア人の基本的問題の１つ［cf.第１章］は、271年のローマの軍団撤退以後のダキアにおけるローマ人の存続についてである。［100万人以上の人達に対してオーストリー•ハンガリー帝国の当局者達によって不公平にも帰属せしめられた "natio tolerata"（黙許された国民）の身分に対して、何世紀もの間にわたって抗議していたルーマニア人によって、トランシルバニアにおいて最初に提起された］この問題は、政治的な意味合いを持っていた。「ワラキア人達の請願書」という名前で知られている1791年と1792年の有名な忘備録［その著者達の中には多分、サムエル•ミク•クライン、I.ピアウリウ•モルナル及びヨン•ブダイ•デレアーヌなどもいた---cf.N.ヨルガ Istoria literaturii române în secolul XVIII『18世紀ルーマニア文学史』1969年、215-216頁と D.プロダン Înca un Supplex libellus românesc 1804『1804年の別のルーマニア語の請願書』］の中では、"aceştiia români nu sînt vreun Naţion strein,ci chiar romanii cei vechi, cari din părţile Romiei în Daţiia, la anii de la Hs.106 ca biruitori şi vitezi au venit"（これらのルーマニア人達は外国人ではなく、AD106年に征服者および軍人としてローマからダキアにやって来た昔からの正真正銘のローマ人である）ということが示されている［D.プロダン、上掲書、41頁］。このことがトランシルバニア学派の基本的信条を実現している。そして、このような考えは、ウイーン学派の歴史家達---その中には、J.F.ズルツァー、I.C.エンゲル、J.K.エダーなどがいる---や、後にドイツの歴史家 R.レースラーなどによって、数多くの反対攻撃の引金となった［cf.第１章］。

この問題の議論の根拠［事実、オーストリー帝国王室の寛大な許可を伴なった、トランシルバニアに対する、ハンガーの欺瞞に満ちた要求］は、４世紀からのラテン語の歴史家達の文章の端々に現れていた［エウトゥロピウス

Breviarum ab urbe condita『ローマ建国以来の要約』IX、13、1 及び IX、15、1; ルフィウス・フェストゥス Breviarum rerum gestarum populi romani『ローマ人の偉業の要約』VIII; セクストゥス・アウレリウス・ヴィクトル Caesares (Libri de Caesaribus)『カエサル家の書』; パウルス・オロシウス Historiarum adversus paganos『異教徒達と係わりのある歴史について』VII、22; Historia Augusta『アウグストゥスの歴史』39章、Vita Aureliani『アウレリアーヌスの生涯』[多分、著者はフラビウス・ボピスク] し、同様に、アウレリアーヌス帝 (270〜275年) 治下のダキア撤退について語っている6世紀の歴史家達 [ヨルダーネス Romana et Getica『ローマ世界とゲト族世界』217] の文中にも窺える。

白熱の議論を引き起こしたのはエウトゥロピウスであった。事実を極めて単純化して解釈し、征服後のダキアには一人のダキア人も残っていなかった "Dacia enim diuturno bello Decibali viris fuerat exhausta" (そしてダキアには、長い対デケバルス戦のために、人がいなくなった) と主張したのは、エウトゥロピウスであった。彼のこの主張は、ドナウ河の北におけるルーマニア人の存続を否定する人達や、ルーマニア人は専らローマ人から成り立っているという考えの純粋なラテン化主義者にとってさえ、大いに都合が良かった。ダキア人の撲滅説は、非常に多くの歴史的事実と矛盾する。まず最初に、ギリシア出身の歴史家ディオ・カッシウス [2〜3世紀] は、幾つかのダキア人の小部族がローマ人に服従していたということを示している。同様にドイツの歴史家 C.パッチは Der Kampf um den Donauraum unter Domitian und Traian『ドミティアーヌス帝とトラヤーヌス帝の下でのドナウ地域をめぐる戦い』[1937年] の中で、多くのダキア人---それらの内の幾人かは、デケバルスと緊密な関係にあったと貴族と兵士---がローマ人に服従していた [そして、3世紀に1人のダキア人の反逆者がデケバルスの子孫であると公言した!] と指摘した。同様に、多くの援軍がダキアから募集され、特にダキアの外国人達 (peregrini) がカラカラ [マルクス・アウレリウス・アントニーヌス (188〜217年)] 帝の勅令によってダキア市民 [cives

daci］と成った212年以降、世代から世代へと伝わるダキア人の名前がローマ化したという碑文による証拠がある；更に又、ダキアにおけるローマ人の定住地は、たいていの場合、ダキア人の定住地に代わって発展し［ポロリスム、ナポカ、ポタイサ、アプルム、ドゥロベタ、スキダウア、カピダウア、など］、それらの内の幾つかは、ダキア語の名前を保存していた。ローマ時代のダキアにおける地名や河川名の多くは、たいていの場合、土着民から征服者に伝達されたものである。

更に、ローマ人自身は、ゲト・ダキア人の追放に全く興味がなかった：ダキアの天然資源の開発や農作業は、熟練した土着の労働者なしには、殆ど不可能であった。そして、帝国の他の地域で、征服した土着民をローマ人が追放した例がかつてあったであろうか。A.D.クセノポル（1847〜1920年）からヴァシレ・プルヴァン（1882〜1927年）、N.ヨルガ（1871〜1940年）、C.ダイコヴィチウ（1898〜1973年）に至るまでの全てのルーマニア人の歴史家達はルーマニア人の存続に関するこの方面の問題を指摘している。

そのような訳で、ダキア人はローマ支配下のダキアでも生き続けたことになる。隣接した領土において、「自由」ダキア人［モルドヴァとブコヴィナにはカルピ族とコストボキ族が、クリシャナ、マラムレシュ、今日のスロヴァキアには他の複数のダキア族］が住んでいた。2世紀後半以降、彼らはローマ化されたダキアへの移住を開始し、ローマ化したダキア人達と共に定住し、植民者として後者の生活に結合した。ディオ・カシウスによれば、コンモドゥス帝の治下［180〜192年］に約12,000人の自由ダキア人が帝国への移住許可願いを提出し、皇帝はダキアにおいて彼らに農地を与えた［LXXII、3、3］。土着民の存在に関する記録はずっと後の時代まで続く：ダキア族に属するベッシ族が5〜6世紀になってもトラキア族の言語をまだ話し続けているという証拠がある。それ故に、ローマ化されたダキアにおける生活は、帝国に課せられた新しい条件下で続けられた。ダキアが terra deserta（人の住まない土地）になったことは決してなかった。

ダキアがローマ化してから、ローマの権力がダキアから撤退した時［271

年］も、問題はほぼ同じであった。歴史的事実の不正確な把握に由来する誤解があるので、まず最初に、ダキアからの撤退はローマ帝国にとって、全く政治的•軍事的•行政的な問題であったということが強調されなければならない。アウレリアーヌスの命令により、軍隊は移動され［第13ゲミナ軍団はラティアリアに、第5マケドニカ軍団はオエニクスに］、軍団と共にダキアの行政職の一団とその関係者達、すなわち、富裕階級の人達、ローマの貴族•商人達が撤退した。ダキア•リペンシス［州都はラティアリア］とダキア•メディテラネア［州都はセルディカ］が、上•下の両モエシアが一部分ずつ出し合うことによって、ドナウ河の南に設立された。

しかしながら、史料が明確でなく、ダキアから撤退した人達がどういう人達であったかを特定化することは、不可能である。エウトゥロピウスがローマ人について言及している "abductesque Romanos ex urbibus et agris Daciae in media Moesia collocavit"（そして、ダキアの都市と田舎からローマ人達を撤退せしめ、モエシアに居住せしめた）［IX、8、2］し、ルフィウス•フェストゥスも "translatis exinde Romanis"（そこからローマ人を連れて来た）と言い、アウレリアーヌスの伝記作者の一人［多分、フラウィウス•ウォピスクスであろうと思われる］が「アウグストゥスの歴史」の中で---いずれにしても、そうはっきりではないが---軍隊と州民について話をしている。

ダキアから撤退した軍隊に言及している唯一の歴史家は、キリスト教の補祭ヨルダーネスである。彼はモエシアに生まれ、ローマ化したゴート人の歴史家で、ダキアでの出来事について非常に良く知っていた: "evocatis exinde legionibus in Mysia conlocavit"（そこ［ダキア］からローマの軍団を呼び、ミシアに配置した）。数多くの歴史家や文献学者達が、上の語句の意味をはっきりさせようと努力してきた。最近の評価に値する推論 Considérations autour de l'évacuation de la Dacie par Aurélien『アウレリアーヌスによるダキア撤退に関する考察』［P.ミロン編 Daco-Romania I、1973年、40-51頁］において、ラドゥ•ヴルペは、史料は1世紀前に起こっ

た出来事をただ要約的に記述しているだけであるということを指摘している。そのような訳で、資料としての価値は相対的なものである。他方、ドナウ河の南で人口の大幅な移動があったという痕跡はない。"La conclusion qui s'impose c'est que l'officialité romaine évacua de Dacie seulement ce qui lui appartenait en propre: l'armée et les fonctionnaires, ainsi ce qu'elle sentait de son devoir de protéger tout d'abord: les classes riches, comprenant les grands propriétaires terriens, les banquiers, les marchands, les brasseurs d'affaires, les exploiteurs des mines et des grands ateliers, les fermiers. Quant aux masses des travailleurs, surtout des paysans, des gens par excellence liés à leurs terres, ils préférèrent rester dans leurs campagnes et dans leurs montagnes, n'ayant aucun motif à les quitter. La protection officielle ne semblait pas nécessairement indispensable à ces laboureurs et pasteurs..." [ラドゥ・ヴルペの上掲論文、49頁] (引き出せる結論は、ローマの権力がダキアから撤退したのは、単に自らに属するものに限られていたということであった: 軍隊と官吏、まず保護を自らの義務と考えた人達: 大土地所有者達を含む富裕階級、銀行家達、商人達、活動家達、鉱山や大工場の経営者達、徴税請負人達。大勢の労働者達、特に農民、なかんずく自らの土地に関係のあった人達は平野部や山間部に止まるほうを好んだ。彼らには土地を去る動機がなかった。公の保護は農夫達や牧人達にとって、必ずしも不可欠には思えなかった)。

ドナウ河の北側におけるダキアのローマ人の存続に関しては、歴史学的・民族学的・言語学的に証明することができる。連続性に関する政敵からの非難があるにも拘わらず、4～6世紀にさかのぼる考古学的発見、地名および歴史的記録によれば、ドナウ河の北側の地域において、あまり多くはなくわずかな数ではあるが、ローマ化した人達が逆境に堪えつつも存続していたという。

考古学的発見が、特にトランシルバニア地方において、ダキア人とローマ

人の存続の証拠が数多く、かつ有意義であるということを示している。D.プロタセは Problema continuităţii în Dacia în lumina arheologiei şi numismaticii『考古学と古銭学に照らしてみた、ダキアにおける存続の問題』[ブカレスト、1966年] の中で、全体的問題に関する分かり良い演繹的推論を行っている。トランシルバニアは、ダキア•ローマ時代の数多くの定住地、4～6世紀にさかのぼるダキア•ローマの伝統を有する多くの墓地[ブラテイ、ビエルタンなど]、キリスト教に関する多くの物、すなわち、キリスト教の教会で用いられたシャンデリアに付けられた奉納物 [ego Zenovius votum posui (我ゼノウィウスに祈願せり) という句が付いている]、ローマ風•ビザンチン風の硬貨、ローマの伝統のある地方の陶磁器類などを誇りに思っている。

ダキア•ローマの地名は、スラヴ語を通して今日まで伝えられている: Alutus > Olt (オルト川)、Maryssus > Mureş (ムレシュ川)、Samus > Someş (ソメシュ川)、Ordessos > Argeş (アルジェシュ川)、Pyretos-Porata > Prut (プルト川)。スラヴ族は古いダキア•ローマの地名 [Petra > Kamenu、Campuslongus > Dlăgopole cf.イタリア語 Campolargo] やルーマニア語の地名 [Repedea > Bistriţa (ビストリッツァ川)「早い川の意」、Frumoasa > Dobra (ドブラ川)「美しい川」の意]を借用した。ドナウ河の平野部においても、Vlaşca, Vlăsia/Codrii Vlăsiei (ヴラシア森林) などという、スラヴ族からルーマニア語の地名に与えられたものもある。ルーマニア語を話す民族は、蛮族の侵入に際して、避難場所を森林に見付け、平野部に住み続けた [cf.C.C.ジュレスク Istoria pădurii româneşti din cele mai vechi timpuri pînă astăzi『古代から現代に至るまでのルーマニアの森林の歴史』ブカレスト、1976年、29頁以降:「森林は、ドナウ河左岸のルーマニア民族の存続において、基本的な役割を果した」]。

ダキア人•ローマ人の存続に関する別の証拠は、ドナウ河の左右に早くも1世紀に広まったラテン的キリスト教である。Contribuţii epigrafice la istoria creştinismului daco-roman『ダキア•ローマのキリスト教史に関す

る碑文研究試論』[1911年] の中でヴァシレ•プルヴァンは、ダキアにおけるキリスト教の始まりを3世紀としている。他方、D.M.ピッピディは、Contribuţii la istoria veche a României『ルーマニア古代史研究試論』[ブカレスト、1958年、234-264頁] において、諸々の資料を検討した結果、ドナウ河の北側におけるダキア人•ローマ人もゴート人にも3〜4世紀の間に公教要理が教えられたと考えている。キリスト教に関する記念碑が2〜3世紀から存在していたことを疑ったのは C.ダイコヴィッチだけである: Există monumente creştine în Dacia Traiana din secolul al II-lea şi al III-lea?『キリスト教の碑文はトラヤーヌスの征服したダキアに2〜3世紀から存在するか』[Anuarul Institutului de Studii Clasice I『古典研究所年報 I』クルージュ、1933-1935年、192-209頁]。

ラテン語を話せる伝道師達が、ラテン語が分かりラテン語を話す人達に、キリスト教を伝導した。このことで、ルーマニア語の biserică (教会)、cruce (十字架)、Dumnezeu (神)、a boteza (先礼する)、înger (天使)、păresimi (四旬節)、cîşlegi (カーニバル) が、それぞれ、ラテン語の biselica, crux-crucis, Domine deus, baptisare, angelus, quadragesima, caseum-ligat という、概して俗語形の連続であるという事実が説明される。キリスト教用語としてのラテン語の意味変化も、ルーマニア語において認められる: lex → lege (法律)、*credentia → credinţă (信仰)、paganus → păgîn (異教徒)、peccatum → păcat (罪業)。

Limba română I [1976年、361頁] において、セクスティル•プシュカリウは、ルーマニアのキリスト教用語は田園的性格を帯び、教会の機構や階級制度に関する用語に欠けているとし、「中世初期の町において教会組織や僧院生活が発達しておらず、我々は村々における僧侶達に幾分の発展を見たに過ぎない」と言っている。碑文に見られるローマのキリスト教に関しては、エミリアン•ポペスクの Das Problem der Kontinuität in Rumänien, im Lichte der epigrafischen Entdeckungen『碑文の発見に鑑みた、ルーマニアの連続性に関する問題』[Daco-romania I、1973年、69-77頁] を参照さ

れたい。

存続に関する更なる証拠は、次のようなルーマニア語の農業用語からも得られる: agru (畑)、cîmp (野原)、falce [ラテン語 falx] (面積の単位)、a ara (耕す)、a săpa (掘る)、a semăna (種を蒔く)、a culege (収穫する)、a secera (刈り入れる)、seceră [< ラテン語 sicilis] (鎌)、a treiera [< ラテン語 tribulare] (脱穀する)、a bate [a bate grîul (小麦を脱穀する) < ラテン語 battuere]、arie [< ラテン語 area] (麦打ち場)、a vîntura [< ラテン語 ventilare] (箕で扇ぐ)、grîu [< ラテン語 granum] (小麦)、mei [< ラテン語 milium] (黍•粟•稗)、orz [< ラテン語 hordeum] (大麦)、secară [< ラテン語 secalis] (ライ麦)、paie [<ラテン語 palea] (藁)、spic [< ラテン語 spicum] (穂)、grăunţe [< ラテン語 *granucia] (粒)、neghină [< ラテン語 *nigellina] (黒種草)、cînepă [< ラテン語 *canapa < cannabis] (麻)、ceapă [< ラテン語 caepa] (玉ねぎ)、aiu [< ラテン語 aliu] (「にんにく」の地方語)、curechi [< ラテン語 colicules] (「キャベツ」の地方語)、curcubetă [< ラテン語 curcubita] (「ヒョウタン」の地方語)、pepene [< ラテン語 pepopeponis] (メロン)、trifoi [< ラテン語 trifolium] (クローバーの類い)、などは、全てラテン語起源である。同様に、moară (粉挽き場)、a măcina (製粉する)、a coace (焼く)、făină (粉)、pîne 又は pîine (パン)、などの製パンに関する用語もラテン語である。農業と主たる食物の調製が、ダキア•ローマ人の基本的な職業であった。

同様に、次のような牧畜用語も全てラテン語に由来する: păstor 又は păcurariu (羊飼い)、oaie (羊), berbec 又は地方語の arete [< aries] (去勢した、又は去勢しない雄羊)、miel (子羊)、mioară [< *agnelliola] (雌羊)、turmă ((鳥) の群れ)、地方語の păcuină [< pecorina, pecuina] (雌羊又は羊一般)、matrice [< matrix] (鋳型)、noaten [< annotinus] (斑点のある)、ţîrţ [< *tertianeus] (第 3 番目の)、a ierna [< hiperbare] (越冬する)、munte (山)、şes [< sesum] (平原)、bou (去

勢された牛)、taur (去勢されていない牛)、vacă (雌牛)、junc (2・3才の牛)、viţea, juncă 及び地方語の junicea (3才未満のまだ子を産まない雌牛)、viţel (子牛)、capră (雌の山羊)、ied, vătui (子山 羊)、păsune (牧場)、a adăpa (家畜に水をやる)、a paşte (草を食む)、staul (家畜小屋)、fîn (乾草)、furcă (乾草用熊手)、jug (軛)、a înjuga (牛に軛を付ける)、a dejuga (軛を外す)、strămurare [< stimulare] (突き棒)、rumega [< rumigare] (反芻する)、など。家畜名も同様に、ラテン語起源である: cî(i)ne (犬)、căţea (雌犬)、cal (馬)、iapă (雌 馬)、armăsar (種馬)、asin (ロバ)、porc (豚)、scroafă (雌豚)、など。

「農業•動物育種学•羊飼いの生活に関するラテン語の単語が多いということは、ルーマニアの領土を羊を追いながら移動してラテン語を標準語化するのに、羊飼いの他に、農業や牧畜業に雇われていた二次的ルーマニア人がいた」ことの証である [セクスティル•プシュカリウ Limba română I 358頁]。

ダキア•ルーマニア人に大いなる可動性を与えたのは、特に放牧である: 羊飼い達はアルプスの牧場からドナウ河の湿地帯や黒海沿岸まで移動した。それは定期的に移動する羊の飼い方であり、二次的生活を全く許さないものではなかった: 羊飼い達は自分達の永住地と緊密に結び付いており、そこに家族を置き、農業•果樹栽培•ブドウ栽培兼ブドウ酒製造•自家製品製造などを行っていた。トランシルバニアの西側の地方におけるダキア•ルーマニア語の中におけるラテン語的要素の保存に最初に注目したのは、又もやセクスティル•プシュカリウである [Limba română I 346-347頁] : ai (にんにく)、păcurar (羊飼い)、nea (雪)、june (青年)、pedestru (歩行者)、などは、トランシルバニアの南西 [アプセニ山脈] を対象にした彼の Atlasul Lingvistic Român『ルーマニア言語地図帳』の中に記録されている。E.ガミルシェクは、Über die Herkunft der Rumänen『ルーマニア人の起源について』[1940年] の中で、ドナウ河の下流地域と並んでトランシルバニアの南西地方がダキア•ローマ人の Kerngebiet (中心地) のひとつであると考えている。

ダキア•トラヤーニス［トラヤーヌス時代のダキア］におけるダキア•ローマ人は意識的努力［言語忠節］のみならず、ドナウ河の南側にあるローマの諸州との有益な接触を通じてラテン語を保存し、四方からの侵略を阻止した。オルテニアや東バナト、そしてムンテニア平原や南モルドヴァさえ、ローマの支配下にあった上•下のモエシアやスキティア•ミノールと常に接触があった。ローマに支配されていたビザンチンの当局者達は、ドナウ河の北側のダキア•ローマに属する諸地方を管理•監督し、しばしば侵略した。ローマの当局の支配が実際にオルテニア、バナト、ムンテニア、南モルドヴァなどまでに及んでいた期間は分かっている。コンスタンチン大帝が328年スチダヴァの地点でドナウ河に橋をかけ、オルト川に沿ってロムラまで幹線道路を再建し、ローマの支配下にあったビザンチン帝国の foederati（同盟者）になるようにとゴート人に強要した。535年にユスティニアーヌスは、ダキアのいろいろな地方を含む大主教区を設立した。ダキア•ローマ人とダキアのゴート人は、政治•経済•文化の面において、ローマの支配下にあったビザンチン世界に編入された。

実際、3～4世紀以降、ゴート人はダキア•ローマ人と共にキリスト教徒と成り、ラテン語を採用した。エミリアン•ポペスクは、当時のダキアにおけるギリシア語とラテン語で書かれた複数の碑文を研究した結果、蛮族の同化の幾つかの事例を明らかにし た: トゥロエスミスやアクシオポリス、そしてトミにおける碑文が、キリスト教徒となり再先例を受けたゴート人達［中には「汗」の事例もある］がいかにローマ軍に受け入れられ昇格したかを示している。同化の過程における重要な役割を、キリスト教が果した。

10. ルーマニアのローマ性

以上のような訳で、ロマンス諸語の中におけるルーマニア語の特異性は、特別な社会的•文化的要素によって決定されたと言える。いみじくも I.A.カンドゥレアは Straturi de cultură şi straturi de limbă la popoarele romanice『ロマンス語系民族における文化的•言語的層』[1913年] の中で、ルーマニア民族に関して「今日の文化的層の前により劣った文化的層があり、しかも、初期の段階においては、ルーマニア人は他のどの民族とも同じく、必要性から、基本的型の文化を有していた」ことを強調した [フロリカ•ディミトゥレスク『I.C.カンドゥレア---言語学者かつ文献学者』ブカレスト、1974年、75頁]。Păstoritul la popoarele romanice『ロマンス語系民族における放牧』[ブカレスト、1913年] の中で O.デンスシアーヌは、過去のルーマニアにおける牧畜•農耕的特徴を指摘したが、それと全く同じくセクスティル•プシュカリウも、ルーマニア語と成ったラテン語の「田舎臭さ」に注目して、"La langue roumaine ne s'est donc conservée que dans la mesure où elle était parlée par un élément rustique" (ルーマニア語は、それ故に、田舎臭い要素で話された範囲にのみ保存された) と La rôle de la Transylvanie dans la formation et l'évolution de la langue roumaine『ルーマニア語の形成と発展におけるトランシルバニアの役割』[La Transylvanie 1938年、51頁] で言っている。

上記の仮説は、まず第1に言語学的•語彙的事実によって実証されている。O.デンスシアーヌは羊飼いの生活の意味分野におけるラテン的要素を主張[『ロマンス語系民族における放牧』、La vie pastorale chez les Roumains『ルーマニア人における牧飼いの生活』パリ、1914年、Cuvinte latine cu semantism păstoresc『牧飼いと意味的に関係のあるラテン語の単語』ブカレスト、1929年] し、セクスティル•プシュカリウは、田舎の文明を証明す

る意味上の発展: mergere（行くこと）、palus-paladem（沼沢）、pons-pontem（橋）、carraria（街道）、bubalus（水牛）、placenta（胎盤）［『ロマンス諸語の中におけるルーマニア語の位置』、Ost- und Westromanisch im Lichte der Sprache『言語から見た東西ロマーニア』Die Tatwelt 12、1937年］、及び物質文明の分野における語彙の消失: villa（別荘）、forum（広場）、strata（大道）、platea（道路）、via（道路）、ruga（皺•襞）、を指摘した。ラテン語はルーマニア語に成るに際して、物質•精神生活の面における数多くのものを失い、その結果として、都市文明の一定の段階に呼応する概念を失った。そして、東ロマンス語の「田舎化」に引き続き「語彙の不毛化」が生じ、「普通の農夫と羊飼いの用いる概念が遥かに少ないので、多くの単語が忘れられてし まった』［セクスティル•プシュカリウ Cercetări şi Studii ブカレスト、1975年、465頁］。

ルーマニア語におけるラテン語の語彙の遺産は、孤立化した社会言語共同体［Sprechinseln］（言語の島）、守旧的伝統［言語忠節］の表示であり、自らの独自性を大事にするために、初歩的な文化の範囲内で、「限られた」言語的規約［cf.ベルンシュタイン］に頼った。同じ線に沿って、ルーマニア語の根底を成すラテン語が「本質的に通俗的な」性格を有するという［見方を変えれば、言語的要素の選択の問題とも取れる］議論をすることが可能であり、ルーマニア語に現れるロマンス語の語彙は、ルーマニア語が通俗ラテン語に属するという証左であるとみなすことさえできよう［M.バルトリ］。

同じ趣旨で、西側のラテン語から「漂流した」ラテン語がルーマニア語に変化したと言うことができるであろう。ロマンス諸語におけるルーマニア語の位置を論じるに当って、A.ロセッティが示したように［Despre locul limbii române printre limbile romanice『ロマンス諸語におけるルーマニア語の位置について』、『ルーマニア語史』627-629頁］、そのような現象は数段階にわたって生起した: つまり、「イタリアで話されていたラテン語の固有語のグループ」に属していた、いわゆる東ラテン語［２～４世紀］から「バルカン諸国の」ラテン語［５世紀に始まる］を経て、「イタリアのラテン

語を除けた、バルカン半島で話されるラテン語に制限され」[628頁]、そして最後に、7～8世紀にルーマニア語と成った[627頁]。

11. ルーマニア語の形成

ルーマニア語という新たなロマンス語の実態の基礎が敷かれたのは、上のような歴史的•社会言語的環境下においてであった。まず最初に、ある言語の「形成」について話をするということは不必要なことであるということを示す必要がある。言語はその存在のいかなる瞬間においても、既に形成されていると同時に、「形成されつつある」のである。言語の社会的かつ個人的機能を満たすのは、確立された制度である。セクスティル•プシュカリウはZur Rekonstruktion des Urrumänischen『原始ルーマニア語の再建について』[1910年、cf.Cercetări şi studii 1974年、18頁] において、「生きた言語は発展が可能で、常に単なる中間的段階の姿しか現さない」し、「私達には、発展中のしかじかの段階がある言語の出発点であるなどと言う資格はない」と述べている。セクスティル•プシュカリウは、「科学的研究に鑑みて、そのような後期の境界を設定することは殆ど不可能で、またその必要もない」ということを特に強調している。「7世紀にはルーマニア語は今日と同じく、その発展の一定の歴史的時点において、ローマ化された民族の言語であった』[同上]。『ロマンス諸語の中におけるルーマニア語の位置について』[『ルーマニア語史』625-633頁] において A.ロセッティもまた、「ルーマニア語は、他のどのロマンス語とも同じく、ローマによる征服から今日まで、ローマ帝国の諸州において中断することなく話されたラテン語の一種以外の何物でもないので、何人もルーマニア語の「形成」について議論をすることはできない』[626頁] と言っている。ロマンス系ではあるが、ラテン語とは異なるルーマニア語の構造の定着の起源を概略的に知るために [cf.A.ニクレスク『ルーマニア語の特異性 II』「ラテン語とロマンス語」の章、28-54頁]、我々は東南ヨーロッパのラテン語がその再編成の頂点にあった4〜5世紀から始めざるを得なかった。4〜5世紀にグラティアーヌス (375-383年) は、イリュ

リクム、パンノニア及びノリクムをイタリアの行政及び教会関係の管轄区に帰属せしめ、ダキアの主教区［ダキア•リペンシスとダキア•メディテラネア］及び上モエシアとトラキア［下モエシア、トラキア及びスキティア］を東ローマ帝国に帰属せしめた。このような訳で、ダルマチアは東南ヨーロッパの共同体を後にして、西ラテン語の方に押し流されていった。ユスティニアーヌス［527-565年］は6世紀に、ユスティニアーヌス・プリマと呼ばれる主教区を創立したが、その中にはダキア、上モエシア、ダルダニア、プラエヴァリターナ、マケドニア、小スキティア、更にはドナウ河の北に位置するローマ化された複数の地方が含まれていた。

それ故に、東南ヨーロッパのラテン語の発展において、5〜6世紀は、ルーマニア語の特徴を持ったラテン語が具体化しようとしつつあったドナウ河の北側の諸地方［特にオルテニア、バナト、トランシルバニア、ムンテニア、ドナウ河に近い南モルドヴァ］やアウレリアーヌスのダキア、上•下モエシア、小スキティアを含む地域を限定するようになった Ausgliederung（異分子）を特徴づけた。ドナウ河の北側や南側において話されていたラテン語には、いかなる方言的差異の痕跡も認められない。それ故に我々は、ドナウ河はカルパチア山脈とバルカン半島の間における、ルーマニアのラテン語に変化するラテン語の軸である、と考えている。

5〜6世紀は、結論的に言うと、ルーマニア型のラテン語への移行過程であった［cf.A.ロセッティ『ルーマニア語史』358頁:「5世紀以降、ドナウ河近辺の諸州におけるラテン語は、アペニン・バルカン・グループを形成していた他のロマンス諸語からさえも独立して発展し、独自の特徴を強めた」］。ルーマニア的ラテン語のそのような出現開始時期は、イスパニア、ガリア、イタリアにおけると全く同じように、ローマ世界のこの地域にも現れた latinum circa romançium（ロマンス語に近いラテン語）の時期であると考えるべきである［この概念は、根拠が疑わしくも1290年の作であるとされているイベリア半島のテキストに準拠したラモン•メネンデス•ピダルや Latina "circa romançium" e "rustica romana lingua"『ロマンス語に近

いラテン語と田舎のローマ語』パドヴァ、1965年の著者ダルコ・シルヴィオ・アヴァッレによって援用されている]。

その時期以降、いかなる遠慮もすることなく、共通ルーマニア語ということを話題にすることができる。

共通ルーマニア語の terminus a quo（最古年代）として提案されている時代区分にも一定の差異が認められる。A.フィリピデは『ルーマニア人の起源 II』232-233頁で、「7世紀初頭---更に正確に言えば---600年という年が、ルーマニア語が分岐したと考えられる最後の年であると考えることができる」と言っている。O.デンスシアヌは Histoire de la langue roumaine I『ルーマニア語史 I』241頁で、「スラヴ族の到来した6～7世紀にルーマニア語的 "特徴" の議論をすることができる」と信じている。I.シアドベイは Sur les plus anciennes sources de l'histoire des Roumaines『ルーマニア人の歴史における最古の史料について』[Annuaire d'Institut de philologie et d'histoire orientale II「東洋文献学・歴史学研究年報 II」ブリュッセル、1934年、863頁] において、共通ルーマニア語の時代を6世紀と8世紀の間に限定している。A.ロセッティは『ルーマニア語史』1978年、359頁で、「共通ルーマニア語の時代は、ラテン語がロマンス諸語に変化したと一般的に認められている、7～8世紀に始まった」と信じている。それに反して、アカデミーは『ルーマニア語史 II』[1969年] の中では、共通ルーマニア語という述語は、早くも5世紀に適用することができると言っている:「5世紀から8世紀の間の共通ルーマニア語とは、再建された抽象的言語である』[17頁]。

共通ルーマニア語の terminus a quo（最古年代）は7世紀、すなわち、西ロマンス語の世界よりも新しいと言うことができる。この時代区分は、ラテン語はドナウ河下流域において他のいかなる地域よりも早くロマンス語に変化することができた [『言語から見た東西ローマニア』ルーマニア語訳は Cercetări şi studii 1974年、460-467頁]、ということに関してセクスティル・プシュカリウによって表明された意見を確認するものである。

西ロマンス諸語においては、文化として書かれたラテン語は、「俗」ラテン語の自由な発展を隠し妨害もした；ローマ世界の東側では、「俗」ラテン語の諸傾向は、教養のある構造によって妨害されるということはなかった。そのような訳で、東においては、ラテン語は早い時期にラテン的言語という環境から分離し、ラテン語とは関係の無い複数の言語と共に発展した。そのような訳で、8～9世紀の西ロマンス諸語の文献を用いてルーマニア語の年代を限定することは、方法論的に勧めることができない。

12. カルパチア・ドナウ地域におけるラテン語と非ラテン語世界との接触

「東ラテン語は異言語の諸要素と戦わねばならなかった」とヨルグ・ヨルダンは『第12回ロマンス言語学・文献学世界大会議事録 I』［ブカレスト、1970年、69頁］において報告している。G.ロールフスも同様に、『ロマンス言語地理学・歴史と原理』において、ルーマニア語は他のいかなるロマンス語よりも「異質遺伝的」要素に対して開放的であり、ルーマニア語の語彙はganz unabhängig von der allgemeinen Romania（全ローマニアから全く自由）であり、他のロマンス諸語から独立した型の語彙的要素をかなりの程度示している、と指摘している［これらの語彙の大部分は非ラテン起源である］。アカデミーの『ルーマニア語史 II』［1969年、314-374頁］は「影響」を扱った章で、ルーマニア語に発展することになるラテン語に入った非ラテン語的諸要素［ゲルマン語やスラヴ語と同様に、その接触が基層的であるか加層的であるかは問わない］を論じているが、それは全く正当なことである。

上に述べたことは、東南ヨーロッパに齎されたラテン語がその発展過程において蒙った言語上の接触の結果に外ならない。まず最初に、ラテン語と東南ヨーロッパで征服された原住民の諸言語との接触に言及しなければならない［cf.第6章］。ラテン語の語彙を豊かにするのに果した［かも知れない］イリュリア語の役割を評価することは、極めて難しい。ダルマチアのローマ化の程度［それは、イリュリア人の領土の他の地域より長期にわたる支配とイタリアとの至近距離に由来するのであるが］は、アルバニア語やルーマニア語においても同様に、ラテン語に伝えられた要素の数の少なさと調和しているとは言い難い［このことは、アルバニア人の元々の故地が、東北部すなわち、イリュリア人とトラキア・モエシア・ゲト人が接触していた地域のどこかであっただろう、というT.モムセンの考えを強固にするものである。cf.I.

I.ルス『土着語の要素』77頁]。

それとは対照的に、ラテン語とトラキア•ダキア語との接触に関するより豊富な知識を我々は有している。トラキア•ダキア語は、ラテン語に取って代わられる結果になったものの、ウリエル•ワインライヒが Languages in contact『言語間の接触』[1952年] で言うように、言語的接触という現代の述語で解釈しなければならない。土着語の話者共同体は、自分達が学ぶラテン語の中に自分達の言葉を保存するし、一方、ラテン語の話者共同体は被征服者達の言語から言葉を借用する。2つの言語体系が共存する最初の言語帯 [Sprachbund] は後日、干渉を受け [特に語彙の面において]、次に二言語併用に移る。更に、言語変化が生じ、社会•文化的又は心理•社会的優位にある言語が行われるようになる。南東ヨーロッパの一定の地域 [ダルマチア•ドナウ•カルパチア•バルカン地域] においてラテン語が優勢になることができたのは、このような方法によってであった。しかし、ギリシアや今日アルバニア人の居住する地域は、様相を異にする。

この問題に関する社会言語学的研究方法から、言語間接触の問題を扱う場合、一方においては「残余語彙要素」を、他方においては「借用語」を常に調べる必要があるということが分かる。ラテン語とダキア語の接触に由来するルーマニア語の本来の単語は、より徹底的な社会言語学的分析によって、例えば、abur (蒸気)、amurg (夕闇)、buză (唇)、brîu (ベルト)、burtă (腹)、bucur(a) (喜ばす、「喜び」の語根)、ceafă (うなじ)、a fărîma (粉にする)、moş (老人)、vatră (かまど)、などは「保存されたもの」と考えられるし、例えば、argeas (織機)、baci (牧童頭)、balaur (大蛇)、viezure (アナグマ)、ţap (雄山羊)、ţarc (家畜の囲い)、zgardă (犬の首輪)、gresie (砂岩)、grapă (耙)、mal (岸)、ghioază (鉄棒)、gălbeză (羊の肝臓病)、など、すなわち、Bedürfnislehnwörter (必要借用語彙) は、ダキア地方の口語ラテン語からの借用語彙であると考えられる [cf.より完全なリストは、コテアーヌ編『ルーマニア語史 II』1969年、327-356頁]。

ダキア•ローマ人のラテン語と移住して来た「蛮族」の諸言語との接触が

生じたのも、同様の条件下であった。4世紀以降、アウレリアーヌスの命令によりローマの軍団が撤退したダキアは、数々のゲルマン系•アジア系の移住民族で氾濫した。最初に到来したのは、ゴート人であった。西ゴート族は自らの軍事的•政治的支配を、モルドヴァ、トランシルバニア東部及びムンテニア東部に及ぼした［西ゴート族の痕跡は、ピエトゥロアサ、ブザウ、及びスンタナ•デ•ブザウ---チェルネアホヴに独特な文化で発見されている］。ヴァンダル族とゲピダエ族は、ティサ川平野に痕跡を残している。しかし、彼らの支配は短命であった。ローマ帝国と同盟を結んだ後、376年には西ゴート族はフン族によってドナウ河南に追放された。5世紀末にダキアを侵略したゲピダエ族は、実際にクリシャナ［北西トランシルバニア］と西バナトを支配した。ムレシュ盆地にある幾つかの墓地が彼らの残した唯一の痕跡である。576年もしくは568年にゲピダエ族は、［約500年頃にパンノニア平野を支配した］ランゴバルド族とアヴァール族によって破滅に追いやられた。彼らの後裔は、土着民と混血した。ゲピダエ族の支配中、ビザンチン皇帝ユスティニアーヌスは、ドナウ河北の幾つかの都市を占領した。アヴァール族自身が最初に定着したのはパンノニア平野であったが、後に南下してシルミウムとサヴァ川の草刈地を征服し、更に、ドブロジアに向かい、サロニカやコンスタンティノープルにまで達したが、626年の敗北によって再び同じパンノニア平野まで撤退することを余儀なくされた。トランシルバニア地方において、アヴァール族の兵士達の孤立した幾つかの集団が、ムレシュ盆地に見いだされる。土着民は彼らに十分の一税を塩で納めなければならなかった。

移住民族について更に、ティサ川とドナウ河中流にまたがるパンノニア平原に定着した蒙古系の騎馬民族であるフン族に言及しなければならない。そこから彼らは、機敏な略奪を目的とする遠征を開始した。彼らに征服された民族は租税を物納したが、決して征服者と交わることはしなかった。蛮族が軍事的防衛を保証し、一方において、定着していた農耕民族は彼らに食糧を提供し、必要な労役を遂行した。この地域におけるフン族の支配は短命であって［376〜454年］、決定的な注目に値する考古学的痕跡は残していない。

以上のことで明らかなように、4～7世紀に我国を通過した移住民族は、ダキアの周辺部のみ［ティサ川の西側の平野、クリシャナ、西バナト；西ゴート族は、ワラキア地方の東ムンテニアも］を支配しただけであった。これらの民族は、ローマ化の度合の強かった場所、ダキア•ローマの人口の多かった場所を避けて、北部•南部ダキアを通過した。ローマ化の強かった地方［東バナト、西南トランシルバニア、オルテニア、西ムンテニア、カルパチア山脈山岳部、カルパチア亜山脈丘陵地帯］は、農夫や羊飼いとして素朴な田園生活を営む土着民族が居住し続けていた。

蛮族は土着民と交わらなかったし、ダキア•ローマの言語の変化に何ら寄与しなかった。他方、ダキア•ローマ人は、一時的に自らの居住地を捨てて隠れ場に住むために、山や森に逃れて、侵入者達から身を守っていた［cf.C.C.ジュレスク「ルーマニアの森林の歴史」1976年］。

ローマの属州としての生活様式は、ローマの行政当局や帝国軍隊の撤退後も、ダキアのかなりの地方で存続しており、例えば、ドナウ河北部のゴート人にキリスト教の採用を決意させるなど、蛮族に対して一定の影響力を行使した。実際、ウルフィラ主教［318～383年］が7年間にわたってギリシア語•ラテン語•ゴート語で説教したり、［アウクセンティウウス•ドゥロストレンシスが Epistula de fide, vita et obitu Ulfilae『ウルフィラの信仰•生涯•死去の手紙』で述べているように］聖書をゴート語に翻訳したのは、この地方においてであった。土着のダキア•ローマ人の存在は、考古学上の発見で証明されている。4～6世紀にかけてのキリスト教化•ローマ化された土着民族に属するキリスト教崇拝に係わる書物は、ドナウ河以北のダキア•ローマ人の生活の存続を証明している。

ドナウ河以北のダキア•ローマの土着の共同体の言語にゲルマン系民族がどの程度まで影響を及ぼしたかを明確にするのは、あまり容易なことではない。ちょうど、R.レースラーが解釈したように、いわゆるルーマニア人の移住説の中で採用されている議論の1つの困難さがここにある。R.レースラーによれば、ダキア•ローマ人がゴート人やゲピダエ人から借用したとさ

れているゲルマン的要素の欠如が、ドナウ河以北の地域にダキア・ローマ人が存在しなかった証拠だと言う。

しかしながら、実際ゲルマン系の言語を話す民族は、ドナウ河以南にも存在した。しかし、彼らの存在を説明する痕跡は、彼の地で話されている諸言語に保存されていない。C.ディクレスク Die Gepiden、E.ガミルシェク Romania Germanica、P.スコク Gibt esaltergermanische Bestandteile im Rumönischen? [ZRPh XLIII]、J.ブリュフと G.ジュグレア Dacoromania III、イヴァン・プディッチ Die altergermanischen Elemente in den Balkansprache [Proceed IX Intern. Congress of Linguists ハーグ、1964年]、V.アルヴィンテ Zu den altgermanischen Wörtern im Rumänischen [Vermischte Beiträge I ハイデルベルグ、1963年] など、数多くの学者がルーマニア語における古ゲルマン語的要素の発見を試みた。

A.ロセッティが『ルーマニア語史』[1978年、243頁] で指摘したように、方法論的に幾つかの困難がある。すなわち、一方において、ルーマニア語の単語の年代確定、厳密な年代の考証、正確な音韻の対応、他方において、ゲルマン語起源であるとされている単語が正確に輪郭の分かった意味範囲の形を有していない、などといった問題がある。 ciuf／ciof（髪の毛の房）、cutropi（侵入する）、nasture（ボタン）、rapăn（家畜の皮膚病）、sternut（星印のある）[cf.方言で、cal strănut（顔面に流れ星印のある馬）]、targă（担架）、などは、古ゲルマン語からの借用であるとほぼ断定できるものである。多くの学者が上記より多い借用語彙表を作成したが、それらの語源には議論の余地がある [cf. そのことに関する議論は、A.ロセッティ『ルーマニア語史』242-245頁]。それとは反対に、A.ロセッティは、Moldova [川と地方の名前] の語源として、ゴート語の Mulda を考えている [同上書、245-246頁]。

13. スラヴ族

話がスラヴ族のことになると、事態は全く異なる。ヴィストゥラ川及び上ドゥニエステル川あたりから出発した初期のスラヴ族は、6世紀末にかけて二手に別れて進んだ。片方は西部の平野を通過してティサ川を下り、パンノニアを通過し、そこから7世紀初頭にトランシルバニアに侵入する。他方はモルドヴァ地方とムンテニア平野を通過したが、この第2の波は、スチャヴァ・シポトの居留地、ブザウ県はサラタ・モンテオルの共同墓地、オルテニア地方はバルタ・ヴェルデの墓地などで明らかである。ムンテニア平野に関して、ビザンチン帝国の住民達は、ヤロミッツァ川からバルカン半島を南に向けて数多い軍事遠征に赴いたのである［ギリシアの歴史家ヨルダネス、プロコピウス、テオピラクトス・シモカテス、エペソのヨアンネスなどは、ビザンティウムの将軍達に撃退された数多くのスラヴ族による攻撃に関する叙述をしている］。

ダキアに定住したスラヴ族は「スクラヴィーニ」と呼ばれ、ドゥニエストル川の東には「アンツィイ」と呼ばれるスラヴ族がいた。スクラヴィーニの定住に関する最初の言及は、ダキア東部においてであった。そこには、農耕・家畜の飼育・漁業を行う村落が数多くあった。ドナウ河以北のダキアへのスラヴ族の到来は侵略と言えるものであり、W.フォン・ヴァルトブルクは Die Ausgliederung der Romanischen Sprachräume『ロマンス語言語空間の異分子』［ベルン、1950年、67頁］において、直接流血を伴うような攻撃ではなかったものの、長く・連続的な・潜行性の侵入であったと特徴づけている。スクラヴィーニは、ドナウ河の北部においても南部においても、ローマ化した土着民とのより緊密な共存関係に努めた。

考古学によれば、スラヴ族の文化はその土地の要素、特に、ラテン的要素の影響を受け、更にそれと混交している。モルドヴァのシポト・スチャヴァ、

フリンチャ•ヤシ、ドロバンツ遺跡、トランシルバニアにおけるベジド•フィリアシ遺跡、ワラキアにおけるイポテシュティ•チュレル•クンデシュティBなどは、スラヴ的要素と土着の要素との共存が特徴的である。他方、イポシュティ•チュレル•クンデシュティAのように、本質的にローマ文化を有する地方もある。

スクラヴィーニア---7世紀のビザンチウムの歴史家がドナウ河の北部地方を呼んだ名前［cf.西ローマニア、イタリア、ガリアにおけるゴート人］---は、もはや地政学上の実態ではなかった。スクラヴィーニアという名称が用いられても、それはローマ化された土着民族の連続した存在を排除するものではない。実際、スラヴ族はドナウ河の北側に長期間止まっていた訳ではなかった。6～7世紀にかけてバルカン半島は実質上、エーゲ海に至るまでスラヴ族によって占領されていた。彼らは、征服者として到来した。

以上で明らかなように、ローマ化された民族とスラヴ族との接触は、ドナウ河の北側と南側で成されたのである。しかし、ローマ化した土着民の中には、ドナウ河の北側のダキアに渡って保身したものもいたし、反対にバルカン山地やピンダス山地に避難したものもいた。彼らは自らをマケドニア•ルーマニア人もしくはアルーマニア人と呼び、10世紀以降はビザンチン人によってヴラック人と呼ばれている。Kutzovlach（クツォヴラック）という名前は、ミロン•コスティン、ディミトゥリエ•カンテミール、ギョルゲ•シンカイなどにさえ知られていたが、それはマケドニア•ルーマニア人に付けられた名前である。

ドナウ河の南側におけるスラヴ族の同化の結果として、今日のブルガリアの地にスラヴ族の支配者として679～680年に定住したトルコ語を話す民族であるブルガリア人のスラヴ化がある。原始ブルガリア人のスラヴ化の過程は、両民族の混交がもはや止められなくなった時、すなわち、8～10世紀にかけての国家の誕生以降に開始された。9世紀初頭、ブルガリア人の支配はドナウ河の北、バナト地方を越えてティサ川にさえ至っていた［スンニコラウル•マレで発見された財宝は、最近の考古学では幾分疑問視されてはいるものの、

原始ブルガリア人の物であったと考えられている]。

ブルガリア人はツァー•ボリスの下、全員がキリスト教徒となり、封建制度を採用した。キリスト教によって原始ブルガリア人とスラヴ族の民族的混交が達成され、同様にスラヴ化も暗々裡に成された。スラヴ語が、ギリシア正教会において、礼拝の言語として認められた。教会の儀式や位階制も同様に、多分ツァー•シメオンとその息子ペトゥルの下、10世紀にドナウ河の北側に伝播した。トランシルバニアにおいては、ブルガリアのスラヴ的典礼とブルガリア人の行っていたビザンチン型の教会制度は、ハンガリー人の到来以前に入っていた。

西南スラヴ族［後にセルビア•クロアチア語を話すようになる］は、最初はアドリア海近く［リム川、イバル川、西モラヴィア河畔］に定着した。後に、14世紀のセルビア人とギリシア人の皇帝であるステファン•ドゥシャンの下、彼らはマケドニア、アルバニア、エペイロス、テッサリアを征服し、15世紀以降セルビア人の拡張が北に向かう。

ルーマニア語が接触したスラヴ語の特徴を識別し、ルーマニア語の中におけるスラヴ的要素の起源を明らかにするためには、ブルガリア語とセルビア•クロアチア語両方の研究をする必要がある。

14. スラヴ語とルーマニア語との関係

ドナウ川の北と南におけるローマ化した民族とスラヴ族との接触の結果、ルーマニア語が誕生した7世紀に早くも、スラヴ語•ルーマニア語に係わる問題が発生した。あのロマンス語が「ルーマニア語」となったのは、スラヴ語の影響を受けてであろうか、あるいは、ルーマニア語はスラヴ語と接触する前に既にルーマニア語として存在していたのであろうか。

この問題に対して最初に解答を試みたのは、I.A.カンドゥレアであった。彼は Les éléments latins de la langue roumaine: Le consonantisme『ルーマニア語のラテン語的要素: 子音』[パリ、1902年] と題した論文の中で「スラヴ語がバルカン諸国に侵入した時、すなわち、6〜7世紀にかけて、ラテン語の時代は終わり、ルーマニア語が形成されていたと考えることができる』[cf.フロリカ•ディミトゥレスク『I.A.カンドゥレア』ブカレスト、1974年、23-24頁] と言う。同様の努力が後日セクスティル•プシュカリウによって成された [Limba română I 1940年]。彼は「ルーマニア語において主たる音韻変化が既に起こり、ルーマニア語の主な特徴が出来上がり具体化した時に、上層としてのスラヴ語の影響が始まった」[284頁] と言う。より最近になり、I.パトゥルツは Studii de limba română şi de slavistică『ルーマニア語とスラヴ系言語の研究』[クルージュ、1974年] の中で、あるスラヴ学者の分析に従って、同様の仮説を支持した。他方、O.デンスシアーヌは『ルーマニア語史 I』で、I.ボグダンは Istoriografia română şi problemele ei actuale『ルーマニア正史とその現実の諸問題』[ブカレスト、1950年] で、A.ロセッティは『ルーマニア語史』[1978年] で、ヨルグ•ヨルダンは Importanţa limbii române pentru studiile de lingvistica romanică『ロマンス語研究におけるルーマニア語の重要性について』[第12回ロマンス語学国際大会議事録 I、ブカレスト、1970年、67-76頁] で、「多

くの言語学者達と歴史家達のほぼ一致した見解」を信頼し、バルカン的・スラヴ的要素が、ロマンス語としてのルーマニア語の特異性の形成に寄与したと述べている［cf.ロセッティ『ルーマニア語史』1978年、268頁］。ローマ化された民族の言語と征服者たるスラヴ族の言語の接触は、ダキア人とローマ人との関係で我々が研究した言語上の接触に係わる同様の総合的パラメーター内で考えなければならない。我々の推定するところによると、上記の接触の期間中、ローマ化された民族はスラヴ語の単語・形態・文章構成法を採用し、他方、スラヴ族の方はラテン的ルーマニア語を同化した。M.クレピンスキーは Mélange Mario Roques IV［1952年、153-162頁］に収録されている『ルーマニア語彙におけるスラヴ的要素』の中で、スラヴ族がルーマニア人から借用した「借用語」とスラヴ族がルーマニア人のラテン語に遺贈した「残余」とを区別している。

以上のことから、スラヴ族は自らが征服したロマンス語民族から言葉を習得したと言える。と言うのも、6～7世紀にかけてはロマンス語はまだ大多数の人々の名声のある言語であったからである。このことは、ラテン語の感情を表す単語の多くをスラヴ語で置き換えている事実の説明となる。ルーマニア語と成ったラテン語を習得した後、スラヴ族はルーマニア語の中で、彼らがその意味と表現力豊かな含蓄を既に知っている自らの言葉を用いることをより好んだ。

ルーマニア語は、ロマンス諸語の中にあって唯一つ、amor, carus, amare, sponsa などの単語を保存していない言語であり、それらはそれぞれ、dragoste（愛）、drag（親愛なる）、a iubi（愛する）、nevastă（妻）、logodnă（婚約）、a logodni（婚約する）、で置き代えられた。恋愛に関する数多くのスラヴ語の単語［それらの中には卑猥なものもある］を追加することができる［cf.E.ガミルシェク Zur Frühgeschichte des Rumänischen『ルーマニア語の古代史について』Gedächtnisschrift für Adalbert Hämel『アダルベルト・ヘーメル記念論文集』［ヴュルツブルグ、1953年、62－72頁］。そのようなスラヴ的要素は「残余」であると考えられる。同様に、ルーマニ

アのラテン語における発音のスラヴ的慣習として、語頭の e- のヨッド化・口蓋化［3人称単数男性主格代名詞の el は［jel］と発音される］、語頭の o- の唇音化［ochi（目）、om（人）は、それぞれ、uochi, uom と発音される］、子音の /h/ と /z/、子音連続 st, zd などを挙げることができる。lume（世界）［しかし、lumea ochilor（目の光）の例の用に「光」］、lună（天体の月・暦の 月）、joc（遊び・ダンス）と a（se）juca（遊ぶ・ダンスをする）などの意味的借用・翻訳や、vită（動物・特に役畜［＜ ラテン語の vita（生命）］）、lemn（樹・木）［例: untdelemn（食用油）＜ スラヴ語の derevo maslo（逐語的には「樹木油」）］などの意味変化は、ルーマニアのラテン語を学んだ人達のスラヴ的「精神構造」を証明するものである。

ローマ化された民族とスラヴ族との接触は必然的に二言語併用を齎した。A.ロセッ ティは『ルーマニア語史』［1978年、309-336頁］で、音韻・形態・文章構成法・語彙に係わる「スラヴ語・ルーマニア語二言語併用の効果」について論じている。エミル・ペトゥロヴィッチは Influenţa slavă asupra sistemului fenomenelor limbii române『ルーマニア語の音韻体系に及ぼしたスラヴ語の影響』［ブカレスト、1956年］と Kann das Phonemsystem einer Sprache durch fremden Einfluss umgestaltet werden? Zum slavischen Einfluss aus das rumänische Lautsystem『一言語の音韻体系は外国語の影響を受けて変化し得るか。ルーマニア語の音韻体系に対するスラヴ語の影響について』［ハーグ、1956年］において、pom-pomi［「木」の単数と複数］に見られるような語末子音の軟音化を伴う相関関係及び lac（湖）-leac（薬）に見られる語中の相関関係がルーマニア語に存在するのは、スラヴ語の影響のせいであるという説明を試みた。

同種の見解が P.ハンプにより Cercetări de lingvistică IV［1959年、171-175頁］で支持されたが、以下に示すように反対意見も多かった: Studii şi cercetări lingvistice［VII、1956年、31頁以降及び VIII、1957年、43頁以降］における Despre sistemul fonologic al limbii române「ルーマニア語の音韻体系について」、Fonetică şi dialectologie II［1960年、59頁以降］

の Asupra clasificării fonemelor semivocale (sau semiconsoane)『半母音（または半子音）について』、Zbornik za filologiju i lingvistiku IV-V［ノヴィ・サド、1961-1962年、289-290頁］における Observaţii asupra palatalizării consoanelor în limba română『ルーマニア語の子音の口蓋化についての観察』、Studii şi cercetări lingvistice XII［1961年、11-16頁］における Despre regula comutării în fonologie『音韻論における変換規則について』などで A.ロセッティが、同様に Studii şi cercetări lingvistice VII［1956年、201頁以降］における Contribuţii la studiul fonologiei limbii române「ルーマニア語音韻論試論』、Studii şi cercetări lingvistice VIII［1957年、55頁以降］における Constituirea corelaţiei consonantice de timbru palatal în limba română『ルーマニア語における子音の相関的構造』、Mélanges linguistiques［オスロ・ブカレスト、1957年、76頁以降］における Les sémivoyelles roumaines du point de vue phonologique『音韻論から見たルーマニア語の半母音』などにおいて A.アヴラムが、Studii şi cercetări lingvistice VIII［1957年、49頁以降］における Asupra corelaţiei de muiere a consoanelor în limba română「ルーマニア語における子音の湿音化の相関関係について」において E.ヴァシリウが、更に、Fonetică şi dialectologie I［1958年、17頁以降］における Consoanele româneşti urmate de *ea* în comparaţie cu consoanele muiate ruseşti『ロシア語の湿音との比較における ea に後続されたルーマニア語の子音について』において D.コプチャクなどが反対意見を表明している。

ブカレストとコペンハーゲンで発行された A.ロセッティ編の Recherches sur les diphtongues roumaines『ルーマニア語の二重母音に関する研究』の中に、スラヴ語の影響下で出現したルーマニア語の母音の音色の相関関係の出現に関する、E.ペトゥロヴィッチに反対の立場の最も重要な多くの研究が含まれている。前母音と /j/ が先行する子音に及ぼす影響はただダキア・ルーマニア語の幾つかの方言を特徴づけるだけであり、標準ルーマニア語と

他の方言はただ母音対立の型を記録するだけである、と大多数のルーマニア人の音韻学者が考えていることは注目に値する。

A.ロセッティは『ルーマニア語史』[1978年、309頁] で、「スラヴ語の影響は口語ルーマニア語における唇音の口蓋化と幾つかの方言における歯茎閉鎖音の口蓋化 [d', t', ń] に対して主として責任があると」述べているが、これは、音韻体系内で口蓋音によって成された役割に関してだけの話である。実際は、幾つかの方言における口蓋音の変化は、スラヴ語との接触による最近の結果のように思われる。

形態論の分野において、スラヴ語とルーマニア語の二言語併用は多分、女性名詞の格の保存---主•対格 (o) casă、与•属格 (unei) case---と呼格 [特に、-o で終わる女性の呼格] の保存と拡大に寄与した [cf.プシュカリウ Limba română I 1976年、282頁、Cercetări şi studii 1974年、303-306頁、A.ニクレスク『ロマンス諸語の中におけるルーマニア語の特異性 I』、1965年、9頁、A.ロセッティ『ルーマニア語史』1965年、310-311頁]。スラヴ語とルーマニア語との二言語併用の結果として、スラヴ語をモデルにした複合数詞 unsprezece (11) [cf.スラヴ語 jedinŭ na desente]、douăzeci (20) [cf.スラヴ語 dŭva desenti] などが誕生し、ラテン語の centum (100) がスラヴ語の sŭto に取って代わられ、ルーマニア語で sută となり、再帰代名詞が発達し、接頭辞による相の表現 [a ponegri (中傷する)、a polei (磨きをかける)、a zăurdi (牛乳が酸っぱくなる)、a răstălmăci (曲解する) など] が生まれた。

文章構成法において、議論の余地のない事実は、遥かに少ない。E.セイデルは Elemente sintactice slave în limba română『ルーマニア語におけるスラヴ語的文章構成法の要素』[ブカレスト、1958年] において、ルーマニア語の文章構成法に近似するスラヴ語の文章構成法の発見を試みているが、それらの大部分は他のロマンス諸語においても同様に認められるものである。

他方、ルーマニア語の語彙の中には、かなりの数のスラヴ語の要素がある。A.デ•チハク [1825〜1887年] の Dictionnaire d'étymologie daco-romane

『ダキア•ロマンス語語源辞典』に始まりごく最近に至るまでの多くの統計が、かなりの数に昇るスラヴ語の単語の存在を示している。A.デ•チハクによれば、彼の調べた5,765語の内2,361語がスラヴ語であると言う。D.マクレアは、Studii şi cercetări lingvistice V［1954年、7-18頁］に収められたContribuţie la studiul fondului principal de cuvinte al limbii române『ルーマニア語の基本語彙研究試論』において、ミハイ•エミネスクの詩全体の16.81%がスラヴ語であると言う。他方、D.マクレアは、I.A.カンドゥレアと G.アダメスクの編集した Dicţionarul enciclopedic ilustrat『図解百科事典』と Cartea Românească『ルーマニアの書籍』［1930年］を分析した結果、16.45%のスラヴ語の要素を発見した。V.シュテウは、Studii şi cercetări lingvistice X［1959年、419-443頁］に収められた Observaţii asupra frecvenţei cuvintelor în operele unor scriitori români『数人のルーマニア人作家の作品における単語の頻度に関する考察』において、13.21%のスラヴ語の要素を記録している。いわゆる基本語彙に立脚した A.グラウールの計算によると、1,417語の内21.49%がスラヴ語的要素であると言う。

スラヴ語の単語は早くも7世紀［A.ロセッティによれば、6世紀末］にルーマニア語に侵入した。しかしながら、侵入の年代は各研究者によって異なる。O.デンスシアーヌは Histoire de la langue roumaine I『ルーマニア語史 I』［241頁］で、5～7世紀説を提案している。セクスティル•プシュカリウ Limba română I［1976年、281頁］と、T.カピダンは8～9世紀を提唱しているが、I.コテアーヌ編 Istoria limbii române II『ルーマニア語史 II』［1969年、373-374頁］には、スラヴ語の借用はやっと8世紀になってからであるという主張がある。ヨン•パトゥルツは、Studii de limba română şi de slavistică［クルージュ、1974年、101頁以降］に収められたVechimea relaţiilor lingvistice slavo-române『スラヴ語•ルーマニア語の関係の古さ』という論文の中で、スラヴ語の影響は、「9～10世紀になってからである」と主張している。更に、イリエ•バルブレスクは

Individualitatea limbii române şi elemente slave vechi『ルーマニア語の特異性と古スラヴ語の要素』［ブカレスト、1929年、468頁］で、スラヴ語の要素は10世紀以前であるとは言い難いとしている。

スラヴ語の単語は、幾つかの層に分けられねばならない：1）7～8世紀にルーマニア語に入った古い単語［ヨン•パトゥルツが上掲書105頁で、既に「ドナウ地方のラテン語」に入っていたと考える単語も含まれる］。2）ドナウ河以北においてルーマニアの諸侯国が形成された12～13世紀に借用された単語。3）ロシア語、ブルガリア語、セルビア•クロアチア語、ポーランド語、ウクライナ語などのスラヴ語から別個に13世紀以降に借用された単語。

スラヴ語からの初期の借用語は、ルーマニア語において古ラテン語と同じ扱いを受けていることが明確に理解できる。それらの内の幾つかの単語はマケドニア•ルーマニア語［＝アロムン方言］にも見られるので、共通ルーマニア語へ早期に混入したことの証拠となる。次に幾つかの例を示そう：şchiau（奴隷•スラヴ人）、jupîn（主人•主君）、stăpîn（君主•地主）、stînă（羊小屋［マケドニア•ルーマニア語にも存在する］）、smîntînă（ミルク•クリーム）、sută（100［マケドニア•ルーマニア語にも存在する］）、baltă（池•沼［マケドニア•ルーマニア語にも存在する］）、gard（柵•垣根［マケドニア•ルーマニア語にも存在する］）。これらの内、jupîn, smîntînă, stăpîn, stînă［cf.スラヴ語　zŭpanŭ, sŭmeⁿtana, stopanŭ, stanŭ］は、「a ＋ n」の連鎖で a の音色を閉じた音色にするという特徴がある［「a ＋ n」は後期スラヴ語では、変化せずに保たれている。cf. hrană（食べ物）、rană（傷）］。baltă と gard は音位転換をせずに［cf.アルバニア語 baltä, gardh］、or と ol の音位転換の起こる7世紀後半以前の非常に早い時期にルーマニア語彙に借用された可能性がある；音位転換を起こした単語の多くは、8世紀にバルカン諸語に入った［cf.しかしながら、I.コテアーヌ編『ルーマニア語史 II』1969年、374頁では、流音の音位転換のない baltă、daltă（大工道具のノミ）、gard などは、スラヴ語の音連鎖 or, ol が変化する以前のスラヴ語の影響を証明するものではない、と考えられている。更に、

「現行の音位転換を起こしていない形態がルーマニア語に生じた」と考えられている]。全く同じような例として、ラテン語の sclavus（奴隷）を挙げることができる［cf.sclavinia ＞ ルーマニア語 şchiau（スラヴ人)、尤も、スラヴ語の要素の中では、kl はそのままの形で残っている: clin（三角ぎれ)、cleşte（釘抜き)、clopot（鏡)、など]。数詞の sută（100）も非常に古い［cf.I.パトゥルツ、上掲書]。

次に挙げるのは、A.ロセッティ『ルーマニア語史』［1978年、316-317頁］による、ドナウ河以北•以南におけるルーマニア語諸方言に共通して見られる単語のリストである［DRはダキア•ルーマニア語を、MR はマケドニア•ルーマニア語を、MgR はメグレン•ルーマニア語を表す］: DR MR babă（老女)、DR MR blid（椀)、DR MR bob（豆)、DR MR brazdă（畝)、DR cleşte MR cleaşte（釘抜き)、DR clin MR cl'in（三角ぎれ)、DR clopot MR cloput（鐘)、DR coaje MR coajă（殻)、DR MR cočasă（草刈鎌)、DR colac MR culac（輪形のパン)、DR MR coş（篭)、DR cocean MR cučan（トウモロコシの肉茎)、DR croi MR cruiri（裁断する)、DR cosiţă MR cusiţă（お下げ髪)、DR MR duh（魂)、DR MR gol（空の•裸の)、DR goni MR aguniri（追う)、DR MR grădină（庭)、DR hrăni MR hrăniri（養う)、DR împleti MR împletesc MgR ampletes（編む)、DR înveli MR anvăliri（覆う)、DR învîrti MR anvărtiri（回す)、DR izvor MR izvur（泉)、DR MR jale（悲しみ)、DR MR jar（燃えさし)、DR lene MR leane（怠惰)、DR a lipi MR alîk'iri（張り付ける)、DR livadă MR livade（果樹園)、DR lopată MR lupată（シャベル)、DR milă MR ńilă（哀れみ)、DR milui MR ńiluiri（哀れむ)、DR nevastă MR n(i)veastă（妻)、DR nevoie MR nivol'ă（必要)、DR a opări MR upăriri（熱湯でやけどをさせる)、DR MR pîndar（張り番)、DR MR padină（台地)、DR plăti MR plătiri（払う)、DR MR plug（犂)、DR MR poală（裾)、DR MR prag（敷居)、DR poliţă MR piuliţă（棚)、DR MR pungă（財布)、DR rană MR arană（傷)、DR

MR rac（ザリガニ）、DR rogoz MR rugoz（菅）、DR scump MR scumpu（親愛な）、DR MR sită（篩）、DR MR slab（虚弱な）、DR MR sută（100）、DR MR stog（干し草の山）、DR a topi MR tuk'iri（溶かす）、DR MR trup（身体）、DR MR zmeu（竜）。

T.カピダンは、Elementul slav în dialectul aromân『アロムン方言［＝マケドニア•ルーマニア方言］におけるスラヴ語の要素』［1925年、45、51-51頁］において、セクス ティル•プシュカリウは Limba română I［1976年、240-242頁］において、DR MR MgR coasă（草刈り鎌）、DR MR MgR dăruies(c)（私が提供する）、DR a învîrti MR anvîrtesc MgR anvărtes（捩る•回す）、などを挙げているが、これらとの関係において A.ロセッティ［上掲書］は但し書きを付けていて、マケドニア•ルーマニア方言にスラヴ語が入ったのは後世のことであり、ダキア•ルーマニア方言とは独立してのことであるとしている；そのような時代差は、音声の扱いの差によっても明らかにされ得る。ルーマニア語の全ての方言に共通しているのは、unsprezece（11）［MR unsprăchaţe（11）］、doisprezece（12）～nouăsprezece（19）まで、treizeci（30）、patruzeci［MR treidzăţi（30）、patrudzăţi（40）］～nouăzeci（90）の数詞である。ルーマニア語の全ての方言に共通するスラヴ語の要素については、セクスティル•プシュカリウ Limba română I［1976年、281-284頁］を見られたい。

スラヴ語の語彙は、ルーマニア語において人間生活•活動の全ての分野に存在し、ラテン語の単語に取って代わっている。ラテン語の単語で「遺失」したものがあるということは、スラヴ人が同化しようとしていたルーマニアのラテン語に幾つかのスラヴ語の単語を残したということである：babă（老女）、milă（哀れみ）、gol（空の•裸の）、a plăti（払う）、rană（傷）、slab（痩せた•弱い）、など。他方、農機具•農地構成•（封建的）社会機構•宗教機構•家財道具•住居•動植物•天然現象•食物•衣類などを表すスラヴ語の単語は、ロマンス語民族がスラヴ族と共同生活をしている間にスラヴ語を借用したことを証明している。

しかしながら、多くのスラヴ語の単語がダキア•ルーマニア語のみに存在するということは、借用が共通ルーマニア語の時代、すなわち、10世紀以降に成されたことを示している。実際、A.ロセッティは『ルーマニア語史』[1978年、318頁]で、礼拝に関するスラヴ語彙がスラヴ族のキリスト教化以降、すなわち、ほぼ10世紀以降であり、ルーマニア語における高級官僚の名前がビザンチンの封建機構を示す述語の借用であり、それ故に、10世紀以降であるのと全く同じように、農業用語[plug(鋤)は例外]は「12世紀以前だとは考えられない」としている。そのような単語はブルガリア語からの影響の結果の可能性がある。

次に、A.ロセッティの『ルーマニア語史』[1978年、320-324頁]から、スラヴ語起源のダキア•ルーマニア語の語彙表を挙げよう: 社会的地位や社会機構を示すもの---bejenie(避難•追放)、boier(特権貴族)、grădinar(庭師)、jupîn(主君•君主)、pribeag(追放•難民)、obște(共同体)、răscoală(反乱)、răzmeriţă(反乱)、rob(奴隷)、slugă(召使)、stăpîn(主君•地主)、など; 人間関係や家族関係を表すもの---babă(老女)、nevastă(妻)、maică(お母さん)、ibovnic(恋人); 肉体的•精神的特徴[良い意味も悪い意味も含む]を表すもの---becisnic(弱い)、blajin(優しい)、cîrn(しし鼻の)、destoinic(立派な)、dîrz(不屈の)、drag(親愛な)、gîrbov(せむしの)、groază(恐怖)、grozav(恐ろしい)、jale(悲しみ)、lacom(貪欲な)、lene(怠惰)、milostiv(寛大な)、nădejde(希望)、など; 体に関するもの---cîrcă(背中)、crac(足、脚)、gît(首•喉)、gleznă(踝)、gol(空の•裸の)、obraz(頬)、slab(痩せた•弱い)、trup(身体)、など; 物質文明•衣類を表すもの---cergă(キルト)、cojoc(羊皮のチョッキ)、copcă(ホック)、izmană(パンツ)、nădragi(農作業用のズボン)、poală(裾)、p(r)estelcă(エプロン)、rufă(下着)、scufie(ナイトキャップ)、șubă(羊皮のオーバー)、など; 商業関係のもの---tîrg(市場)、ucenic(徒弟)、など; 家具類に関するもの---bici(鞭)、bîtă(棒)、belciug(金属の環)、blană(毛皮)、blid(椀)、ciocan(ハンマー)、cleşte(釘抜き)、clopot

(鐘)、coasă (大鎌)、colibă (小屋)、coşciug (棺桶)、cosor (刈り込み用ナイフ)、coş (篭)、coteţ (家畜小屋)、cumpănă (つるべ•天秤)、daltă (大工用のノミ)、grădină (庭)、grajd (馬小屋)、greblă (熊手)、grindă (角材)、iesle (まぐさ桶)、laviţă (農家の木製長ベンチ)、lopată (シャベル)、nicovală (鉄敷)、ogradă (中庭)、perie (ブラシ)、pernă (枕)、pilă (ヤスリ)、pinten (拍車)、pivniţă (地下倉庫)、ploscă (水筒)、pod (屋根裏)、plută (筏)、poliţă (棚)、prag (敷居)、prispă (農家の軒下のポーチ)、pungă (財布)、rogojină (蓙)、sanie (橇)、sfeşnic (燭台)、sfoară (綱)、sticlă (瓶)、sită (篩)、strungă (羊小屋の入口)、teasc (ブドウ圧搾機)、ţeavă (パイプ)、tocilă (グラインダー)、topor (手斧)、uliţă (農村の通り)、vadră (バケツ)、vîslă (櫂)、zăbrea (鉄格子の棒)、zăvor (閂)、など; 食物や料理に関するもの---colac (輪形のパン)、drojdie (イースト)、hrană (食物)、icre (魚卵)、lacom (食いしんぼうの)、oţet (酢)、pită (パン)、poftă (食欲)、smîntînă (ミルク•クリーム)、ulei (食用油)、など; 農業に関するもの ---brazdă (畝)、ogor (耕された畑)、pleavă (籾殻)、plug (犂)、pogon (面積の単位、5012㎡)、prisacă (養蜂所)、rariţă (耕された畑)、snop (束)、stog (干し草の山)、など; 漁業に関するもの---corabie (船)、mreajă (網)、năvod (魚網)、undiţă (釣竿)、vîrşă (梁)、など; 動物•魚•鳥禽類に関するもの---bivol (水牛)、cîrtiţă (モグラ)、cocoş (オンドリ)、cuc (カッコー)、dihor (ニオイネコ)、gînsac (雄のガチョウ)、gîscă (ガチョウ)、guşter (アオトカゲ)、jivină (野獣)、lebădă (白鳥)、lin (鯉の一種)、molie (蛾)、nevăstuică (テン)、ogar (猟犬)、păstrăv (マス)、păun (クジャク)、prepeliţă (ウズラ)、rac (ザリガニ)、raţă (アヒル)、rîs (ヤマネコ)、sobol (モグラ)、stelniţă (トコジラミ)、ştiucă (淡水カマス)、veveriţă (リス)、vidră (カワウソ)、vrabie (スズメ)、zimbru (野牛)、など; 植物•花•野菜に関するもの---bob (豆)、cocean (トウモロコシの肉茎)、gulie (カブ)、hamei (ホップ)、hrean (ワサビ)、jir (ブナの実)、lobodă (ヤマホウレンソウ)、mac (ケシ)、măslin (オリー

ブの木)、morcov (ニンジン)、ovăz (カラスムギ)、praz (リーキ)、ştir (アマランス)、など。

更に、礼拝や宗教機構に関するキリスト教関係の述語［幾つかはギリシア語からの借用］もある: agnet (結んだパン)、blagoslovi (祝福する)、a se căi (後悔する)、chilie (僧房)、chivot (聖箱、特に聖なるパン用の)、colindă (キャロル)、colivă (葬式の時の小麦粥)、duhovnic (聴聞僧)、dveră (祭壇に通じる戸)、Isus Hristos (イエス•キリスト)、icoană (イコン)、liturghie (ミサ) , molitvă (特別祈祷)、monah (修道僧)、mucenic (殉教者)、odăjdii (法衣)、pomană (喜捨)、popă (僧侶)、post (断食)、pravilă (法 典)、praznic (葬式の後の宴会)、potir (杯)、schit (小修道院)、sfînt (聖人)、slavă (栄光)、smirnă (ミルラ•没薬)、stareţ (修道院長)、taină (神秘)、tîmplă (聖画壁)、 ţîrcovnic (教会の番人)、troiţă (路傍の十字架)、utrenie (朝課)、vecernie (晩課)、 rai (天国)、Rusalii (聖霊降臨祭)、iad (地獄)、diavol (悪魔)、など。更に、読み書きの教養を表す単語として: buche (文字)、ceaslov (聖務日課表)、cerneală (インク)、a citi (読む)、diac, grămătic (書記)、izvod (原書)、leat (年)、veleat (年•寿命)、letopiseţ (年代記)、molitvelnic (祈祷書)、predoslovie (序文)、slovă (文字)、tîlc (意味)、tipic (教会の法規)、などが挙げられる。

副詞の中にもスラヴ語起源のものが幾つかある: da (はい)、ba (いいえ)、ne-, za- といった接頭辞や -alnic, -nic, -iv といった接尾辞など。

特に重要な問題は地名にある。ルーマニア語の多くの地名［河川名、町村名、地方名］は、スラヴ語起源である。しかし、E.ペトゥロヴィッチは、スラヴ人自身によって齎された［ルーマニア語では何も意味しない、例えば、Cerna, Lipova, Bălgrad などの］スラヴ系の地名と、ルーマニア人によって齎された［ルーマニア語で何らかの意味を有する、例えば、Baba, Belciu, Cîrnu, Lunca, Sîrbi, Stolnici, Varniţa, Vidra, Vîrtop などの］地名•人名•普通名詞などとは区別されなければならないとしている。

しかしながら、スラヴ語の地名の幾つかは以前彼の地で行なわれていたラテン語の語義借用である: C.T.サヴェアーヌは、ドブロジアにおけるCamena はドブロジアのラテン語碑文に現れるラテン語の Petra（石）のスラヴ語訳に外ならないという事実を明らかにした［cf.セクスティル•プシュカリウ Limba română I［1976年、301頁］。セクスティル•プシュカリウは同書［302頁］において、Bistriţa という川の名前の源は、その川の元の名前が多分 Repedea［「急流」の意］という支流に由来し、後にスラヴ語に翻訳されたものであることを示した。全く同じように、Frumoasa［「美しい」の意］は Dobra と、Cîmpulung［「長い野原」の意］は Dlăgopole と、大衆によっても公権力によっても翻訳されている。同じような状況にあるのが大河川のラテン語名である: Marisius は Mureş に、Alutus は Olt に変化した［尤も、N.ドゥラガーヌは Românii în veacurile IX-XIV『9～14世紀におけるルーマニア人』［537頁］において、Alt という中間の段階を提唱している］。

以上のように、ある地名がある時代から別の時代に、同一の地域に居住しある言語を話す民族から別の言語を話す民族に伝えられるようなケースは、この地における生活の連続性を証明する証拠に外ならない。しかし、そのように古い名前が歴史を通じて世代から世代へと伝わらなかったとしても、連続性が分断されたことの証拠にはならない。地名は公の理由で変わることがままある［セクスティル•プシュカリウ Limba română I 1976年、302頁］。征服者達は地名を変えることができるし、権利がある: ローマ人はそうした［Turidava を Apulum に］し、スラヴ人も同じこと［Craiova, Ialomiţa, Braşov など］をしたに違いない。

他方、スラヴ語の多くの地名が古ブルガリア語を話す人達から受け継がれていることを言明しなければならない［例えば Dîmboviţa, Bîrza, Mislea］。又、スラヴ人の人名に由来し、ルーマニア人によって付けられた固有名詞に由来することも時としてある［例えば、Bogdăneşti, Bălăneşti, Dobreşti, Iveşti, Vladimireşti, Voloşcani など。cf.ヨルグ•ヨルダン Nume de

locuri româneşti în R.P.R.I『ルーマニア人民共和国における地名 I』ブカレスト、1952年、123-136頁]。

スラヴ系の他の地名は、スラヴ人自身によって齎されたものである: Bahna, Bălgrad, Bistreţ, Bistriţa, Brat, Bratia, Craiova, Cozia, Cerna, Criva, Cruşov, Dîlboca, Ialomiţa, Ilfov, Jijia, Lipova, Mleci, Novac, Ohava, Pociovalişte, Predeal, Rodna, Snagov, Suhodol, Vlaşca, Zlatna. これらの地名と同様に、スラヴ人が共存していた時期にルーマニア人によって与えられたスラヴ語の地名にも言及する必要がある。E.ペトゥロヴィッチは Daco-Romania X 2 [1942年、237-238頁、240-241頁] 収録の Daco-Slava『スラヴ系ダキア』において、ヨルグ・ヨルダン Rumänische Toponomastik『ルーマニア語の地名学』[ボン・ライプツィッヒ、1924-1926年] に端を発する上記の区別をしている。また同じく、スラヴ語起源の共通ルーマニア語に由来する地名も、ルーマニア人自身によって与えられた可能性がある、と E.ペトゥロヴィッチは考えている [Grădişte, Ponoare, Săliişte, Grindu, Prisaca, Crivina, Lunca, Dumbrava, Zăvoiu, Poiana, Preluca, Livada, Rogoz, Slatina, Strija, Peştera, Ocna, Rîmnic, Vîrtop, など]。

スラヴ族との接触の結果は、ルーマニア語の体系の深部においてではないが、量的に明らかである。語彙と地名の一部分はスラヴ語起源である。形態的構造において、スラヴ語のみの影響でルーマニア語の幾つかの形態的特徴を説明するのは、疑問の余地のある仕事である。-o の語尾を有する女性呼格は、-a の語尾を有する呼格と近似している; zece (10) の助けを借りて [unsprezece (11), douăzeci (20) など] 作られる数の構造は、語彙の問題または数詞の構造と係わりのある語彙の問題であると考えられる; 更に、再帰動詞は、他のロマンス諸語同様に存在する。

他方、ルーマニア語におけるスラヴ語の諸要素の中で、音声的特徴が、その単語の浸透の時代と起源に関する証拠を提供する可能性がある。brazdă (畝)、grădină (庭)、grajd (馬小屋) のような -ar や -al の音位転換を

伴った単語は、9世紀以降に導入されたものと考えられる。と言うのは、音位転換は、南スラヴ語においては、9世紀に起こったからである。同じ頃に導入されたものとして、clopot（鐘）、coş（篭）、gol（空の•裸の）などを挙げることができよう: o は8～9世紀の南スラヴ語において、短い a から発達したものである。-o の語尾を有する呼格も同じ時代にさかのぼる。他方、スラヴ語の on は11世紀まで un として扱われていた［例: luncă（川岸の草原）、a săvîrşi（完成する）、cf. a sfîrşi（終える）、veleat（年•寿命）、predoslovie（序文）、grămătic（書記）、izvod（源•起源）、slovă（単語•文字）、など］。

ローマ化した民族とスラヴ族との接触がルーマニア語が発達する数世紀にわたって行われていたことを既に上で見た。特にブルガリア人、セルビア•クロアチア人などとの直接的接触のみならず、大聖堂•教会を通じての古スラヴ語との文化的接触という形での再三にわたるスラヴの影響は、ルーマニア語におけるスラヴ語起源の特に重要な語彙の出現の原因となった。

しかしながら、I.A.カンドゥレア、S.プシュカリウ、更に、A.フィリピデ［cf.『ルーマニア人の起源 II』55頁］が指摘するように、「ルーマニア語は外国語の影響なしに発達した」のであり、ローマ化した民族の言語に対するスラヴ語の影響があったのは「ルーマニア語において音韻変化の主たる規則が既に定着し、ルーマニア語の様相が既に固定化した時」であった［S.プシュカリウ『ルーマニア語 I』1976年、281頁］。スラヴ語の影響は、ルーマニア語が「出現した」7・8世紀、特に12•13世紀に認められる。

我々が共通ルーマニア語の問題を考察することができるのは、このような視点からである。

15. 共通ルーマニア語

ルーマニア語史の基本的問題の１つに、共通ルーマニア語の時代と構造を確証することがある。Latinum circa romançium（ロマンス語に近いラテン語）［cf.第11章］に後続し、ルーマニア語の諸方言がドナウ河の北側と南側に分断される以前のルーマニア語の段階を、学者達はいろいろな呼び方をしている。A.フィリピデは română primitivă（原始ルーマニア語）と呼び、S.プシュカリウは străromână（古ルーマニア語）［cf.ドイツ語 Urrumänisch］と呼び、D.マクレアは română comună primitivă（原始共通ルーマニア語）と呼び、I.コテアーヌは Limba română XIII［1964年、364頁］で protoromână（ルーマニア祖語）と呼び、『ルーマニア語史 II』［1969年、17頁］の序文の中で română comună（共通ルーマニア語）という名称を採用している。

protoromână（ルーマニア祖語）という述語は Tratatul de istoria limbii române I『ルーマニア語史試論 I』においても用いられている。しかしながら、română comună（共通ルーマニア語）という述語が幾つかの歴史的事実を際立たせるという利点を有しているということを、我々は指摘しなければならない: 原始ルーマニア語話者の共同社会は、その場所がどこであれ、均質の文化を発展させ、ルーマニア語に特有の主たる革新が既に生じ、比較的統一された状態の言語を話していた。

このことは、共通ルーマニア語に方言的差異がなかったという趣旨に理解されてはならない［cf. S.プシュカリウ Zur Rekonstruktion des Urrumänischen『ルーマニア祖語の再建について』ルーマニア語訳は Cercetări şi studii 1974年、77-79頁］; しかしながら、方言差は大きくはなかった。その証拠として、今日でさえマケドニア•ルーマニア語からダキア•ルーマニア語への移行がかなり容易であるということを挙げることができるし、マケ

ドニア•ルーマニア語の話者は何ら困難なくダキア•ルーマニア語を習得することができるし、発音上の差異なく話せるということを挙げることができる。

共通ルーマニア語の時代におけるルーマニア語の相対的統一性は、ルーマニアのローマ的精神が発展した領域に統一性があるということでも説明され得る。その領域というのが、ドナウ河の北側［バナト、オルテニア、西トランシルバニア、ムンテニア、南モルドヴァにおけるドナウ平野］のみならず、ドナウ河左岸、ドナウ河の南側、バルカン山脈［ハイモス］に至るまでであることを最初に示したのは、D.オンチウルである。ドナウ河は決して境界線ではなかった; その反対に、北側と南側を結び付ける様々な可能性を提供したり、言語の統一的発展を確保したりした。

統一的発展は時として、ルーマニア人集団の移動の時に中断された。アロムン人［＝マケドニア•ルーマニア人］の集団は、9～10世紀にかけてバルカン半島の南部に向けて移動した。マケドニアに住むビザンティウムの年代記編集者ケドレノスは、ブルガリア皇帝のサムエル兄弟が暗殺された976年頃に、アロムン人がカストリアとプレスパ湖の間に居住していたことを報告している。

時を同じくして、ドナウ河とバルカン半島北部に住むルーマニア人のドナウ河以北へのより大量の移住が行われた: 彼らは、元々居住していたダキア•ルーマニア人的要素を増加せしめると同時に、強化せしめた。そのような、ドナウ河以南から以北への移住は、ダキア•ルーマニア人の連続性を決して退けるものではない。むしろそれとは反対に、ダキア•ルーマニアの地にダキア•ルーマニア人と混住する非ラテン系民族の急速かつ強度な同化につながった。

しかしながら、大量の移住はドナウ河以南に向けて行われた。9世紀に開始されたこの大量移住は、上モエシアに住むルーマニア人がバルカン半島の南部、ピンドス山脈やテッサリア地方に下ったものである。ビザンティウムの年代記編集者達によって vlahi［ギリシア語では vláhos］という名前で、バルカン半島南部における彼らの存在が幾度にもわたって報告されている。

12世紀になると、その種の言及の回数は更に多くなる。例えば、キンネモスは、黒海域における「かつてイタリアであった所からの植民者であると考えられる」非常に多くのブラック人の新兵補充について話をしている。これらのブラック人とは、マケドニア・ルーマニア人、すなわち、アロムン人［ルーマニア語で aromân(i) 又は armân(i) と呼ばれる］のことであり、ギリシア人が kutsovlahi と呼び、セルビア人が tsintsari［字義通りには「蝿」の意］と呼んでいた人達のことである。彼らはルーマニア語では macedo-români（マケドニア・ルーマニア人）［複数形］という学問上の名前を有している。

彼らの起源に関しては、二つの異なる意見がある：ルーマニアの歴史家達［N.ヨルガ、D.オンチウル、A.D.クセノポル］は、彼らはバルカン半島においてローマ化した原住民の子孫であると考えている。歴史家達の意見は、「バルカン半島の北部丘陵地帯とカルパチア山脈の間に行われる北バルカン・ラテン語」と「アドリア海、バルカン半島の西南丘陵、エーゲ海、テッサリアの間で行われれるラテン語である西南バルカン・ラテン語』［マケドニア・ラテン語の起源は後者にある］を話す人達の存在を信じるタケ・パパハギ［1892-1977年］のような言語学者達によっても裏書きされている［Aromânii『アロムン人』大学講義録、ブカレスト、1932年、23頁］。

様々な理由によって、マケドニア・ルーマニア語についての同じ意見がギリシア人の学者達［M.カラジウ・マリオツェアーヌ Compendiu de dialectologie română『ルーマニア語方言学概論』ブカレスト、1975年、216頁］によっても共有されている。「11世紀にマケドニア・ルーマニア人の大多数がヘラス［＝ギリシア］に定住していたものの、エペイロスとマケドニアとの間のいたるところに広まっていた」又「マケドニア・ルーマニア人がかつては、今日セルビア人が住んでいる、不吉で通行不可能な場所、ドナウ河とサウ川［今日のサヴァ川］の近くに住んでいた」と言うビザンティウムの年代記編集者ケカウメノス［11世紀］の言にも言及しなければならない［cf.A.フィリピデ『ルーマニア人の起源 I』662-663頁］。

そのような訳で、2番目の意見はルーマニア人のバルカン半島への移住理論を支持することになる。特に、O.デンスシアーヌ、S.プシュカリウ、A.フィリピデ、A.ロセッティなどといったルーマニア人の言語学者達は、バルカン半島、ギリシア文明圏内［ラテン語やギリシア語の碑文が暗示するように、有名なジレチェック・ラインの南が両者の文化環境線を示す］にはいかなる「トラキア・イリュリア・ローマ系の」民族も存在しなかったという事実に特に基づいて、上記の説を支持している。

他方、極めて早い時代に分断された両地方におけるラテン語の発展は、ダキア・ルーマニア人とマケドニア・ルーマニア人が共に話ししているルーマニア語がその存在を断言するような統一に殆ど到達し得てなかった。ダキア・ルーマニア人とドナウ河以南のルーマニア人が起源を共にするという考えは決して新しいものではなく、既に Untersuchungen über die Geschichte der östlichen europäischen Völker『東ヨーロッパ民族の歴史研究』［ライプツィッヒ、1774年］における J.トゥンマン、Researches in Greece「ギリシア研究』［1814年］と Travels in Nothern Greece『北ギリシア紀行』［1835年］におけるウィリアム・マーティン・リークといった歴史家達によって早くも18・19世紀に支持されている。J.トゥンマンは、マケドニア・ルーマニア人はダキアにおけるルーマニア人の「同胞」であるが、バルカン半島やロドピ山脈やピンドス山脈ではトラキア族を継承していると主張している。他方、マーティン・リークは、マケドニア・ルーマニア人はドナウ河以北の様々な地方に住む人達の一分派で、そこから移動を開始し、10・11世紀に南下したと考えている。同様の意見を B.P.ハシュデウが G.ブルンクシュ編の Etymologicum Magnum Romaniae『ルーマニア大語源』［3巻］に収録の Strat şi substrat『層と下層』において表明している；しかし、ハシュデウは、マケドニア・ルーマニア人の南下はハンガリー人の侵入によるものであるから、10・12世紀のことであるとしている。貴重な論文である Aromâni, dialectul aromân『マケドニア・ルーマニア人とその方言』［ブカレスト、1932年］の著者 T.カピダンは、バルカン半島に古ルーマニア人の定

着の痕跡があるという事実［cf. 河川や村落の名称: ラテン語 Vavisa ＞マケドニア•ルーマニア語 Băeasa、ギリシア語の Elasona、ラテン語の Salona に由来する固有名詞 Lăsun が Săruna になっている］を尊重して、上記の点に関してより用心深い意見を表明している:「マケドニア•ルーマニア人のピンドス山脈への南下の時代から、ローマ化された原住民の要素が幾つか保存されている可能性」を T.カピダンは排除していない［上掲書29頁］。

言語学的議論の多くが、ルーマニア語のドナウ河以北と以南の諸方言の共通の起源に関する意見を支持している。まず最初に、マケドニア•ルーマニア人の殆どが今日ギリシアの物質的精神的文明に支配された地域内に居住しているという事実を考慮しなければならない: "il ne faut pas oublier que la majorité des Macédo-roumains apparaît aujourd'hui dans une région où la langue latine ne pouvait s'implanter; á cause de la concurrence qui lui faisait le grec. La naissance d'un parler roman là où nous trouvons actuellement les Macédo-roumains était par ce fait impossible."（マケドニア•ルーマニア人の殆どが、ギリシア語と競い合ったがためにラテン語が移植され得なかった地方に今日姿を現していることを忘れてはならない。今日マケドニア•ルーマニア語の行われている地域でロマンス語が生まれたということは、この事実から不可能なことであった）［O.デンスシアーヌ『ルーマニア語史 I』322頁］。第2に、7～8世紀に浸透が開始される、ルーマニア語への初期のスラヴ語の要素が、ダキア•ルーマニア語においてもマケドニア•ルーマニア語においても同様に発見されるという事実を見逃してはならない。第3に、ドナウ河の北側と南側におけるルーマニア語の全ての方言において生じた音韻的ならびに形態的•統辞的変化に統一性がある。S.プシュカリウは、繰り返し［『原始ルーマニア語の再建について』、『ロマンス諸語の中におけるルーマニア語の位置』など］ロマンス諸語に反して「特にルーマニア語的である」と証明される全ての特徴がダキア•ルーマニア語にも、イストゥリア•ルーマニア語にも、マケドニア•ルーマニア語にも存在することを示した:「一方において、ラテン語からルー

マニア語を区別する特徴といった、ルーマニア語の全ての特徴は4つの全ての方言に存在する」[Limba română I 1976年、232頁]。その説を証明するためにプシュカリウは、あるおとぎ話の冒頭の部分をルーマニア語の全ての4つの方言で再現せしめた: そのようにして、4つの方言に共通する特徴が明らかになった。

S.プシュカリウの説は、歴史的観点から解釈されなければならない: ドナウ河以南の他の方言と同じくマケドニア•ルーマニア語は、共通ルーマニア語が具体化した後に、しかし10世紀のマギャール人すなわちハンガリー人の侵入以前に分化した。マケドニア•ルーマニア方言は、ハンガリー語起源の要素を一切含んでいない。

言語学のクルージュ学派、特に S.プシュカリウと T.カピダンは、ルーマニア語の諸方言に共通した特徴をつぶさに考察した。Aromânii『マケドニア•ルーマニア人』[1932年、136-198頁] において T.カピダンは、「マケドニア•ルーマニア語の位置はルーマニア語の一部分である」と定義したが、タケ•パパハギも Aromânii. Grai. Folclor. Etnografie『マケドニア•ルーマニア人 言語 民俗 民族誌学』[大学講義録、1932年] でも同じ意見を表明している。マティルダ•カラジウ•マリオツェアーヌは Compendiu de dialectologie română『ルーマニア方言学概論』[1975年、225-265頁] において、マケドニア•ルーマニア語の類型学的記述を初めて試みたのであるが、他のルーマニア語方言の一部分とみなしている。

ルーマニア語のドナウ河以北と以南の諸方言が、共通ルーマニア語に関する情報を提供してくれるという点に鑑み、興味がある方言であることから、共通ルーマニア語の「再建」の試みを S.プシュカリウが全ての4つの方言が共有する諸要素を基に、初めて行った [『原始ルーマニア語の再建』Prinzipienfrage der romanischen Sprachwissenschaft『ロマンス言語学の原則上の問題』1980年、17-75頁]。他方、A.フィリピデは『ルーマニア人の起源 II』[234頁] において反対意見を表明し「そのような現象は各々の方言において独立して発展した」と言っている。同じく、A.ロセッティも

『ルーマニア語史』[1978年、361頁] において「革新は共通ルーマニア語以降に生じた可能性がある」としている。

S.プシュカリウは、次の諸要素を共通ルーマニア語の現象であると考えた:

1) 直説法現在1人称単数と3人称複数における歯音と鼻音の粗悪化---audz-aud (私は 聞く)、spui-spun (私は言う)、pociu-pot (私は可能である) : マケドニア•ルーマニ ア語を例外として、再建形が粗悪化された形態に「どうしても打ち勝つことができなかった」。

2) 直説法不完了過去1人称単数は、lăuda (< ラテン語 laudabam) の代わりに lăudam (私は賞賛していた) であった。

3) 女性名詞の複数形は、cetăţi (要塞)、adunări (集会)、などであった。cf. vaci (雌牛)。

4) ラテン語の reus (罪人)、horresco (私は驚く)、rivus (川)、などにおける e と i の強い非口蓋音化。

5) 唇音と唇歯音の口蓋化。

6) -n- のロータシズム [= -r- 音化]。

7) k, g + e, i の破摩音化 [ダキア•ルーマニア語では c, g; マケドニア•ルーマニア語 では ts, dz]。

A.ロセッティは『ルーマニア語史』[1978年、265頁以降] で、次のような現象が共通ルーマニア語に属すると考えている。

1) ラテン語 cera (蝋) > DR ceară, MR tseară、ラテン語 legem (法律) > DR lege, MR leadge、ラテン語 coda (尾) > DR MR coadă、ラテン語 florem (花) > DR floare MR floari、などに見られるアクセントのある e と o の条件つき二重母音化。

2) 鼻音又は強いアクセントの影響を受けての e の閉音化と強い非口蓋音化 [i > î] : ラテン語 tenerus (若い) > tinăr > tînar 。

3) o の閉音化 [o > u] : ラテン語 arborem (樹木) > DR arbure > arbore MR arburi、ラテン語 formica (蟻) > DR furnică MR furniga、ラテン語 oricla (小さな耳) > DR ureche MR ureacl'e 。

4）アクセントのない a, e, o に由来する ă［=/ə/］の出現: ラテン語 camisia（シャツ）＞ DR cămașă MR cămeașă、ラテン語 peccatum（罪）＞ păcat、ラテン語 contra（〜に反して）＞ DR catră MR cîtrî［この音色は二次的なものである］。

5）ラテン語の k, g, t ＋ e, i, y の口蓋化、軟音化、および歯擦音化: DR mațe MR matsă（内蔵）、DR fecior MR ficior（男児）、MR tseară（蝋）、MR tser（空）、しかし、cireașă（桜）、ciršesku（私が乞う）。

6）ラテン語の l, n ＋ e, i, y の軟音化と消失: DR întîiu MR întînu（第1の）。

7）ラテン語の s ＋ i, y の口蓋化を経由しての子音 /š/ の生成。

8）sc ＋ i, y からの șt の生成: a ști（知る）。

他方、A.ロセッティは次の諸現象を「共通ルーマニア語時代以降に生じた」革新的音韻現象であると考えている:

1）y の影響を受けての唇音と唇歯音の口蓋音化。

2）î や â と書かれる母音の音色 /î/ の出現。

3）ラテン語の r, s, ts, dz, s ＋ e, i の強い非口蓋音化: ラテン語 reus ＞ rău（悪い）、ラテン語 rius ＞ rîu（川）、ラテン語 sinum ＞ sîn（胸）。

4）y を2番目の要素とする下降二重母音［ay, ey, uy など］の生成。

5）語末にくる子音の数の減少。

6）DR MR toamnă（秋）や MR armân［アロムン＝マケドニア・ルーマニア方言］に見られる、語頭の a- の消失や添加。

共通ルーマニア語の一般的記述は、マリウス・サラ、ヨン・コテアーヌ、マティルダ・カラジウ・マリオツェアーヌが Istoria limbii române II『ルーマニア語史 II』［1969年、189-389頁］において行っている。3人の著者達は、現代ルーマニア語の4つの方言を比較することによって、共通ルーマニア語を再建しようと試み、当時の音韻・形態・語彙を全体にわたって再構成しようと試みた。彼らによれば、次のような現象が共通ルーマニア語の時代に属する: /ə/ の音色をもつ母音、/ęa//ǫa//ie/ などの二重母音、/i̯ea//i̯eu/ な

どの三重母音、/č//ǧ//š//ţ//ḑ//（硬音の）l//（硬音の）r//（湿音の）l//（湿音の）n/ などの子音、noru ＞ noră（嫁）や soru ＞ soră（姉•妹）といった第 4 変化名詞の保存、属格と与格の統一、lu Vasile や Frumosului の類いの［後接的にも前接的にも用いられた］与属格冠詞 lu、ヨッド化されていない語根を有する第 2 •第 3 •第 4 活用形など。

現代語の方言の言語現象を比較することによる共通ルーマニア語のこのような純粋な「再建」は、しかしながら、満足のいくような通時的視点が得られないこともあって、共通ルーマニア語時代以降に平行して存続している結果と、元々ある共通した事実とを区別することがいつもできるとは限らない、という方法論的不都合がある。

16. メグレン・ルーマニア方言とイストゥリア・ルーマニア方言

バルカン半島におけるルーマニア語の運用者達の中で最も重要な共同社会であるマケドニア・ルーマニア方言の運用者達によって形成される方言［すなわち、アロムン方言］の次に、ドナウ河以南の別のルーマニア語方言に言及しなければならない。それらは、megleno-român（メグレン・ルーマニア方言）と istro-român（イストゥリア・ルーマニア方言）である。メグレン・ルーマニア方言は、ギリシアとマケドニアのメグレン地方［トルコ語で「カラジョヴァ地方」］、特にサロニカ［MR Sîrună］の北で、放牧・農耕・手工業などにたずさわる約2万人の人達によって話されている。メグレン・ルーマニア方言は、アクセントのある î を o に変える［例えば、DR cîmp（野原）に対して comp、DR lînă（羊毛）に対して lonă］、語頭の a- の消失［例えば、DR adaug（私が与える）に対する daug、DR afară（外で）に対する fară］、その他に幾つかの音韻的・形態的な特異現象が特徴的である［cf. T.カピダン Megreno-Românii I, Istoria şi graiul lor『メグレン・ルーマニア人 I 歴史と言語』ブカレスト、1925年］；マティルダ・カラジウ・マリオツェアーヌ『ルーマニア方言学概論』［1975年、266-289頁］。

メグレン・ルーマニア方言は、1859年発行の Les Turks et la Turquie contemporaine『トルコ人と現代トルコ』の著者であるギリシアの歴史家 B.ニコライデ、1867年発行の Reise durch die Gebiete des Drin und Wardar『ドゥリン川とバルダル川地方への旅行』の著者であるドイツ人 I.G.フォン・ハーン、1875年パリ発行の Les Roumains de la Macédoine「マケドニアのルーマニア人」の著者であるフランス人 M.E.ピコらの研究のきっかけを作った。G.ヴァイガントはその Vlacho-Meglen「ブラック・メグレン人」においてメグレン・ルーマニア方言の最初の記述を提供した。

イストゥリア•ルーマニア方言は、今日のユーゴ•スラビアのイストゥリア半島の北で、1,500人という非常に小人数の共同体で話されていて、その主たる中心地はジェイアニ、レタニ、スシュニェヴィッツァ、スコドゥルである。この方言の主たる特徴は、/a/ の代わりとしての /å/ という音素の存在［例えば、DR arde（それが燃える）に対する årde、DR mare（海）に対する måre、DR asin（ロバ）に対する åsir など］、ラテン語起源の要素における語中の -n- の -r- 音化［＝ロータシズム］、唇音の非口蓋音化、-l（-）及び l ＋ 子音の消失［例えば、DR vesel（陽気な）に対する vese、DR a culca（寝かす）に対する cuca］などである。イストゥリア•ルーマニア方言の主たる研究は、S.プシュカリウ［M.バルトリ、A.ベルロヴィッチ、A.ビハンとの共著］の Studii istroromâne『イストゥリア•ルーマニア研究』［I、ブカレスト、1906年、II、ブカレスト、1926年、III、1929年］と、最近になってからの A.コヴァチェックの Descrierea istroromânei actuale『現代イストゥリア•ルーマニア描写』［ブカレスト、1961年］によっている［cf.マティルデ•カラジウ•マリオツェアーヌ『ルーマニア方言学概論』1975年、198-215頁］。

メグレン•ルーマニア人もイストゥリア•ルーマニア人も、自らを vlaşi 又は vlasi と呼んでいることから、共通した起源を有することが証明される。しかしながら、お互いにたどった歴史は異なり、議論の余地がある。

O.デスシアーヌは『ルーマニア語史 I』［332-337頁］において、メグレン•ルーマニア方言は、元々はダキア•ルーマニア語の一分派であるドナウ河以北グループに属し、マケドニア•ルーマニア方言の影響を蒙ったものであると考えている。この意見は、しかしながら、マケドニア•ルーマニア方言がメグレン•ルーマニア方言の分派であると考える多くの研究者達［A.ロセッティ『ルーマニア語史』1978年、357頁、マティルダ•カラジウ•マリオツェアーヌ『ルーマニア方言学概論』1975年、266頁］によって無視されている。マケドニア•ルーマニア方言とメグレン•ルーマニア方言の類型学的分析を行った結果、マティルダ•カラジウ•マリオツェアーヌは、両方言は共にドナウ河

以北方言群に対立するという結論に達している［La romanité sud-danubienne: l'aroumain et le meglénoroumain『ドナウ河以南のラテン語: アロムン方言とメグレン•ルーマニア方言』、La linguistique 8 パリ、1972年、1、105-122頁］。

イストゥリア•ルーマニア人は、バルカン半島の西北でローマ化された人達を祖先として、多分ダキア•ルーマニア人と同じ分派に属すると考えられる。歴史家達［I.マヨレスク、D.オンチウル］の中には、イストゥリア•ルーマニア人はイストゥリア生まれであると考える者もいる。S.プシュカリウは『イストゥリア•ルーマニア研究 II』［3頁以降］で、イストゥリア•ルーマニア人は、「西ルーマニア人」であり、中世を通じてドナウ河右岸域でセルビア人と共存した後、トルコ人の到来する時までに、アドリア海方面•イストゥリア半島に押しやられた、と考えている。O.デンスシアーヌと A.ロセッティは、賞賛しないではおれないような言語学的主張でもって、イストゥリア•ルーマニア人の故地はダキア•ルーマニア人の居住する地域の西部であるという意見を支持した: イストゥリア•ルーマニア方言は、西ダキア•ルーマニア方言と多くの共通点を有している［ラテン的要素の語中の -n- の -r- 音化、純粋な唇音の保存、vrea（欲する）を助動詞とする条件法の形成---今日のダキア•ルーマニア方言のバナト地方における（v)reaş veni に類するイストゥリア•ルーマニア方言の条件法の表現に ręs vede がある］。イストゥリア•ルーマニア方言は、ハンガリー人の侵入する前、10世紀にダキア•ルーマニア語から分かれたものである。

そのような訳で、ルーマニア語は全体として今日２つの主要な方言群を有する。

1）ドナウ河以北方言群［ダキア•ルーマニア方言とイストゥリア•ルーマニア方言］。

2）ドナウ河以南方言群［マケドニア•ルーマニア方言とメグレン•ルーマニア方言］。

このような事実で、ルーマニア人がこの地域に特有な一種の移動性という

特徴を有していることになる。A.ロセッティは、『ルーマニア語史』[205、210、214-217頁] において、ルーマニア人のみならずセルビア人やアルバニア人をも含めて、7～14世紀におけるバルカン半島の「民族移動」に注目している。このことは、バルカン諸民族の共同生活、拡張と移動、方言の頻繁な統合と分割、二言語併用、ブラック人すなわちドナウ河以南のルーマニア人の自然な結合を齎す民族混交などの説明をするのに有益である。更に、それは「バルカンの言語的統一」、言語のある種の形態的•統辞的類似を説明する [cf. 第6章、A.ロセッティ『ルーマニア語史』207-217頁、K.サンフェル『バルカン言語学』パリ、1930年、及び、そこに含まれている参考文献]。

ルーマニア人の民族移動は、主に南の方に向けられた。ロマンス諸語の中でも、ルーマニア語的な特徴がバルカン半島の西北部にも現れている。Vlahii din nordul peninsulei Balcanice în Evul Mediu『中世のバルカン半島北部におけるブラック人』[ブカレスト、1959年] において、シルヴィウ•ドゥラゴミールは、「バルカン半島西部におけるブラック人の居住は、中世の初期に生じた拡張によるものである』[168頁] と言っている。セルビアの山々にはルーマニア人の羊飼い [ブラック人] 達が居住していたようである。そのような訳で Vlaxu [複数形は Vlasi], Stari Vlax [12世紀], Romanija といった地名がある。とても良く知られているのは、Durmitor, Visitor [ラテン語で videre は「見る」の意], Pîrlitor, Palator [cf.ルーマニア語で a (s)păla は「洗う」の意], Cipitor [cf. ルーマニア語で a aţipi は「まどろむ」の意], Murgule [cf. ルーマニア語で murg は「黒っぽい馬」の意] などであるが、これらは皆 [ラテン語的ではない] ルーマニア語的構造を示している [cf.このことに関して、C.ジレチェック Die Romanen in den Stätten Dalmatiens während des Mittelalters I-III『中世のダルマチアの地におけるローマ人 I-III』ウイーン、1901、1903年、A.ロセッティ『ルーマニア語史』213-214頁]。

vlah という単語は元々「ルーマニア人の」羊飼いの意味であったが、その意味が拡大して「羊飼い」という職業を表すようになった。他方、バルカ

ン半島のそれらの地方におけるローマ化されたルーマニア人の存在は、決してドナウ河以北のローマ化されたダキア•ルーマニア人の存在を否定するものではないということを強調しなければならない。世界のこの地域におけるルーマニア人の存続は、考古学上の遺物によっても証明される。ドゥリドゥ文明［I.ネストール Contributions archéologiques au problèmes des Proto-Roumains. La civilisation de Dridu『原始ルーマニア人に関する考古学的試論•ドゥリドゥ文明』Dacia 2、1958年、371頁以降; エウゲニア•ザハリア Săpăturile de la Dridu『ドゥリドゥ遺跡発掘』ブカレスト、1967年、Raport preliminar despre săpăturile de la Bratei『ブラテイ遺跡発掘に関する予備的報告』Materiale 10、1973年、191頁以降］、ワラキア地方におけるウルジチェニ、ブコウ•プロイエシュティ、バサラビ、モレシュティ、ダブカの各地区、東南トランシルバニア地方における集落［ベジド、サラシューリ、ポイアン、シモネシュティ］モルドヴァ地方における集落［フリンチアII、ロズナ、スチャヴァ、スピノアサ］、オルテニア地方とドブロジア地方における集落［ファカイ、プロプショール、オブルシア］などは全て、ルーマニアの他の地域同様、ドナウ平野やヤロミッツァ渓谷における原始ルーマニア人の複数のグループの存在を証明するものである。

リジア•ブルズが Continuitatea creaţiei materiale şi spirituale a poporului român pe teritoriul fostei Dacii『旧ダキア領におけるルーマニア人の物質的精神的構造の連続性』［1979年、88-89頁］が示すように、上記のような集落［種々の水準を含む、すなわち、同じ文明の発展における種々の段階の証拠となる］の発見は、そこにおけるルーマニア人の存続を示すものである。これらの原始ルーマニア人の集落が、当時のカルパチア•ドナウ地域において発見される「唯一単一制」の物質文明である。その範囲は、ドナウ河以北と以南からバルカン半島や黒海を含む広いものである。それは7世紀のロマンス系文化から発展し、徐々にドナウ河以南のスラヴ•ブルガリア的要素を吸収していった。

原始ルーマニア人は丘陵•山岳地帯に住み、時々移動していたに違いない

[cf.地名に関して、I.ドナト Cercetări geoistorice privitoare la originea românilor『ルーマニア人の起源に関する歴史地理学的研究』ブカレスト、1941年、10頁: 丘陵•山岳地帯におけるルーマニアの地名の大部分は、ルーマニア人の名前と関連性がある]。Dicţionar de istorie veche a României『古代ルーマニア史辞典』[D.M.ピッピディ編、ブカレスト、1976年] の中で、著者の1人である G.シュテファンは、ルーマニアの連続性は分散と同様に、頻繁な集中によって特徴づけられ、「可動的」であることを記述している。上記のような歴史的•言語的状況下で、A.ロセッティが『ルーマニア語史』の中で言うように、バナト地方、トランシルバニア地方、オルテニア地方、モルドヴァ地方、黒海に至るドナウ平野、ドゥリナサヴァ川•ティサ川•ドナウ河合流域 [スコピエの町の周辺域およびブルガリアの西南を含む] を含む、ドナウ河以北•以南の広大な地域で話されてきた、という意見に我々も賛成である。『ルーマニア語 I』[1976年再発行] の中で S.プシュカリウは、共通ルーマニア語の元々の領域は非常に広範囲であったことを指摘している:「ルーマニア人の "故地" を求めても無駄である。ルーマニア人が形成された "中心地域" を正しく予測しようと試みることは無駄である; 歴史はそのようなことは何も物語らず、言語学もただ単に中心的地域を指摘するだけである」[254頁]。そのようなかなり広い範囲にわたって広まっていたという地理的•歴史的状況下で、共通ルーマニア語は、歴史と言語学が尚その正体を確認する必要のある、しかしながら、その統一性を決して妨げない一定の変化をきっと経験したに違いない。ルーマニア語は、最も統一のとれたロマンス語のひとつである。

17. 移動民族との他の言語的接触

ルーマニア語が複数の移動民族の言語と接触するようになったのは、上記のような歴史的背景においてであった。移動民族の中で最も重要なのは、ハンガリー人であった。フィノ・ウゴール系のハンガリー人［別名マギャール人］は、ウラル山脈とヴォルガ河中流域に住んでいた。9世紀にはドン河とドゥニエペル［レベディア又はレヴェディア］河の間における彼らの存在が報告されているが、そこからペチェネグ人に追い立てられ、更にブルガリア人に敗走せしめられて、カルパティア山脈を越える。アールパードの指揮の下に、パンノニア平野に定住した。彼らはまずトランシルバニア地方の侵略を開始し、10世紀には早くもそこに定住する。自らの共同社会を守ろうとしていた先住民達は抵抗した。Gesta Hungarorum『ハンガリー人達の偉業』［12世紀］において、ベラ4世王の匿名の書記がビハレア要塞［今日のビホール県］におけるルーマニア人のメヌモルト公［cneaz］に対してハンガリー人が戦争をしかけたことや「ブラック人とスラヴ人の君主」であるジェルに支配された土地をハンガリー人から占領したことに言及している。Terra Blachorum（ブラック人の土地）やジェルの後継者であるジュラの regnum latissimum et opulentissimum（とても広大でとても豊かな王国）といった「領土」(地方の政治組織)に言及しているのも同じ Gesta Hungarorum である。

地方の支配者達は、自らの独立のために10世紀の間戦った。ベラの匿名の書記によって記述された Blachi ac pastores Romanorum（ブラック人すなわちローマ人の羊飼い達）は侵略者達に対して、容易に屈服しなかった。これらの領土におけるハンガリー君主の支配は、11世紀後半になってやっと開始され始める；他方、ハンガリーの封建王政によるトランシルバニアの征服は、12世紀と13世紀を通じて行われた。ハンガリー人は複数のルーマニア

人の国主（voievod）と公（cneaz）の協力を得て、自らの支配をトランシルバニアで拡大しようと試みた。ルーマニア人の国主達と公達は、ハンガリーの新しい社会•政治機構の範囲内で封建的特権がある程度許されていた。

ハンガリー語の要素が最初にルーマニア語に入ったのが早くも11•12世紀であることは明確である；それらの単語はルーマニア語に一般的に普及していて、主に社会生活の意味分野に属している:oraş（町）、bir（税金）、birău（特にトランシルバニア地方の郡長代理）、bîlci（市場）、hotnog（指揮官）、ducat（公国）、hotar（国境）、gînd（考え）、gazdă（主人）、nemeş（貴族）、pîrcălab（特に要塞の指揮官）、pîrgar（知事）、şoltuz（知事）、sălaş（住民）、uric（世襲財産）、viteaz（勇士）、など。他の単語は、商業や工業に関連している：aldămaş（手打ちの酒）、ban（小銭）、a cheltui（費やす）、chezaş（人質）、(h)eleşteu（養魚場）、hîrdău（桶）、pîrîş（原告）、marhă（牛•動物）、meşter（職人）、vamă（税関）、など。農地機構に関するものもある：dijmă（小作料）、imaş（牧草地）、neam（親戚•家族）、megieş（隣人）、など。軍事用語も幾つかある：puşcă（小銃）、puşcaş（小銃使い•小銃の名人）、など。

更に、ハンガリー語起源の動詞も幾つかあるが、それらは南スラヴ語［ブルガリア語又はセルビア•クロアチア語］経由で借用されたものである：a alcătui（作る）、a bănui（疑う）、a bîntui（害する）、a birui（打ち勝つ）、a făgădui（約束する）、a îngădui（許す）、sudui（罵る）、a tămădui（癒す）、など。接尾辞 -ui［スラヴ語 -ovati、ハンガリー語 -i］、-ălui, -ului の助けを借りた例もある：a felului（答える）、a preţălui（値踏みする）、など。-aş, -eş, -(ă)uş などのルーマニア語の接尾辞は、ハンガリー語起源である：gînd（考え）、chin（苦痛）、fel（種類）、hang（伴奏）、pildă（例）、raită（一巡）、などの抽象名詞や talpă（靴底）、şir(e)ag（列•一連）、chip（姿•方法）、ciupercă（キノコ）、şoim（タカ）、tîlhar（追いはぎ）、などの具象名詞は言及に値する。

トランシルバニア地方では、ルーマニア人とハンガリー人が何世紀にもわ

たって生活しているので、他のいかなるダキア・ルーマニア語の亜方言におけるよりも、ハンガリー語の単語が多い: 前述のように、ドナウ河以南のルーマニア語の方言には、そのような単語は存在しない。更に、ハンガリー語の諸方言の中にかなりの数のルーマニア語の単語、特に地名や固有名詞と並んで、牧畜生活に関係のある単語が存在するという事実を見逃してはならない。

18. ペチェネグ人とクマン人

ハンガリー人が最初にパンノニアに、そして後にトランシルバニアに現れたと同様に、ペチェネグ人とクマン人［共にアルタイ系の民族］が、ドナウ河以北のルーマニアの領域に、僅かの期間、その姿を見せる。ペチェネグ人は徐々にワラキア平野を侵略するが、そこからクマン人に押し返されて西方•南方に前進し、パンノニアやビザンチン帝国に侵入する［彼らの侵入は1091年の残忍な戦争を通じて、ビザンチン帝国に阻止される］。彼らは、Peceneaga, Picineaga, Picinegul［バナト地方］といった地名を残しただけである［cf.ハンガリーにおける Peceneska、セルビアにおける Pecenoge, Pecenejevci］。クマン人に関する限り、我々はより多くの情報と名詞を有している: クマン人は11世紀後半に、ペチェネグ人が放棄したワラキアとモルドヴァを支配するようになった。ペチェネグ人と同じくクマン人は、部族単位で生活し、牧羊•牧畜の半遊牧生活を送っていた。原住民の影響を受けたクマン人は、農業に着手し、定住生活を開始した。クマン人の社会は成層化し、指導者達はカトリックを受け入れ、ミルコヴ河畔にクマン人主教区を設立するようにさえなった［1227年］。いろいろな封建的制度が次第に度を増して、具体化した。当時の書物では、モルドヴァとムンテニアがしばしばクマニア［Cumania］と呼ばれていた［cf.イタリアにおいてパウルス•オロシウスは Historia adversus paganos『対異教徒の歴史』の中で vulgariter loquat, Gothia quod Romania fuisset（ゴティアはローマニアであったから俗語で話すべきである）と書いている。cf. カルロ•タリアヴィーニ Originile limbilor neolatine『新ラテン諸語の起源』ルーマニア語訳は、A. ニクレスクによって成された。ブカレスト、1977年、127頁］。

1241年の蒙古人の侵入の結果、クマン人の支配は終わった: クマン人の大半はパンノニアに逃れて、原住民と共存し［、必然的に混合し、ついには吸

収されてしまったり]、残りの少数はドナウ河以南に逃亡した。クマン人の痕跡は幾つか、ブルガリアにおいて今日なお認められるが、彼らは găgăuţi（馬鹿者）とか surguci（とさか）であると理解されている。

クマン語の要素であると確定するのに困難な主な理由は、それらがトルコ語の単語と似ているからである。Codex cumanicus『クマン法典』[1303年にイタリアとドイツの宣教師達によって編集されたラテン語•ペルシア系クマン語彙集、cf.ジェザ•クーン Codex cumanicus『クマン法典』ブダペスト、1880年] の中には、対応するルーマニア語のある単語が含まれている: ambar（ルーマニア語［以下 R. と略す］hambar 納屋）、chater（R. catîr ラバ）、habar（R. habar 知識）、maydan（R. maidan 空き地）、murdar（R. murdar 汚い）、taman（R. taman ちょうど）、chinda（R. chindie 日没）。

O.デンスシアーヌは『ルーマニア語史 I』の中で、beci（地下室）、ţoi（酒用のグラス）、scrum（灰燼）、などのルーマニア語の単語は、クマン語起源であるとしている。これらの単語は、トルコ語からの借用語が記録されていないトランシルバニア地方やドナウ河以南の諸方言を含む全ルーマニア語域で認められる。同じことが、Balaban, Teleorman, Caracal, Cara, Caraiman などといった地名や固有名詞についても言える。更に、Comana, Comăneşti などといった、クマン人を思い浮かばすような、ルーマニア人によって付けられた地名がある。

19. ルーマニア諸国家の建設

12〜14世紀は、ルーマニア諸国家建設の時である。トランシルバニア地方、カルパチア山脈の周囲、ドナウ河流域において、共同社会の一員として生存した後、地方政治機構を voievodate［「公国」の複数形］や ţări［「公国」の複数形］［今日なお Ţara Haţegului, Ţara Oaşului, Ţara Făgăraşzului, Ţara Bîrsei, Ţară a Românilor（ルーマニア人達の国）などといった地名がトランシルバニア地方にある。Blachia という地名は、10〜11世紀のワラキア地方の東部に見られる。cf.Vlăsia, Codrul Vlăsiei, Vlaşca などといった地名］という名称のもとに建設した後、ルーマニア人は最初の封建国家を複数建設した。トランシルバニアの公国の機構は完全で、早くも12世紀には複数の郡［comitate（＝comitat の複数形）］に分割されていた；高い位の貴族達の中からハンガリーの王に任命されたトランシルバニアの支配者たる公は、一定程度の自治権を得ていた。1272〜1273年の間に、ワラキア公リトヴォイの「国』［ジウ川とオルト川の間］は、ハンガリー王ラディスラスの宗主権から逃れる試みをして失敗した；ラドゥ・ネグル［「黒いラドゥ」の意］の指揮下におけるルーマニア人の一集団「ファガラシュの国」への移住は、13世紀におけるカルパチア・ドナウ地域の政治機構を強化した。全く同じように、他の複数の支配者［公］達からも高い位の公であることを認められたバサラブは、自らの公たる地位にとって更により大きな名声を得た：彼は、バナト地方における幾つかの要塞を巡っての、自らの宗主であるハンガリーのロベルト・カーロイと他の複数の封建諸公の間の紛争に介入したり、ブルガリア人とビザンチン人の戦争［1323年］に介入したり、ドナウ河口のタタール人支配に対する統一戦線の交渉に従事した。バサラブ支配の名声の増加とセヴェリンのバナト地方へのバサラブ支配の拡大は、ハンガリーの封建諸公の領土・宗教の拡大を妨害した。封建君主達の悪しき助言を受けてロ

ベルト・カーロイは、1330年9月バサラブ公に対する遠征を開始した。ルーマニアのバサラブ公は、幾つかの譲歩をして戦争を回避しようと試みたが、ハンガリーに拒否された。戦場となったのはバサラブ公の居住の地クルテア・デ・アルジェシュであった。ハンガリー王ロベルト・カーロイとその軍隊は、バサラブの農民軍によってツァラ・ロヴィシュテイ（Ţara Loviştei）のある峠（ルーマニア語で posadă）で敗北した［1330年11月9～12日］。このことによって、ワラキアの独立が達成され、その結果として東南ヨーロッパにおけるワラキア公国の存在が承認されることになった。

モルドヴァ人達も同様に、ハンガリーと戦わねばならなかった。オラハとかいう君主の名前が1247年のヨアニテスの公文書の中に挙がっている［このことは、タタール支配下において、ルーマニアという政治機構が存在したことを証明するものである］し、14世紀の初頭にある君主に支配された「ルーマニアの領土」（Wlachenland）の記録や、1300年の Civitas Moldaviae［「モルダヴィア国」の意、多分ファルティチェニ近くのバイアのことであろう］に関する記録が存在した。ドナウ河に隣接する諸地方と北ヨーロッパを結ぶ商業道路を管理するために、ハンガリー王であるアンジュ家のルイ1世は、マラムレシュ［北西ルーマニア］の君主であるドゥラゴシュとボグダンと共に、一再ならず遠征隊を組織した。

しかしながら、モルドヴァのルーマニア人同様に、マラムレシュのルーマニア人も、ハンガリーに満足していなかった。長年にわたる抵抗の末、随員達と共に東カルパチア山脈を経てモルドヴァに入ったボグダンは、君主として認められた。1330年にワラキアで起こったことは、1364～1365年にかけてモルドヴァにおいても起こった。ハンガリー王であるアンジュ家のルイの猛遠征は、1330年のロベルト・カーロイによるワラキア遠征と同じように終わってしまった：モルドヴァ人が勝利し、モルドヴァ封建国家が独立した。ルーマニアの3つの自治国がヨーロッパに出現したのは、以上のようにしてであった。

ドブロジアも又14世紀の一定期間、政治的自治を獲得した：指導者の1人

バリカは、1346年にビザンチン帝国の内紛に力を貸した。しかし、14世紀末ドブロジアはワラキアの君主ミルチア老公（1386〜1418年）の支配下に入った。しかしながら、それ以前にドブロティッチ［ビザンティウムによって「君主」として認められている］は、1366年にジェノアからキリアの町を征服し、ドナウ河下流域の保護者となった。ドブロティッチは、ビザンティウムの帝位相続に介入し、「君主」である彼の息子イヴァンコ自身、ジェノアとトルコと戦った。1388年、後者はイヴァンコに遠征を企てて勝利し、イヴァンコは死んだ。

このようにしてルーマニアの独立した国々が出現し、発展し、強化しようとしている時に、トルコとの政治的問題が発生した。バルカン半島におけるオスマンの拡張、ギリシア・ブルガリア・セルビアの征服が今度は、ルーマニアの諸公にとって非常に大きな驚異となった。ブルガリア皇帝殺害とセルビア君主打倒の1389年以後は、トルコの対峙はルーマニアの諸国のみに集中した。有効な同盟政策と数々の戦勝［1394年のロヴィネ戦、1396年のニコポレ戦、1397年と1401年のアルジェシュ川戦］を通じてワラキアの支配者ミルチア老公は、トルコの進撃をくい止め、自らの国を対トルコ抵抗の中心地にすることに成功した。モルドヴァにおいても、村では農民の、町では商人の援助を得て、そして小貴族達の協力をも得て、シュテファン大公が対トルコ抵抗の中心となった。大公はトルコ軍をヴァスルイ［1475年］とヴァレア・アルバ［1476年］において敗り、モルドヴァの独立を確実にした。しかし晩年には、ミルチア老公もシュテファン大公も、納税の義務を負った［ワラキアは1418年、モルドヴァは1487年］。後に、ワラキアのラドゥ・デ・ラ・アフマッツィ（1525〜1529年）とモルドヴァのペトゥル・ラレシュ（1527〜1538年）の治世以降、ルーマニアの諸国は、自治は保持していたが、至高の門［すなわち、オスマン宮廷］の宗主権を受け入れた。

数多くのトルコ語の単語がルーマニア語に入ったのは、そのような歴史的状況においてであった。しかし、何よりもまず政治・行政・商業・軍隊の機能に関する単語が特に多かったので、一般に流布するには至らなかった。ファ

ナリオット時代［1711〜1821年、トルコから任命されたワラキアとモルドヴァの支配者達が、コンスタンティノープルのファナル地区に住むギリシア人であった時代］が、トルコ語の借用語数も多く、最も大切な時代である。

A.デ•チハクによる Dictionnaire d'étymologie dacoromane『ダキア•ルーマニア語語源辞典』［1870年］の中に占めるトルコ語の要素は、全体の約20%である。D.マクレアの統計---Probleme de lingvistica română『ルーマニア語学の諸問題』［31頁］は、トルコ語起源の単語が1827コであるとしているが、その数字は Dicționarul limbii române moderne『現代ルーマニア語辞典』［1958年］の全語彙の3.62%を占めることになる。今日これらの単語の多くは、大衆語のほんの一部でしかない。トルコ語からの借用語を自らの言語に取り入れた他のバルカン諸語の場合と異なって、ルーマニア語におけるトルコ語からの借用語は、軽蔑的•侮辱的な意味合いを得るものが現れた。それは、取りも直さず、自らがラテン系民族であり、キリスト教徒であることを意識する国民の態度の現れである。

20. ルーマニア語におけるトルコ語の要素

トルコ語の要素が最初にルーマニア語彙に入ったのは、16世紀のことである。16世紀末までの第1段階において、ルーマニア語のテキストに現れるトルコ語の借用語は、次の通り非常に僅かである: atlaz（紗•繻子）、boccea（大きな肩掛け）、bogasiu（商人）、catifea（ビロード）、cearceaf（敷布）、haraci（税金）、ibric（小さなコーヒー沸かし）、maramă（頭布）、peşcheş（賄賂）、tafta（コハク織り）、tipsie（丸盆）、など。

17世紀になると、トルコ語からの借用語の数は増加する: abanos（コクタン）、acaret（少しの財産）、alai（行列）、anteriu（白い法衣）、arnăut（「特にアルバニア人の」傭兵）、bacşiş（心付け）、belea（災難）、bidiviu（駿馬）、bocluc（悲しみ［元々は、bălegar（牛•馬糞）の意］）、buluc（群衆）、cafea（コーヒー）、calabalîc（荷物）、calfă（徒弟•職人）、capac（蓋）、caşcaval（羊乳チーズ）、ceardac（バルコニー）、ceauş（従者）、chef（酒の宴）、chindie（日没）、chirie（家賃）、cioban（羊飼い）、cirac（弟子）、cişmea（水道栓）、ciubuc（チブーク［最近では「賄賂」の意味も］）、cîrmîz（赤ペンキ）、conac（館）、culă（要塞化した館）、cusur（欠点）、damla［今日では dambla（卒中）、後に「偏執狂」の意味も］、dimie（厚い布）、divan（ソファー）、dugheană（小さな店）、duşman（敵）、geambaş（馬商人）、giuvaer（宝石）、hac［a veni de hac「打ち負かす」の意の熟語で］、hain（残忍な）、halva（甘いトルコ風の菓子）、hambar（倉）、han（宿）、harbuz（スイカ）、hatîr（楽しみ）、herghelie（馬の群れ）、ibrişin（錦糸）、iureş（攻撃）、leafă（賃金）、liliac（コウモリ）、liman（港）、mahala（場末）、mahmur（機嫌の悪い）、maidan（空き地）、marafet（些細なこと）、mezat（競売）、murdar（汚い）、muşama（油布）、nai（パンフルート）、oca（重さの単位「1 kg 強」）、odaie（部屋）、para（小

銭)、pehlivan（道化役者)、perdea（カーテン)、pezevenghi（詐欺師)、raft（戸棚)、salahor（日雇い労働者)、saltea（マットレス)、samsar（仲買人)、samur（アーミン)、schelă（足場)、soi（種類)、surghiun（追放)、surlă（トランペット)、şiret（狡猾な)、tain（一人前の食糧)、taraf（楽団)、tichie（ナイトキャップ)、tingire（鍋)、tiptil（忍び足で)、tutun（タバコ)、ursuz（不機嫌な)、zaraf（高利貸し)、zor（急ぎ)、など。

他にトルコ語からの借用語として、次のような単語を挙げることができる: caraul(ă)（番兵)、ceapraz（飾り紐)、dulamă（厚い羊毛の布地)、gîrbaci（皮の鞭)、macat（掛け毛布)、mangafa（鈍重な男)、mangal（炭)、mascara（不真面目な男)、tulpan（頭布)、zăbun（厚手の羊毛の野良着)、zaiafet（宴会)、zorba（反乱---今日では用いられない)、zorbagiu（喧嘩好きな）[今日では zurbagiu]、など。

ファナリオット時代［1711〜1821年］を通じて、トルコ語の影響はギリシア語の影響同様に強かった。

ここに物質文明の分野での借用語を列挙してみよう［A.ロセッティ、B.カザク、L.オヌ Istoria limbii literare『文学語の歴史』ブカレスト、1971年、413-414頁による］: 家財道具類---balama（蝶番)、bina（建築用の足場)、canat（ドア•フレーム)、cercevea（窓枠)、duşumea（床板)、geam（窓)、iatac（寝室)、lighean（洗面器)、tavan（天井）; 商業用語---alişveriş（初売り)、chilă（穀類を計る単位)、chilipir（有利な仕事)、cîntar（秤)、geaba（ただで)、ghiotura（大量)、mofluz（破産)、muşteriu（常連)、para（小銭)、peşin（現金で)、saftea（初売り)、teanc（束)、tejghea（カウンター)、top（連)、toptan（卸し)[特に cu toptanul（多量に•卸で）の意味で用いられる]、amanet（質草）; 料理•製菓用語---acadea（カルメラ焼き)、baclava（クルミ入りの甘い菓子)、beltea 又は peltea（フルーツ•ゼリー)、caimac（ミルクなどの薄皮)、cataif（ホイップ•クリーム•ケーキ)、cheftea（ミンチ•ミート•ボール、今日では chiftea)、ciorbă（ボルシチの類い)、ciulama（ホワイト•ソース•シチュー)、ghiveci（野菜のごった

煮)、iahnie (野菜などのシチュー)、iaurt (ヨーグルト)、magiun (スモモのジャム)、musaca (挽肉•ポテト•ナスなどの料理)、pilaf (ピラフ)、rachiu (ブランディ)、rahat (甘いトルコ風の菓子)、sarailie (蜂蜜•クルミなどの入ったトルコ風の菓子)、sarma (ロール•キャベツ)、şerbet (シャーベット) [cf.英語 sherbet]、cazan (釜)、ceaun (鍋)、farfurie (皿)、ibric (小さなコーヒー沸かし)、tavă (盆)、telemea (羊乳チーズにコエンドロの実を入れたもの)、tuci (鋳鉄)、など; 衣服と履物---anteriu (白い法衣)、basma (ハンカチ)、chimir (広い皮帯)、fes (トルコ帽)、ilic (野良着)、maramă (生糸の頭布)、suman (農夫のオーバー)、şalvari (トルコ風の幅広ズボン)、ciorap (ストッキング、今日では「ソックス」も)、papuc (スリッパ)、borangic (生糸)、chihlimbar (コハク)、colan (ネックレス)、fildeş (ネックレス)、mărgean (サンゴ)、pafta (皮帯の留金)、sidef (真珠母) ; 軍事用語も---ghiulea (砲丸)、tulumbă (消防士のホース) ; 海軍用語---caic (軽舟)、cange (四つ爪アンカー)、catran (タール)、talaz (大浪) ; 商工業の分野---bidinea (ペンキ用刷毛)、burghiu (ドリル)、cazma (スコップ)、chepeng (出入口)、dulgher (大工)、moloz (落ちた壁土)、tavan (天井)、tinichea (ブリキ)、calup (靴型)、mucava (厚紙)、papugiu (靴屋)、pingea (靴の底皮)、boia (塗料)、boiangerie (染め物屋)、fistichiu (ピスタチオのような草色の)、ghiurghiuliu (赤い [ワインに関して]) ; vataf (監督)、など。

他のトルコ語起源の単語で動物に関するもの---catîr (ラバ)、calcan (ツノガレイ)、salîu 又は şalău (ホソスズキ•淡水スズキ) ; 植物に関するもの---anason (アニス)、arpagic (エゾネギ)、bostan (カボチャ)、cais (アンズの木)、chimion (カミン)、curmal (ナツメヤシ)、dovleac (カボチャ)、dud (桑の木)、lalea (チューリップ)、nufăr (スイレン)、pătlăgea (トマト又はナス)、zambilă (ヒヤシンス)、zarzăr (アンズの類いの木)。抽象名詞も少しではあるが、ある: berechet (多量)、dandana (災難)、habar (知識)、hal (苦境)、huzur (安楽)、moft (小事)、naz (気まぐれ)、

tabiet（習慣•趣味）。

オスマン•トルコの要素は、ラザル•シャイネアーヌによって、非常に理解し易く実際に用いられるようになった概念の一部分として、研究されている。「東方の影響」という見出しの下で、ラザル•シャイネアーヌは、ペチェネグの要素とクマンの要素をトルコの要素と一緒にしているが、各々の要素の重要性•借入方法•分野と役割は、ルーマニア語の発展と構造内で異なっている。「東方の影響」は、ラテン語がルーマニア語に進化する時代に早くも経験されている：ダキアに来たローマの植民者達は、帝国の東方からの者が多く、東方の諸方言やギリシア語を話していた。「影響」という述語は、トルコ語起源のルーマニア語の語彙［及び接尾辞］に関する限り、安易に受け入れることはできない。いずれにせよ、トルコ起源の語彙に関して、ラザル•シャイネアーヌの記念碑的な労作である Influența orientală asupra limbei și culturei române I II『ルーマニア語とルーマニア文化に関する東方の影響 I II』［ブカレスト、1901年、フランス語訳 L'influence orientale sur la langue et la civilisation roumaine［Romania XXX、1901年、XXXI、1902年と Revue internationale de sociologie パリ、1902年の別冊］］とA.ロセッティ、B.カザク、L.オヌノ上掲書［408-425頁］を参考にすることが不可欠である。

21. ルーマニア語とギリシア語の接触

全くその本質を異にするのは、ルーマニア語とギリシア語・ギリシア文化との接触であった。その接触は、N.カルトジャンがその著書 Istoria literaturii române vechi I『古ルーマニア文学史 I』［ブカレスト、1940年、10頁］において言っているように、「高級な文化的傾向を通じての」ビザンティウムとの宗教・政治・文化・その他の直接的結び付きの結果であった。ギリシア語との接触は、いろいろな時代と様相を含んでいた: それらは、ルーマニアのローマ性［＝ラテン語］がギリシアの東方文化圏への編入に起因する、長い文化変容の過程に対応していた。

H.ミハイエスクはその著書 Influenţa grecească asupra limbii române pînă în secolul al XV-lea『15世紀までのルーマニア語に及ぼしたギリシア語の影響』［ブカレスト、1966年］において、ギリシア語からの借用の時代を幾つかの段階に区分する試みをして、次のような範疇を打ち立てた:

1）ドナウ河近隣の複数の地方で話されていたラテン語の中で用いられていたギリシア語。

2）古ギリシア語の単語。

3）スラヴ語の影響を通じて、又はビザンティウムの直接的影響によって［4～9世紀］、並びに、ルーマニア封建諸国が組織化され、発展するにつれて［10～15世紀］入ったギリシア語の単語。

4）アロムン方言［＝マケドニア・ルーマニア方言］に見られるギリシア語の要素。

ラテン語に入り幾つかのロマンス語の中で見られるギリシア語の単語［cannapa（麻）、cerasus（桜の木）、conchylium（魚介類）、phasianus（雉）、cristallus（ガラス）、margarites（真珠）、machina（道具・機械）、centrum（中心）、これらに angelus（天使）、baptismus（洗礼）、baptizare

(洗礼を授ける)、basilica (大聖堂)、ecclesia (教会)、elemosyna (施し)、martyrium (殉教)、paradisus (天国)、parochia (教区)、pascha (復活祭)、schisma (教会の分裂)、synodus (教会会議)、などを加えることができよう。これらの内、古ルーマニア語に残ったのは、angelus, baptizare, basilica の3語である] に関して、問題は極めて複雑である。E.コセリウは Das Problem des griechischen Einfluss aufdes Vulgärlatein『俗ラテン語におけるギリシア語の影響』[Festschrift Harri Meierミュンヘン、1971年収録、135頁、cf.G.ナール編 Griechisch und Romanisch チュービンゲン、1971年] で、ギリシア語がラテン語に及ぼした影響は、まだ十分に研究されていない、と言っている [cf.このことに関して、Revue roumaine de linguistique XIX 6、1974年、509-517頁収録の I.フィッシャー Manual de lingvistică romanică『ロマンス語学の手引』、A.ニクレスク編 Latina vulgară『俗ラテン語』ブカレスト大学出版局、191-233頁収録の M.ナスタ Graeca in latino『ラテン語の中のギリシア』]。

しかしながら、研究者の中には、取り入れられたギリシア語の要素に関して、カルパチア・ドナウ地方で話されていたラテン語は、西ラテン語と異なっていなかったと言う人もいる。H.ミハイエスク [上掲書45頁] は、「書かれた記録によると、ギリシア語彙が東よりも西に多かったという証拠はなく、エーゲ海地方のギリシア世界がドナウ河地方のラテン語に直接影響を及ぼしたという証拠もない。ドナウ河地域のローマ化された人々とギリシア人との接触は乏しく、表面的であった」と言う。

「ルーマニア語が個別の言語としてまだ存在しなかった時に取り入れられた』[A.フィリピデ] 古ギリシア語の諸要素は、現地語起源の可能性がある。H.ミハイエスク [上掲書64-65頁] は、「それらの僅かな数のみが地方的・直接的影響の結果、現れた」と考えている。ドナウ河地域のラテン語へのそれらの侵入は、口語経由であった: broatec (アマガエル)、ciumă (皮脂嚢胞) [今日では「ペスト」の意]、frică (恐怖)、proaspăt (新鮮な)、spîn (髭のない男)、stup(ă) (麻くず cf. a stupa 今日では「塞ぐ・栓をする」の意)、

sterp（不妊の）、trufă（フランス松露）。ルーマニア語の語彙の中でこれらの要素を古ギリシア語と呼ぶことができるのは、上のような理由からである。

ビザンティウム•ギリシア語の別のグループの単語が、9世紀までにスラヴ諸語の影響で、ルーマニア語に浸透した: busuioc（メボウキ）、colibă（小屋）、comoară（宝）、corabie（船）、crin（ユリ）、cucuvaie（フクロウ）、dafin（月桂樹）、disagă, desagă, desagi（ナップサック）、drum（道）、など主に動物•植物•造園に関するものが多い。スラヴ族が10世紀にキリスト教に改宗し、ギリシア式典礼を採用してから、この語彙は増加した。宗教•教会関係の語彙: amin（アーメン）、aleluia（ハレルヤ）、acatist（特別祈祷•祈りの時に読み上げられる人名表）; condac（賛美歌）、minei（祈祷書）、tipic（儀式）、litanie（連祷）、liturghie（ミサ•儀式）、metanie（礼拝のために膝を折ること）、parastas（葬式）; 種々の宗教•礼拝道具; aer（墓碑•聖布）、aghiasmă（聖水）、agneţ（結び目のあるパン）、(a)nafură（聖体（用のパン））、azimă（種なしパン）、chivot（聖体用パン入れ）、colivă（葬式の時の小麦ガユ）、icoană（イコン）、mir（聖油）、potir（聖杯）、smirna（ミルラ•没薬）; 教会建築の部分---catapeteasmă（聖画壁）、chilie（僧房）、lavră（大修道院•シナゴグ）、mănăstire（修道院）; 教会の階級---arhanghel（大天使）、arhidiacon（長補祭）、călugăr（修道僧）、cler（僧）、episcop（主教）、mitropolit（府主教）、patriarh（総主教）; 教会用衣類---camilafcă（聖職者用の黒い帽子）、mitră（主教冠）; 聖書から取られた人間•動物•植物の名前---evreu（ヘブル人•ユダヤ人）、iudeu（ユダヤ人）、aspidă（コブラ）、chit（ヨナの大魚）、lighioană（生き物）、fariseu（パリサイ人）、chedru（［今日では cedru］ヒマラヤスギ）、chiparos（イトスギ）、finic（柳の枝）、isop（ヒソップ）、migdal（アーモンドの木）、mirt（ギンバイカ）、nard（カンショウ）; ビザンチン風のキリスト教儀式によって取り入れられた月の教養語名: ianuarie 又は ghenar（1月）、fevrar 又は februar（2月）、martie（3月）、aprilie（4月）、mai（5月）、iunie（6月）、iulie（7月）、など［大衆ルーマニア語が受け継いだ、次のようなラテ

ン語名は別である---cărnidar（睦月）、faur, făurar（如月）、marţ, mărţişor（弥生）、prier（卯月）、florar（皐月）、cireşar（水無月）、cuptor（文月）、gustar（葉月）、răpciune（長月）、brumărel（神無月）、brumar（霜月）、îndrea（師走）]。

これらのギリシア•スラヴ的要素によって、ルーマニア語の元々のラテン的キリスト教語彙が豊かになった。更に、13•14世紀におけるルーマニアの封建諸国家と教会の組織化に伴い獲得された教会関係の語彙を、次のように挙げることができよう: a afurisi（呪う）、anatemă（呪詛）、arhiereu（大教主）、arhimandrit（大修道院長）、candelă（灯明）、cădelniţă（吊り香炉）、chir（主）、c(h)imitir（墓地）、ecleziarh（伝導者）、ctitor（［特に教会の］設立者）、egumen（修道院長）、epistolie（書簡）、epitrop（教会の後見人）、eres（迷信）、eretic（異端の）、har（恩寵）、faclă（松明）、ieromonah（修道院長）、a mărturisi（告白する）、paraclis（小礼拝堂）、policandru（シャンデリア）、pizmă（羨望）、raclă（棺桶）；schit（小修道院）、sihastru（隠者）、talant（通貨の単位、タラン ト）、trapez(ă)（矩形の食卓）、turlă（小塔）、zîzanie（紛争）---これらの語彙は、スラヴ•ビザンティウム系である。

10〜13世紀は、文化と関係のある語彙---hîrtie（紙）、condei（ペン）、călimară（インク壷）、dascăl（教会の詠唱者•教師）、diac（書記）、a procopsi（富ます）；社会機構と関係のある語彙---argat（人足）、camătă（高利）、temei（根拠）；商業や物質文明に関する多くの語彙---cărămidă（レンガ）、ieftin（安い）、litră（1/4キロ、又はリットル）、orez（米）、tigaie（フライパン）、strachină（針）、săpun（石鹸）、pat（ベッド）、pir（カモジグサ）、piron（大釘）、pirostie（三脚）、pită（［パン］の地方語）、temelie（基礎）、a văpsi（今日では a vopsi（塗る））、mireasmă（芳香）、mirodenie（香味）、などが浸透した時期であった。これらの語彙によって、ルーマニア人の社会生活のレベルが上がったことが明らかである。

他方、ルーマニアの諸地方とビザンチン世界との経済的•政治的•文化的関

係の結果として、ビザンティウムの平行的•直接的影響がある［11〜13世紀］。商業に関する語彙や一般的に経済に関する語彙---a agonisi（稼ぐ）、arvună（手付金）、mătase（絹）、prisos（余剰）、folos（有用性）；軍事用語---cart（夜警）、cucură（矢筒）、flamură（旗）、za（鎖の鐶）；心理的概念---mînie（怒り）、urgie（怒り）、などはビザンティウム•ギリシア語との直接の接触を通じてルーマニア語に入ってきた。

13〜15世紀におけるルーマニア諸国家の出現と発展は、国の社会政治機構や経済の適切な財政的•商業的類型に関する、スラヴ•ビザンティウムの語彙を、更に齎した: catastif（リスト）、comis（書記）、despot（暴君）、despină（暴君の妻）、diac（書記）、grămătic（書記•学者）；ducă（指導者）、hrisov（権利証書）、logofăt（尚書）、pitar（御用商人）、spătar（中世の軍司令官）、vistiernic（公金保管人）、căpitan（首領）、schiptru（今日では sceptru「王権」の意）、cîntar（秤）、dinar（古い貨幣の単位）、cămară（貯蔵室）、maistor（今日では maistru「師匠」の意）、zugrav（特に「家のペンキ塗り職人」の意）、buzunar（ポケット）、plapomă（布団）、zahăr（砂糖）、など。

これらは全て、直接的であれ、［スラヴ語を通じて］間接的であれ、元々のラテン的中核との量的関係を非常に変革させたビザンティウムの「文化変容」の過程に次いで生じたルーマニア語語彙の増加の証拠となるものである。

スラヴ•ビザンティウムのそのような「文化変容」の過程は、主に社会的•文化的特権階級の人達に関係があったので、ルーマニア語の話者達に差異が生じるようになった。スラヴ•ビザンティウムの文化の影響は、主としてルーマニアの封建社会の上層部に及び、その普及範囲と影響力は限られていた。他方、そのような型の文化は、ルーマニア語のような、新しいラテン語の非ラテン的文化の型を作った。「スラヴ的表現の中におけるルーマニア魂」というのが、N.カルトジャンが『古ルーマニア文学史 I』［ブカレスト、1960年］の中で、彼が最も良く研究し特質を明らかにした例の現象を記述するのに用いた表現である。N.カルトジャンは「スラヴ•ビザンティウム文化への

ルーマニア語の浸透」の時期を明らかにして、貧困なスラヴ文化に直面して[「ルーマニアの僧侶達の手に届くスラヴ文化は本質的に貧困であった」上掲書 14頁]、ビザンティウムとルーマニア人の関係、ビザンティウムの文化的概念の導入、スラヴ的文化概念の「ビザンティウム経由」の導入、すなわち、スラヴ•ビザンティウム統合の完遂は、ルーマニア語を文化的に非常に豊かなものにしたということを指摘した。ビザンティウムとの宗教的•政治的•文化的関係は、ルーマニア人の「より高度な文化的本能」を証明することになった［N.カルトジャン 同上書］；ルーマニア人は、直接ビザンティウムの光を受けるために、どうすれば「近隣のスラヴ文化の障害を乗り越えることができるか」を知っていた。結局、11〜15世紀は、ロマンス語［＝ルーマニア語］で表現された、ギリシア•スラヴ型の文化の形成という、非常に特異な現象を生んだ。

22. 文語ルーマニア語の最古の文献

O.デンスシアーヌスの『ルーマニア語史 I』[389-397頁] から借用したこの小見出しの下で、ルーマニア語が文語となる前の段階に言及することにしよう。ルーマニア語の一定量の長さをもった最初のテキストが、権力がホスポダールと呼ばれる太守から、ボヤールと呼ばれる特権貴族の手に移るなど、ルーマニア社会の激動の時代である16世紀に現れたことは人口に膾炙されているところである。文化はより民主的になっていた。他方、既に述べたように、15世紀末に向けて、ブルガリアとセルビアの専制君主制の廃止に伴い、ルーマニアにおけるスラヴ系文化が衰退し、ドナウ河以南のスラヴ圏で更に養われるということはなかった。

しかしながら、14〜15世紀を通じてのルーマニアにおいて、スラヴ語が唯一の教養語であった。それ故に、ルーマニア語の痕跡は、スラヴ語のカバーを剥がさないと探し求めることはできない。Lui Titu Maiorescu『ティトゥ・マヨレスク記念論文集』[ブカレスト、1900年] 収録のスラヴ学者 I.ボグダンによる De la cine şi cînd au împrumutat românii alfabetul chirilic『ルーマニア人は誰から何時キリル文字を借用したか』において明らかにされているように、キリル文字は13世紀と14世紀の初頭まだルーマニア語の音素を記述するのに用いられていた。

他方、13世紀より遥か前にルーマニアにおいて、ルーマニア語が存在していたことを証明する証拠がある。一般的に、ルーマニア語の最古の文献として、587年のバルカン東部における遠征時の出来事を物語るのに、「母語」で話したとビザンティウムの年代史家であるテオフィラクトス・シモカテスとテオファネスが伝える "torna, torna fratre" が挙げられている [テオファネス『歴史 II』15: retorna]。O.デンスシアーヌス『ルーマニア語史 I』[390頁] は、"torna, torna fratre" という文句は、軍隊において命令を表

すためのビザンチン風のラテン語であるに過ぎないと考えたが、ペトゥレ・S.ナストゥレル Studii şi cercetări de istorie veche「古代史研究』[VII 1956年、179-188頁]、A.フィリピデ『ルーマニア人の起源 I』[504-508頁]、更に最近になって、A.ロセッティ『ルーマニア語史』[1978年、657-658頁]は、"torna, torna fratre" はルーマニア語に属する単語である、と正当化の理由を付けて信じている:「(この語句は) ルーマニア語と成る過程における、ドナウ河以南のローマ化された民族の母語に関する貴重な情報の一部である』[A.ロセッティ『ルーマニア語史』658頁]。

既に我々は、バルカン半島北西部におけるルーマニア語の地名を相当数挙げた [Durmitor, Visitor, Cipitor など] ; これらは、固有名詞と地名の別はあるが、15世紀以前のスラヴ系文献および11〜13世紀のハンガリーの文献に現れるルーマニア語の単語であった: Kokora [1052年]、Vrez [1135年]、Bunu, Singuru [1222〜1228年]、Tunata [1251年]、Bucur, Cocor, Şerban [1293〜1302年]。しかし、多くのルーマニア語の単語が現れたのは特に14〜15世紀においてであった [O.デンスシアーヌ 同上書、394-398頁]。時として、語尾が変化した形を含む言連鎖さえ現れている: Peraole Szaszilor [=Păraele Saşilor「サクソン人の小川」の意、1392年]、Ungiul cu freszeni [「トネリコのある角」の意、1392年]、Riulu alb [「白い川」の意、1398年]、Vale saca [「乾いた谷」の意、1453年]、Din gula vali [「谷口から」の意、1474年]、Kukului [「カッコウの」の意、1474年]、Gura vaii albinilor [「蜜蜂の谷口」の意、1486年]、など; 以降の文献が存在していないものの、これらは全体としてロマンス語が既に具体化していたことを示すものである。

最近の研究によって、11〜12世紀のトランシルバニア地方において、ラテン文化が保存されていたことが明らかになった。東南トランシルバニア地方 [バナト地方のチェナド-イグリシュ-スンニコラウル・マレ] において、ラテン語やギリシア語、そして多分スラヴ語が、伝導後ハンガリー政府の勧めによって、教えられていたラテン系キリスト教の教会の存続に関する記録があ

る［追放されたギリシア人の僧侶の代わりにイタリア人の僧侶が就任した］。popor（大衆）、pedestru（歩行者）、gint（種族）、などのダキア•ルーマニア語の単語がラテン語に由来する教養語［又は準教養語］であったことは、それらの単語がルーマニア語の歴史的音韻法則に合致していないことから、不可能なことでは決してあり得ない：ラテン語の popolus は pópur 又は pûpur になるはずである；更に、ルーマニア語の pedestru におけるラテン語の「d ＋ e」は、z になっていない；gente(m) ＞ gint は16世紀以外の他に記録がない。これらの単語は、多分ラテン語やイタリア語を話す人達によって導入されたか、イタリア人の僧侶達によって導入されたかの可能性がある［チェナド-ウルブス-モリセナの聖ゲラルドゥスはイタリア人であった］、そして後にルーマニア語の中に広まっていったのであろう［pedestru という形態は今日なお北西トランシルバニア地方の方言に見られる］。

既に上に示したように［cf. România literară XII、9、1979年、19頁］、古い時代のルーマニアの文化は、ルーマニア語史の専門家達によって今日までに主張されてきた以上に、ラテン語の影響をより受け易かったように思える。チェナド、イグリシュ、スンニコラウル•マレなどの修道院が、西ヨーロッパにおいてはモンテ•カシーノなどの修道院がそうであったように、ラテン文化の維持に重要な役割を果したことは有り得ることである［cf.シュテファン•ブルサネスク Pagini nescrise din istoria culturii româneşti『ルーマニア文化史の書かれざる頁』ブカレスト、1971年］。

13〜16世紀のルーマニア語を分析してみると、A.ロセッティが『ルーマニア語史』［1978年、477-478頁］で分析した結果と同様に、13〜16世紀のルーマニア語は最初の文語ルーマニア語の文献が現れる16世紀のルーマニア語と差異がないことが分かる。それ故に、ルーマニア語が16世紀よりも遥か昔に書き言葉として使用されていたことが明らかであるが、それらの文献は今日まで残っていない。用いられたキリル文字から判断すると、書き言葉としてのルーマニア語が既に一定の伝統を誇っていたことが分かる。I.ボグダン［上掲書、585-595頁］によると、キリル文字は13世紀末から14世紀初頭にか

けてのルーマニア語の音韻を転写するのに用いられたという［年代の特定化は、ルーマニア語とブルガリア語における、ある種のキリル文字の音価との一致に基づくものである］。更に、I.バルブレスクと P.カンチェルは、適正な根拠があるとは思えないが、12〜13世紀説を立てている。しかしながら、ラテン•アルファベットがルーマニアの地においてずっと前から用いられていたということに関しては、疑問の余地はない。

シジスムンド•ヤコーとラドゥ•マノレスクは Scrierea latină în Evul Mediu『中世におけるラテン語の文書』［ブカレスト、1971年、122頁］で、［カトリックの影響によって、］11世紀にトランシルバニア地方でラテン語とラテン•アルファベットが「リバイバル」になったことに触れている。ディミトゥリエ［＝デメトゥリウス］•カンテミールが Descriptio Moldaviae『モルダヴィア叙景』［1915〜1916年］において断定していることは、極めて重要である: 伝統に従って、1439年までモルドヴァ地方ではラテン•アルファベットが用いられていて、アレクサンドゥル王［1400〜1430年］は、いかにカトリックの伝播を食い止めるべきかという府主教デオクリストの忠告に従って、ラテン•アルファベットで書かれた書物や文献は焼却するように命じられた、と伝えられている。この理論は、トランシルバニア学派の学者達［1750〜1820年］、I.ヘリアデ•ラドゥレスク［1802〜1872年］、政治家ミハイル•コガルニチャーヌ［1817〜1891年］などによっても支持されている［この点に関して、エミル•ヴルトス Paleografia româno-chirilică『ルーマニア•キリル文字による古文書』ブカレスト、1968年、21-22頁を参照されたい］。エウジェニウ•コセリウも「ルーマニア人の間でラテン•アルファベットが用いられていたということに関する1509年の M.A.コッチオ•サベッリーコの提供する情報を真摯に受け止めなければならない」という意見を支持している［A.ニクレスク Popor---o problemă de limbă a culturii『国民---教養語の問題』România literară XII 9、1979年、19頁］。

とにかく、ルーマニア語は15世紀にはキリル文字で書かれていたと推論しなければならない: 1485年にポーランドのカシミール王に対して成されたシュ

テファン大王の忠誠の宣言 "haec inscriptio ex Valachico in Latinum versa est"（ワラキアのこの碑文はラテン語で書かれている）は、失われてはいるが、ルーマニア語のオリジナルがあったに違いない。約1482〜1492年頃、特権貴族のドゥラゴミール•ウドゥリシュテは、トランシルバニアに住む或るブラショヴの貴族に当てた手紙の書き出しに "bunilor i cestitem"（私の良き忠実な）と言っているが、それはその特権貴族がルーマニア語を知っていて、多分ルーマニア語で文章を書くことに慣れていたことを示すものである。更に加えるに、ルーマニアの或る僧侶がルーマニア語で手紙を書いたことに対して、シビウ市当局から報酬を得たという情報もある。N.ヨルガは Istoria românilor『ルーマニア人の歴史』［ブカレスト、1937年］の中で、トルコで wallachisch geschrieben（ワラキア語［＝ルーマニア語］で書かれた）手紙を或るドイツ人が見たというエピソードを再録している。

13〜16世紀のルーマニア語は、一体どんな姿を呈していたのであろうか。A.ロセッティ［上掲書］は、13〜16世紀の間に話されていたルーマニア語の特徴は、次のようなものであったと考えている: derept［今日では drept（権利）］のような単語の中でアクセントのない -e- の消失は生じていなかった; 今日では単音化している形態の中に既に二重母音が現れている［Neatedul, Buciuměni; しかしながら、urecle［今日では ureche（耳）］のような形態もある］、口蓋母音の保存［jumetate（半分）］、中性複数語尾 -ure の保存、男性固有名詞の総合的与属格の保存［Stoicăi, Jurjii］; 16世紀と同じ現象であるが冠詞 lu による分析的与属格の出現［Ştefan a lu Has］。13〜16世紀の間のルーマニア語の方言分布は、16世紀の方言分布と差異がない: dz はモルドヴァで認められているし、z はワラキアで認められている［g が一般的になったようである］。A.ロセッティ［同上書］がいみじくも指摘しているように、13〜16世紀と16世紀という2つの時代の類似性は、文献のない時代の情報が欠如していることによるのかも知れない。16世紀以前のより豊かな材料は、ギョルゲ•ミハイラ Dicţionar al limbii române vechi『古ルーマニア語辞典』［ブカレスト、1974年］に見い出せる。

ギョルゲ•ミハイラによって、スラヴ系ルーマニア語、ラテン語、ハンガリー語のテキストから記録された628語の内207語がラテン語起源で、次のような単語を含むことが明らかにされた: 1222〜1228年の間のもの---bun（良い）、singur（一人の）; 1318年のもの---urs（熊）、vară（夏）; 1348年のもの---fecior（男の子）、surd（聾者）; 1519年のもの---dos（背中）; 1520年のもの---baie（岩塩坑）。次のようなトラキア•ダキア語起源の単語が24コある: 1293〜1302年のもの ---baci（牧童頭）; 1318年のもの---copil（子）; 1520年のもの---groapă（穴）、次のような古い大衆的なスラヴ系の単語が59コある: 1348年のもの---bălan（金髪の）; 1361〜1370年のもの---muşat（美しい）; 1517年のもの---vîrh（頂上）; 1519年のもの---iaz（池）。次のようなスラヴ系の教養語が43コある: 1368年のもの---voi(e)voda（太守•支配者）; 13997年のもの--- (d)vornic（昔の司法長官）; 1514〜1516年のもの---tîrgoveţ（町の住民）。26コのハンガリー語の単語が記録されている: 1400年のもの---uríc（権利証）; 1408年のもの---ban（支配者）[今日では「お金」の意味も]; 1424年と1431年のもの---oraş（町）; 1512年と1521年のもの---ham（馬具）。11コのトルコ語の単語がある:1436年のもの---turc（トルコ人）、1509年のもの---caftan（長い外套）、cadie（トルコの裁判官）。16世紀には6コのギリシア語の単語が認められる。

上記のことから、ラテン語とスラヴ語の要素は既に13世紀に認められるが、ハンガリー語•トルコ語•ギリシア語の要素が記録に現れるのは15•16世紀になってからである、ということが容易に推論できる。ギョルゲ•ミハイラは『古ルーマニア語辞典』の内容を総合して[213-217頁]、15世紀以降は教養スラヴ語•ハンガリー語•ギリシア語•トルコ語などの借用語が認められるが、13•14世紀には大衆ラテン語•原住民語•スラヴ語の借用記録がある、と述べている。carte（手紙•本）、a scrie（字を書く）、a cugeta（考える）、a cunoaşte（知る）、a învăţa（学ぶ）、a număra（元々は「読む」、今日では「数える」の意味）、pană（羽根•ペン）、などの基本語彙に属する相当数の単語が13•14世紀に存在していた、と想像することができる[cf.Cercetări

de lingvistică XXIV 1, 1979年、17-21頁収録のフロリカ・ディミトゥレスクの論文]。

しかしながら、文書や手紙をルーマニア語で書くことから、宗教書においてルーマニア語を用いるという段になると、別の問題が生じる: 教会関係の書物をスラヴ語やギリシア語以外の言語で書くことは、[東方] 正教会がそれらの2言語のみを教会用語として保護していた間は、外部からの革命的介入の結果、初めて可能であった。

ルーマニア文化史における重要な出来事が起こったのは、宗教改革の反響が最初にルーマニア領内に届いた所、カルパチア山脈の向う側、すなわち、トランシルバニア、マラムレシュ及び北モルドヴァである。時はあたかも、カトリックに対しヤン・フスとマルティン・ルターに導かれた、ヨーロッパにおける大宗教改革の時であった。ヤン・フスの導く宗教改革は14・15世紀のボヘミアにおける宗教騒動に由来するものであった: カトリック教会に対して原始キリスト教の単純性と内的精神の清めに回帰するように求めたヤン・フスの考えは、プラハの下層社会の人達のみならず、インテリ達の支持を得た。1415年におけるフスの破門と火刑は、ローマ法王との宗教的関係の決定的分裂、カトリックに対する闘争、宗教行事の国民化を齎した。ボヘミアから、フスの運動は血を血で洗う反乱・報復を繰り返し、近隣のハンガリーに入り、そこからトランシルバニア地方に入るが、宗教的側面の上に社会問題化の様相を呈していった。

トランシルバニア地方の農民の条件は、特に苛酷なものであった。農民の大半は農奴であった。そのような訳で、ルーマニアとハンガリーの農民が貴族階級に立ち向かったボブルナにおける1437年の革命へと、火花は容易に燃え上がった。農民は敗北し、その結果としてフスの信奉者達は、トランシルバニア地方においても流血の迫害を受けた。フランシスコ会のマルキアのヤコブが1438年に宗教裁判官としてトランシルバニアに送られた。たいていのフス信奉者達は、反宗教改革によってポーランドやチェコから追放された信者仲間と共に、モルドヴァに避難した。文献によると、フランシスコ会の僧

侶コンスタンティンはモルドヴァの村々を回り、ヤン•フスの改革の理念を説き［cf. N.カルトジャン『ルーマニア文学史 I』49頁］、モルドヴァで2人の僧侶が聖書をハンガリー語に翻訳していたことが分かる［A.ロセッティ『ルーマニア語史』1978年、484頁］。しかしながら、フス信奉者のチェコ人達は正教を信じるルーマニア人達と接触していなかったし、フスの教義は期待していた通りの反応を得ることができなかった。

N.ヨルガ、S.プシュカリウ、N.ドゥラガーヌ［1884〜1939年］、A.I.カンドゥレア、A.ポロコポヴィッチ［1884〜1946年］などといった、ルーマニアの一流の学者達は、ルーマニア語への宗教書の翻訳は15世紀に現れるという仮説を立て［O.デンスシアーヌや A.ロセッティは、社会•文化的、歴史的、言語的根拠から反論を唱えている］、ルーマニア語への宗教書の翻訳は、フスの宗教改革運動と結び付いているに違いないという仮説を立てている。しかし、フスの宗教改革運動は、ハンガリー人とザクセン人のカトリック教徒の間に広まっていった。尤も、その運動は、ワラキアとモルドヴァと強い宗教的関係にあったトランシルバニアのルーマニア正教信者に混乱を与えることにはならなかった: トランシルバニアには、ワラキアやモルドヴァの君主達によって設立された正教の教会が複数あり、正教の府主教がカルパチア山脈を越えてルーマニア国内で聖別された; 更に、ルーマニアの農民の諸問題は、［多数派を構成しているとは言え、国家的•社会的•宗教的分離を受け易い地域において］改革的であるとは言え、カトリックの厳密な神学論争とは全く異なっていた。モルドヴァでは、正教は人々の精神的構造と伝統にあまりにも深く根付いていたので、信仰の根底を揺るがすことはできなかった。正教は、フスの改革運動がカトリックに対する反動であるという程度にまで、ルーマニア人を改革運動と関係無くせしめていた。聖書の主要部分をルーマニア語に翻訳するなど、宗教改革への一時的転向はあったかも知れないが、トランシルバニア、マラムレシュ、北モルドヴァなどで同時代に見られたような宗教書の大規模な翻訳にまでは至らなかった。O.デンスシアーヌ『ルーマニア語史』と A.ロセッティ『ルーマニア語史』［1978年、486-488

頁］は、ルーマニアの宗教文化の変革に直接影響を及ぼしたのはルターの改革であったことを、示している。ヴィッテンベルクに始まったルターの改革は、すぐにトランシルバニアのハンガリー人やザクソン人に受け入れられた。彼らは早くも1519年にルターの聖書を入手し、家庭で用い始めた。宗教改革の大規模な伝播は、1530年以降に起こった：ザクセンの宗教改革者である J. ホンテルスは、生まれ故郷のブラショヴに帰り、1542〜1543年に布教用のパンフレットを表した。ザクソン人と共にハンガリー人もルターの宗教改革を受け入れ始めた：トランシルバニア公であるヨアン•シジスムンド•サポルヤイは、［自らの公国を併合しようとしたハンガリーから分離する目的で］ルターの宗教改革を奉じ、良き伝導活動者を多く供給し、トランシルバニアの多数派であるルーマニア人のために、宗教改革を受け入れるように努めた。宗教改革の布教活動は、国が援助した。最初にルーマニア人を宗教改革の見方に引き入れようとしたのはザクソン人であるが、16世紀後半に同じ役割を果したのはハンガリー人であった。ルーマニア人の中へルターの宗教改革を広め、宗教書をルーマニア語に翻訳したり、印刷したりするイニシアティヴを取り援助したのは、シビウ、ブラショヴ、オラシュティエといったトランシルバニアの３つの中心地に住むザクソン人とハンガリー人であった。ザクソン人とハンガリ人は宗教改革の伝播における国の介入を通じて、ワラキアとモルドヴァにおいて、ルーマニア人を正教会から分離しようと試みた。ルーマニアの改革派教会が設立され、ギョルゲ•デ•スンジョルスが主教に就任すると、彼は教会でのスラヴ語使用を廃止し、ミサをルーマニア語で行った。彼の後継者と成ったのはパヴェル•トルダシであり、その次の後継者はミハイ•トルダシであった。そして、もしトランシルバニアの君主の位にカトリックを信じるシュテファン•バトリが就いていなかったならば、宗教改革はより大きな弾みを得ていたであろう。正教の位皆制は、トランシルバニアが２つの主教区に分けられ、ルター派とカルヴァン派の伝導活動の縮小によって、強化された。ルーマニア語の最初の翻訳が現れたのは、そのような状況下であった。A. ロセッティによれば、それらの言語的特徴からして、

1530年から1559年の間にマラムレシュと北トランシルバニアで書かれたものである。福音書とパウロの書簡のルーマニア語訳が1532年にモルドヴァで成されたということは、クラクフで最近発見された文書［人道主義的インテリであるニコライ•フリューゲルの手紙の中］によっても証明される：或る手紙によれば、"doctor ex Walachia, vir canus, qui non germanice, sed latine et polonice loquitur"（ゲルマン語でなくラテン語とポーランド語を話す、白髪のワラキアの博士）が、ポーランド語•ドイツ語•ルーマニア語で４つの福音書とパウロの書簡を編集する目的で、ヴィッテンベルクにマルティン•ルターを訪ねた［A.ロセッティ『ルーマニア語史』1978年、751-753頁］。

このことは、1530年と1559年の間に複数の祈祷書のルーマニア語訳が存在していたことを確認するものである。モルドヴァは、トランシルバニア同様に、宗教改革のルーマニアにおける中心地を幾つか提供し、そこで教会関係の書物がルーマニア語に翻訳されていたようである。この点に鑑み、重要な意味を持つのは、最初のルーマニア語訳書の中での詩編同様に、ルターの教義問答書の存在である。実際問題、ルーマニア語の複数の宗教書は、北トランシルバニアの宗教改革の中心からあまり遠くない所、ジプス、北ハンガリーから現れている。このことは、O.デンスシアーヌによって最初に、そして実質的には A.ロセッティによって提唱されたことであるが、ルターの影響に従って宗教書をルーマニア語に翻訳するという傾向に沿って、ルーマニア語とルーマニア文化における画期的な時代であったということを説明するのに受け入れられる唯一の理由である。

P.P.パナイテスク Începuturile scrisului în limba română『ルーマニア語における書写の開始』［ブカレスト、1965年］、I.ビアス Despre introducerea scrisului românesc în biserica românilor『ルーマニア人の教会におけるルーマニア風書法の導入について』［ブカレスト、1904年］、アカデミー Analele Academiei Române『ルーマニア•アカデミー年報』［ブカレスト、1941年］などでは、初期の宗教書の翻訳はルーマニア国内の社会•

政治的かつ文化的諸要因によって説明されるべきであり、スラヴ系文化の支配に対する一定の社会集団の反作用の結果であると考えられている。更に、エミル•ヴルトスは Paleografia româno-chirilică『ルーマニア•キリル文字による古文書』の中で、宗教関係の書物の中にルーマニア語を導入することは、社会の発展の一定段階にあって全ヨーロッパを通じて明らかなことであるが、「古代ヨーロッパの教養語の放棄」を意味したとさえ信じるに至った。上のように見てきた場合、フスやルターの外部からの影響は、ルーマニア語の発展の手助け•手引ではあったが、決定的な原因であったとは言えない。

他方、A.ロセッティ［上掲書、755-757頁］は、ルターの教義問答書は1559年に補祭のコレシによって最初に印刷され、北トランシルバニアやマラムレシュで翻訳された複数の本の内の１冊であり、ルーマニア語への初期の翻訳書としては誇れるものである、と指摘している。

外的•内的所要素がルーマニア語をして16世紀の書き言葉にしたのは、極めてあり得ることである。フスの宗教改革を受け入れることもなく、またルターの宗教改革に転向した訳でもないルーマニア人が、多かれ少なかれ感じられていた、或る種の内的要求に呼応する宗教的潮流に則った考えを受け入れる術を知っていたという事実を見逃す訳にはいかない。宗教改革に有利であった或る段階の後、コレシ自身正教のスラヴ語•ルーマニア語のテキスト［スラヴ語とルーマニア語を組み合わせることは、正教の教えに対する尊重を意味している］の印刷に着手した；このようにして、教会におけるルーマニア語の使用がルーマニア人にとって同じく不可欠であるということを、コレシが証明した。以上のようにして、ルーマニア語がすべてのロマンス語の中において、全てのキリスト教関係のテキストが出版される最初の言語に成った。スラヴ語に対するルーマニア語の歴史において重要な時を刻むものである：16世紀に始まって、ルーマニア語は徐々に教養語としての道を歩んで来た。

23. 16世紀のルーマニア語で書かれたテキスト

最も古い16世紀のルーマニア語のテキストは、2つの範疇に分けられる:

a）翻訳されたテキスト。

b）翻訳されたのではないテキスト［個人の手紙、日々のメモ、公式の裁判関係の記録］。別の分類の仕方として:

a）手書きのテキスト。

b）印刷されたテキスト。

という風に分けることができる。

これらのテキストの分類の差異の中には、使用言語の差異が含まれる: 翻訳されたテキストには、しばしば外国語の原型からの借用といった人工的言語が認められるが、一方において、翻訳されたのではないテキストは、語彙においては翻訳されたテキストに劣るが、当時の［そして、今日まで引き継がれている］口語に近いルーマニア語で書かれている。他方、上記の範疇の各々に関する社会•文化的理由が異なっていた: 翻訳されたのではないテキストは、ルーマニア語で書くという明らかな必要性から生まれた［権力が次から次へと別の特権貴族に移る激動の時代に、スラヴ文化が徐々に忘れられ、スラヴ語があまり良く知られていなかったという事実も、決定的要因であった］し、また翻訳された宗教書は、必然的に改革を要求した宗教の改革的影響を受けて、出現した。

最も重要な16世紀のルーマニア語のテキストは、次のようなものであった:

a）ロータシズムの現れるテキスト: Codicele Voroneţean『ヴォロネッツ修道院の古文書』、Psaltirea Voroneţeană『ヴォロネッツ修道院の詩編』、Psaltirea Scheiană［ブラショヴの］『スケイ［地方で印刷された］詩偏』、Psaltirea Hurmuzaki『フルムザキ詩偏』［手書き本が保存されている］。これらは、15世紀末に成された翻訳［N.ヨルガ、I.A.カンドゥ

レア、S.プシュカリウ、などの説］か、16世紀初頭に成された翻訳［O.デンスシアーヌ、A.ロセッティ、N.カルトジャン、などの説］のようである。それらの翻訳は、コレシの印刷したテキスト以前の16世紀に北トランシルバニアやマラムレシュで成されたものである。

b）1544年の Cathehismul『教義問答書』; この写本は発見されていないが、Rechnungen aus dem Arhiv von Hermannstadt und der sächsischen Nation I『ヘルマンシュタットとザクソン国の古文書館の勘定書 I』［シビウ、1880（?）年］の中で言及されていて、ワラキアの教義問答書を印刷したことに対して、フィリップス師とかに2フロリングが支払われたということが記されている。ウロツワウ［ドイツ語名は、ブレスラウ］の同僚の僧侶に当てられた手紙の中で、北トランシルバニアはビストゥリッツァのザクソン人の僧侶が、シビウでは教義問答書が「セルビア［＝キリル］」文字で印刷された、と手紙に書いた。更に、現存する記録によると、フィリップス師［ことモルドヴァ人のフィリップス又はフィリップ•マレル］が宗教改革の伝導奉仕の中で印刷をしたことに対して、市当局から金銭を受け取った、とある。

c）Evangheliarul slavo-român『スラヴ•ルーマニア福音書』［1551〜1553年］: 同じくモルドヴァ人のフィリップによってシビウで印刷されたもの［ルーマニアの文献学では、この本は Evangheliarul de la Petersburg『ペテルスブルクの福音書』と言われ、1549年の日付がある---I.ビアス、H.ホドシュ Bibliografie românească veche I『古ルーマニア書誌 I』［80-81頁］は、1580年に印刷されたと考えている。レニングラードに保存され L.ドゥメニによって発見された Evangheliarul slavo-român de la Sibiu 1551〜1553『1551〜1553年の間に印刷されたシビウのスラヴ•ルーマニア福音書』［ブカレスト、1971年］がコレシの印刷本よりも早いことは確かなようである。あまり確かでないのは、その言語の場所である。E.ペトゥロヴィッチと A.ロセッティによるとモルドヴァであるし、I.ゲツィエと A.マレシュによるとバナトだとい

うことになる。

1559〜1560年に始まって、ブラショヴの町は、［ワラキアの君主の居住地であるトゥルゴヴィシュテの出身である熟練した印刷工である］輔祭コレシの努力の地であった。コレシはルーマニア語で10冊程の教会関係の書物を発刊した：Întrebare creştinească『キリスト教疑義』［1559年］、Tetravanghelul『福音四書』［1561年］、Pravila『法典』［約1560〜1562年］、Apostolul『十二使徒』［約1563年］、Cazania I『第1説教集』［1564年］、Molitvenicul『(祈祷書』［1564年］、Psaltirea românească『ルーマニア詩編』［1570年］、Liturghierul『ミサ典書』［1570年］、Psaltirea slavo-română I『スラヴ・ルーマニア詩編 I』［1557年］、Cazania II『第2説教集』［1581年］。1589年頃に Psaltirea slavo-română II『スラヴ・ルーマニア詩編 II』がコレシの息子シェルバンによって出版された。

旧約聖書の最初の2書［創世記と出エジプト記］のハンガリー語からルーマニア語への訳を含む Palia de la Orăştie『オラシュティエの旧約聖書』が1582年に出版されたのは同じトランシルバニアの南、しかし西寄りのオラシュティエにおいてであった。その翻訳は、バナト地方のカランセベシュの町の出身であるエフレム・ザカンとシュテファン・ヘルチェ、北バナト地方はルゴジュ出身のモイセ・ペシュティシェル及び第1主祭アキリエなどの学者グループによって、カルヴァン派の主教ミハイ・トルダシの祝福と支持を得て成された。印刷をしたのはシェルバン・コレシと輔祭のマリアンであった。

約1570〜1573年に Carte de cîntece『賛美歌集』が、多分パヴェル・トルダシュによって、ラテン・アルファベットを用いたハンガリー風の綴りで、クルージュで出版された；その内たった8頁しか保存されていなく、Fragmentul Todorescu『トドレスクの断片』という名前で知られている。

この時代にモルドヴァやワラキアでルーマニア語に翻訳された宗教書は、何も保存されていない。Evanghelia『福音書』と Apostolul『使徒行伝』のモルドヴァ版2冊が多分1532年にブコヴィーナで出版されたものと思われるが、現存していない。

最後に、しかし重要なことであるが、太守のパトラシュの命により、ロードス島滞在中にワラキアはマニチェシュティの書記ラドゥによって1574年に複写された Tetravanghelul『福音四書』に言及しないわけにはいかない。この複写は、多分コレシの Tetravanghelul を手本に成されたもので、今日大英博物館に保存されている。

数種の法典や俗人の手紙が現れたのは、その頃であろう。それらは文語の文書であると考えられる。例えば、1581年にポトゥナにおいて修辞学者ルカチが法典を［スラヴ語から以前に訳されてあったものを手本にして］改訳している。マテイ•ヴラスタリスの Sintagma『統合関係』に関するルーマニア語の Glose『注釈』が記されたのは、北モルドヴァにおいてであった。

言語学的に興味があるのは、トランシルバニアはビストゥリッツァの知事に対してスチャヴァとクンプルング•モルドヴェネスクから送られた公式の通達である。これらは、1926年に A.ロセッティによって、ルーマニア語で書かれた幾つかの文書とともに、公刊された。

ワラキアにおいては、1600年頃にテオドシエ•ルデアーヌによって書かれた［しかし残念ながら現存していない］ミハイ勇敢公の年代記と1620年のミハイ•モクサの Cronograf『年代史』を通じて、史書の開始とすることができる。個人の書簡類の中で、1521年にブラショヴの知事であるハンス•ベンクネルに対してクンプルングの特権貴族ネアクシュによって送られた手紙 Scrisoarea boierului Neacşu din Cîmpulung『クンプルングの特権貴族ネアクシュの手紙』を是非とも挙げなければならない; それが言及に値するのは、それが知られているルーマニア語の最初のテキストの内の１つであり、使用されたルーマニア語が非常に注意深く推敲されたものだからである。

南トランシルバニアはブラショヴの近くのスンペトゥルで、僧侶のヨン•ロムルスが1620年に３冊の通俗書を翻訳した: Alexăndria『アレクサンダー大王の功業』、Floarea darurilor『恩寵の華』、及び Rujdeniţa『キリスト降誕』。一方、北トランシルバニアのルパ•デ•ジョスでは、トアデル師が1610年に法典を翻訳している: それは A.ロセッティによって、ビストゥリッ

ツァ古文書館で発見された。

Textele măhăcene［ストゥルザンの古文書の中に含まれる］『マハチの聖句』［トゥルダのマハチの僧グリゴレによって大部分が複写された説教と聖人伝］、Codicele Todorescu『トドレスクの古文書』、Manuscrisul de la Ieud［マラムレシュの］『イエウドの手写本』、及び Codicele Marţian『マルツィアンの古文書』などは、16世紀と17世紀初頭のものである。

1588年と1640年の間にトランシルバニアにおいても印刷活動は衰え、その結果として殆ど全ての、翻訳されたり複写されたりしたルーマニア語の本は、手写で人々の間を回ることになった。

24. 1650年頃までのルーマニア語

ルーマニア語の歴史において、我々が普通「16世紀」と呼ぶ世紀は、1640年から1650年までが実際には含まれる。その最終年は著者によって微妙な差異をみせる: O.デンスシアーヌとA.ロセッティは単に16世紀と言っている［A.ロセッティ、B.カザク、L.オヌ『文語ルーマニア語の歴史』ブカレスト、1971年、35-46頁も同じ意見である］が、ルーマニア文学史の新しく簡潔な本の著者達は「16世紀」を1640年まで延長せしめている［S.ムンテアーヌ、V.D.ツァラ『文語ルーマニア語の歴史』1978年、54-66頁］; あるいは、あまり意味のない根拠に基づいて1656年まで延長せしめている著者もいる［I.ゲツィエ Baza dialectală a României litarare『文語ルーマニア語の方言基盤』ブカレスト、1975年、272頁以降。cf. 上記の『文語ルーマニア語の歴史』の縮約版、ブカレスト、1978年、77頁以降］。

16世紀と17世紀中葉［1640〜1656年］までのルーマニア語の構造は、文語とその文語が書かれた地方の口語と非常に近い関係にあることが明らかである。「北部」のテキスト［ロータシズムが現れる］と「南部」のテキスト［コレシ以前の印刷物、コレシ自身の印刷物、ブラショヴ-シビウ-オラシュティエ、南•南西トランシルバニアの通俗書］とに分けられる。A.ロセッティ［上掲書、492-495頁］は、テキストに現れるルーマニア語の方言区分を試みている。A.ロセッティは、バナトとフネドアラの地方的変種をも考慮に入れ、Palia de la Orăştie『オラシュティエの旧約聖書』などを南•北トランシルバニア的要素の混合の賜物であるとしている［「オラシュティエの旧約聖書」に現れるワラキア的要素は、I.ゲツィエ『ルーマニア文学史』［101頁］が言うように、ワラキアの印刷業者の介入のせいであろう］。

他方、我々は A.ロセッティの観察を考慮に入れなければならない［上掲書 612頁］:

「方言区分は、北トランシルバニアとモルドヴァ、南トランシルバニアとワラキア、トランシルバニア人の近隣公国への移民などといった、社会的集団間に存在するつながりによって正当化される。このようにして、16世紀のルーマニア語の音韻は今日よりも明瞭な地方的特徴を示していて、その結果、各方言の対立は明確な音韻的特徴によって成される。音韻的特徴の幾つかは、一般的に言語的発展に乗り遅れる地方に対して、より高い社会的名声を有する共通語が拡張するので、排除されてしまった。」

25. 16世紀から17世紀中葉にかけてのルーマニア語の特徴

16世紀から17世紀中葉にかけてのルーマニア語の特徴は、類型学的に見た場合、保守的でもあり、革新的でもある。ラテン語のアクセントのない a ＞ ă が、まだ同化されずに保存されている---băserecă（教会［今日では biserică］）、blăsteme（呪い［今日では blesteme］）、a rădica（持ち上げる［今日では a ridica］）、părete（壁［今日では perete］）、fămeie（女［今日では femeie］）、など；非ラテン系の単語においても同様である---năsip（砂［今日では nisip］）、păhar（グラス［今日では pahar］）、など。語中の -e- の消失はまだ生じていない---derept（正しい［今日では drept］）、a derege（修繕する［今日では a drege］。「i ＋ n, m ＋ 子音」に同化がまだ生じていない---a împle（満たす［今日では a umple]）、a îmbla（歩く［今日では a umbla]）、ただし、コレシの中に既に umplut, umpluse［「満たす」という同じ動詞の活用形］が見られる。-e- の同化がまだ生じていない---arepi（翼［今日では aripi]）、a ceti（読む［今日では a citi]）、demîneaţă（朝［今日では dimineaţă]）、neşte（幾つかの［今日では nişte]）、a nemeri（見付ける［今日では a nimeri］）。語末の -u は、少なくとも文字の上では保存されている---domnu（主人）、semnu（印）、など。

次に記す事柄は、17世紀中葉までの言語的革新である：a もしくは e が後続するアクセントのある e の単母音化---leage ＞ lege（法律）［キリル文字 ѣ や ѧ が音韻変化や伝統的綴字のせいで、音声的実態を隠してはいる］：cf. A.ロセッティ、上掲書、496-499頁；約1620年の Alexăndria「アレクサンダー大王の功業」においては常に通常の e で書かれている；en ＞ in の変化---cuvente ＞ cuvinte（複数の単語）、den ＞ din（～から）；în

＞ in の変化---inel（イヤリング）［たった一度だけ înrel という形で現れる］、inimă（心）［înremă, inrimă という形もある］。

当時のルーマニア語は、「唇音 ＋ ヨッド」を、f ＋ i ＞ hi の例外［hiastru（継子）］を除いて、そのまま［の形態で］保っていた；唇音はそのまま［の形態で］保たれていた［地方によっては、t',d' ＞ ć, ǵ という口蓋音になった所がある］；ć と ǵ の破擦音は無変化のままであった［地方によっては、その後に摩擦音になった所もある］。

北部［マラムレシュ、バナト、モルドヴァ］では破擦音 dz［ラテン語の d ＋ e,i］、g［ラテン語 j ＋ a,o,u］が見られる：a dzăcea（横たわる［今日では a zăcea］）、dzile（複数の日［今日では zile］）、Domnedzău（神［今日では Dumnezeu］）、giumătate（半分［今日では jumătate］）、giude（判事［今日では jude, judecător］）、giudeţ（県［今日では judeţ］）；二重母音 îi の欠如---pîne（パン［今日公式には pîine］）、cîne（犬［今日では cîine］）、mîne（明日［今日では mîine］）；唇子音に後続する e の非口蓋化---iubăscu（私は愛する［今日では iubesc］）、mărg（私は行く［今日では merg］）、ivăscu（現れる［今日では ivesc］）、或る種の破擦音と摩擦音の後でも同様である---ţîn（私は持つ［今日では ţin］）、dzîc（私は言う［今日では zic］）、samănă（彼らは似ている［今日では seamănă］）；接尾辞 -tor と -ar における -r の語源的•類推的軟音［湿音］化---agiutoriu（助け［今日では ajutor］）；dătătoriu（与える［今日では dătător］）；他にも同様の例がある---ceriul（天•空［今日では cerul］）、boieriu（貴族［今日では boier］）、mărgăritariu（真珠［今日では mărgăritar］）。他方、語中の -n- のロータシズムが生じる---mîrule（それらの手［今日では mîinile］）、spunre（言う［今日では spune］-r-, -nr- という２種類のロータシズムがあった）；n ＋ e,i の保存---călcîniu（踵［今日では călcîi］）、pustińe（砂漠［今日では pustie］）、cuńe（誰に［今日では cui］）、întîniu（最初の［今日では întîi］）；特種文字で表される［巻舌の］r の存在---amarra（苦い［今日では amară］）、riu（川［今日では rîu］）。hotarră（国境［今日

では hotare])。この最後の例は、広い範囲に広まっている。

南部［南トランシルバニア、西南トランシルバニア、ワラキア］のテキストにおいては、多くの革新的現象が現れた: ラテン語の d ＋ e,i が z に成った---a auzi（聞く）、zile（日々）、zice（彼は言う）; ラテン語の j ＋ a,o,u が j に成った; jos（下に）、ajutoriu（助け［今日では ajutor］）; 二重母音 îi［i を挿入したもの］の出現---cîine（犬）、mîine（明日）; 摩擦音 s,z の後および破擦音 ţ と唇音の後の口蓋音の維持---seară（夕方）、Dumnezeu（神）、merg（私は行く）、iubesc（私は愛する）。

『オラシュティエの旧約聖書』の多くのテキストの中には、rumân や rumânesc という形態の他に、român や românesc という形態が見られるが、［ウルガータもしくはハンガリー語の原本を通じて］ラテン語の形態に近付ける意志が働いたのであろう。

上に見たように、17世紀中葉までの文語ルーマニア語の音韻体系には、変動と方言差が認められる［cf. O.デンスシアーヌ『ルーマニア語史 II』12頁 "Le morcellement dialectal y est assez visible"（ルーマニア語の方言の分断が非常に明白である）］。更に、地方地方による不安定な変化が認められる: 各々の方言の特徴が常にテキストの特徴と重複するとは限らない［ワラキアの複数の要素が他の地方のテキストに現れるし、コレシの印刷物の影響がルーマニアの他の地方で話される方言に感じられる］。

形態面において、注目に値する特徴として次のような現象を挙げることができる: 女性名詞の複数語尾 -e ---dobînde（利子［今日では dobînzi］）、rane（傷［今日では răni］）、groape（穴［今日では gropi］）、nunte（複数の結婚［今日では nunţi］）、talpe（足の裏［今日では tălpi］）; 中性複数語尾の -ure ---locure（場所［今日では locuri］）、chinure（苦しみ［今日では chinuri］）、ceriure（天［今日では ceruri］）; 定冠詞付きの与属格語尾 -eei,-iei ---peliţeei（その体の［今日では pieliţei（その皮膚の）］）、judecateei（その判断の［今日では judecăţii］）、inimiei（その心の［今日では inimii］、並びに inemii, morţii（死の）; 定冠詞なしの -e で終わる

男性単数•複数の呼格--- ome! (男よ! [今日では omule!])、învăţătoare! (先生!) [今日では învăţătorule!]、nebune! (お前、気違い野郎め! [今日では nebunele!])、fraţi! (兄弟よ! [今日では fraţilor!])、bărbaţi! (男達よ! [今日では普通 bărbăţilor!])。男性名詞を従える属格の後接的定冠詞は lu と lui で、女性名詞を従える属格の後接的定冠詞は ei と ii であった---a ei noastre credinţă [英語に直訳すると、of her our faith [『ヴォロネッツの古文書』の中]、ii Sara [英語に直訳すると、of Sarah [『オラシュティエの旧約聖書』の中]]。動詞の活用語尾に関して、不完了時制の全ての人称語尾に -a が見られる---era [=英語 was]、pleca [=英語 was leaving]、grăia [=英語 was speaking] ; 強変化の完了 [又は過去] 形---cerşiiu [=英語 I begged、今日では cerşii、より文語的には am cerşit]、dediu [=英語 I gave、今日では dădui、文語では am dat]、feciu [=英語 I did、今日では făcui、文語では am făcut] ; 3人称単数についても---fepse [=英語 he did, he made、今日では făcui]、ven(r)iu [=英語 he came、今日では veni] ; 迂言的過去完了についても---era venritu [=英語 he had come]、era înţeles [=英語 he had understood]、nu să era culcaţi [=英語 they had not yet gone to bed] ; ラテン語の接続法に由来する să, se [<ラテン語の si] を伴う条件法現在---se feceri [=英語 if they did]、se judecaret [=英語 if they went to judgement]、se avure [=英語 if they had]、să nu fure [=英語 if they were not]; vrea (欲する) を助動詞とする条件法過去---se vrea fi [=英語 if they had been]、peri-vrea [=英語 he would have perished、字義通りには perish-would]、scula-se-vrea [=英語 he would have risen、字義通りには rise-he-would]、又 a fi を助動詞とする条件法過去---ară fi adus [=英語 he would have brought、字義通りには he would be brought] ; 小詞 a を伴う長い不定詞の使用; ラテン語の過去分詞---fapt [=英語 made 又は done、今日では făcut]、întort [=英語 returned、今日では întors]; 過去分詞の類推形---înţelegut [=英語 understood、今日では înţeles]、

învăncut［＝英語 vanquished、今日では învins］。

文章構成法の面では、翻訳されたものと原文との差異に注意しなければならない。翻訳されたものの文章構成法は、スラヴ語やハンガリー語の原本からの借用的表現が非常に多い［cf.A.ロセッティ、上掲書、577頁:「我々自身の言語精神と異質なそれらの文章構成法は、聖書関係の書物の微妙な点をより貧しい言語に翻訳する時に、初期の翻訳者が経験した技術と困難さの欠如を示した。その通常の結果は、しばしば原本の文章構成の模倣的な表現であった」］。他方、翻訳されたものでない、原書の文章構成は、非常に口語に近かった。

次に、17世紀中葉までの文語ルーマニア語の文章構成法上の特徴を幾つか示そう: 属格と与格の、前置詞を用いた分析的構造---de の使用: cale de cetate（要塞の道）、casa de domnul（主人の家）; a の使用: trestie a cărtulariu（［字義通りには］学者の葦）、dĕde（el）a lucrători（彼は労働者達に与えた）; 対格に前置詞 pre のついた構文は、テキストによって異なる:『フルムザキ詩編』•『ヴォロネッツ詩編』•『ヴォロネッツの古文書』並びに、コレシによって印刷されたテキスト類において、特定化された人間の直接目的語には前置詞 pre が付いていない［cf. Recueil d'études romanes に収録された L.オヌの論文、206頁; A.ニクレスク『ルーマニア語の特異性 I』77頁以降］; 他方、前置詞 pre は Evanghelia cu tîlc『福音注解』又は Cazania II『第2説教集』［1583年コレシの印刷による］に現れている。尤も、O.デンスシアーヌや A.ロセッティが推論しているように、スラヴ語の原書の影響によるものと考えられるが、福音書そのものの中には pre は現れていない。

文章構成法上の特別な問題が、冠詞の使用において現れる: 女性名詞の与属格の後接的冠詞---Gheorghe a i Mosostoie（モソストイエのギョルゲ）［cf. acest cap de țară a Mulduvei（このモルドヴァの地の果て）］; 形容冠詞の使用---spuse ceii fete（彼はその少女に言った）[cf.形容冠詞のない例もある---săgetele tarelui（強者の矢）では celui tare とは言っていない];

与属格用に、所有格の前に後接的冠詞を用いる---lui al nostru priiatin [英語に直訳すると、to the our friend]、a ei voastre credinţă [英語に直訳すると、of the your faith]。

語彙の分野では何よりもまず、その貧困さに言及しなければならない。この大障害を乗り切るために翻訳者達は、宗教的•政治的•文化的概念を表す外国語を借用したり、同音異義語に助けを求めたりした。ルーマニア語は17世紀中葉まで、以前の複数の翻訳書に現れた語彙を使用した: agru (畑 [今日では ogor])、arină (砂)、auă (複数のブドウ< ラテン語 uva [今日では struguri])、a cumpli (満たす [今日では a umple])、a deşidera (欲する [今日では a dori])、これらは全て廃語である; a număra (読む [今日では「数える」という意味だけで用いられている])、a deştinge (区別する [今日では a distinge])、gintu (氏族 [今日では gintă])、i! (du-te!)、(a se) inveşti (服を着る [今日では a (se) îmbrăca])、lucoare (明かり [今日では lumină])、măritu (花婿 [今日では mire])、temoare (恐れ [今日では teamă])、virtute (美徳 [今日では vîrtute])、など。

時として、ある種の単語は異なる意味で用いられていた---adunătură (集会 [今日では「暴徒」の意味のみで用いられる])、bezaconie (悪行 [今日では bazaconie (愚行)])、bezdnă (絶壁 [今日では beznă (暗がり)])、cătuşe (錨 [今日では「手錠」の意味で用いられる])、ciudă, ciudesă (驚異 [前者は今日「悪意」の意味で用いられ、後者は消失している])、limbă (民族•人種 [今日では「舌•言葉」の意味のみで用いられる])、mişel (貧しい [今日では「ならず者の•卑劣な」という意味で用いられる])、peliţă (体 [今日では「皮膚•薄皮」の意味で用いられる])、prost (単純な [今日では「馬鹿な•悪い」の意味で用いられる])、a săruta (挨拶する [今日では「キスする」の意味で用いられる])、silă (力 [今日では「嫌悪」という意味で用いられる])、soţie (同伴者 [今日では「妻」のみを意味する])。

同じ時代に次のようなスラヴ語やハンガリー語の単語が流布していた: alămojnă (魂)、cislă (会議•会談)、a măhăi (手まねで招く)、a upovăi

(望む)、a gilălui (嫌う)、a felelui (答える)、などであるが、これらは当時の社会的•政治的•宗教的現実との関連で借用された単語である。16世紀と17世紀前半のルーマニア語は、スラヴ語やハンガリー語と文化的接触があった。ルーマニア語ば、あまり統一性がなく、北と南に地方区分されてはいたものの、初期のルーマニア語のテキストは、コレシのテキストに見られるように、ルーマニア語の文語に一定の規範を設けつつあった。このようにして、ルーマニアの国内に統一的な文語ルーマニア語の基礎ができた。

26. 17•18世紀のルーマニア文化

17世紀後半と18世紀前半のルーマニア語は、スラヴ語の公的排除の結果として発展した。まず最初にトランシルバニアにおいて、次にワラキアとモルドヴァにおいて、ルーマニア語は君主の宮廷に導入された。ルーマニアの特権貴族ヴァシレ•ルプ（1634〜1654年）やワラキアのマティ•バサラブ（1632〜1654年)、更にヴァルラアム（？〜1657年）やシミオン•シュテファンやドソフテイ（約1624〜1693年）などといった教養人の府主教は、ルーマニア語へ翻訳したり、初期の宗教書をルーマニア語で公刊するように働きかけたり、自らがその仕事に従事した。

17世紀後半と18世紀前半は、ロサ•デル•コンテが Mihai Eminescu o dell'Assoluto［モデナ、1961年、471頁］において "l'età d'oro della lingua"（ルーマニア語の黄金時代）と呼んだ時代であった。僧籍にある翻訳者達は、宗教に関することの教育はもはやスラヴ語を知らない人達にはルーマニア語で成されるべきであり、僧籍にない学者達は、近代的ヨーロッパという確信から出た発想であるが、日常の言葉すなわちルーマニア語で書くべきであるという考えに刺激されていた。大衆の言葉であるルーマニア語が、教養語でありスラヴ語に劣る「俗語」であるとは、もはや考えられなかった。P.P.パナイテスク『ルーマニア語における書写の開始』［ブカレスト、1965年、211頁］、宮内大臣コンスタンティン•カンテクジーノ（1650〜1716年)、ディミトゥリエ•カンテミール公（1673〜1723年）などといったルーマニアの人文主義者達はルーマニア語に対して特別な態度を取り、宗教語としても文学語としても、ルーマニア語の地位を高めたと、言っている。

多くの学者達が一般的にルーマニア語に関する意見を述べ、特に文語ルーマニア語に関する意見を述べたのは、17世紀後半から18世紀前半にかけてであった。特に強調されたのは、ルーマニア語のラテン性［＝ラテン語に起源

があるということ］である。歴史家グリゴレ・ウレケは、Letopisețul Țării Moldovei『モルドヴァの年代史』において、"rumânii cîți se află lăcuitori la Țara Ungrească și la Ardeal și la Maramureș, de la un loc sînt cu moldovenii și toți de la Rîm se trag"（ハンガリー、トランシルバニア、マラムレシュに住む全てのルーマニア人は、モルドヴァ人と同じく、ローマの子孫である）と述べている。別の歴史家ミロン・コスティン［1633〜1691年］は、De neamul moldovenilor『モルドヴァ人について』の中で、"Neamul acesta de carele scriem, al țărilor acestora numele mai vechiu și mai direptu ieste rumân, adecă rîmlean, de la Roma"（我々が今記述している、そのより古く正しい名前がルーマニア人である人達は、ルーマニア人すなわち、ローマに由来する人達である）と記述している。更に、コスティンは、"de la discălecatul lor, de Traian și cît au trăit pănă la pustiirea lor di pre aceste locuri și cît au trăit în munți, în Maramoroș și pe Olt, tot acest nume au ținut și țin pănă astăzi și încă mai bine muntenii decît moldovenii că și ei acum zic și scriu țara sa rumânească, ca și rumânii cei din Ardeal"（まず最初にトラヤーヌスによって基礎が築かれて以来、これらの地から離れて山々の中やマラムレシュやオルト川のあたりに住むようになってから、モルドヴァ人以上にワラキア人が［と言うのも、後者が今日でさえ、トランシルバニア人と同じように、ルーマニアの国について記述している］今日まで大切にしているのは、同じ名前である）と述べている。

ルーマニア語がラテン語に由来するという考えは当時いたるところで、ルーマニア人の統一の意識と結び付いていた。ディミトゥリエ・カンテミールは、ルーマニア人が住むそれらの土地の "româno-moldo-vlahi"（ルーマニア・モルドヴァ・ワラキア人の）統一と古さについて話している。ミロン・コスティンは、"Lăcuitorii Țării noastre Moldovei și Țării Muntenești și românii din țările ungurești...toți de un neam și odată descălecați sînt"（この我がモルドヴァやワラキアに住む人達は、ハンガリーに住むルー

マニア人同様に、起源的に同じ民族であり、その始まりもまた同じであった）と指摘した。全く同じように、ワラキアの歴史家コンスタンティン・カンタクジーノは、"Rumânii din Ardeal, moldovenii şi ceşti de ţara-aceasta, tot un neam, toto o limbă fiind...toţi aceştia dintr-o fîntînă au izvirît şi cură"（トランシルバニアのルーマニア人もモルドヴァ人もワラキア人も皆同じ民族に由来し、同じ言語を有している...と言うのも、皆が同じ泉から涌き流れているからである）ということを強調した。

この時期に非常に重要な役割を果したのは、府主教のシミオン・シュテファン（？～1656年）、ヴァルラアム（？～1657年）、ドソフテイ［約1624～1693年］、などであった。文語ルーマニア語の諸問題に最初に注目したルーマニアの学者は、シミオン・シュテファンであった：Noul Testament『新訳聖書』［バルグラード---アルバ・ユリア、1648年］の Predoslovia către cetitori（読者への前書き）の中でこの府主教は "rumânii nu graim toţi într-un chip"（我々ルーマニア人が皆同じように話すのではない）ことに残念ながら注目し、"cuvintele acelea sînt bune, carele le înţeleg toţi"（皆に理解される単語は良い）ということを強調した。

このようにして、ルーマニアの文化史上初めて、ルーマニア語への翻訳の諸問題が提起された："să izvodim aşea cum să înţeleagă toţi"（皆に分かってもらえるように創作しよう）と言い、自らの方法を示している："noi le-am lăsat［cuvintele］cum au fost în izvorul grecescu, văzînd că alte limbi încă le ţin aşea, cumu-i *synagoga* şi *publican* şi *gangrenă*...carele nu se ştiu rumâneşte ce sînt"（synagoga や publican や gangrenă などといった単語が、一体何を指すのかルーマニア人には分からないので、外国の人達がそうしているように、ギリシア語のままにしておいた）。そのような訳で、シミオン・シュテファンは、文語ルーマニア語に新語を導入することによってルーマニア語の語彙を豊富にする必要性を認識した。少し後の1698年に、学者のラドゥ・グレチェアーヌも又 îngustarea limbii rumâneşti（ルーマニア語の狭さ）を Minei『祈祷書』の中で、"cu greu

iaste a tălmăci neştine singur, ales despre limba elinească spre cea rumânească; că sînt cuvinte elineşti şi vorbe despre locuri care unele nici la lexicoane nu să află, altele, de să şi află şi să înţăleg,...nu pot veni la tălmăcit”（翻訳をするのは、とりわけ、ギリシア語からルーマニア語に翻訳するのは、実に困難である；と言うのは、地名に関するギリシア語の単語がたくさんあるかたわら、それらの内の幾つかは語彙の中に見当たらないし、他のものは語彙として存在していても、理解されず翻訳され得ない）と言って嘆いた。しかし、新語を通してルーマニア語を豊かにするという考えを実際に運用するのに秀でていたのは、ディミトゥリエ•カンテミールであった。このモルドヴァの君主は、ただ借用語のみには頼らずに、ルーマニア語の中で文化的•科学的述語を創り出すために、彼自信が新語を造ることによって、母語の助けを借りるという努力もした。Istoria ieroglifică『象形文字の歴史』の中でディミトゥリエ•カンテミールは Scară a numerelor şi a cuvintelor streine tîlcuitoare「数と外国語で説明される単語の尺度』［全260語］を作成したが、それは意味的にそして時として語源的にラテン的要素とギリシア的要素を説明している。これがルーマニア語における新造語彙集の最初のものとなった［cf. V.クンデア版、ブカレスト、1973年］。新造語の多くは一般に流布せず、文語ルーマニア語に成り得なかったことは言うまでもない：ディミトゥリエ•カンテミールは、当時エリートの度合が過ぎていたのである。彼自身だけで、しかも１冊の本の中で、後世に何世紀もかけて数多くの学者達によって与えられることになる新造語［ルーマニアの大衆語の直接的実態とも言える］を、自らの母語に賦与することは不可能であった。実際、ディミトゥリエ•カンテミールの仕事、大モルドヴァ君主の模範、自らの考え、自らの新造語などは、トランシルバニア学派の学者達によって採用•発展された。

1640〜1780年の間には、ルーマニア語で書かれた書物がたくさんあった。最も重要なのは、宗教的なもの•宗教を題材にした文学的なものであった。トランシルバニアには府主教のシミオン•シュテファンの指導による『新訳

聖書』［ベルグラード---アルバ•ユリア、1648年］が現れた；モルドヴァにおいては、府主教のヴァルラアムが Cartea românească de învăţătură『ルーマニア教科書』［別名 Cazania『説教集』1643年、cf. J.ビック版］を出版し、府主教ドソフテイが自らの翻訳になる Psaltirea în versuri『韻文詩編』［1673年、cf. N.A.ウルスの1974年版］を出した；ワラキアにおいて1688年に、当時の有名な学者達［ラドゥ•グレチェアーヌとシェルバン•グレチェアーヌ兄弟、宮内大臣コンスタンティン•カンタクジーノなど］の広範な協力を得て、Biblia de la Bucureşti『ブカレスト版聖書』［別名を「シェルバン•カンタクジーノ公版聖書」とも言う］が発行された［が、まだ再発行はされていない!］。

ルーマニアの或る地方から別の地方に流布したこれら全ての作品の中で、ヴァルラアムの『説教集』が特に一般に知れ渡った。Istoria cărţii româneşti『ルーマニア書史』［ブカレスト、1968年、69頁］においてミルチア•トメスクは［トランシルバニア地方やバナト地方で発行された］他の複数の説教集はヴァルラアムの『説教集』の抄録を含んでいたと言っている。この『説教集』は、バナトはティミショアラの近くにある村で翻訳され、いろいろな注釈を付けた写本が複数ワラキアやモルドヴァで発見されている［cf.A.ニクレスク Circulaţia interzonală a limbii, culturii româneşti『ルーマニア言語文化の地域間流布』『ルーマニア語の特異性 II』99頁以降に収録］。これらの宗教的作品は通常 "către toată seminţia românească"（全てのルーマニア人に）［cf.ヴァルラアムの『説教集』］向けられていたが、そのことはルーマニアの言語的•文化的統一を証明するものである。一定期間ワラキアの首都であったブカレストにおいて、府主教アンティム•イヴィレアーヌル［コーカサスのイベリア、今日のグルジョア出身］の作品 Didahii『説教集』［cf. G.ストゥレンペル版］をルーマニア語の修辞的文体の基礎を築いたものとして、是非とも挙げなければならない。

勿論、当時のそれらの基本的作品の他に、多くの宗教的作品が現れた。バルグラド［今日のアルバ•ユリア］において、コレシの Cazania II『第2説

教集』[1641年] とカルヴァンの Catehism『教理問答書』[1640年] が Scutul Catehismului『信仰の弁明』という題のもとに再発行された。

僧侶であるヴィンツのヨアン・ゾバが Sicriul de aur『黄金の寺』[セベシュ、1683 年]、Cărare pre scurt『最短の道』[バルグラド、1685年]、Ceasloveţ『聖務日課小書』[バルグラド、1687年]、Molitvenic『祈祷書』[1689年]、などの序文を書いて発行したのも、トランシルバニアにおいてであった。

反宗教改革闘争に加わった府主教ヴァルラアムは Răspunsul împotriva Catehismului calvinesc『カルヴァンの教理問答書に対する返答』[ワラキア、1645年] を書いた。同様に、モルドヴァの府主教ドロフテイは、ルーマニアの多くの教会に、ルーマニア語に翻訳され印刷された次のような宗教書を与えた: Dumnedzăiasca liturghie『神聖なミサ』[ヤシ、1679年]、Psaltirea slavo-română『スラヴ・ルーマニア詩編』[ヤシ、1680年]、Molitvănicul de înţăles『祈祷解説書』[ヤシ、1683年]、Octoihul『賛美歌』[ヤシ、1683年]、Parimiile『箴言』[1683年]、など。このようにして、教会に決定的にルーマニア語が導入されるようになった。

ワラキアにおいて、ルーマニア語に訳された教会関係の書物の印刷は、ほぼ同じ頃に成された。初期に印刷された本は、説教集であったり---Evanghelia învăţătoare『注釈福音書』[ゴヴォラ、1642年]、スラヴ語の原書つきの祈祷書であったり、ルーマニア語の儀式書であった---Pogribania preoţilor『僧侶の埋葬の儀式』[トゥルゴヴィシュテ、1650年]、Mistirio『サクラメント』[トゥルゴヴィシュテ、1651年]、Tîrnosenie『献堂の儀式』[トゥルゴヴィシュテ、1652年]。

1680年以降、印刷活動はワラキアにおいて大いに盛んになった。ブカレスト、スナゴヴ、トゥルゴヴィシュテ、ブザウ、ルムニックなどで印刷された本は、それまでに全ルーマニア公国で印刷された本を、質・量ともに凌いだ。最初に現れたのは、なかんずく Evanghelia『福音書』[1682年] と Biblia de la Bucureşti『ブカレスト版聖書』[1688年] である。以後、府主教アン

ティム•イヴィレアーヌルの指導を得て、ルーマニア語によるミサに必要な殆ど全ての書物は、ワラキアの印刷所で印刷された。Psaltire『詩編』[ブカレスト、1694年]、Evanghelie『福音書』[スナゴヴ、1697年]、Molitvenic『祈祷書』[ムルニク、1706年]、Osmoglasnic『賛美歌集』[ルムニク、1706年] Octoih『賛美歌』[トゥルゴヴィシュテ、1712年]、など。

トランシルバニアにおける印刷活動は、1750年以降に大きな転換期を迎えた。何冊かの本が、今度は特にブラショヴのみならずバルグラドやシビウや他の中心地などで発行された: Floarea adevărului『真実の華』[1750年]、Ceaslovul『日読祈祷書』[1751年]、Catehismul『教義問答書』[1753年]、Strastnicul『報いの書』[1753年]、Liturghierul『祈祷書』[1776年]、Evanghelia『福音書』[1756年]、Octoihul『賛美歌』[1760年]、Penticostarul『聖霊降臨祭』[1768年]。これらは全て前の時代のワラキアの書物を再発行したものである。

最後に、大事なことではあるが、ルムニクの主教であるダマスキン、ケサリエ、フィラレットゥ達は、Mineiele『日読祈祷書』[1776〜1780年] を発行することにより、スラヴ語に対するルーマニア語の勝利を完全なものにした [これらの事実については、アレクサンドゥル•ドゥツの Coordonate ale culturii româneşti în secolul al XVIII『18世紀のルーマニア文化概説』ブカレスト、1968年、特に171-212頁を参考にされたい]。同時代はルーマニア語による歴史書出現の時代でもあった。最も重要な歴史書は、モルドヴァの歴史家達によって書かれた。まずそのスタートを切ったのは、グリゴレ•ウレケの Letopisețul Țării Moldovei, de cînd s-au descălecat țara și de cursul anilor și de viața domnilor『君主達の毎年の歴史と生活を含む、モルドヴァの創立以来の歴史』[1359年までを含む、cf.リヴィウ•オヌ版、1967年] であった。引き続きミロン•コスティンの Letopisețul Țării Moldovei de la Aron Vodă încoace『アロン公から今日に至るまでのモルドヴァの歴史』[1595〜1661年まで、cf.P.P.パナイテスク版、1958年] が現れた。引き続き出版されたのは、ヨン•ネクルチェの Letopisetul Țării Moldovei

de la Dobija Vodă pînă la a doua domnie a lui Constantin Mavrocordat『ダヴィジャ公からコンスタンティン•マヴロコルダトの2回目の治世に至るまでの歴史』[1661〜1743年まで、cf. ヨルグ•ヨルダン版]である。

ワラキアにおいても、シェルバン•カンタクジーノの治世[1678〜1688年]とコンスタンティン•ブルンコヴェアーヌの治世[1688〜1714年]の間に、ラドゥ•グレチェアーヌによって Istoria domniei lui Constantin Basarab Brâncoveanu voievod『特権貴族コンスタンティン•バサラブ•ブルンコヴェアーヌの治世の歴史』が、家老のコンスタンティン•カンタクジーノによって Istoria Ţării Rumâneşti『ワラキアの歴史』が1690年頃に、ラドゥ•ポペスクによって Cronica lui Nicolae Mavrocordat『ニコラエ•マヴロコルダトの歴史』が1714年に、本質的にある程度の文学作品風に、「匿名」の歴史として書かれた。

数冊の法典が翻訳されたり改作されたりして、その内の何冊かが印刷されたのも、同じ時代のことであった。オルテニアの僧ミハイル•モクサが翻訳した Pravila『法典』[ゴヴォラ、1640年]や貴族の秘書であるエウストゥラティエによって起草された Şepte taine『七不思議』[1644年]といった2冊の教会法の他に、2冊の民法が出版された: Carte românească de învăţătură『ルーマニア教科書』[ヤシ、1646年]---Pravila lui Vasile Lupu『特権貴族ヴァシレ•ルプの法典』[ギリシアとイタリアの原典から翻訳して編集したもの]としても知られている---と Îndreptarea legii『法律注解』[トゥルゴヴィシュテ、1652年]---1646年にヤシで印刷されたものを大幅に改訂し、ワラキアの文語に構造上の改良を加えたもの。

また、同じ時代にルーマニア語による最初の文学•芸術作品が生まれた: ミロン•コスティンの哲学的な詩である Viaţa Lumii『世俗の生活』[約1680年]とディミトゥリエ•カンテミールの寓意小説 Istoria ieroglifică『象形文字の歴史』[1705年]。数量的に遥かに多かったのは、しかしながら、通常はスラヴ語やギリシア語の原書から翻訳されたり翻案された大衆書で、

それらはルーマニアの各地で持て囃された。特に知られたのは Alexăndria『アレクサンダー大王の功業』、Floarea darurilor『恩寵の華』[cf. Fiore di virtù『美徳の華』]、Rujdeniţa『キリスト降誕物語』、Eposia『イソップ物語』、Istoria Troadei『トロイの歴史』、Sindipa filozoful『哲学者シンディパ』、Varlaam şi Ioasaf『ヴァルラアムとヨアサフの話』[ウドゥリシュテ・ナストゥレル訳] ---最後の2冊は小説---などである。更に、Ceasornicul domnilor『支配者達の時計』[歴史家アントニオ・デ・ゲバラ・イ・デ・ノロニアによる Relox de Príncipes『君主達の時計』をニコラエ・コスティンが翻訳したもの] や Foletul Novel [ヨアン・ロムヌルがコンスタンティン・ブルンコヴェアーヌのために Foglietti Novelli をイタリア語から翻訳した年鑑] や韻文の歴史書などが数多く出現した。

17世紀後半には、哲学・地理学・医学・天文学・数学などといった、様々なテーマの科学的内容の作品の翻訳や翻案が始まった。ディミトゥリエ・カンテミールが Divanul sau Gîlceava Înţeleptului cu lumea sau Giudeţul sufletului cu trupul『法廷すなわち賢人と俗人との闘争または魂と肉体の争い』[ヤシ、1698年] ---キリスト教的内意の哲学書---を発行する一方で、1700年頃にブラショヴにおいて Geografie『地理学』が発行された。18世紀になると科学的内容の著作物がかなり多くなる。N.A.ウルスはそれらの作品を綿密に調査し、Formarea terminologiei ştiinţifice româneşti『ルーマニア語の科学用語の形成』の中で、科学用語目録を作成した。複数の2カ国語辞典 [特に、ルーマニア語・スラヴ語辞典、スラヴ語・ルーマニア語辞典] も編集され、1757年にはディミトゥリエ・エウスタティエヴィッチによる最初の Gramatica rumânească『ルーマニア語文法』が書かれた。しかし、今日残っているのは手写本のみである。

27. 17•18世紀のルーマニア語の構造

17•18世紀のルーマニア語は、前世紀からの音韻•書記法を有しているという特徴がある: a împle (満たす)、a îmfla (膨張する)、den (〜から)、dentre (〜の間から)、amente (記憶)、iaste (今日では este [=英語 is])、priatan (今日では prieten 友人)、語末の -u: domnu (主人)、fostu (前の) ---以上がヨン•ネクルチェの作品に現れる [cf.A.ロセッティ『ルーマニア語史』[1978年、717−721頁] の、特にヨン•ネクルチェの諸作品における、そして17•18世紀の普通のルーマニア語における語末の -u の発音に関する考察、及びヨルグ•ヨルダンの SCL、V、1954年、337頁以降の考察]。

発音に関するこれらの保守的様相の他に、革新的様相が特にワラキアにおいて現れた: a rădica (今日では a ridica「立てる」の意)、a răsipi (今日では a risipi「散らす」の意)、などはカッコに入れた今日と同じ形態と共存していたし、din, dintre, a umfla, a umbla (行く), boier (貴族), grăieşte [=英語 he speaks]、などの形態がより明確に成ってきた。そして、それらが徐々に文語の規範的な形態に成ってきた。

しかしながら、この時代で注目に値するのは、モルドヴァにさえ現れる、ある種の地方的特徴で、例えばミロン•コスティン、ディミトゥリエ•カンテミール、ヨン•ネクルチェなどの作品に現れる次のような特徴である: 今日アクセントのある二重母音の ea が é である現象---avé (今日では avea [=英語 had])、băté (今日では batea [=英語 he was beating])、mieluşé (雌の子羊 [今日では mieluşea]) ; 今日アクセントのある二重母音の ia が ié である現象---abié (辛うじて [今日では abiá])、spăriét (驚いた [今日では speriat])、tăiét (切られた [今日では tăiat]) ; 語中•語末でアクセントのない母音 e が i である閉音現象---aproapi (近い [今日では aproape])、degite (複数の指 [今日では degete])、vinim (私達が来る [今日では venim]) ; 今日アクセントのある音節の前にある ă が a であ

る現象---macar（せめて［今日では măcar］）；唇を用いる閉鎖音の後での非口蓋化---bat（酔った［今日では beat］）、să margă［今日では să mearga ＝英語 let him go］; s,z,dz,s,j 及び硬子音の後の非口蓋化---sîngur（一人ぼっちの［今日では singur］）、îngrodzînd（ぞっとする［今日では îngrozind］）、sară（夕方［今日では seară］）、mojîci（無骨者［今日では mojici］）、amăţală（めまい［今日では ameţeală］）；更に、f ＋ i の口蓋化現象がある---hiară（野獣［今日では fiară］）、hiarestreu（鋸［今日では fierăstrau］）[『ブカレスト版聖書』の中]、p ＋ i の口蓋化現象---chiapteni（複数の櫛［今日では piepteni］）［ドソフテイの「作品」の中］。

これらのモルドヴァの地方的特徴の他に、他の地方にもそれぞれの特徴があったということを付け加える必要がある：ワラキアではモルドヴァの g, dz は、それぞれ j, z に相当した；mîne（明日［今日では mîine］）、pîne（パン［今日では pîine］）、cîne（犬［今日では cîine］）；-ar, -tor などの語尾の -r は軟音化•口蓋化していた；前置詞 de と pe の代わりに非口蓋化した dă と pă が用いられ、再帰代名詞 se の代わりに非口蓋化した sa が用いられた。このように見てくると、17•18世紀のダキア•ルーマニア語は複数の地方的特徴を反映していたと言える。

同じような保守的傾向は形態の面でも明らかであった：女性名詞複数語尾 -e ---talpe（複数の足の裏［今日では tălpi］）、izbînde（複数の勝利［今日では izbînzi］）；中性名詞複数語尾 -ure ---lucrure（複数の物事［今日では lucruri］）、podure（複数の橋［今日では poduri］）；glasure（複数の声［今日では glasuri］）；無冠詞の男性呼格語尾 -e ---oame!（男よ！［今日では omule!］）；pămînte!（大地よ！［今日では pămîntule!］）；ヨッド化［＝口蓋化］した動詞の活用語尾---auz（私が聞く［今日では aud］）、văz（私が見る［今日では văd］）、spui（私が言う［今日では spun］）。上記のような守旧的形態の他に、次のような革新的形態も幾つか現れた：複数語尾 -uri［年代記作者達の作品に現れる］；唇子音の保たれた動詞の活用形 ---văd, aud；幾つかの動詞の活用形の減少---zişu（彼は言った［今日では

zise]): plînşu（彼は泣いた［今日では plînse]); 過去完了形の保存---vîndurăm（私達は売った［接中辞 -ra を含む形態]); 受動の意味を有する再帰動詞---s-a osîndit（彼は罰せられた［今日では a fost osîndit]）。形態面においても、「地方化」の傾向がある程度見られた: モルドヴァにおける oi face［＝英語 I am going to do]、ワラキアにおける o face［同上］などの、今日通俗的であると考えられている未来形; モルドヴァにおける不変化所有冠詞 a とワラキアにおける可変化所有冠詞 al, a, ai, ale; 「今」を表す副詞 a(c)mu, acu(m) などが、文語として現れた。

更に、前置詞 a, de, la を用いた分析的属格と与格の存在に注目できよう: purtători de trebile domniei［英語に直訳すると carriers of the government's affairs]、au spus a tot norodul［英語に直訳すると they said to all people]、au dzis la şoltuzul［英語に直訳すると they said to the mayor］; 固有名詞の与格•属格における後置［＝前接］冠詞---Mihnii-vodă, Radului-Vodă, Brîncoveanului; 属格と同格に置かれた名詞の格の一致---stare cetăţii Cameniţii［英語に直訳すると the state of the Cameniţa's citadel]。

文章構成法の面では、教会の形式が古風であるのに気付くと同様に、ディミトゥリエ•カンテミールの教養が感じられる文体とドソフテイの作詩法に特別な注意が払われねばならない。又、ディミトゥリエ•カンテミール、ミロン•コスティン、コンスタンティン•カンタクジーノなどといった幾人かの若者達に関しては、ラテン語•ポーランド語•イタリア語などによる中世文学の影響を見逃すことはできないし、更に、グリゴレ•ウレケやヨン•ネクルチェなどに関しては、大衆の口語ルーマニア語の影響を認めざるを得ない。ディミトゥリエ•カンテミールは特に学者臭い文体が特徴で、ラテン語やビザンチン•トルコの影響が著しい。一般に、当時の書物の文章構成的•文体的特徴は、より柔軟でより多様化していたと言える。しかしながら、前世紀の旧式の構文から逃れ切った訳ではなかった。

語彙に関しては、新造語という際立った特徴があった。blagocestie（尊

敬)、cin (階級)、preobrajenie (変容)、iproci (更に)、などといった、文学を通じてのスラヴ語からの借用の他に、トルコ語や現代ギリシア語からの数多くの借用語があった。羊や牛の飼育に関する述語をも含めて、16•17世紀のいろいろな意味分野［家庭•商業•食品•衣類•武器•技能•植物など］におけるスラヴ語彙については、既に18章で議論した。

18世紀の語彙に関しては、ギリシア語の新造語が大量に流入した時代であり、ギリシア文化が以前にも増して大々的にルーマニアに流入した1770年と1820年の間は特別であった。モルドヴァにおいては1711年に、ワラキアにおいては1715年に開始されたことであるが、ルーマニアの君主の位は、オスマン支配を維持し、オスマン帝国に穀物•食糧を提供することが主たる任務とする単なる知事同然の、ファナリオットの支配者［コンスタンティノープルのファナール地区出身のギリシア人］達にオスマン宮廷から与えられた。それにも係わらず、ルーマニアは一定程度の自治を保持していた: ルーマニアはトルコに支配されたのでもなければ、パシャの管理下に入った訳でもなかった。1821年にトゥドール•ヴラディミレスクの反乱の結果として終わるファナリオット支配の間に、オスマン宮廷の意のままに変わった11の家族出身の74人の支配者達に次から次へと、モルドヴァとワラキアの君主の位は移っていった。ファナリオット君主達の中には、賞賛に値する自由な文化的主導権を発揮した者もいた: コンスタンティン•マヴロコルダ、アレクサンドゥル•イプシランティ、グリゴレ•ギガ3世。ファナリオット体制化で最も意義のあるのは、ギリシア文化の導入と、近代ギリシア語を通じてのフランス文化の導入であった。ギリシアの学校が設立され、［コンスタンティン•カラジア、フォティーノなどによってギガ家のことはもとより］ルーマニアについてギリシア語で年代史が記された; スラヴ語による神学教育に代わって、ギリシア語による文学•哲学•科学が教授された。ギリシア語が宮廷の公用語になった。

18世紀のギリシア語からの借用語は、主として精神生活•社会生活に関するもので、文語の真の意味の発展を具体化した。次に、L.ガルディ Les

mots d'origine néogrecque à l'époque des Phanariotes『ファナリオット時代の近代ギリシア語の借用語』[ブダペスト、1939年] によって、近代ギリシア語の借用語を一覧表にしてみよう: 教育の分野---ipochimen (人物)、agramat (無知な); 芸術の分野---melos, musicos (音楽家)、tragodie (悲劇) ; 宗教の分野---pronie (摂理)、arhidiacon (大輔祭); 家庭生活---babă (老婆)、ţaţă (下品な)、zulie (嫉妬) ; 伝達手段---a filonichisi (議論する)、poliloghie (長口舌)、anafora (広報)、plic (封筒) ; 精神生活---anost (退屈な)、a catadicsi (〜して下さる)、nostim (楽しい)、a plictisi (退屈させる)、filotimie (寛大さ)、ifos (傲慢) ; 社会階級---arhondologie (貴族年鑑)、など; 政治•行政---anarhie (無政府)、achivernisi (統治•管理する)、eterie (反乱)、politie (政策)、protimisis (優先権) ; apodoxis (受け取り)、a exoflisi (立派に振る舞う)、icosar (小銭) ; 依頼---bibil (レース)、calţavetă (ガードル)、fiong (結び目)、fundă (蝶ネクタイ)、stambă (更紗)。しかしながら、これらの内の幾つかの単語のみがルーマニア語に保存されているだけである。今日のルーマニア語では、これらは主に口語に命脈を保ち、時として軽蔑的ニュアンスを表すことがある。

近代ギリシア語起源の動詞の接尾辞として、幾つかを挙げることができる: -isi, -arisi, -erisi などはロマンス語起源の動詞に用いられている---a curarisi (治療する)、a asigurarsi (保証する [今日では廃語])、a publicarsi (公にする [今日では廃語]) ; -osi ---a afierosi (費やす)、a se fandosi (気取る)、a se sclifosi (空涙を流す)。トルコ語の要素の大部分が物質生活を反映しているのに対して、近代ギリシア語の要素が精神•社会生活を反映していることを指摘しなければならない。

以上のような近代ギリシア語やトルコ語の要素は、何人かのルーマニア語史の専門家達が暗示するように、「影響」であるとは考えるべきではない: [例えば、スラヴ語のように直接の接触があった後] ルーマニア語の文法構造を変化せしめたり、体系を修正せしめるといった類いの言語的接触の結果

ではない。ルーマニア語と対トルコ•ギリシア語との関係は、ある限られた一定期間内における集中的な語彙の借用のみに限られる。

他方、17•18世紀にトルコ語とギリシア語の侵入を受けたのは、ルーマニア語全体ではなかった。トルコ語の単語同様に、ギリシア語の諸要素は特にワラキアとモルドヴァに広まり、僅かながらトランシルバニアにも広まった［トルコ語はこの地方にまでは達しなかった］。L.ガルディは、17•18世紀のルーマニア語の二重の条件について述べている：モルドヴァとワラキアにおいてギリシア語の新造語を通じて述べられていた事柄は、トランシルバニアにおいては、ラテン語•ハンガリー語•ドイツ語による名前が付けられていた。ルーマニア語に導入された近代ギリシア語の数は、1821年以降実質的に減少した。

今我々が扱っている時代［1740〜1780年］を通じて、地方語彙もまた同様に重要であった。音声と形態の面は別として、17•18世紀のルーマニア語の語彙には明らかな「地方化」という特徴がある。ヴァルラアム、ドソフテイ、ミロン•コスティン、ディミトゥリエ•カンテミールらの文学作品の中には、あまり流通していない、特にトランシルバニアのみに限られた地方語彙が数多くあった：agud［より普通には dud（桑の木）］、arină［今日普通には nisip（砂）］、ciobotă［今日普通には cizmă（ブーツ）］、curechi［今日普通には varză（キャベツ）］、feredeu［今日では地方語、普通には baie（風呂）］、gingină［今日普通には gingie（歯茎）］、glod［今日では地方語、普通には noroi（泥）］、harbuz［今日では地方語、普通には pepene verde（スイカ）］、mamcă［今日普通には doică（乳母）］、mire（花婿）、omăt［今日では地方語、普通には zăpadă（雪）］、pîntece（腹）、a sudui［今日では地方語、普通には a înjura（罵る）］、a şugui［今日では地方語、普通には a glumi（冗談を言う）］、tină［今日では大衆語、一般には noroi（泥）］、ţinterim［今日では cimitir（ブドウ畑）］。これらはモルドヴァの作品に多く見られる。更に、a aldui［今日では binecuvînta（祝福する）］、alenşig［今日では duşmănie（敵意）］、a bintătui［今日では a pedepsi

(罰する)]、de biu [今日では din belşug (豊かに)]、chischineu [今日では basma (ネッカチーフ)]、cloambă [今日では creangă (木の枝)]、hasnă [今日では folos (有益)]、imală [今日では地方語、普通には noroi (泥)]、ludişor [今日では地方語、普通には prostuţ (馬鹿な)]、niştotă [今日では lipsă (欠乏)]、pită [今日では地方語、普通には pîine (パン)]、poroboc [今日では copil (子)]、sucă [今日では地方語、普通には nărav (習慣)]、tăroasă [今日では gravidă 又は大衆的に borţoasă (妊娠中の)]、a zăuita [今日では地方語、普通には a uita (忘れる)]。以上のような単語がもっともっと多く、モルドヴァやトランシルバニアやバナトなどで書かれた作品によって普及していった。

このようにして、17•18世紀のルーマニア語の構造は、ルーマニアの諸地方で話される地方語や東部のギリシア•トルコ文化に対して同等に開放的であった。それは、ルーマニアの言語•文化を豊かに近代的にするのに成果のある過程であった。ミロン•コスティン、ディミトゥリエ•カンテミール、ドソフテイなどを通じて17•18世紀はルーマニア語を芸術的に発展せしめるように努め始めた時代であった。府主教ドソフテイによる Psaltirea în versuri『韻文詩編』とミロン•コスティンの詩は、ルーマニア語による最初の作詩の試みであった。物語•年代記•典拠の疑わしい逸話などの収集を通じて、ヨン•ネクルチェはルーマニア語の韻文作家の始祖の1人であると言えるし、府主教のヴァルラアムと特にアンティム•イヴィレアーヌルはルーマニア語による修辞学の基礎を築いた。1640〜1780年は、ルーマニア語•ルーマニア文化の初期の発展過程における、最後にして最も豊かで価値のある時代であった。

28. トランシルバニア学派

1780〜1840年は、ルーマニア語の歴史において、一般的に西ヨーロッパ、そして特にラテン的•ロマンス的•西ヨーロッパに広く目を向けた時代であった。その時代のルーマニア語の発展の歴史を研究するということは、まず始めに、トランシルバニアにおいて18世紀後半［1770〜1780年］に起こり、ルーマニアの3地方において同時ではあるが異なる様相を呈し続けたある過程の源に帰るということを意味する。そのことを、近代ルーマニア語と近代ルーマニア文化のラテン的•ロマンス的•西ヨーロッパへの統合と呼ぶことができるであろう。S.プシュカリウは再ローマ化の過程であると特徴付けたが、我々は『ルーマニア語の特異性 II』［55〜98頁］において、近代ルーマニア語と近代ルーマニア文化のロマンス的西ヨーロッパ化と呼んだ。以前にもラテン語の語彙やロマンス語の語彙が散発的にそして偶然にルーマニア語に入ってはいたものの、1780〜1840年は終始一貫した政治的•社会的計画性を以て、意識的に文化的•言語的現象に注目し、その結果、ルーマニア人の住むあらゆる地域におけるラテン的•ロマンス的文化の再建が達成された。当然のことであるが、18世紀のワラキアとモルドヴァの西欧文化の行為者と受動者は、社会階級•文化志向がトランシルバニア人とは異なっていた；トランシルバニアは、急激な社会的•国民的•政治的•宗教的激変のせいで、ルーマニアの文化がラテン的•ロマンス的•西ヨーロッパに適応し、当初からルーマニア国民の目を覚まさせ、「啓発」する役割を担っていた。

17•18世紀のワラキアとモルドヴァにおいて、西ヨーロッパ的精神の存在が感じられた。非ラテン的な文化と言語を媒介者として、ルーマニア語がラテン語に由来するという意識が復活した。17世紀のポーランドの文化的環境［エネア•シルヴィオ•ピッコロミーニを間接的に知ったモルドヴァの歴史家達によって樹立された］下でイタリア•ルネッサンスの諸要素と接触したり、

ギリシアの文化と接触したりして、18世紀のワラキアにおいて西ヨーロッパの価値が広まっていった。近代ギリシア文化の教育を受けた知識人達［モルドヴァのニコラエ•ミレスクやワラキアのコンスタンティン•カンタクジーノ］が、西ヨーロッパ特にヴェネツィアとの文化•外交関係の仕事に従事するようになったのは、単なる偶然ではなかった。コンスタンティン•ブルンコヴェアーヌ公自身、イタリアに住むギリシア人であるニコラス•コムネン•パパドプロスと文通し、イズミールに住むヴェネツィアの領事と密接な関係を結び、パドゥアで研究を続けるためにギリシア系のルーマニア人学者を派遣した程である。コンスタンティン•カンタクジーノが、コンスタンティノープルでの滞在を終えた後に、自身の学問を完成させるために滞在したのはパドゥアであった; そして、その息子ラドゥカーヌ•カンタクジーノが留学に派遣されたのはヴェネツィアであった。

近代ギリシア語流入の最高潮にあった18世紀に、ワラキアの歴史家達は近代ギリシア語の助けを借りて、ロマンス語［特にイタリア語］の新語を導入した。L.ガルディ Les mots d'origine néo-grecque en roumain『ルーマニア語における近代ギリシア語の語彙』［114頁以降］が示すように、当時のルーマニア語が物質文明を指示するのにギリシア語•イタリア語の名詞で豊かになったのは、東バルカン文化を通じてであった。

西ヨーロッパとのそのような「仲介者を経ての」接触は、近代的文語ルーマニア語樹立過程の第一歩であった。初期の西ヨーロッパ的［ラテン的かつロマンス的］語彙の諸要素は、個人の教養の程度に従って、また各歴史家によって異なるとはいうものの、基本的にはビザンティウムの型の上に接木されたものであった。ポーランド•トルコ•ロシア•近代ギリシアなどの東方文化を通じての西ヨーロッパとの接触の時代の特徴は、「対立」に近い程の「差異」であった: 一方において、ワラキアの歴史家達やモルドヴァのヨン•ネクルチェの通俗化しつつあった母語があるかと思うと、他方において［N.カルトジャンが示唆するように、また B.カザクがラテン的影響と言っているように］ミロン•コスティンの古典的厳格主義や、中世の修辞学をくまな

く修め、外国の複数の文化の中心地で培ったディミトゥリエ•カンテミールの芸術的技巧がある。それらの作家達の中で、コンスタンティン•カンタクジーノはユニークな存在である:「ラテン的モデルの影響」は、コンスタンティノープルやパドゥアで修めた学問と一致して、ビザンティウムの文体的捻れによって釣り合いが取れていた。

これらのことは全て、当時の歴史文学ならびに偉大な学者達［ワラキアのコンスタンティン•カンタクジーノ、モルドヴァのディミトゥリエ•カンテミール公: 各人がそれぞれ東方の介入を経て、西ヨーロッパのラテン的•ロマンス的価値を発見した］の作品が、当時ビザンティウムのモデルを模倣して成り立っていたルーマニア語の中に数多くの西ヨーロッパの要素が流入するのに重要な水路を形成したことを示している。そのような訳で、我々が文語ルーマニア語の開始を西ヨーロッパのお陰だと思っているのも、実は歴史書のお陰だと言える。

中央ヨーロッパの文化およびラテン的世界の文化との直接接触は18世紀中葉までさかのぼるべきであり、その場所はトランシルバニアに求められるべきである。西ヨーロッパ精神は、トランシルバニア学派の出現に先行するいろいろな政治的•宗教的•文化的出来事にその印を残している。O.デンスシアーヌは Literatura română modernă『近代ルーマニア文学』［ブカレスト、1943年］の中で、17•18世紀にトランシルバニアにおいてオーストリーによって奨励されたローマ•カトリックとの宗教的統一の役割を指摘している。そのお陰でルーマニア人は数多くの文化的利益を得て、より高い教育を受けるという恩恵に浴すことができた。D.ポポヴィッチが La littérature roumaine à l'époque des lumières『啓蒙時代のルーマニア文学』［シビウ、1945年］において示したように、ローマ•カトリックとの統一のお陰でルーマニアの社会的力が主張されるようになり、またその宗教的行為に対する基礎がしっかりした国家的意義•意図を与えることになった。ローマとの統一は、実際に大問題の幕開けとなった。それは、ルーマニア最大の国民的要求に基づくもので、政治的行為の道具であると同時に武器でもあった。ルーマ

ニア人の文化的ルネッサンスにおいて指導的役割を果したのは主教のイノチェンツィウ・ミク・クライン（1692〜1768年）であった。彼は1738年にオーストリー皇帝カール6世から、ブラージュにおいて修道院と神学校を設立する許可を得た。このようにしてブラージュの神学校が設立されると、その資金を元にして1743年以降に若いルーマニア人達がローマの De propaganda fide（(布教）神学校）に派遣された。

最初は修道院で、次に1734年に "20 de tineri să se ţie şi să înveţe latinesţe"（20人の青年が確保されてラテン語が学ばれる）神学校となったブラージュのドミニウムといったトランシルバニアにおけるラテン語学校の設立［1738年］に伴って、主教のイノチェンツィウ・クラインの直接の指導の下に、まず最初に、トランシルバニアに Abstand（差異）の概念、他国に対するルーマニア人の特別な個性、そして自らの国民的特異性の認識が芽生えてきた。それらの "odiosae et ignominia plenae nomenclationes tolerati, admissi inter Status, non reputate, eaque huiusce modi, quae tanquam externae maculae sine iure et auctoritate nationi valachicae affixae fuerunt"（憎らしく、名前もなく、何ら反省することなく、同様に何の権利もないのに国の中に居住を許され、不当な汚点としてワラキアにしがみついていた人達）［『トランシルバニアのワラキア人達の嘆願書』51頁］を排除するために、ルーマニア語がラテン語に由来し、ラテン文化が強調されるという巨大な活動がトランシルバニアにおいて発生した。

サムエル・ミクは Scurtă cunoştinţă a istorie românilor『ルーマニア人の歴史概説』［クルージュのアカデミー図書館蔵］の中でルーマニア人に向かって次のように雄弁に物語っている："O cuvîntătorul rumâne, priimeşte această puţintică, dar cu multă osteneală şi priveghe adunată istorie a neamului tău şi, au tu te nevoieşte, au, de nu poţi tu, îndeamnă şi ajută pre alţii care pot, ca mai pre lung şi mai pre larg, lucrurile rumâneşti să le scrie şi la tot neamul cunoscute să le facă...ca cei buni să se laude întru neamurile neamurilor, iar cei răi şi

cei nevrednici să se ruşineze şi să înceapă a lepăda simţirea cea dobitocească şi a fi oameni rumâni, adecă desăvîrşiţi, că mult iaste a fi născut rumân.”（おお、ルーマニア語の話者よ、小さいながらも丹精込めて根気強く集めし汝の国の歴史を受け入れて欲しいものだ。そして、ルーマニアの真実に関してもっともっと広くかつ長く書くように、汝自身が努力するように、そして汝自身が不可能な場合は、他の人達ができるように手助けして欲しいものだ。そして願わくは、善が全人類の中で良き地位を占め、悪と卑しむべきことが恥じられ、獣のような習慣が放棄され、完全な人間・真のルーマニア人に成って欲しいものである。ルーマニア人として生まれたことは、何と素晴らしいことか。）［F.フガリウ編『トランシルバニア学派 I』ブカレスト、1970年］。

後日ペトゥル・マヨール［1754〜1821年］は、”văzînd românii din ce viţă strălucită sînt prăsiţi, toţi să ne îndemne strămoşilor întru omenie şi în bună cuviinţă a le urma”（ルーマニア人が自ら高貴な幹に由来することが分かったのであるから、彼らを勇気づけ、人間性と品位に関して祖先の例に従わせるべきである）と主張した。［Istoria pentru începutul românilor în Dacia『ダキアにおけるルーマニア人の初期の歴史』1812年、cf.フガリウ編『トランシルバニア学派 II』190頁］。このようにして、トランシルバニアにおけるルーマニア人社会の歴史性が築かれた。

トランシルバニアに住むルーマニア人の自治・国の主体性・歴史的故郷がルーマニアの国民的文化の形成の必要性につながった。ルーマニアの文化的・社会的解放のために、数多くの偉大な人物が奮闘した：イノチェンツィウ・ミク・クライン、サムエル・ミク（1745〜1816年）、ギョルゲ・シンカイ（1753〜1821年）、ペトゥル・マヨール（1754〜1821年）、ヨアン・ブダイ・デレアーヌ（1870〜1830年）。そして、「国民の福祉」・「ルーマニア人の利益」・「意識改革」・「啓蒙」のために働いた知識人や科学者は多い：パウル・ヨルゴヴィッチ（1764年〜1808年）、ラドゥ・テンペア（18世紀末〜19世紀初頭）、I.モルナール・ピウアリウ（1741又は1749〜1815年）、C.ディアコノヴィッチ・ロガ（1770〜

1850年)、V.コロシ、A.テオドリ、I.テオドゥロヴィッチ、I.コルネリなど。彼らは、ルーマニア文化史とルーマニア言語学史が Şcoala Ardeleană（トランシルバニア学派）と呼び、たまに Şcoala latinistă（ラテン学派）と呼ぶ学派を構成した。

トランシルバニア学派に属する学者達の取った最も重要な行動は、ルーマニア語の標準語化•統一•洗練に関する努力であった。教養語に対する基準観念が生まれたのは、彼らの作品からであった。ギョルゲ•シンカイが18世紀の啓発的概念を用いた最初の人であったように思える: "în care muncă a mea m-am sîrguit cît am putut ca de la cuvintele şi vorbele cele româneşti nicicum să nu mă abat şi depărtez, ci să le aleg...nu pentru altă ceva fără numai ca prin *normă*...să se îndrepte şi să sporească limba noastră, precum şi a altor neamuri."(私の作品の中において私はできるかぎり、ルーマニア語から少しでも外れたり遠ざかったりしないように、「規範」を通して、他の国民と同じように言葉を矯正し、発展せしめるという1つの目的のために、言句を選ぶように努めてきた）[ギョルゲ•シンカイ Catehismul cel mare『大教義問答』1783年]。

ヨン•ブダイ•デレアーヌは Descălul românesc pentru temeiurile gramaticii româneşti「ルーマニア語文法の基礎のためのルーマニア語案内」において regulă [gramaticească]（[文法的] 規範）について述べている。

言語•文法•辞書の問題が主要な問題に成った。サムエル•ミク [•クライン•デ•サドゥ] とギョルゲ•シンカイは、1780年にウイーンで Elementa linguae daco-romanae sive valachicae「ダキア•ルーマニア語すなわちワラキア語の基本」を印刷した; ヨン•ブダイ•デレアーヌは Descălul...『...案内』を書いたが、それは1812年にラテン語の作品 Fundamenta grammaticae linguae romanicae seu ita valachicae『ロマンス語すなわちワラキア語の基本文法』と成った; ラドゥ•テンペアは Gramatica românească『ルーマニア語文法』を1798年に発行した。コンスタンティン•

ディアコノヴィッチ•ロガも Gramatica românească『ルーマニア語文法』をブダで1822年に発行し、パウル•ヨルゴヴィッチは Observaţii de limba rumânească『ルーマニア語の観察』を世に出した。2カ国語の文法書も複数出版された---例えば、サムエル•ミクとギョルゲ•シンカイによる Deutsch-walachische Sprachlehre『ドイツ語•ルーマニア語文法』。これらの本は全て、ルーマニア語を記述しようとする試み、ルーマニア語の構造•機能のメカニズムを明確にする試み、そして当然、統一的規準を勧めるという試みであった。

ルーマニア人の国民的かつ社会•政治的主張に対する闘争において同じ文化的•言語的重要性が増加した。ルーマニア語の表記にラテン•アルファベットを導入するに当たってサムエル•ミクは1801年の Acatist『祈祷書』の Către cetitoriu（読者へ）［の序文］の中で次のように述べている: "am judecat că noi, cei ce sîntem români să punem într-această cărticică literele noastre cele vechi şi părinteşti. Şi să socotim că fieştecărui adevărat român înţelept şi cu minte bună, mai plăcea-i-va cele părinteşti de cîte cele streine, care pre neamul nostru la mare barbarie l-au adus."（我々ルーマニア人は我々のこの小冊子の中において、古からの、祖先から受け継いだ文字を使用するべきであると考えた; そして又、賢明にして健全な精神の持主である真にルーマニア人である各々は、我が国民を非常に粗野にせしめた外国の事物よりも、我らが祖先に由来するものを遥かに享受するであろう）［cf.『トランシルバニア学派 I』フガリウ編、273頁］。

ルーマニア語の表記にラテン•アルファベットを用いるというサムエル•ミクの努力は Carte de rogacioni pentru evlavia homului chrestin『キリスト教信仰の祈祷書』［ウイーン、1779年］の中に見られ、その巻末に著者の用いたラテン•アルファベットの表記と、ラテン•アルファベットとスラヴ文字との対応関係の記述がある。勿論、サムエル•ミクの提案した綴り方は語源的であり、特にルーマニア語的な現象を全てラテン•アルファベットに

還元する試みがなされている：［ă］は a か e で表されている---caldare［今日では căldare（バケツ）］、septemana［今日では săptămînă（週）］、［î］は語頭では î で、語中では e か a で、その他の場合は â で表されている---fen［今日では fîn（干し草）］、camp［今日では cîmp（野原）］、târg［今日では tîrg（市場）］；［u］は o で表されている---rogacione［今日では rugăciune（祈り）］；［che］と［ghe］は cl gl で表されている---glacia［今日では gheaţă（氷）］、clave［今日では cheie（鍵）］；quare［英語の who, which に相当する］や quand［今日では cînd、英語の when に相当する］において qu を用いている；［ea］と［ia］は e で表されている---epa［今日では iapă（雌馬）］、herba［今日では iarbă（草）］；［şt］＋［e,i］は sc か st と書かれている---crescere［今日では creştere（成長）］、esti［今日では eşti、英語の you are（単数）に相当する］；［mn］は gn と書かれている---pugn［今日では pumn（拳）］、miel（子羊）は gnell と書かれている。いかなる音声的価値も有さない語源的文字も h 見られる---hom［今日では om（男）］、や horă［今日では oră（時間）］など。

トランシルバニア学派の他の数人の代表者達も、キリル文字をラテン・アルファベットに置き代えるという考えを擁護したが、そのようなイニシアティヴは当時の社会的・政治的・文化的計画に一致するものであった。G.シンカイは Elementa linguae dacoromanae sive valachicae『ダキア・ルーマニア語すなわちワラキア語の基本』の第2版［1805年にブダで印刷されたもの、共著者のサムエル・ミクの名前は現れていない］の中で、表音的綴りを重視した改革を幾つか示している：［î］を表記するのに â, ê, î を用いた；今日と同じように ea, ia という表記も見られる；cl gl という表記を止めて今日と同じ che ghe という表記をしている；語頭の無音の h を廃止した、など。また、ブダイ・デレアーヌとペトゥル・マヨールは Orthographia romana sive latino-valachicae una cum clavi『ローマ風すなわちラテン・ワラキア風の正書法』［ブダ、1819年］で、そして、コンスタンティン・ディアコノヴィッチ・ロガは Orthographia sau dreapta scrisoare『正書法す

なわち正しい書き方』［ブダ、1818年］で、ラテン・アルファベットを用いた幾分語源的な正書法を行った。19世紀初頭のトランシルバニアにおいて、スラヴ文字を廃止してラテン・アルファベットに代えるという考えが生まれ、それが徐々にルーマニア人学者達の意識の中に広まっていった。

29. ワラキアにおけるルーマニア語とルーマニア文化のロマンス的西欧化

ワラキアとモルドヴァにおいてロマンス的西欧化志向が生じたのは、時期は同じではあるが、全く異なった様相においてであった。上記の文化的地域におけるまず第1の特徴は、ヨーロッパとの文化的接触の意識の発達の遅れである。コンスタンティン・ブルンコヴェアーヌに奨励されて Fiore di virtù『美徳の華』が Floarea darurilor『恩寵の華』［スナゴヴ、1770年］という題で訳され、Fiori di filosofi e d'altri savi『哲学者と賢人達の華』が Pilde filozoficești『哲学的寓話』［トゥルゴヴィシュテ、1713年］という題で訳された---これは理解力のある「一般的な」大衆がいたことを証明するものである---が、ウイーンでラテン語とイタリア語を学んだマテイ・クレツレスクのような貴族達がいて、子弟をして同じく上記の言語を学ばせる一方で、ヨーロッパを模範にする必要性が18世紀後半になってやっと主張された; そのように主張したのはルムニックの主教達を初めとする文化的・宗教的中心地内外に住む高僧・数人の啓蒙的貴族達・商人達・僧籍にない学者達であった。

ルムニックの印刷所は18世紀を通じて活動し、トランシルバニアの文化の中心地であるシビウと密接に係わって、カトリックの影響を排除するために、全トランシルバニアにルーマニア語で書かれた本を普及させる役割を担っていた。早くも18世紀初頭［1719年］にダマスキンはクライオヴァにラテン語学校を設立する意欲を持っていた。そして、宮廷裁判所に対して、ルムニックで印刷されたルーマニア語の書物をトランシルバニア地方とバナト地方で配布する許可を求めた［A.ドゥッ、上掲書、1968年、I、125頁］。

18世紀に向けて、神聖ローマ帝国皇帝ヨーゼフ1世の寛大な宗教的無関心という背景に反して、東方帰一教徒のルーマニア人に影響を与えていた文化

的活力はオーソドックスのルーマニア人に伝播し、その結果、「南トランシルバニアにおける非東方帰一教徒のルーマニア人に対する真の啓蒙」を生むことになった［N.ヨルガ］。各々の公国のルーマニア人が商業関係を樹立していた南トランシルバニア地方の境界近くにある市や町から始まって、早くも16•17世紀から、言語的•国家的共通性の下に、東方帰一教徒と非東方帰一教徒との間の国家的•社会的信条の了解が成り立っていた。ブダやブラショヴやシビウの文化的中心地や印刷所はワラキアやモルドヴァに門戸を開放した。東方帰一教会やウイーンやローマの神学校で訓練を受けた、カルパチア山脈の両側に住む学者達や東方正教会の神学校で勉強をした学僧達が、そのような運動に加わった：ローマ•カトリックに参加したトランシルバニア人達は「ラテン文化的正教会の諸形式」を受け入れた人達との目的が合致した［A.ヤシミルスキー］。

1789年に、キエフの学苑を自由科の学位を得て卒業したディミトゥリエ•エウスタティエヴィッチは、トランシルバニアの「非東方帰一教会神学校校長」に任命された。東方帰一教会神学校校長は、ローマの「布教神学校」で学び枢機卿ステファノ•ボルジアの保護を受けたギョルゲ•シンカイであった。ルーマニア公国の主教達はトランシルバニアの商人•印刷業者•学者達との関係を保っていた。ケサリエの Mineie『日読祈祷書』はブダで1805年にリプリントされた；全く同じように、主教であるホティンのアンフィロヒエによって Ce obște gheografie『一般地理学』［1795年］という題で訳されていたものが再び翻訳されたり、あるいは、クラウデ•ブフィエルの原書の翻案がブダにおいて1814年にリプリントされたりした。ワラキアとモルドヴァからトランシルバニアへのルーマニア語書籍の流通、反対方向への流通の余波は実に1800年以降確実なものとなった。そのようにして、G.コンスタンティン•ロジアが Măiestria ghiovăsirii românești『ルーマニア系統の巨匠』［ブダ、1809年］の中で言うように、"de ghintă românească dincoace și dincolo de Dunăre"（ドナウ河の両岸のルーマニア系の）国民的文化が18世紀後半になって、国家的•宗教的境界を越えて、姿を現し始めた。

トランシルバニアにおける同様の現象と異なって、ヨーロッパのロマンス世界への諸公国の接近は、正教の影響を通じて行われた: "Aflu linia neamului din vechi trăgîndu-să din slăvit neam al romanilor---valahi numindu-să după limba slovenească---a căror slavă au strălucit împreună unde şi-au întins soarele razele"（私には、古からのルーマニア人の系統が、スラヴ語でワラキア人と呼ばれ、ローマの栄光ある国民に由来することが、分かる）とルムニックの主教ケサリエが書いている。他方、1787年に府主教のグリゴレ•ルムチャーヌは "cearcă în adînc tainele firii şi să poartă cu pohfală preste aflarea fiinţei celor de sub soare"（自然界の諸々の不思議なことを探り、太陽の下に生きとし生けるものの本質の発見に意気揚々と近づく）"minţile cele mai iuţi ale filozofilor celor din academiile Europei"（ヨーロッパの学界における哲学者達のより鋭い精神）を賞賛している。

博識と華麗では幾分劣るが、ラテンの系統であるという考えが、諸公国文化によっても同様に公式化された。主教達は "împodobiţi cu învăţătură"（教養で身を飾って）いたし、時としてロシア語や近代ギリシア語同様にラテン語•イタリア語•フランス語などをも知る人達であった。ケサリエは Mercure littéraire et politique『文学と政治の使者』を愛読し、フランス語で dictionnaire encyclopédique『百科事典』と呼ばれる本を取り寄せるように言ったり［N.ヨルガ］、更に、ディドゥロの Encyclopédie『百科全書』を訳した最初のルーマニア人であろう。モルドヴァでは府主教のレオン•ゲウカが、「主教としてフランス語を学び、巨額の費用をかけて立派な図書を集め、種々の本をルーマニア語に翻訳せしめた』［N.ヨルガ］。ヴァルトロメイ•マザレアーヌはロシア語からの翻訳書を出版したが、アンフィロヒエ•ホティニウルはイタリアに旅行し、ブフィエールの地理の手引き Geografia universale『世界地理』［ローマ、1775年］を持ち帰り、自らルーマニア語に訳して、De obşte gheografie『一般地理学』［ヤシ、1795年］という題で出版した。

ワラキアとモルドヴァにおけるロマンス的西欧化の推進者達は、自らの地位と正教を極端に用心深く大事にした: 彼らは、東方のギリシアやロシアの教会を頼みとする東方の宗教的訓練に左右されたり［彼らは、ルムニック、ヤシ、ネアムツ、ホティンなどの主教であった］、ウグロ•ヴラヒアのギリシア府主教と自らの関係、すなわち、太守や特権貴族といったルーマニアの支配者階級とギリシアの利害とを結び付けている事柄によって左右されていた。

グリゴレ•ルムニチアーヌがブカレストを誉め称えて府主教に言った "Ţara Românească se vecineşte şi cu neamuri care se laudă şi se răsfaţă în ştiinţe filosoficeşti"（ワラキアは哲学的主題を誇りとし、それに耽る国々と国境を接する）を "aleasă parte a Europei, cu aer sănătos şi subţire"（健全で妙なる空気のヨーロッパの選ばれた地）と全く同じように理解しなければならない［cf. ドゥツ Coordonate aleculturii româneşti în secolul al XVIII-lea『18世紀ルーマニア文化の指針』192頁］。ワラキアとモルドヴァの主教達、並びにモルドヴァの主教達と特権貴族達の西欧志向はゆっくりと、注意深く、進行した: 正教の擁護者達に支持された古い東方文化という抵抗は相当に強く、西欧化に向けて取られたいかなる手段も国家権力に対抗するものとして解釈される恐れがあった。トランシルバニアにおける宗教改革と異なって、国家権力の監督の下で行われた西欧化と近代化の過程は、本質的に控え目なものであった。他方、この革新的な "duh sfranţozesc"（フランス的エスプリ）は、18世紀のモルドヴァ•ワラキア社会の「上層部」によって導入されていたのである！［トルコに対して文化的に優位にあることによってギリシアの地位を高めるという］高貴にして秘密の使命を帯びたファナリオットの「太守達」が既に近代西欧文化の諸要素を齎してあった。パウル•コルネアが強調したように---Originile romantismului românesc『ルーマニアのロマンティシズムの起源』［ブカレスト、1972年、53頁］---非常に厳格な階級制度を伴った誇り高い貴族の代表者達である、オスマン•トルコ政府のそれらの使者達は、自ら革新的精神を具体的に表現せずに、むしろ新しい事柄を齎すことに好都合な雰囲気を作

り上げた。彼らは、ルーマニアの精神がヨーロッパに溶け込む過程に拍車を掛け、ルーマニアの貴族達にヨーロッパの教養ある上流階級との親善の模範を提供した。それ故に、物事は全て「特権貴族」という排他的世界、ギリシア人であれ社会の上層部に限られていた: "Il est absolument certain que la civilisation néo-grecque des provences roumaines, n'ayant aucun contact avec les larges masses du peuple, a toujours gardé son caractère aristocratique"（ルーマニアの諸地方における近代ギリシア文明は、一般大衆との接触が全くないので、貴族的性格を常に保っていた）［L.ガルディ、上掲書、53頁］。

ルーマニアの特権貴族階級の模倣の的であるファナリオット達がギリシア型の「高級な」文化を象徴していたこのような文化的状況下の19世紀初頭に、アヴリグのギョルゲ•ラザール［ウイーンで神学と数学を学んだ］とギョルゲ•アサキ［リヴォフ、ウイーン、ローマで哲学と工学を学んだ］の２人が共にルーマニアの国民的文化のために到来した。

上昇気運にあった社会階層に特別な意味を持つトランシルバニアとその文化は、諸公国のロマンス的西欧志向の中にその存在が感じられた。ルーマニアの教育を促進した特権貴族［例えば、コンスタンティン•ラドヴィッチ•ゴレスク］や上で述べた学者達［ラザールとアサキ］の両者はカルパチア山脈を越える文化的運動に緊密に関連していた。1820年にギョルゲ•アサキがヤシの近くのソコラに神学校を再開したが、その時彼はこのモルドヴァの首都にヴァシレ•ファビアン•ボブ、ヴァシレ•ポップ、ヨン•コステアなどのトランシルバニアの知識人達を教授として呼んだ。

エリートの学校と対照的に、実用的な接近方法がルーマニア人の教育に取って置かれた。ブカレストの「スフントゥ•サヴァ」学校では、ギョルゲ•ラザールが "să paradosească aritmetica şi geografia istoricească pe harte şi apoi geometria şi geometria practică"（算数と地図帳を用いての歴史地理、そして、幾何学と応用幾何学を教えるように）要請された［cf.パウル•コルネア、上掲書、77-72頁］。ギョルゲ•アサケはヤシの「三尖塔」修道院

の神学校において "cu aplicaţie practică de gheodezie şi arhitectură"（測地学と建築学の応用学）の教師であった。東方封建制度的精神で行動しつつも、西欧志向もする特権貴族達の勧める近代化の過程で行政をする行政官達を訓練するのが彼の使命であった。ファナリオットの支配者達にこのように理解され、受け入れられて、ルーマニアの教育は低い社会層の人達に向けられた。しかしながら、ルーマニアの種々の学校は志望目標や社会的•文化的枠組を直ぐに乗り越えてしまった。「ギョルゲ•ラザール」学校は、特に中流階級の子弟を集め、国内史の授業を熱心に行い、理論的な教育を熱心に展開した；ギョルゲ•アサキの講義を聞きたがる貴族の子弟が出席した。2つの異なる先駆的計画の運命が同じ方向に進まなかった理由がそこにある：ワラキアにおいては、ルーマニアの教育は啓蒙的特権貴族や上流階級の人々ならびに商人達に激励され保証されて発展し、広範な社会的支持を得、［その結果、1818年にギリシア系の学校が廃止されたが、］ヤシの学校はギリシア志向の保守的特権貴族達によって挫折してしまった。

その結果として、ワラキアでは近代ヨーロッパ文化が社会の下層階級にまで深く深く広まって行ったのに対して、モルドヴァにおいては、1820年にヴァシレ•ルプの学校である Şcoala Vasiliană がギョルゲ•アサキの指導の下に開校され、それに続いて次々と学校が再開される19世紀の20•30年代頃までは西欧の近代文化は完全に貴族達の間に限られていた。

以上のような訳で、19世紀は、複雑ではあるが統一的な社会的•文化的構造内で、西欧化の過程を発展せしめた時代であると言える：トランシルバニアにおいて文化は、数世紀にわたって闇の中に葬られていた多数の農奴達を啓発する目的であったので、一般大衆にとって近付き易いものであった；ワラキアの文化は大衆層を広げるものであったが、モルドヴァの文化は既に、ギリシア•ルーマニア貴族の制限された限界を脱し始めていた。

30. 18•19世紀におけるトランシルバニアと科学的文化

教養語に関して、トランシルバニアは時として、哲学や政治に関する述語が近代ギリシア語から借用されているワラキアやモルドヴァとは異なる。N.A.ウルスが Formarea terminologiei ştiinţifice româneşti『ルーマニア科学用語の形成』[ブカレスト、1962年] で言うように、希にそして散発的に、西欧文化を奨励した人達の言葉の中に新語が数多く入り込んだのはただ科学用語の中においてであった。そのような科学用語はイタリア語から直接借用されたり、近代ギリシア語のイタリア語法から借用されたものである。例えば、アンフィロヒエ•ホティニウルの Gramatica de la învăţătura fizicii『物理学を学ぶ文法』[1796年] に現れる地理学と自然科学の述語を見てみよう: arcipelag [今日では arhipelag (多島海)]、orizonte [今日では orizont (地平線•水平線)]、ovest [今日では est (東)]、satelite [今日では satelit (衛星)]、など。同じ著者による De obşte gheografie『一般地理学』[1795年] の中には、apéndolo [今日では pendul (振子)]、ecfatore [今日では ecuator (赤道)]、emisfero [今日では emisferă (半球)]、などが現れている。数学の述語に関しては、モルドヴァの詩人マテイ•ミッル [約1801年に死亡] の手書き本の中に現れるギリシア語の述語と、Elemente aritmetice arătate fireşti『自然に示された算数の要素』の中でアンフィロヒエ•ホティニウルが用いているイタリア語の単語と比較してみると面白い [cf.N.A.ウルス、上掲書、97-98頁]。そして最後に、エナキッツァ•ヴァカレスクの Observaţii sau băgări de seamă『観察または覚書』の中にイタリア語の影響を受けた文法用語が見られる: grammatica [今日では gramatică (文法)]、propoziţione [今日では propoziţie (文•節)]、nome [今日では nume (名詞)]、pronome [今日では pronume (代名詞)]、など。

ルーマニアの諸公国では、文語は近代ギリシア文化を学んだ数人を通じて、あるいはイタリアとの直接の接触の結果、西欧を志向していた。同じく、教養語の西欧化が科学のある限られた分野、しかもたった1つの分野において生じたことも事実である。トランシルバニアで用いられた強度にラテン語化された数学用語と、同時にアンフィロヒエ•ホティニウルの書物に現れる、モルドヴァで一般化したイタリア語法と比較してみることは、意味のあることである。全く同じように、上記の期間［1806〜1810年まで］は、物理学•化学•医学などの述語には、西欧ロマンス語的要素が多く現れた。しかしながら、同時に、近代ギリシア語の要素は、ルーマニアの教養語における多くの意味分野を広めた。近代ギリシア語の要素は、国の政治•行政機構に関する概念: politie（国•市）［今日では廃語］、politicesc［今日では politic（政治的な）］、anarhie（無政府）、eterie（反乱）、anaforá（公式の報告）、catagrafie（公式の記録）［今日では「リスト」の意］；法制に関する概念---clironom（相続人）［今日では廃語］、protimisis（優先）［今日では廃語］、など; 知的生活に関する概念---a paradosi（教える）［今日では廃語］、a silabisi（音節に分ける）、ritoricesc［今日では retoric（修辞的）］、ipochimen（人）［今日では冗談で］；芸術に関する概念---musicós（楽団長）［今日では廃語］、melos, psaltichie（声を出して歌う宗教音楽）［今日では廃語］；商業•工業、そして当然のことながら、宗教生活に関する概念などを表していた。近代ギリシア語の語彙的影響が最高になったのは1780〜1821年の間であるが、その間にも特に影響を与えたのは、社会の上層階級•君主の宮廷•貴族の学校•高僧•商業界などにおいてであった。

容易に分かるように、トランシルバニアは哲学を含む文化のいろいろな分野において、理論的に指示され実際に達成された「一般的」行為の一部分として、新しい単語と概念を導入した: サムエル•ミクは natură（自然）、idee（概念）、experiență（実験）、soțietate（社会）、などの単語を用いた［cf.G. イヴァネスク、Formarea terminologiei filozofice românești moderne『近代ルーマニアの哲学用語の形成』Contribuții la istoria limbii române

literare în secolul al XIX-lea I『19世紀の文語ルーマニア語史試論 I』ブカレスト、1956年に収録、172頁]。他方、ワラキアとモルドヴァにおいては、上記のような改革は、イタリアとより緊密な関係にあったイエナキッツァ・ヴァカレスクやアンフィロヒエ・ホティニウルといった知識人の個人的なイニシアティヴによって、化学用語に限られていた。

それ故に、モルドヴァとワラキアの西欧への開眼は、ギリシア文化の範囲内で、しかもギリシア文化を仲介して行われた; 初期の段階では数人の著名な人達を介して、イタリア語とイタリア文化に接触した。しかし、ワラキアとモルドヴァの当時の他の知識人達は、近代的・革新的考えを誇りながらも、東方の伝統に従ったままであった。それ故に、同時性と統一性の範囲内で、ルーマニアの全ての地方で、平衡的ではあるが多様な、西欧との親善化が進んだ: トランシルバニアにおいては、西欧との親善が確実に理論から大衆的行動に進んでいたのに対して、ワラキアとモルドヴァにおいてはまだ個人がイニシアティヴを取るという、初期の段階でしかなかった。

31. 1804～1814年のブダの印刷所における活躍

1805年頃、ルーマニア文化の中への西欧のロマンス的要素の浸透は「強化された」。我々の考えでは、そのような文化的•言語的現象は、今日まで十分に強調されたことのない重要な事実と結び付いている: すなわちそれは、ブダ大学の印刷所におけるルーマニア語の書籍の "tenzor si revizor"（検閲官•校訂者）という地位へのサムエル•ミクとギョルゲ•シンカイ並びにペトゥル•マヨールといったルーマニア人の任命である。1804年には、サムエル•ミクと共にギョルゲ•シンカイが「帝国印刷局」の diortositoriu（校訂者）に任命された［cf.N.ヨルガ Istoria literaturii române în secolul XVIII--1688～1821 II『18世紀---1688～1821年のルーマニア文学史 II』ブカレスト、1969年版、174頁］; 1806年にサムエル•ミクが死去すると、シンカイが検閲官の任務も帯びた。ブダの印刷局には、ワラキアにおける正教の支持者であり、1805年以来 Mineie『日読祈祷書』の印刷を企画していたヨアン•モルナールといった人物がいた事実も考慮しなければならない［cf.N.ヨルガ、上掲書、176頁］。1809年ペトゥル•マヨールがブダに来てギョルゲ•シンカイの後継者となり、非常に実り豊かなイニシアティヴを取った。

その頃、白熱した討論•論争をしている間にも、東方帰一教会のルーマニア人信徒と "schismatic"（分離派教徒）［すなわち、オーソドックスの信者］との間のいろいろな矛盾や競争がなかった訳ではないが、ブダ大学の親ルーマニア文化活動はかつて無い程に繁栄を見た。サムエル•ミクとギョルゲ•シンカイの次に挙げるような書物が印刷されたのは、ブダ大学においてであった: Istoria, lucrurile şi întîmplările românilor pe scurt『ルーマニア人の行為と事件の小史』［1806年］、Elementa linguae daco-romanae『ダキア•ルーマニア語の基本』［1806年にシンカイによって再発行された］、Hronica românilor şi a mai multor neamuri『ルーマニア人と数民族の

歴史』[1808年、cf.M.トメスク Istoria cărţii româneşti『ルーマニア書籍史』ブカレスト、1968年、110-111 頁]。

1806年は、ブダで発行された一連のルーマニア語による暦にとって、最初の記念するべき年である。ギョルゲ•シンカイが1807〜1808年にその仕事を引き受け、更に後にペトゥル•マヨールが継続した。マヨールは、僧侶達とルーマニア人のために自らの活動を指揮し、ミクの Propovedaniile la îngropăciune『葬儀の際の説教』を翻訳したり、自らの Didahiile『説教集』[1809年]、Predice『説法集』[1811年]、などを発行したり、自らの Istoria pentru începutul românilor în Dacia『ダキアにおけるルーマニア人の初期の歴史』やフェヌロンの Les aventures de Télémaque『テレマクの冒険』の自らの翻訳 [cf.N.ヨルガ、上掲書、II, 202頁; イレアナ•ヴルトス Primele manuscrise româneşti ale întîmplărilor lui Telemah『テレマクの冒険の最初のルーマニア語手写本』、Limba română XXI、1、1972年、27-47頁に収録] を印刷したりした。又、翻訳の分野では、Povăţuirea către economia de cîmp『農事心得』[1812年]、Învăţătura despre agonisirea viţei de vie『ブドウ栽培法』[1813年]、Învăţătura pentru ferirea şi doftoriia boalelor『病気の避け方•治し方』[1816年]、その他の実用書はマヨールのお陰である。

東方帰一教会のルーマニア人とオーソドックス信者のルーマニア人が共に働いた「大学の帝国印刷局」あたりの、上述のような活気に満ちた活動は、トランシルバニアのみならず、ワラキアにおけるルーマニア文化を大幅に西欧に向けさせた。1805〜1806年に始まる、歴史•哲学•神学に関する書物や実用書の数的増加とともに、トランシルバニアやワラキアにおける文語ルーマニア語は、西欧の語彙の洪水であった。ギョルゲ•シンカイとペトゥル•マヨールの業績の中に現れるラテン語とロマンス語 [特にイタリア語] の語彙数に関する研究が繰り返し行われた [cf.G.シンカイ Opere『全集』フガリウ編 I、170頁以降、A.ニクレスク Premesse sul problema dei rapporti cultural-linguistici italo-rumeni『イタリア•ルーマニア間の言語•文化的関係に関す

る諸問題について』Actele celui de al XII-lea Congres internaţional de lingvistică şi filologie romanică II『第12回国際ロマンス比較言語学会議事録 II』ブカレスト、1971年、897-904頁収録]。G.シンカイや P.マヨールの作品に現れる西欧ロマンス語彙は、S.ミクやパウル•ヨルゴヴィッチといった後継者達の作品の中に見られるよりも、遥かに多い。

その頃、トランシルバニアにおいて、ペトゥル•マヨールの友人であり、ウイーン出身で神学を学び、リヴォフで「帝国顧問官」であったヨン•ブダイ•デレアーヌは、疑似英雄大叙事詩 Ţiganiada『ジプシーの詩』[18世紀末に始まり1812年に終わる] や Temeiurile gramaticii româneşti『ルーマニア語文法の基礎』、Descălul românesc pentru temeiurile gramaticii româneşti『ルーマニア語文法の基本図書案内』、Fundamenta Gramaticae Linguae Romanicae『ロマンス語文法の基礎』[1812年]、などといった数多くの言語学書を書いたり、Lexicon românesc-nemţesc şi nemţesc-românesc『ルーマニア語•ドイツ語、ドイツ語•ルーマニア語辞典』を書いたりした。この最後の辞典は検閲官から許可を得たが、残念ながら手写本でしか残っていない。以上のような訳で、ギョルゲ•シンカイ、ペトゥル•マヨール、ヨン•ブダイ•デレアーヌのお陰で、近代ルーマニア語のロマンス的西欧化が最高潮に達しつつあったことが容易に分かる。1805〜1806年から1812〜1820年にかけて、トランシルバニアは徐々に、そしてかつてない程強力に、ラテン的•ロマンス的ヨーロッパと直接接触を通じて、西欧文化圏の中に入って行った。

32. トゥドール•ヴラディミレスクの革命時代

ワラキアとモルドヴァは、ラテン語とロマンス的文化•ロマンス語に対する熱狂的な普及を経験した。しかし、知識人達•特権貴族達•高僧達は、自らの文化的背景や優先権をロマンス的ヨーロッパの歴史というよりも、むしろ当時のレベルに負っていた。諸公国で話された教養ルーマニア語の中には、ロマンス的要素が多数含まれていた。イタリア語法の多くが、イエナキッツァ(約1735〜1797年)、アレク（約1762〜1799年)、ニコラエ（約1784〜1825年)、ヤンク（約1791〜1863年)、等のヴァカレスク詩人ファミリーの作品やギョルゲ•アサキの作品に見られる；それに次いで、ロシア軍やロシアの行政によって齎されたフランス語の要素や、数多くのギリシア語の要素があった。イギリス領事の報告によると、1814〜1818年の間のルーマニアでの特権貴族達は、ギリシア語を完全に修得していた。

近代ルーマニアの文化が発展するそのような状況下で、トゥドール•ヴラディミレスクの氾濫が1821年に発生し、その反乱の持つ重要な国家的•社会的意味は直ぐに政治的重要性を生んだ。1822年にはファナリオット時代が終わり、グリゴレ4世ギガがワラキア君主に、ヨニッツァ•サンドゥ•ストゥルザがモルドヴァの君主に成ると、連続して重要な出来事が発生した。ルーマニア人の近代への移行の必要性は必須であった。逆行的支配の打倒、暗黒時代の劣悪な法制の打破、国民が満足した訳ではないがエリートのための輝かしい文化の開花、政権の再編成、などが1821〜1829年の間にワラキアを激しく動かした大問題の極一部分である。

D.ポポヴィッチとパウル•コルネアは、ルーマニア文化史における或る時代の「発端」を強調した。1821年のいろいろな出来事の中からヘテリア［ギリシア人の反乱］やモルドヴァを暗黙の内に省略したとしても、他方において、特にワラキアに関することを是非とも言わなければならない。ワラキア

公国においては、ルーマニア精神の革新的運動と民族的•知的改革は、近代ヨーロッパのどの地域よりも早く強力に、種々の考えと芸術的価値を齎した。

ルーマニアの「啓蒙」は、カルパチア山脈の南、ワラキアで始まった：それはルーマニアの「第2回目の」啓蒙であった。トランシルバニアの場合と全く同じく、上昇気運にある中流階級によって促進され、ロマンス的西ヨーロッパに対する志向が明らかであった。しかし、トランシルバニアとワラキアとの差異は、社会的•国家的•文化的運動のラテン世界との関係において現れた：トランシルバニアにおいては、ラテン文化が自らの歴史的伝統、国としての存在、約2,000年に及ぶという威厳を主張しようと努める人達の諸権利を確実なものにしたのに対して、ワラキアは西欧と同時に進行するために、同時代のロマンス的ヨーロッパとの接触を求めていた。

ワラキアにおける社会的発展闘争を誓った上層階級の一部である啓蒙的特権貴族の取った行為を考慮しなければならないというのも、上のような事情からである。グリゴレ•バレアーヌ、ディニク•ゴレスク、ヤンク•ヴァカレスク、コンスタンティン•フィリピレスクは自らの社会的使命を認識し、西欧文化に広く門戸を開いた。時は正に、ヴォルテール、モンテスキュー、コンディヤック、ベッカリアなどがルーマニア人によって発見•翻訳され、哲学の講義が成され［ディニク•ゴレスクは哲学書を2冊翻訳した］、"ştiinţa moraliceascǎ"（倫理学）や "teoria virtuţilor"（美徳の理論）に助けが求められ、自然と哲学が一体となり、自国と宗教が調和し、古典主義とロマンティシズムが調合し、ギリシアがイタリアやフランスといった西欧と融合した時、すなわち、トランシルバニアにおいて文化的共生が達成され、そこから国民的文化の使者達が輩出し続けた時であった。ヤンク•ヴァカレスクはモルドヴァとワラキアの統一さえ夢見た。そして、1830年には La Milcof『ミルコフ川にて』［「ミルコフ川」はモルドヴァ公国とワラキア公国を分かつ小川］という詩を書いた。彼は永遠のローマを賞賛し、学者肌で、フランス文学を翻訳し、ラシーヌ、モリエール、ラマルティーヌなどをルーマニアに紹介した。ディニク•ゴレスクは急激な社会的•文化的改革を試み、兄弟の

ヨルダケ・ゴレスクは反封建社会批判の一環として、多くの文学的・文化的活動をした。啓蒙的特権貴族階級は一定の史観を獲得し、貴族の虚栄を認識し、西欧文明化を推進していた中流・下層階級に参加した。

そのような訳で、バルブ・パリス・ムムレアーヌ、ナウム・ルムニチェアーヌ、グリゴレ・プレショイアーヌ、エウフロシン・ポテカ、そして、彼のユニークなヨン・ヘリアーデ・ラドゥレスク、などといった中流階級の学者・文人に指導されて、1825年にワラキアは決定的にイタリアとフランス志向に成る。「啓蒙的特権貴族達」は、ルーマニア文化とルーマニア語の洗練のための道を開いた: 複数の劇場、学者達の種々の協会が設立され、新聞・雑誌が発行され、複数の印刷所も設立された; ギョルゲ・ラザールが1824〜1825年にスフントゥ・サヴァ学校を再開すると、ルーマニアの教育網はクライオヴァ、クンプルング、ヴァレニイ・デ・ムンテ、ワラキアの他の場所へと広まって行った。1826年にはディニク・ゴレスクはゴレシュティ村に学校を設立した。ワラキアは、文化を民主的にした。

33. ヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスク

ヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスクが1830年代後半にワラキアの代表的人物に成ったのは、ルーマニア文化がラテン的世界を志向していた［トランシルバニア地方］り、ロマンス的世界を志向していた［ワラキア地方］り、文語を近代化する種々の方法を統一する必要性が感じられるような国民的文化の、増加と融合を通じての、具体化が認められる状況下においてであった。ヘリアーデ---簡単にこう呼ぶ---は、"să fie una la toţi învăţaţii acelei naţii"（その国の知識人にとって１つでなければならず）、"cine voieşte să aducă pe români pe calea civilizaţiei şi a mîntuirii trebuie să le formeze şi să le desăvîrşească limba"（ルーマニア人を文明と救済の道に導きたく思う人は誰もが、ルーマニア語を形作り、完成させなければならない）と考えた作家であり理論家であった。そのような理由から、トランシルバニア学派の学者達に倣って、ヘリアーデもワラキアにおいて、ルーマニアの教養語の「建設」を開始した。しかし、ヘリアーデは取捨選択し、近代的解決策を取り、"să ne unim în scris şi să ne facem o limbă generală"（我々は書き方を統一するべきであり、共通語を作るべきである）と考えた。文語ルーマニア語の「洗練」が実質上開始されたのは、ヘリアーデのお陰である："a cultiva o limbă va să zică a o curăţi de tot ceeace nu o face să înainteze"（言語を洗練することは、その進歩を阻止する事柄全てを追放することである）。かくして、近代的な統一された文語ルーマニア語の「規範」の樹立に向けての作業が進められた。

教養語の「非トランシルバニア化」と呼べる現象、すなわち、ドイツ語•ロシア語•ギリシア語などの排除と同じく、ラテン語に代わってのイタリア語法の選択ができたのも、近代ロマンス語を志向した［新しいワラキアの社会•文化構造の中で唯一の代表者であると期待された］ヘリアーデのお陰で

ある: geografie (地理)、centru (中央)、energie (エネルギー)、などの方が gheografie、chentron、energhia などよりも好まれた;同様に、privilegiu (特権)や colegiu (学校)は、それぞれ privileghiu や coleghiu より好まれた; Tacit (タキトゥス) は [ドイツ語風にトランシルバニア人が書き慣れていた] Taţit よりも好まれた; しかしながら、ヘリアーデ自身 soţietate [今日では societate (社会)]、pretinde [pretende の代わりに、英語の pretends に相当]、scenă [sţenă ではなく、「舞台」の意]、sceptru (王権)、Scipion (スキピオ)、patrotism [patriotismos ではなく、「愛国心」の意]、entuziasm [enthusiasmos ではなく、「熱狂」の意]、cler [cliros ではなく、「僧侶」の意]、などと書いている。最後の数例はギリシア語尾の -os, -icesc [の代わりに -ic が用いられている] を排除したものである。

ラテン語の -(t)io に相当する形態 -(ţ)ie の一般化も又ヘリアーデのお陰である [cf. エリーザベス・クロス The Development of Moldern Rumanian. Linguistic Theory and Practice in Muntenia, 1821-1838、オックスフォード大学出版局、1974年、114116頁] ; 同様にヘリアーデは、ラテン語の qu- の代わりに c- を採用した: ラテン語の qualitas (質)、イタリア語 qualità、ルーマニア語 calitate。その他にも、ヘリアーデが提唱し、後に近代ルーマニア語に取り入れられたものは多い。

ヘリアーデの改革の一般的傾向が近代性と教養ルーマニア語の統一に向けられ、それがルーマニア語をロマンス世界により近付けることによって達成されたことは、言うに及ばない。誇張無しとはしないが [cf. カルロ・タリアヴィーニ Un frammento di storia della lingua rumena nel secolo XIX: XX L'italianismo di Ion Heliade Rădulescu『19・20世紀のルーマニア語史の断片: ヨン・ヘリアーデ・ラドゥレスクのイタリア語法』Europa Orientale VI、1926年、313-359頁]、そして、一般大衆から承認されない恐れも無きにしもあらずであるが、構造的見地からすると、イタリア語がルーマニア語に最も近いと言える; 他方、ヘリアーデも同じ意見ではあるが、時

としてフランス語と、また時として一般的にロマンス諸語と類似していることも容易に認めることができる。

ヘリアーデは、1828年の文法書［若干18才の1820年には早くも手書き本で流布していた!］で、"scrim pentru cei care trăiesc iar nu pentru cei morţi"（我々は死者のためにではなく、生きとし生ける人のために書く）のだから "scrieţi cum să vă înţeleagă contemporanii"（同時代人に分かってもらえるように書きなさい）、と大衆に勧告していた［cf.A.ロセッティ Limba scrierilor lui Ion Heliade Rădulescu pînă la 1841『1841年までのヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスクの文語』、『19世紀文語ルーマニア語史試論 I』1956年、59頁］。ヘリアーデの時代と一致する1821〜1841年は、西欧のロンンス的、特にイタリア語とフランス語に対して、文語ルーマニア語の語彙と構造を幅広く開放した。

文語に対するヘリアーデの行為は、同時代性と「ロマンス語化」であって、トランシルバニアでなお明白な考古学的傾向と言える「ラテン語化」とは異なっていた。更に、ルーマニアの文化史からして当然であるが、［近代ギリシア語•ドイツ語•ロシア語といった］非ロマンス語の介入を排除した、ロマンス諸語との直接的接触を意味した。最後に、しかし決して軽んずるつもりはないが、ロマンス的西欧文化圏に教養ルーマニア語を編入せしめたことを挙げなければならない。このようにして、ヘリアーデの活躍した主な時代である1829〜1841年のワラキアは、ロマンス的西欧とのルーマニア文化の共時性という、18世紀中葉以来トランシルバニアが模倣し続けていたものを獲得した。

34. ルーマニア文化の地域間循環

1750〜1840年代の広範囲と複雑性を考えると、概略的ではあったが、上記の概観で近代ルーマニアの起源へと我々を導いてくれる。ルーマニアの国土を包含した西欧のロマンス的文化は、新ラテン民族の文化史における最も独創的な現象の内の１つである。年代的にはロマンス圏内文化の潮流の最後であるが、非ラテン的な複数の媒介を通じて、また種々の社会•文化的影響を受けながらも自ら増幅しつつ、トランシルバニア地方、ワラキア地方、モルドヴァ地方においては、イタリア文化はオーストリー•ハンガリー圏を通過したが、ワラキア地方とモルドヴァ地方においては、イタリア文化は西欧化した18世紀のギリシアやロシアを経由して流入して来た。フランス文化はウイーンとヴェネツィアを経由して、ルーマニアの諸公国に浸透した。トランシルバニア地方の西欧化はローマ•カトリックとの宗教的な結び付きを伴っていたが、他方、ワラキア地方とモルドヴァ地方はオーソドックスに忠実であった。奇妙に見えるかも知れないが、啓蒙時代のヨーロッパ合理主義は高位の教会権威によって、この東方のロマンス語圏において支持•促進されていた。そのような訳で、西欧化は文化の問題のみならず、歴史的•言語的•社会的•政治的な問題でもあった。ロマンス的西欧化が１つの文化圏と他の文化圏では、あるいは同一地方においてさえも、かなり異なる社会的•文化的な分裂や層化を齎したのと全く同じく、ルーマニアの諸公国においても、「十分洗練された」という弁別的素性を持った、ラテン的•ロマンス的西欧文化が強調されたことに疑問の余地は無い。換言すれば、ルーマニアにおける西欧的ロマンス文化は、まず始めに「多様化」を意味した。

この現象の原因は、何ら疑問の余地なく、18世紀のトランシルバニア地方、ワラキア地方、モルドヴァ地方のルーマニア社会に一般的に見られた諸条件に求められるべきである。カルパチア山脈の向う側、トランシルバニア地方

においては田舎の人々が公民権を奪われたルーマニア農民と利害を同じくする社会•政治的統一性を要求していたのであるが、ワラキア地方とモルドヴァ地方においては、階級による社会的組織は明白で不動のものであった：このような差異が、ルーマニア語とルーマニア文化をロマンス的西欧への異なる道を歩ませしめたのである。

それ故に、近代のルーマニア文化や統一された文語ルーマニア語について今日話をする時、他方面の社会的•文化的かつ言語的原因について考えてみることが要求される。1750〜1840年は、その過程の絶頂にあった。ロマンス的西欧に文化的影響を開いた時代であり、近代文語ルーマニア語の文化的•言語的特異性の建設の時代であった。

当時の文語ルーマニア語を考える時、文化の「地域間循環」と事実上ある地方から別の地方への新語法の循環的採用を考慮しなければならないのも、上のような理由からである。18世紀においては、ディミトゥリエ•カンテミールのいろいろな歴史的作品が特に重要な意味を有する：ルーマニア語がラテン語に由来するということと、ダキアにおけるルーマニア人の存続という問題意識は、トランシルバニア地方において、社会的•文化的かつ国民的運動によって受け入れられ、Hronicul româno-moldo-vlahilor『ルーマニア•モルドヴァ•ワラキア年代記』がウイーンから齎され、主教のイノチェンチウ•ミク•クラインによってブラショヴに紹介された。1730年までに複写されてサムエル•ミクの知るところとなり、彼は Descriptio Moldaviae『モルダヴィア描写』と Istoria imperiului otoman『オスマン帝国史』と共に引用した。後者はギョルゲ•シンカイにも読まれた。シンカイは又、カンテミールが自らの父親の伝記である Vita Constantini Cantemirii『コンスタンティン•カンテミールの生涯』を書いたのを読んだ。ペトゥル•マヨールはディミトゥリエ•カンテミールを "foarte mare învăţătură"（非常に博識の人）であると記述した。

このような状況下で、ディミトゥリエ•カンテミールがラテン語やロンンス系の新語法を採用するに当たって用いた幾つかの方法がトランシルバニア

のラテン語学者達の書物の中に求められたと、我々は信じることができる。我々の考えでは、このような訳で pretenţie（見せかけ）、condiţie（条件）、continuaţie（継続）、disputaţie（論争）、oraţie（祈り）、といった単語の語尾の -ţie［カンテミールやトランシルバニア学派の学者達も1770年以降用いている］が説明され得る。実際、-(t)io で終わるラテン語法を -(ţ)ie で採用するそのような方法は、文語ルーマニア語の伝統に一致していた: 又、ワラキア地方の年代記に -ţie という語尾が現れるのも、決して偶然ではなかった。

更に、次のようなロマンス系の新語法を採用するに当たって、ワラキア地方とトランシルバニア地方に見られる一致の説明は、ルーマニア国内の相互文化圏という概念においてである: observaţie（観察）［詩人のイエナキッツァ・ヴァカレスク、学者のヨルダケ・ゴレスク］、multiplicaţie［今日では multiplicare（増加）、cf.ヨルダケ・ゴレスクの Ducere de mînă către aritmetică『算数の初歩』ウイーン、1785年、Lexiconul de la Buda『ブダ判語彙集』］、elocvenţie［今日では elocvenţă（雄弁）、詩人のツィキンデアールやムンテアーヌ］、experienţie［今日では experienţă（経験・実験）、ギョルゲ・シンカイとヨルダケ・ゴレスク］、orator（雄弁家）［ペトゥル・マヨールとヨルガケ・ゴレスク］、centru（中心）［シンカイとムムレアーヌ］、elegant（優雅な）、fabulă（寓話）、veneraţie（尊敬）、veteran（退役兵）［ツィキンデアール、ブダイ・デレアーヌ、ヨルダケ・ゴレスク］。Lexiconul de la Buda『ブダ版語彙集』、ヨルダケ・ゴレスクの Condica limbii româneşti『ルーマニア語帳簿』、イエナキッツァ・ヴァカレスクやギョルゲ・アサキやディニク・ゴレスクらの作品からの完全な採用、並びに、ギョルゲ・シンカイ、ペトゥル・マヨール、パウル・ヨルゴヴィッチ、そして時としてブダイ・デレアーヌらの用いた新語法は全てラテン語とロマンス系新語法の「共同中軸」を連想せしめるものであり、個々の新造語を個別に借用したというよりは、むしろ、ある文化圏から別の文化圏へ、ある作家から別の作家へ、ある作品から別の作品へと採用された形の相互知識・相互循環の結果で

ある。

近代文語ルーマニア語の歴史は、ルーマニア文化圏内での教養語の循環の問題でもある。

35. ルーマニア語の構造（1780～1840年）

1780～1840年のルーマニア語の構造は、統一的規準を求めるという特徴があった。iaste［今日では este、英語の is に相当］、priiatin［今日では prieten（友人）の意］、などの古い音声的形態は廃止され、それぞれ、ieste, prieten に取って代わられた; a ceti（読む）、den（～から）、dentru（～の中から）、はそれぞれ、a citi, din, dintru に取って代わられた; 地方語の音声的形態も同じような運命に逢った---a audzi（聞く）は a auzi に取って代わられた。a împlea［今日では a umple（満たす）の意］、a îmbla［今日では a umbla（行く）の意］、împregiur［今日では împrejur（～の回りに）の 意］、a încongiura［今日では a înconjura（取り巻く）の意］、cîne［今日では cîine（犬）の意］、mîne［今日では mîine（明日）の意］、pîne［今日では pîine（パン）の意］、direg［今日では dreg（私が直す）の意］、diregătorie［後に dregătorie（高官の職）の意］、dirept［今日では drept（正しい）の意］、などの単語は、ラテン語に似ているために、そのまま保存されていた。ラテン語にないような綴り字は、極力避けるように努力された: a と î の代わりに e が用いられた---beutură［今日では băutură（飲物）の意］、a crepa［今日では a crăpa（破る）の意］、reu［今日では rău（悪い）の意］、strein［今日では străin（外国の）の意］、capetem［今日では căpătăm（我々が獲得する）の意］、numer［今日では număr（数）の意］、redicine［今日では rădăcini（根）の意］、モルドヴァ地方のコスタケ•コナキの複数の詩の中にも見られる形態---resboae［今日では războaie（複数の戦争）の意］、resplăteşte［今日では răsplăteşte（彼が報いる）の意］、recoreşti［今日では răcoreşti（君が冷す）の意］、zedar［今日では zadar（無用）の意］。バナト地方の言語学者 P.ヨルゴヴィッチとコンスタンティン•ディアコノヴィッチ•ロガは、ルーマニア語の綴り字を

ラテン語に似せるために、potere［今日では putere（力）の意］、sunt［今日公式には sînt、英語の I am に相当］、scie［今日では ştie（彼は知る）の意］、formos［今日では frumos（美しい）の意］、などといった書き方をしていた。サムエル•ミクなどは rumân（ルーマニア人•農奴）と roman（ローマ人）を全く同一の roman で表していた。これは語源的書き方の基本と成った。トランシルバニア地方の哲学者で詩人のルチアン•ブラガ（1895〜1961年）は、統一的規範に到達するためにルーマニア語を通じてラテン語を再建する現象を "setea de întoarcere la un prototip de limbă"（ある言語の模範に帰るという渇望）と呼んだ。その「模範」は、ラテン語であった。

形態の分野では、所有冠詞の無変化形 a の代わりに、al, a, ai, ale を規則化する傾向にあった。動詞の歯茎子音が保存される頻度が高かった---aud（私が聞く）、pot（私は〜できる）、spun（私は言う）、などが、それぞれ、auz, poci, spui の代わりに用いられた。不完了時制の 3 人称複数の活用語尾に -u を用いる傾向が徐々に増加した---ei erau［英語の they were, 西語の ellos eran に相当］；とは言え、ei mergea［英語の they were walking、西語の ellos andaban に相当］は広く流通していた。接続法の să dea［西語の que dé に相当］、să stea［西語の que esté に相当］、などは、それぞれ、să deie, să steie に取って代わりつつあった。

しかしながら、最大の革新が生じたのは語彙の面においてであった。ロマンス的西欧化は、ルーマニア語の語彙を、ラテン語とイタリア語から借用した新語によって、豊かなものにした。トランシルバニア学派の初期の代表者達は、新語を過度には使用しなかった。サムエル•ミクは、"graiul nostru s-ar afla în lipsă"（我々の言葉が必要とした）時と場所でしか新語を認めなかった。このことは、トランシルバニア学派の学者達が、古いルーマニア語の書物に現れる語彙をそのまま保存すると同時に、借用語や翻訳語を好んだことを示すものである；伝統的な語彙は、派生•合成などによってできた単語で豊かになり、完成され、教化された。

いかに奇妙に見えようとも、トランシルバニア学派の著名な代表者達は、新語の導入の乱用に反対したように、いかなる急激な•純粋主義的傾向•ラテン語を使用する傾向をも示さなかった。次に、トランシルバニア学派の学者達が用いたラテン語•ロマンス語系の新語を幾つか、シュテファン•ムンテアーヌとヴァシレ•ツァラの Istoria limbii române literare『文語ルーマニア語史』[127頁] から引用しよう。

ラテン語•ロマンス語系の新語:

aghent [今日では agent (行為者)]、antecessor [今日では廃語「祖先」の意]、attac [今日では atac (攻撃)]、attentat [今日では atentat (陰謀)]、cauză (原因)、condiţie (条件)、conferenţie [今日では conferinţă (講演•会議)]、columnă (円柱)、a consilia (忠告する)、consilier (相談役)、constituţie (憲法)、a corecta (修正する)、director (所長)、elementuri [今日では elemente (複数の要素)]、elocvenţi [「雄弁な」の男性複数形]、exemplar (本1冊)、gen (性•種類)、inscripţie (碑文)、inspector (検察官)、impostor (詐欺師)、literă (文字)、mysterii [今日では mistere「神秘」の複数形]、magistru (師)、memorie (記憶)、modă (流行)、natură (自然)、naţioane [今日では naţiuni (複数の国家)]、ocasie [今日では ocazie (機会)]、omagiu (称賛)、orator (雄弁家)、pedagogue (教育者)、a prononţiia [今日では a pronunţa (発音する)]、proprietate (財産)、presidium [今日では prezidiu (議長団)]、raţie (分け前)、a recomenda [今日では a recomanda (推薦する)]、a replica (答える)、regulă (規則)、securitate (安全)、sistemă [今日より一般的には sistem (体制)]、stand (本などの陳列台)、soţietate [今日では societate (社会)]、sufragiu (投票)、ţivilizaţie [今日では civilizaţie (文 明)]、urban (都会の)、virtuos (有徳の)、veneraţie (尊敬)。

専門用語:

afecţii (愛情•病気)、articul [今日では articol (冠詞)]、caz (事例)、cauterisaţie [今日では cauterizare (腐食)]、coleoptere (甲虫類)、

compoziţie（作品）、contaminat（汚染）、cujugţie［今日では conjuncţie（接続詞）］、dialect（方言）、derivat（派生語）、duoden（十二指腸）、imperfect（不完了の）、instinct（本能）、interjecţie（感嘆詞）、lavă（熔岩）、mod（方法）、pronume（代名詞）、pori（複数の気孔）、speriinţă［今日では experienţă（経験）］、termen（述語）、verb（動詞）。

借用•翻訳語:

alsăuire［今日では însuşire（充当）］、asăuri［今日では atribute（複数の特性）］、chipuri［今日では moduri も（複数の方法）］、estere［今日では existenţă（存在）］、feţe［今日では persoane（複数の人）］、hotărîre（決定）、închipuire peste tot［今日では idee universală（世界的な考え）］、a închipui（想像する）、încheiat［今日では articulat（分節的な）も］、a împururi［今日では a eterniza（永久化する）］、întregime［今日では integritate（完璧）］、nestrăbuincios［今日では de nestrăbătut, impenetrabil（入り込めない）］、peste tot（世界的な）［字義通りには「至るところの」の意］、putinţă（可能性）、singuratec（個々の）、spiţă（種）、stihie（自然の猛威）、stări împrejur［今日では circumstanţe（状況）］、temei（根拠）、trup（身体）、zicere［今日では afirmaţie（肯定）］、など。

パウル•ヨルゴヴィッチは Observaţii de limba rumânească『ルーマニア語の要点』の中で、ラテン語起源の初期の語彙的要素の派生語を利用して作った新語表を提案した。以下にそれらの例を少し挙げよう:

advenire（到来）［a veni「来る」から］、convenire（同意）、convenciune［今日では convenţie（協定）］、devenire（進展）、prevenire（到着）、provenire（出現）［これらは全て venire「来ること」に由来する］、iluminare（照明）［luminare「光ること」に由来する］、imperit（無知の）［今日では廃語］、imperiţie（無知）［今日では廃語］、periculu（臆病な試み）［今日では廃語］、periculos（驚いた）［今日では「危険な」の意］［これらは全て perire「滅びること」に由来する］、prelucire［今日では strălucire（光輝）、lucire「光り輝くこと」から］、など。

このリストはギョルゲ•シンカイとペトゥル•マヨールの言語学的研究［フガリウ編］、ウルス『ルーマニア科学用語の形成』［ブカレスト、1962年］の中に見られる科学用語の目録、G.イヴァネスクの研究［1956年］による哲学用語、トランシルバニアからの法律•行政用語［『19世紀の文語ルーマニア語史概論』］、などで完璧なものになろう。

当時の典型は述語の「語句注解」である:『ロマンス諸語の中におけるルーマニア語の特異性 II』［148-158頁］で既に見たように、ペトゥル•マヨール、ギョルゲ•シンカイ、アンフィロヒエ•ホティニウルなどは、新語を説明する習慣があった---彼らは "trută sau păstrăv"（マスすなわち鱒）、"ghinte adecă neamuri"（人種すなわち人種）、"cvadranţi sau pătrari"（四辺形のすなわち四方形の）；また時として、古い単語を新しい単語で説明している場合もある---"bani sau monete"（お金すなわち金銭）、"icoană sau figură"（イコンすなわち御姿）。これらの事実は、大衆の「啓蒙」を推進する考えの結果として、新語を「導入」しようと著者達が考えたものであることを示している。

同じような機能が、1825年にブダで出版された最初の辞典であるDicţionar-românesc-lătinesc-unguresc-nemţesc「ルーマニア語•ラテン語•ハンガリー語•ドイツ語辞典」［Lexicon valachico-latino-hungarico-germanicum quod a pluribus auctoribus decursu triginta et amplius annorum elaboratum est（数多くの若者達によって、30年以上にわたって成されたルーマニア語•ラテン語•ハンガリー語•ドイツ語辞典）］によって果された。サムエル•ミクによって1795年に着手されたこの辞典は、V.コロシ、L.コルネリ、I.テオドロヴィッチ、A.テオドーリなどといったトランシルバニア学派の学者達によって完成されたが、その後ペトゥル•マヨールによって部分的に改定された［cf.L.ガルディ編、サムエリス•クレインDictionarium vakachico-latinum『ルーマニア語•ラテン語辞典』ブダペスト、1944年］。

上記の辞典は、一般的なルーマニア語の単語も載せてはあるが、かなりの

数の新語をも載せてある。それらの新語の幾つかは実際に流布していたのであるが、他の新語は新しい単語でルーマニア語を「豊かに」する行為の一部分として、単に発達の可能性のある望ましいものとして載っていたことに疑問の余地はない［辞書に載っていた単語が当時全て実際に流通していたと考えるべきではない］。次にブダで発行された辞典から、そういった単語の一覧表を示そう:

bal（パーティー）、bancă（ベンチ）、capital（主要な）、climă（気候）、complot（陰謀）、convenţie（協定）、companie（仲間）、complement（補足）、condiţie（条件）、chirurgie（外科）、contagios（伝染）、generos（寛大な）、familie（家族）、medicină（医学）、medic（医者）、epilog（結語）、magie（魔法）、moral（道徳）、notă（注釈）、plan（計画）、pretext（口実）、pur（純粋な）、raţie（分け前）、regulă（規則）、sacrament（秘跡）、sacrilegiu（冒涜）、teatru（劇場）、など。これらの単語の多くが、ルーマニアの教養語として次の時代に一般化する形態で現れていることが強調されなければならない。

36. ルーマニアの教養語（1828～1840年）

近代ルーマニア語とルーマニア文化の西欧化は、ルーマニア文学と文化の最も著名な人物の１人であるヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスクの活躍を通じて、1828～1840年の間に著しい勢いを経験した。D.ポポヴィッチ Ideologia literară a lui Ion Heliade Rădulescu『ヨン•ヘリアーデ•ラドウレスクの文学的イデオロギー』［ブカレスト、1935年］が言うように、ヘリアーデは、「自らの国を救うための投資の世代の中での戦士であり、新しい文明の建設者達の世代から出た真の建設者である」［11頁］。しばらくの間、ヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスクは、自分の回りにワラキア地方、モルドヴァ地方、トランシルバニア地方の最も代表的なルーマニア人学者達を呼び集めた。彼らは、ヘリアーデと考えを同じくし、ヘリアーデの考えを受け入れて、文語ルーマニア語の明確にして統一された進路を計画するのに成功した。ヘリアーデの側にいたのは、モルドヴァのコスタケ•ネグルッジ、ミハイル•コガルニチャーヌ、貴族の詩人ヤンク•ヴァカレスク、革命家ヨン•クンピネアーヌ、詩人ヨン•クルローヴァ、共に学者のギョルゲ•バリツィウとペトゥラケ•ポエナール、劇作家 C.ファカ、俳優謙脚本家謙学者の G.アリスティアなどであった。この集団が教養ルーマニア語の発展のためのガイドラインを作成した。ニコラエ•ヴァカレスク、コンスタンティン•ゴレスク、コンスタンティン•クンペアーヌといった文学好きの数人の啓蒙的ルーマニア人貴族達によって1827年にブラショヴで設立された Societate literară（ルーマニア文学協会）の考えをヘリアーデは提案した。ヘリアーデの指導の下に Societatea Filarmonică（フィルハーモニー協会）が1833年に設立された。又、ヘリアーデは最初のルーマニア語新聞 Curierul rumânesc『ルーマニア新報』を1829年4月8日に発行し、続いて Curierul de ambe sexe『両性新報』を1836年に発行した；ヘリアーデは更に、ルーマニア語で演技する国立劇場を設立し、

1828年にはルーマニア語の真の「ポール•ロワイヤル文法」と言えるGramatica Românească『ルーマニア語文法』を発行した。

ヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスクは、ルーマニア文化のためにトランシルバニア学派の努力を続けた。彼は、ヨン•ブダイ•デレアーヌやペトゥル•マヨール達の考えと調和して、文語ルーマニア語を統一する傾向のある過程の発展と必要性を実感した。ヘリアーデは、トランシルバニア学派の学者達の基本的な考えを同時代の人達に要約して伝達するのに成功した。ヘリアーデはパウル•ヨルゴヴィッチを知り、評価し、後者のルーマニア語についてのObservaţii『要点』を高く評価した。

ヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスクの中心的関心は、文語ルーマニア語の統一であった。彼は歴史的観点から、18世紀の宗教書の言語を拠り所とする一種の統一［例えば、ティモテイ•チパリウなどの知識人の参加も得た］、過去の言語的統一への回帰を促進した。更に、"cea mai mare parte din români"（大多数のルーマニア人）によって用いられる文語の考えを支持したのも、ヘリアーデであった。1839年の『ルーマニア新報』［128号］でヘリアーデは、全てのルーマニア語の方言•変種と調和の取れた言語に到達する手段を指摘した: "multe au bune moldovenii, multe au bune ungurenii, bănăţenii, bucovinenii, multe bune macedonenii, multe au bune muntenii; dar multe au toţi şi rele. Să lepădăm ce e rău, să îmbrăţişăm cele bune de la toţi şi între toţi şi să priimim înnoiturile cele bune. Un trup să fim, o limbă să avem"（モルドヴァ人やトランシルバニア人やバナト人やブコヴィナ人は良い点をたくさん有している。マケドニア人も又多くの良い点を持っているし、ワラキア人も同様に多くの良い点を有している。しかし、それらの人達全てが、悪い点をも有している。悪い点を放棄し、全ての中で良い点を採用し、新しい革新を歓迎しよう。我々は一体となり、1つの言語のみを話そう。）［シュテファン•ムンテアーヌ、ヴァシレ•ツァラ、上掲書、120-121頁］。ヘリアーデの考えでは、文語ルーマニア語の規範は、現在の言語構造と一致していなければならない。彼は ci［英語の what、西

語の qué に相当］や（el）vorbeşti［英語の he speaks、西語の él habla に相当］といったモルドヴァ風の形態を、それぞれ、ce、vorbeşte に置き代えた。又、întăleg［英語の I understand、西語の entiendo に相当］、zisă［英語の he said、西語の dijo に相当］、iubăsc［英語の I love、西語の quiero に相当］を、それぞれ、înţeleg、zise、iubesc に代えた。更に、ワラキアの方言形 pă［英語の on に相当］と dă［英語の by, of に相当］を、それぞれ、文語の pe と de で置き代えた。同様に、sară（夕刻）、samănă［英語の he sows と he resembles に相当］、sîngur（1人で）の代わりに、それぞれ、seară、seamănă、singur によって置き代えるなどした。形態面においては、ワラキア人にとって規範的であったと思われるのだが、auz［英語の I hear、西語の oigo に相当］と văz［英語の I see、西語の veo に相当］の代わりに、それぞれ、aud、văd という形態を奨励した。彼は又、不完了過去の3人称複数語尾に -u を奨励した：cînta［英語の they were singing、西語の cantaban に相当］の代わりに cîntau とした。そして、jurămînturi（複数の誓い）、mormînturi（複数の墓）の代わりに、それぞれ、jurăminte、morminte といった複数形をより好んだ。語尾も -ariu や -oriu の代わりに、それぞれ、-ar や -or を好んで用いた。更に、politicescu（政治の）や diplomaticesc（外交の）といった形容詞の語尾 -icesc の代わりに、politic や diplomatic などに見られるように、-ic という語尾を用いた。文語の諸問題に関するヘリアーデと C.ネグルッジとの公開された書簡は、ルーマニア語の使用に関して成された共同作業の良い実例を示している。ヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスクの偉大な文化的•言語学的博識や文学の才能は、ルーマニア文化の実に様々な分野において新たな痕跡を残した。ヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスクは、トランシルバニア学派の学者達が一体となって成し遂げた仕事に匹敵する仕事を、近代的な統一された国語と国民文化を樹立することによって、成し遂げた。トランシルバニア学派とヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスクは、近代ルーマニアの教養語の革新と統一のための道を開いた、と言える。

37. ルーマニアの教養語（1840～1890年）

前世記後半［1840～1890年］の文語ルーマニア語は、特に好ましい歴史的•社会的•文化的条件下で発達した。ルーマニア文化の国民的•統一的性格は、トランシルバニア学派の代表者達、ヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスク、ギョルゲ•アサキ、並びに、教養語を統一するために戦った全ての人達によって注目された。Dacia literară『文学的ダキア』は、1840年に M.コガルニチャーヌによって、詩人の V.アレクサンドゥリと散文作家の C.ネグルッジの助けを得て、初めて編纂された雑誌であるが、国民的•歴史的理想を文学的•言語的に表現するのに最も適したものであった。作家達は、過去の美徳に引き付けられた: 彼らは、ルーマニア人の栄光の過去と偉大な歴史的人物達を呼び覚ました。M.コガルニチャーヌ自身 Arhiva românească『ルーマニアの古文書』を編集し、その中で彼は歴史的資料を公にした。文学者達の興味が人々に対して向けられた時であった。『文学的ダキア』は、"producţii româneşti fie din orice parte a Daciei"（ダキアのいかなる所からもルーマニア語の作品を収集し）、"ţelul nostru este realizarea dorinţei ca românii să aibă o limbă şi o literatură pentru toţi"（ルーマニア人が皆のために同じ言語と文学を有するという望みを満足させるのが、我々の目的である）と宣言した "foaie românească"（ルーマニア語の雑誌）である。

1840年以後に全ルーマニア人の統一のために好ましい重大な行動が幾つか取られたことを忘れないでおかなければならない。統一ルーマニア国家が、1848年のブルジョア民主革命の目的のひとつであった。ルーマニア諸公国の統一という考えが、ルーマニア人民と革命家達の理論の中に、常に意識としてあった。例えば、Pruncul român『ルーマニアの赤ん坊』は、1848年革命時の発行物のひとつであるが、"toată naţia română să fie liberă, ca toată naţia română să alcătuiască un stat, un singur popor de fraţi"

（全ルーマニア人が自由になり、ひとつの国家•同朋の１民族が成立する）ために専制政治を打倒するようにと、"frații noștri din Moldova"（我がモルドヴァの同朋）に主張した。1848年8月、V.アレクサンドゥリは、歴史家で革命家のニコラエ•バルチェスクに "dorul cel mai înfocat al unei mari partide din Moldova este unirea cu Valahia, sub un singur guvern și sub aceiași constituție"（モルドヴァの大多数の人達の最も熱烈な願望は、１つの政府と同一憲法の下でのワラキアとの統合である）という手紙を送った［cf.Istoria României. Compendiu『ルーマニア史概論』1974年、253頁］。1848年の革命は「単一的」であり、国家統一の意識を意味するものであった。

統一が達成されるのに時間はかからなかった: 統一は全人民の大目的であった。ルーマニア文化とラテン•ロマンス系ヨーロッパの歴史と同時代性への統合を準備し、1848年のブルジョア民主革命の間中戦った世代と、次に1859年のルーマニア諸国家の統一という大きな理想を完成せしめた世代と同じであった; 代表的人物は、ヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスク、M.コガルニチャーヌ、V.アレクサンドゥリ、G.バリツィウ、シミオン•バルヌツィウ、A.パピウ•イラリアン、A.トゥレボニウ•ラウリアン、I.マヨレスク、C.A.ロセッティ、ヨンとディミトゥリエのブラティアーヌ兄弟、D.ボリンティネアーヌ、C.ボリアック、N.オラシャーヌなどであった。アレクサンドゥル•ヨン•クザ公が1859年１月24日にモルドヴァとワラキアの支配者に選ばれた。その歴史的出来事が、1918年に完成されることになる統一ルーマニア国家への発展に向けての本質的な段階を成すものであった。

国家統一は、国家の独立を獲得するための必要条件であった。1860年にラテン•アルファベットが公式に導入されたのは単なる偶然ではなかった。1862年に統一公国は、パリの「ルーマニア学生協会」が1846〜1848年の間に用いたフランス語による名称 Romanie, Roumanie に由来する名称である「ルーマニア」を採用した［cf.J.A.ヴァイヤン La Romanie『ルーマニア』パリ、1844年］。1866年に、ホヘンツォレルン•ジグマリンゲンのカロル公がプルシアから我国の支配者として呼ばれた時の憲法によって明記され、ルー

マニアという国名が、オスマン帝国から独立して正式なものと成った。1866年には Societatea literară（ルーマニア文学協会）が設立され、それがすぐに Societatea Academică Română（ルーマニア•アカデミー協会）と改名され、更に、Academia Română（ルーマニア•アカデミー）と成り、ルーマニアのあらゆる所からルーマニア人の科学者•文化人達を呼び集めた。ルーマニア語の印刷も新聞という形---保守的なものとして、Timpul（タイム）や Epoca（時代）、リベラルなものとして、Românul（ルーマニア人）、Voinţa Naţională（国民の意志）、や文学雑誌---Zimbrul（オーロックス）、Steaua Dunării（ドナウの星）、România literară（文学的ルーマニア）---という形で、1855〜1856年に現れた。1869〜1872年には、労働者や社会主義者の印刷物も出現した。

トランシルバニアにおいては、1838年にギョウルゲ•バリツィウが Gazeta de Transylvania『トランシルバニア新聞』と Foaie pentru minte, inimă şi literatură『精神と魂と文学のための雑誌』を発行した；シビウにおいて1853年に Telegraful român『ルーマニア電信』が現れた。

1877年5月9日にルーマニアの国家独立が宣言されたのは、そのような状況下においてであった：総理大臣ミハイル•コガルニチャーヌが Adunarea deputaţilor（ルーマニア国会）で次のような演説をした："Sîntem independenţi, sîntem naţiune de sine-stătătoare; sîntem o naţiune liberă şi independentă"（我々は独立した、独立独行の国家である；我々は自由で、独立した国家である）；人民の真に熱狂した雰囲気の中で、トルコからの独立戦争が開始された；戦争が終結したのは、1878年であった［サン•ステファノ条約でルーマニアの独立が認められた］。1878〜1900年の間にルーマニアは、かつて例を見なかった程に経済的•政治的•社会的発展を見て、ヨーロッパ特にフランスやイタリアというロマンス社会において、自らの地位を占めた。ルーマニア語は、教養あるロマンス諸語の中で、自らのしかるべき地位を占めた。

ルーマニア語の教養語に対するそれらの社会的•政治的状況の結果は、特

に重大であった。まず最初に挙げなければならないのは「新語の大量導入」である。ルーマニアの社会的•経済的•科学的•技術的進歩が、ルーマニアの教養語をして西欧のロマンス諸語から借用せしめた。文語ルーマニア語は、ルーマニア社会の社会的•経済的発展を正確に反映するための道具となっている必要があった。イタリア語とフランス語が、特にこの目的のために力を貸した。イタリア語、そして特にフランス語が、ブルジョア階級や社会生活において何か異彩を放つ地位に就きたく思う人達や上流階級の人達の「流行」であった。若者達、良家の令嬢達、若い紳士達、若い将校達は、ルーマニア社会全体を巻き込んだロマンス的西欧化の行為者であった。当時のドラマの中で若い令嬢達が dascăl de franţozească（フランス語教師）、dascăl de chitare（ギターの教師）、dascăl de joc（ダンス教師）を求め、高齢者達は自分達の息子や娘達が「フランス風に家をひっくりかえしたり」、「各人が自分の思うようにしたかったり、自分のしたいことに正当性を見いだしたり、一般大衆の口から自由•平等やお気に入りの言葉や意味のない言葉が聞こえる」といった、不平•不満を言っている［cf.A.ニクレスク編 Primii noştri dramaturgi『ルーマニアの初期の劇作家達』ブカレスト、1956年］。

しかしながら、1830年代に西欧、特にフランスに派遣された青年達が、フランスの文化と諸制度に直接接触したことを忘れないでおこう；それらの青年達の中には、後の政治家ミハイル•コガルニチャーヌ（1817〜1891年）、詩人ヴァシレ•アレクサンドゥリ（1821〜1890年）、作家兼外交官ヨン•ギガ（1816〜1897年）、散文作家アレク•ルソ（1819〜1859年）、などがいる；彼らは革新的考えを身に染み込ませて、モルドヴァやワラキアに帰って来た。彼らは保守的な特権貴族に嘲笑された。しかし、そのような彼らが 1848年の革命を実際に齎し、1859年のワラキアとモルドヴァの統一を齎し、近代ルーマニアを作ったのである。ロマンス的ヨーロッパ、イタリアとフランスとの文化的接触は、まず近代世界の社会的•政治的現実との接触を意味した。

イタリア語の述語、そして特にフランス語の述語が、数学•地理•自然科学•医学などに見いだされる。N.A.ウルスは『ルーマニア語の科学用語の形成』

［ブカレスト、1962年］の中で、ルーマニア語が受けた影響に関して、語彙の形成過程が2つの主な段階に分けられるとしている:

1）まず第1の段階は、18世紀後半に始まって、約1830年まで続く、ワラキアとモルドヴァにおける多量の近代ギリシア語とロシア語の要素とトランシルバニアにおける大量のラテン語•ドイツ語•イタリア語の語彙;

2）第2の段階は、1830年以降で、フランス語•イタリア語•ラテン語からの多量の借用語である:「近代ギリシア語•ロシア語•ドイツ語から以前に借用した数多くの用語は、まだ初めの音韻的形態を保っていたが、今や［1830年を指す］フランス語をモデルにして、ルーマニア語の形態を決定的に確立した。その間にも、いろいろな経路からの借用が行われた。その現象を A.グラウールは「多重語源」と呼んだ。更に、当時の重要な特徴として、外国語からの翻訳借用•言い換えがある; しかし、翻訳借用は、時代が進むにつれて大量借用が行われたので、徐々に減少した。」

そのような事実の下で、ルーマニア語におけるフランス語•イタリア語起源の単語の目録を作成することは可能であろうが、決して容易な作業ではない。ディミトゥリエ•マクレアは、3万語収録の Dicționarul enciclopedic al limbii române『ルーマニア語百科辞典』［I.A.カンドゥレアとギョルゲ•アダメスク編、ブカレスト、1931年］の中からフランス語起源の単語として29.69%を、そして、続いて発行された約5万語を収録する Dicționarul limbii române contemporane『現代ルーマニア語辞典』 の中から、フランス語起源の単語として38.42%を見いだした。Dezvoltarea limbii literare române în prima jumătate a secolului al XIX-lea『19世紀前半における文語ルーマニア語の発達』［ブカレスト、1904年］の中で P.V.ハネシュは、当時のルーマニア人作家達の作品の中で用いられたフランス語からの借用のリストを提出した: a copia（写す）、adnotație（注釈）、original（元々の）、erudiție（博識）、filozofie（哲学）、naiv（ナイーヴな）、suav（妙なる）、amabil（親切な）［バルチェスクも］、bizar（奇妙な）; blond（金髪の）、brun（浅黒い）、diafan（透明な）、eter（エーテル•空気）、etern（永久の）、

fantasmă（お化け）、laşitate（卑怯）、matinal（朝早い•午前の）、melodios（調子の良い）、misterios（神秘の）、rozǎ（バラ）、a saluta（挨拶する）、terasă（テラス）［ボリンティネアーヌも］；brav（勇敢な）、demoazelă（令嬢）、franc（フランクな人）、grav（重大な）、ierarhie（階級）、iluzie（幻想）、indiscret（慎みのない）、marş（行進）、peisaj（風景）、a prefera（より好む）、rezon（理由）、rezonabil（理に適った）、solenel（荘厳な）、suflu（呼吸）［C.ネグルッジも］；anomalie（異常）、argument（論拠）、civilizaţie（文明）、complement（補足）、contradicţie（矛盾）、elementar（初歩の）、fantastic（空想的な）、fantazia（空想）、formulă（公式）、pedant（衒学者）、reacţionar（反動主義者）、rezervă（予備）、soluţie（解決）、voiaj（旅行）［アレク•ルッソも］；abuz（乱用）、arbitrar（独断的な）、a consulta（相談する）、a eczila（追放する）、a legaliza（合法化する）、a maltrata（虐待する）、personal（個人の）、simpton（徴候）、vagabond（浮浪者）、armonios（調和の取れた）、atac（攻撃）、conversaţie（会話）、a exalta（熱狂させる）、fatal（宿命的な）、idealism（観念論）、materialism（唯物論）、palid（蒼白な）、pension（寄宿学校）、piramidal（ピラミッド型の）、a profita（儲ける）、provizie（食糧の貯え）、prizonier（囚人）、prozaic（散文的な）、radios（明るい）、reverie（幻想）、sistem（体制）、a triunfa（勝つ）、a vizita（訪問する）、voiaj（旅行）［ヴァシレ•アレクサンドゥリも］。

この類いのリストをより充実させるためには、紙幅が足りない。しかしながら、フランス語から非常に頻繁に借用された単語、特に1848年世代の作家達の作品に現れる借用語は、必ずしも元の形態で保存されてはいない：a brila（光り輝く）、caos（混沌）、concherant（征服者のような）、seanţă（会合）、a dispoza（指図する）、a mepriza（見下す）、dezir（希望）、solenel（荘厳な）、sujet（臣下）、a grinţa（歯を軋しらす）、suvenir（土産）、ierarşie（階級）、retirat（退役した）、volonter（自発的な）。その他、たくさんの単語が文語ルーマニア語の発展過程において放棄された。それら

は一時的にルーマニア語の単語として存在したものである。しかしながら、フランス語起源の大多数の単語は、文語ルーマニア語に根深く残った。

フランスの文化的影響とは異なり、イタリアの文化的影響は、ルーマニアのあらゆる所で明らかであった。その上に、イタリアとの接触の方がフランスとの接触よりも時間的に早かった。モルドヴァの主教アンフィロヒエ•ホティニウル［18世紀］とワラキアの宮内大臣コンスタンティン•カンタクジーノ［1650〜1716年］は、自分達の作品の中に既に幾つかのイタリア語の単語を導入してあった［cf.A.ロセッティ、B.カザク、L.オヌ『文語ルーマニア語史 I』339頁］。しかし、ワラキアのヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスク［1802〜1872年］やモルドヴァのギョルゲ•アサキ［1788〜1869年］の着実な努力の結果、文語ルーマニア語の中にイタリア語の要素が広まったのは、特に19世紀のことであった。アサキは文学と愛国心でイタリアに接近した［cf.La Italia『イタリアにて』の中に次のような詩片がある: Un roman al Daciei vine la străbuni ca să sărute／Ţărna de pe-a lor mormînturi şi să-nveţe-a lor virtute（ダキアのローマ人が今や祖地に来て口づける／教会墓地内の彼らの永遠の遺骨と彼らの美徳は、消え去らない）; アサキの広めた単語として、melanconia（物悲しさ）、solenitate（荘厳）、fortună（幸運）、astuţie（明敏）、bandiera（旗）、focolar（炉床）、vendeta（復讐）、などを挙げることができる］。他方、ヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスクは、ルーマニア語があらゆる面で、その良き姉妹であるイタリア語に近付くべきであると考えた言語学者であった。1839年以降、ヘリアーデはイタリア純粋主義•ルーマニア語のイタリア語化を試みた。ヘリアーデはその著書 Pararelism între limba română şi italiană「ルーマニア語とイタリア語の類似点」［1840年］の中で、イタリア語とルーマニア語は元々イタリアで話されていた同一言語の方言であった、と断言した。そのような訳で、彼はルーマニア語の中にあるスラヴ語•トルコ語•ハンガリー語•ギリシア語の要素を、イタリア語の要素で置き換えるように努めた。例えば、自らの Vocabular de vorbe streine în limba română『ルーマニア語の中における外国語彙』

［1847年］の中で、bătămînt（鼓動）、bătăiare（動悸）、baticor（心臓の動悸）、astut（狡猾な）、dignitate（尊厳）、demnitate（威厳）、opulent（富んだ）、prepotent（横暴な）、などを、それぞれ、ルーマニア語の bătaie（鼓動）、bătaie de inimă（心臓の鼓動）、viclean（狡猾な）、vrednicie（美徳）、bogat（富んだ）、などの代わりに推進した。更にヘリアーデは、oglindă（鏡）、mîndrie（誇り）、oboseală（疲労）、clopot（鐘）、などという単語を、それぞれ、spechiu 又は specol, fiertate, fatică, campană に置き代えるように努力した。

そのような誇張にも係わらず、ルーマニア語の次の時代の発展段階において、アレクサンドゥル•オドベスク［1834〜1895年］やジョルジェ•カリネスク［1899〜1965年］といった博学の作家達の作品を通じて、次のような新語が教養ルーマニア語彙の中に入った: opulent（豊かな）、prepotent（横暴な）、demnitate（威厳）、dignitate（尊厳）、など。ヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスクの放縦も、イタリア語起源の単語がルーマニア語において無意味であるという考えに我々を導く必要がなかったわけである。ルーマニア語におけるイタリア語の影響を研究する学徒達は、1850〜1880年の間と今世紀にかなりのイタリア語彙がルーマニア語に入って来たという考えで一致している。acerb（苦い•鋭い）、a aclama（歓呼して迎える）、a acompania（同伴する）、adulator（追従者）、a agita（乱す）、amant（恋人）、amor（恋•愛）、antepenultim（終わりから２番目の）、asasin（暗殺）、a aspira（熱望する）、atitudine（態度）、aură（微風）、avariţie（貪欲）、aventură（冒険）、avocat（弁護士）、などの単語を導入したのはヘリアーデである。しかしながら、他方、beatitudine（深い幸福）、colegiu（学校）、conaţional（同じ国の）、consiliu（協議会）、docent（講師）、domestic（家）、などの単語は、直接イタリア語からルーマニア語に入って来たものである。マリン•Z.•モカーヌとマリア•クザは、それぞれ、博士論文［未刊］において、現代語の複数の辞書に基づいて、ルーマニア語におけるイタリア語の単語目録を作製している。

他方、19世紀初頭のルーマニア語彙における新語について語る時、文語ルーマニア語の「ロマンス的西欧化」は、実質上ロシア語との接触の影響を受けたという事実を認めなければならない。ロシアとトルコの間で取り交わされたアケルマン協定［1826年］とアドリアノープル条約［1829年］によって、ワラキア公国とモルドヴァ公国はロシアの保護領となった。ワラキアにおいては1831年に、そして、モルドヴァにおいては翌年、Réglement organique「基本法規」が制定され、それによってルーマニアの農業•工業•商業が発展し、資本主義の関係に有利に働いた。同時に、数々の近代的な制度が樹立されて、時代にマッチした西欧型の政治的•行政的諸機構が確実なものと成った。19世紀初頭のロシア自身、18世紀のフランスの啓蒙主義の影響を受けていた。

フランス語起源の近代的な行政•政治に関する術語が数多くロシア語を通じてルーマニア語に入って来た。ヨルグ•ヨルダンは、Influenţe ruseşti asupra limbii române『ルーマニア語におけるロシア語の影響』［ルーマニア•アカデミー紀要、シリーズ C I、4、ブカレスト、1949年］の中で、次のような単語と形態がロシア語起源であるとしている: vacanţie［今日では vacanţă（休暇）］、esenţie［今日では esenţă（本質）］、rezidenţie［今日では rezidenţă（住居）］、-ţie の語尾を有する数多くの新語［しかしながら、我々は『ロマンス諸語の中におけるルーマニア語の特異性』2、116-122頁で、条件付きの賛成意見を述べた］、complect（完全な）、caiet（ノート）、comitet（委員会）、などといった形態。「基本法規」を抜粋してみると、ロシア語を通じて入って来た政治•行政に関する次のような多数の単語が現れる: sesie［今日では sesiune（開会）］、misie［今日では misiune（使節）］、reglement［今日では regulament（規則）］、finanţ［今日では finanţe（財政）］、そして、次のような、ロシア語そのもの; cinovnic（官吏）、delă（任務）、ocîrmuire（政府）、ofis（法令）、など。更に、次のような単語もロシア語起源である---ヨーロッパの国々を指す名詞: Anglia（イギリス）、Rusia（ロシア）、などと、当時の軍事用語: polcovnic（大佐）、porucic

(少尉)、更に、アクセント•パターンが -érie のような次のもの: aetilerie (砲兵隊)、cavalerie (騎兵隊)、など。ロシア語の単語がフランス語の単語と同じ時期にルーマニア語に入って来た。実際、ルーマニア諸公国において、フランス語を流暢に話すロシア人の将校達が、フランス文化とフランス語を伝播するのに、ある程度積極的な役割を果した。

38. 19世紀における教養ルーマニア語の問題点

19世紀後半における教養ルーマニア語の幾つかの傾向を見逃すべきではない。トランシルバニアとルーマニア［この場合、ワラキアとモルドヴァを指す］の緊密な文化的接触は、真にラテン的傾向を支持する、トランシルバニア学派［特にペトゥル•マヨール］の考えが、カルパチア山脈を越えてワラキアとモルドヴァに入る原因となった。Tentamen criticum in originem, derivationem et formam linguae romanae in utraque Dacia vigentis vulgo valachicae『西ダキアにおいて話される、俗にワラキア語と呼ばれるルーマニア語の起源•派生•形態についての論評』［ウイーン、1840年］の中で、アウグスト•トゥレボニウ•ラウリアン［1810〜1881年］は、ルーマニア語のラテン的構造の「完全な純正」を支持した。彼によると、barbarismi（外国語法）は”（a Traiani temporibus in hodiernum diem mutatem non esse formam), exceptis barbarismis per commercium cum undique circumdatibus vicinis nationibus introductis qui quamquam in ipsam grammaticam formam nullum exercuerint influxum, tamen linguae puritatem sat spurcaverunt”（文法形態に何ら影響を与えなかったとは言え、隣接する近隣諸国との接触で導入され、言語の純正さをかなり汚した外国語法を例外としても、［トラヤーヌスの時代から今日に至るまで形態が変化していない］ラテン語を）「汚染した」［cf.L.シャイネアーヌ Istoria filologiei române『ルーマニア言語学史』1892年、162頁］。I.C.マッシムと共にアウグスト•トゥレボニウ•ラウリアンは、Dicţionarul limbei române『ルーマニア語辞典』2巻［ブカレスト、1871年］を企画し、ルーマニア語のラテン語要素をも収録した。次に Glossariu care coprinde vorbele d'in limb'a straine prin originea sau form'a loru, cum şi celle de origine indouiosa『起源や形態が外来語であったり、疑わしい起源の単語を含むルー

マニア語辞典』［1877年］を出版し、その中にスラヴ語•トルコ語•ハンガリー語•近代ギリシア語起源の単語やその他の単語を収録している。ルーマニア語の起源をラテン語化するという企て［辞書の3つの巻を、ă, î, ş, ţ, z, j などの非ラテン•アルファベットを除く人工的な語源的綴りによって補うつもりであった］は、あまりにも膨大すぎて実現しなかった。文語ルーマニア語が確立された時代と国において、A.T.ラウリアンは、異なる社会•政治•国家的条件下でルーマニア人の住む他の場所［＝トランシルバニア］でならば有効であったであろう理論的原理を、時代錯誤的に再考しようとした。ある意味において、A.T.ラウリアンはトランシルバニアにおいてティモテイ•チパリウ（1805〜1887年）によって述べられた理論に従った部分もあったと言える。T.チパリウは「現在の状況下でできるだけ純粋な言語で書き、死んでしまったり、忘れられたり、見捨てられたりした形態•単語•記号などを復興させるために、スラヴ語や他の要素を放棄し、それらを、他に仕方のない場合にはローマの複数の方言から借りた単語で置き代えるために、ルーマニア語から非ラテン的要素を"追放"する」という考えの「トランシルバニア学派」の伝統を受け継いでいた［Principia de limba şi de scriptura『言語と書記の原理』ブラシウ•ブラージ、1866年、4頁］。T.チパリウが提案したのは、ラテン語•イタリア語の要素を借用するこよによって、ルーマニア語のラテン語性を「回復」せしめようとすることであった。更に、T.チパリウは、ラテン語の語源的綴りをルーマニア語で用いることを提案した。そして、複数の綴り方が行われていた場合、最も語源に近い形が用いられるべきだと主張した。

しかしながら、強調されなければならないのは、トランシルバニアにおいては、それらの考えは自らの長い栄光の歴史に適した政治的諸権利を奪われたルーマニア人によって闘われた社会的•国民的闘争の表現であったのに対して、カルパチア山脈のこちら側のルーマニア［モルドヴァ公国とワラキア公国の、ルーマニア人民によって準備され、長らく期待された統一国家］においては、ラテン語化の考えは同じような反応を得ることができなかった、

ということである。そのような訳で、me gaudiu forte de ve vedere in bona sanita（あなたがお元気で私は嬉しく思います）や una rondinella nu face primavera（燕一羽で春にはならぬ）のように書くことがルーマニア語のラテン語性と統一を守ることであると考えた「純粋」ラテン語推進論者達は、アレク・ルソ（1719〜1859年）を初めとし、ヴァシレ・アレクサンドゥリ（1821〜1890年）やアレクサンドゥル・オドベスク（1834〜1895年）などといった作家達の反感を買うことになった。

それらの作家達は、[「衒学」、「学者の言語体系」、そして更に、「学問の宴会」という風刺を用いて] 学者達の反語法、そして特に、人々の言葉は長い歴史的過程の帰結であるという考えに反対した: ルーマニア語は、「国民の心を歌う言葉・民謡の言葉の集まり・宗教書の翻訳家達が用いた言葉・我々の信条の言葉・古の歴史家達の言葉・歴史の言葉の集まりと共に」始まるのである [アレク・ルソ]。国民の文語となるべきものは、ラテン語の体系ではなくて、「ルーマニア人のいる所ならどこででも書かれ聞かれる共通語」でなければならない。生きている言葉同様に古い言葉を頼りにするというこれらの考えは、「大衆の歴史的」傾向と呼ばれるようになった [19世紀後半において実用的にも理論的にも教養ルーマニア語の基礎作りを試みた種々の理論に関する全体的な問題に関しては、ミカエラ・マンカシュ Istoria limbii române literare. Perioada modernă. Secolul al 19-lea『文語ルーマニア語史 近代 19世紀』ブカレスト、1974年5-29頁、及び、シュテファン・ムンテアーヌ、ヴァシレ・D.・ツァラ Istoria limbii române literare『文語ルーマニア語史』ブカレスト、1978年、134-159頁を見られたい]。

このように非常に正当化された批評にも係わらず、A.トゥレボニウと T.チパリウのラテン語化の傾向の影響で、数多くの新しい単語が文語ルーマニア語に入って来た: aerofagie（呑気症）、articulatoriu（発生の）、factură（特徴、後に、送り状）、fisură（亀裂）、famat（有名な）、fluctuant（変動する）、など。これらは今日のルーマニア語でも専門用語としても用いられているが、最初にラウリアンとマッシムのルーマニア語辞典に現れたもの

である。ルーマニア語の教養語彙の形成に寄与したラテン語推進派の人達に関する厳密な評価は、未だに行われてはいない。

39. ティトゥ•マヨレスク

評論家ティトゥ•マヨレスク（1840〜1917年）の活動は主に、1867年にルーマニア•アカデミー協会［会長はヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスク］となり1879年にルーマニア•アカデミー［ワラキア人•モルドヴァ人•トランシルバニア人•ブコヴィーナ人、そしてマケドニアのルーマニア人達からなる国の科学者集団］となるルーマニア文学協会の設立［1866年］と関係している。ルーマニア•アカデミーは、ヨン•ヘリアーデ•ラドゥレスク、T.チパリウ、ギョルゲ•バリツィウ、ヴァシレ•アレクサンドゥリ、C.ネグルッジ、A.T.ラウリアン、I.C.マッシム、C.A.ロセッティ、ティトゥ•マヨレスク、A.フルムザキ、I.G.スビエラ、V.A.ウレキア、ヨン•カラジアーニなどの歴史家•言語学者•知識人•作家達を含んでいた。

長い議論の末1869年に、ルーマニア•アカデミーは、z, ş, ţ の変わりの di, si, ti, ci の使用といった、ラテン語推進派の語源に忠実に書くという正書法、casa'a（その家）の例のように定冠詞の前のアポストロフィーの使用や、アクセント記号の使用、更に、語源的に正しい二重子音の使用などを制定した。ティトゥ•マヨレスクは 1866年に Despre scrierea limbei române『ルーマニア語の表記法について』を発表してあったが、1867年と1873年に再度同じ問題と取り組んだ。彼はルーマニア語の表記に関して、語源的要素を幾つか残すものの、音声的表記の原則を制定した；文字は有意味の発音、すなわち、音素［本質的に論理的な記号で、単なる音声記号ではない］を表すのに用いられるべきであると最初に主張したのは、ティトゥ•マヨレスクである。そのようにして、ルーマニア語における音声的表記の基礎が確立した。ティトゥ•マヨレスクの表記に関する提案は、1880〜1881年に公式に採用された。そして、1889年に O.デンスシアーヌによって批判され、ティトゥ•マヨレスク、O.デンスシアーヌ、ヨン•ビアーヌ、ヤコブ•ネグルッ

ジなどから成り立つ委員会で再検討された結果、より音声的表記に近付いた; そして、その音声的表記は、ルーマニア•アカデミーの1904年の決定に委ねられた。しかし、その決定においても、「語源的必要性」によって正当化された表音文字の原則から逸脱したものが複数あった。1953年にルーマニア語の正書法規則が又セクスティル•プシュカリウの指導の下に変更が加えられ、1953年にはアレクサンドゥル•グラウール、ヨルグ•ヨルダーン、エミル•ペトゥルヴィッチから成るアカデミー委員会によって、ルーマニア語表記の語源的表記法の様相が更に排除された。現行のルーマニア語の表記法は、実際のところ、ティトゥ•マヨレスクによって基礎が与えられたと言える。語源的表記から表音的表記へと相次いで改定が成され、形態的統一の原則があるものの、本質的には表音的である: 異なる形態には異なる表記、同一語形変化には同一の表記---ea（彼女は)、しかし、ia［英語の he takes、西語の él toma に相当]、aceea（あの•あれ）［女性単数の指示形容詞•代名詞]、しかし、aceia（あれら（の））［男性複数指示形容詞•代名詞]、など。

我々が文法に対して重要な推奨をし、断固たる態度を示しているのも、同じくティトゥ•マヨレスクのお陰である。Limba română în jurnalele din Austria『オーストリーで発行された書籍におけるルーマニア語』［実質上は「トランシルバニアで発行された書籍」を指す］の中で、ドイツ語法•方言•冗長を指摘し、次に Beţia de cuvinte『冗漫』［副題は Studiu de patologie literară『文学病理学研究』] を風刺し、Direcţia nouă în poezia şi proza română『ルーマニアの詩と散文の新しい方向』［1872年］と În contra neologismelor『新語法に反対して』［1881年］の中で冗長•文体的不精•誇張を弾劾したティトゥ•マヨレスクは、教養ルーマニア語の中における新語の存在についての自説を開陳した。ティトゥ•マヨレスクは「外国風の•混成の文体」を非難し、「真にルーマニア語的文体」を願望する意志を表明した。このようにしてティトゥ•マヨレスクは、借用語のない、大衆を印象づける尊大な欲求のない文語の採用を提案した。他方、新しい概念を表すための自然な要求を満たすために採り入れられた新語は、確かに彼も受け

入れた。ティトゥ•マヨレスクの用心深く、かつ現実主義的な態度は、1866〜1880年の典型的な現象である、ロマンス諸語やラテン語からの新語の借用という長い過程において折良いものであった。彼の断固たる見解は、幾つかの翻訳•借用語を奨励したものの、外国語からの借用の傾向を和らげた---înrîurire（影響）［ドイツ語の Einfluss から］; luare aminte（注意）［字義的には「気に掛けること」の意］; a se mărgini（〜の範囲内に止まる）［a se limita の代わり］; propăşire（進歩）［＜ラテン語の progressus］、など。そして、不必要な大量の新語を排除した。

しかし、今上で述べたことでティトゥ•マヨレスクが純粋主義者であると考えることはできない: 彼自身 stimulant（刺激的な）、tendenţă（傾向）、prelecţie（大学の講義）、などといった新語に頼ったこともある。尤も、他方において、彼は新語の乱用を非難し、既存のルーマニア語の単語を教養ルーマニア語に復活させるために、ルーマニア語の現在の可能性に関する精密な知識［împrejurare（状況）、binecuvîntare（祝福）、などという単語を誇ることは circumstanţă（状況）、benedicţiune（祝福）、などといった単語が不要であるということになる］を推奨した。ティトゥ•マヨレスクは、ルーマニア語とルーマニア文化の持つ特徴を保存し奨励するという考えに導かれて、ルーマニア人の言語であるルーマニア語の長所を確信していた。ミハイ•エミネスク、ヨン•クレアンガ、I.L.カラジャーレ、ヨン•スラヴィッチといったルーマニア文学の偉大な古典作家達が、「ジュニメア」（青年）文学協会の偉大な spiritus rector（青年指導者魂）の近くにいて、成功したり、文学に対するマヨレスクの教訓に従ったのは、決して単なる偶然ではない。モルドヴァ、ワラキア、トランシルバニアにおいて彼らはルーマニア人の生きた伝統の説明者であり、彼ら自身の創造になる革新的能力と伝統との係わりあいの意識を伝統に加えた。ティトゥ•マヨレスクの「国民的方針」が勝利を得たのも、上記の偉大な作家達を通じてであった。芸術的文体が生まれ、純文学に対する規範が確立され、科学用語が近代化された。しかし、特に文語ルーマニア語をルーマニア人全ての言語にすることによって、文語ルーマニ

ア語の構造を統一する過程が強化された。その時正に、ルーマニア語がフランス語•イタリア語•スペイン語•ポルトガル語と並んで、「ロマンス世界の教養語」となったのである。

19世紀の最後の20年間は、ルーマニア語とルーマニア文化をヨーロッパ人が認知する真の「黄金時代」であった。その黄金時代は、ティトゥ•マヨレスクの指導の下に、運の良い政治的•経済的条件下で到来した。

40. 20世紀のルーマニア語　ルーマニアの統一時代

世紀の変わり目、特にトランシルバニアにおいて、ルーマニア語の統一が最高潮に達した。1918年の国家統一に向けて、カルパチア山脈の向う側において、地方語と一般大衆的要素がまだ残っていた。しかし、ルーマニア・アカデミーの正書法規則の具体化、複数の大辞典［B.P.ハスデウのEtymologicum Magnum Romaniae『ルーマニア語大語源辞典』1886〜1893年とセクスティル・プシュカリウの指導と編集による Dicționarul Academiei『アカデミー辞典』1910〜1913年］の出現が、教養ルーマニア語の統一化傾向を強化した。

統一ルーマニア国家の樹立で、1918年以降文語ルーマニア語の諸規則の統一化が以前にも増して好まれた。その時以来、単語は、そして特に新語に関しては、地方語はもう存在しなかった。そのような訳で、語尾に -ție を有する新語は -(ț)iune を有する新語よりも一般的になった。その結果、語尾の -(ț)iune は、［ロマンス語型の］科学的・哲学的文体に徐々に限られていった。同様に、pasaj（通過）、peisaj（風景）［＜フランス語 paysage］、masaj（マッサージ）、などのように -aj の語尾を有する新語を排除して広まっていった。語形は、特にフランス語的な語形が、第一次世界大戦以降、以前にも増して広がりを見せた。フランス語からの新語がファション化した：文学や演劇は、次のような単語の侵略を受けた：a bulversa（転職させる）［＜フランス語 bouleverser］、a clama（要求する）、cozerie（閑談）、a deboșa（堕落させる）、eboșă（スケッチ）［＜フランス語 ébauche］、a flana（散歩する）［＜フランス語 flâner］、a se mefia（信用しない）［＜フランス語 méfier］、rezolut（決心した）、revolut（成就した）［＜フランス語 révolu］、sejur（一時逗留）［＜フランス語 séjour］。これらの単語は多分、中流・上流の都市に住むブルジョアから発生した、より高い次元の社

会的•文化的起源のものであったと思われる。これらの単語は、セクスティル•プシュカリウ Limba română I［1940年］やヨルグ•ヨルダン Limba română actuală. O gramatică a "greşelilor"『現代ルーマニア語「誤用」文法』［ヤシ、1943年］によって、当時はまだルーマニア語に同化していないと考えられていた。

フランスの評論の直接的影響で、エウジェン•ロヴィネスクやポンピリウ•コンスタンティネスクといった批評家達やルーマニアの報道機関は、非常に多くの新語を導入した: abscons（難解な）［＜フランス語 absconse］、fabulaţie（仕上げ）、alert（警戒）、adjuvant（補助の）、cuplu（カップル）、fervoare（熱情）、lejer（弛んだ）［＜フランス語 léger］、a exulta（非常に喜ぶ）、a ghida（案内する）、a deregla（調子が狂う）［＜フランス語 dérégler］、rectiliniu（直線の）、tern（光沢のない）［＜フランス語 terne］。これらの単語の多くが、今日まで生き永らえている。このことに関して、ジョルジェ•コシュブク（1866〜1918年）やアレクサンドゥル•ブラフツァ（1858〜1919年）といった詩人や、潜在的な意味や長所を持った大衆語を発見し広めようと試みた散文作家兼劇作家のバルブ•シュテファネスク•デラヴランチャなどの反動•反作用も見逃せない。

今世紀初頭、ルーマニア農民に対する、昔からの家長的•社会的•国民的志向を非難する文学的風潮が出現した: 評論家の G.イブラレアーヌ［1871〜1936年］、並びに「田園生活の記述における写実主義」を提起するヤシの雑誌 Viaţa Românească『ルーマニア人の生活』に集まった作家達によって推進された poporanism（人民主義）; 偉大な歴史家で作家のニコラエ•ヨルガ［1871〜1940年］によって「人民のための文学」を書く目的で、歴史的•田園的インスピレーションを養う目的で創刊された Sămănătorism『種蒔き』。トランシルバニアにおいて、ルーマニアとの統一後も長い間にわたって、知識人の間においてさえ、ドイツ語やラテン語化された形での新語がまだ多く流布していた: senátor（貴族員議員）、muzícă（音楽）、などの単語におけるアクセントの位置に注意、adjunct（副官）、advocatură（弁護士

の仕事)、filială（支店)、acurat（正確な)、などといった単語の使用。新語の幾つかは、カルパチア山脈を越えてワラキアやモルドヴァに入って来た: probă（検査•証拠)、ドイツ語の Unterreden（会談する）の翻訳借用として、既存の conversaţie（会話）の代わりに convorbire（会話)、corectură（矯正•校正)、coloratură（着色)、claviatură（キーボード)、rentabil（有利な)、învăţăcel（徒弟）[ドイツ語の Lehring（徒弟）の翻訳借用]、a sista（止む）[cf.フランス語の sister（止まる)]、şahist（チェスの指し手）[cf.ドイツ語の Schachist]。そのような訳で、新語がトランシルバニアからワラキアやモルドヴァへと、統一ルーマニアの一部として入って来た訳である。セクスティル•プシュカリウは Limba română I [1976年、410-415頁] の中で、ルーマニアの統一のお陰で流通域の広まったトランシルバニアの新語の調査•追跡を行った。ブカレストやヤシのフランス語ファンには知られていなくて [帝都ウイーンで話されていたフランス語に多分起源があり] トランシルバニアに存在していたフランス語の単語に特に注目した: anticar（古本屋)、cupeu（個室車両)[＜フランス語 compartiment coupé]、marş!（行け!）[犬をけしかける時の声]、peron（プラットホーム）[＜フランス語 perron]、などがトランシルバニア経由でルーマニアに入り、オーストリーでフランス語として用いられていた単語である。

1,900年以降、教養ルーマニア語の形態的規範も変化を蒙った: ある種の形容詞の複数形の安定化---「新しい」の男性単数形 nou、女性単数形 nouă、複数形が男性 noi、女性 nouă の代わりに共に noi となった; grădine（庭)、cireşe（桜)、ţărance（農婦)、といった女性複数形が語尾の -e を -i にして、それぞれ、grădini, cireşi, ţărănci となった。この傾向の結果、音節数を減らし、音韻変化を生ぜしめることによって複数化した名詞の数が増加した; 接続法のワラキア的形態が増加した---să stea [スペイン語の que quede（彼が止まる）に相当]、să dea [スペイン語の que dé（彼が与える）に相当] ---să steie、să deie といった異形を統一したもの、尚これらは、să spună [スペイン語の que diga（彼が言う）に相当]、să rămînă

[スペイン語の que quede（彼が止まる）に相当]、să ţină［スペイン語の que tenga（彼が持つ）に相当]、să cadă［スペイン語の que caiga（彼が落ちる）に相当]、să trimită［スペイン語の que envíe（彼が送る）に相当]、などの形態が、それぞれ、să spuie、să ţie、să cază、să trimită、などといった形態の代わりに文語ルーマニア語で広く用いられているのと平衡している；直説法完了過去3人称複数 fusese［英語の had been、スペイン語の había sido に相当]、rămăsese［英語の had remained、スペイン語の había quedado に相当]、などに語尾 -ra が益々用いられるようになった：fuseseră、rămăseseră；第2活用動詞の多くが第3活用動詞に編入された：a aparea（現れる）、a disparea（消える）、a ramînea（止まる）、a ţinea（保持する）、などが、それぞれ、a apare, a rămîne, a ţine となった。文章構成法も、特に1918年の国家統一後、変化した。まず最初に挙げなければならないのは、フランス語•イタリア語•ドイツ語などの文章構成法からの幾つかの翻訳借用である：a ajuta pe cineva の代わりに ajuta cuiva（誰かを助ける）［対格の代わりとしての与格の使用]、a schimba de plan（自分の計画を変える）［フランス語の changer de plan 又は projet から]、a se teme pe cineva（誰かを恐れる）の代わりに a teme pe cineva（誰かを恐れる）［cf.フランス語の craidre quelqu'un]、a urma după cineva の代わりに a urma cuiva（誰かの後に従う）［cf.フランス語 succéder à quelqu'un］；不定詞の使用：credea a spune（彼は言おうと思った）［cf.フランス語 il croyait dire]、obosea de a-l urmări（彼はその男を追うのに疲れた）［cf.フランス語 il fatiguait de le suivre]、mă interesează a şti（私は知ることに興味がある）［cf.フランス語 il m'intéresse de savoir]、a se cere（求める）、a se dori（自ら欲する）、a se vrea（欲する）、などの動詞は再帰動詞として、あるいは過去分子と共に受動態としても用いられる：se cere ştiut（知られる必要がある）、se doreşte iubit（彼は愛されることを欲している）、se vrea stimat（彼は尊敬されることを欲している）、など。関係代名詞 în care［英語の in which、スペイン語の en que に相

当］の代わりとして unde の使用---într-un veac unde poeţii abundă（詩人の多い世紀）。

今世紀の文語ルーマニア語の文章構成法の別の傾向として、教養語に浸透する口語的構造への接近がある。このことに関して、代名詞が属格の時の同格の一致の消失を挙げなければならない---casei acesteia（この家の）は casei aceasta となる。cf.同種の誤用として、să dăm ajutor colegei noastre copleşită de treburi（あまりにもたくさんの仕事を負担している我々が仲間に手を差し延べるよう）［女性形容詞 copleşite に一致が見られない］；数を表す副詞的限定語 întîi（最初の）の形容詞的限定詞への変化; clasa întîi（一流）が clasa a doua（二流）や clasa a treia（三流）の類推で、clasa întîia となる；限定的構造で、序数の代わりに基数を用いる---anul al doilea（第２年目）や secolul al douăzecilea（第20世紀）の代わりに anul doi や secolul douăzeci を用いる；目的語の特定な人間が動詞の後にある時も、直接•間接目的語の弱形代名詞での重複---am văzut pe tata（私は父を見た）が l-am văzut pe tata となり、am dat mamei cartea（私は母に本を与えた）が i-am dat mamei cartea となった；具体的な人名の複数直接目的語の前に前置詞 pe を用いることがより少なくなるという現象---publicul îi încurajează pe sportivii români.

文語ルーマニア語において、最後の２つの傾向は、第一次世界大戦と第二次世界大戦の間に一層明白になった。ヨルグ•ヨルダンは、1930年と1940年の間のルーマニア語の記述にとって極めて重要な２つの仕事に従事した: Limba română actuală. O gramatică a "greşelilor"『現代ルーマニア語「誤用」文法』［ヤシ、1943年］---この中で著者は、統一後のルーマニア語の「活力」•「逸脱」•「革新」などを考察した；Stilistica limbii române『ルーマニア語文体論』［ブカレスト、1944年］---この中で著者は、いろいろな作家達から集めた大量の資料を用いて、ルーマニア語を書いたり話したりする表現手段（文体的現象）を考察した。現代ルーマニア語に関する多くの言語的•文体的側面が、セクスティル•プシュカリウ Limba română I

［1940年］とアレクサンドゥル・グラウール Tendințele actuale ale limbii române『ルーマニア語の現代の傾向』［1968年］によって、明らかになった。

41. 現代ルーマニア語

現代ルーマニア語と言う時、1930年から1940年の間に話され•書かれたルーマニア語を中心に、そして一般的に手に届く書物を基にして、現代ルーマニア語の一定の特質を明らかにすることができる。

まず最初に言えることは、近年ルーマニア語は、かつて名詞に見られた数多くの揺れを解決した事である---şcoală（学校）の複数形として şcoale と şcoli があった中から後者を、stradă（街路）の複数形として strade と străzi があった中から後者を、coală［紙の］（一枚）の複数形として coale と coli があった中から後者を、そして coadă（尾）の複数形として coade と cozi があった中から後者を標準形として選んだ。このことは、ある種の名詞の複数語尾を -e から -i に変えるという、上に述べた傾向を示すものである。同じ傾向は、ルーマニア語の以前の段階においても見られた；16〜19世紀の複数形と今日の複数形を比較してみると、talpe（足の裏）、aripe（翼）、săgete（矢）、porunce（命令）、barbe（顎）、などが今日、それぞれ、最終的に tălpi, aripi, săgeţi, porunci, bărbi に変わっている。女性複数語尾 -i への傾向は今日、telegramă（電報）［telegrame という複数形も］、îngheţată（アイスクリーム）［îngheţate という複数形も］、mahala（場末）［mahalale という複数形も］、limonată（レモネード）［limonate という複数形も］、などの名詞の口語の複数形が、それぞれ、telegrămi, îngheţăţi, măhălăli 及び mahalăi, limonăţi、などと成っていることにも見られる。ただし、これらの口語の複数形は、文語では認められていない。

-i の語尾を有する複数形は、形態面で単数と明確に区別するという特徴を有している。今までの研究成果からして、ルーマニア語は構造的に単数と複数を明瞭に区別する言語であると言うことができる。ルーマニア語においては、性の区別は数の区別程は重要ではないと言える。同じような状況にあ

るのが中性名詞の複数形である。中性名詞の複数形においても類似した2つの形の間に揺れが見られた---nucleuri---nuclee(中核)、hipodromuri---hipodroame（馬場)、aerodromuri---aerodroame（飛行場)、reveruri---revere（襟の折り返し)、などは -e を語尾に有する形が優勢になった。確かに、中性複数の語尾として -uri を放棄する一般的傾向があるとは言えない; 多くの中性名詞が -uri という語尾を含む2つの複数形を保存している: corpi---corpuri（体)、timpi---timpuri［前者は主に「時」を表すのに、後者は殆ど「時勢」を表すのに用いられる]、chibrituri---chibrite（マッチ)、contacturi---contacte（接触)、ghişeuri---ghişee（切符の窓口)。しかしながら、揺れを示す中性名詞［それらの多くは新語である］の中で、統一化が -e の優勢という形で現れているという事実を指摘しなければならない。例は多くないが、2つの異なる形態が、それぞれ異なる意味を有しているものがある: rapoarte（レポート）---raporturi（関係）; resorturi（メカニズム）---resoarte（部局）［例えば、resoartele de specialitate（特別部局）という風に用いられる]。

中性名詞複数形には、更に別の問題がある: 多くの中性名詞が -e の語尾と同様に -i の語尾［男性名詞］をも示す: hexametru（六歩格）---hexametre 又は hexametri; robinet（栓）---複数形は robinete 又は robineţi; exploziv（爆薬）---複数形は explozive 又は explozivi; compus（混合物）---複数形は compuse 又は compuşi［この形は科学の「化合物」の意]。男性形が今日頻繁に科学•技術用語として用いられていることが分かる: condensatori（コンデンサー)、curenţi（電流)、cristali（水晶)、---これらの例のように、特別な意味を有するものが多い。-e の語尾を有する複数形は広い一般的な意味を有し、主に日常語で用いられている。

性に関して、ルーマニア語は良く知られているように、名詞に可動のカテゴリーがある。現代の文語ルーマニア語は、つい最近まで男性だけが有していた職業や肩書を指す名詞の性に関して、一定不変の傾向がある。今日では女性がそのような職業に就くようになってはいるが、その職業名に女性名詞

がない場合がある: ministru（大臣）、vatman（市街電車の運転手）、milițian（警察官）、forjor（鋳物職人）: その職業に就いている人が女性であることを示すためには femeie（女性）という名詞を借りて複合形にする:femeie-ministru（女性の大臣）、femeie-forjor（女性の鋳物職人）、femeie-milițian（女性の警察官）。他方、一般の口語にはそのような文語に対する強い反動が現れて、補充的形態が用いられる: vătmăniță（市街電車の女性運転手）、milițiancă（女性の警察官）、sudoriță（女性の溶接工）---これらは徐々に文語にも取り入れられつつある。このようにして、-iță という接尾辞は、つい最近までは愛称のための特別な接尾辞であったが、女性形を作るというより広い用法を獲得した。-iță というこの女性接尾辞には -ă という片割れがある: avocat（弁護士）---女性形は avocată、inginer（技師）---女性形は ingineră、arhitect（建築家）---女性形は arhitectă; -ă という女性接尾辞は、文語において大衆的な -iță と競争して用いられている: inginer（技師）---女性形は ingineriță 又は ingineră である。

格変化の問題は、固有の人名の地位を明確にしている。人間や固有名を表す個別の男性名詞の属格と与格は、普通名詞とは異なる: lupului（その狼の•に）、しかし、lui Ion（ヨンの•に）; 今日後者の形式は家族名にも適用される---lui Popescu（ポペスクの•に）---他方、家族名は19世紀までは総合的な属格•与格を用いて、例えば、Bălcescului（バルチェスクの•に）のように言われていたのであるが、今日では例えば、lui Popescu（ポペスクの•に）のように言う。分析的な属格と与格は明らかに普及しつつある; 女性名でさえも、そして、総合的な属格や与格のみを有していた名詞さえも、上に見たように、分析的になりつつある: lui Maria（マリアの•に）、lui Ana（アナの•に）、など。以上のような訳で、現代ルーマニア語は、固有の人名の属格と与格を形成する手段を統一する傾向にあると断言することができる。

呼格についても、幾つかの注釈が必要である。良く知られているように、ルーマニア語は、-e で終わる男性呼格をラテン語から保持している。そして、男性とバランスを取るために、女性の呼格をスラヴ語から借用して用い

ている: Alexandro!（アレクサンドゥルよ!）; bunico!（おばあちゃん!）。更に、ルーマニア語自身の呼格形も作り出された: -ia の語尾を有する女性名詞は、-ie という呼格語尾を獲得した: Maria（マリア）---Marie!（マリアよ!）。他方、男性名詞は、-e の他に、-ule という新しい語尾を作り出した: Radule!（ラドゥよ!）、Neagule!（ネアグよ!）、Ionescule!（ヨネスクよ!）、ticălosule!（卑怯者め!）、prostule!（馬鹿者め!）。呼格には次のような方言形もある: mămăi, mamă-hăi!（お母ちゃん!）、moşuleu, moşule-hău!（おじいちゃん!）。

口語ルーマニア語に見られるこれらの呼格形の多様性の反動として、文語では呼格として主格を用いるという反対の傾向が見られる。この点に関して重要なのは、教養語でMaria!（マリアよ!）、Ana!（アナよ!）、Sandu!（サンドゥよ!）、tovarăşi!（皆さん!）といった呼格が、簡単文や呼びかけに普及しつつあることである。更に、主格単数が呼格よりも距離がある［更に、謙虚な態度を表す］と考えられる傾向にある。主格が特に遠くから見知らぬ人を呼ぶ時の呼格として用いられるので、ある人達にとって tovarăşul profesor!（先生!）、tovarăşa profesoară!（［女の］先生!）などは、それぞれ、tovarăşe profesor! や tovarăşe profesoară! よりも親しみを感じさせない。そのような訳で、呼格形と主格形が同じ呼格を「距離のある」又は「形式的な」呼格と呼ぶことができるであろう。

名詞と冠詞との使用関係に言及する必要がある。ルーマニア語には複数形の地名が数多くある---Bucureşti（ブカレスト）、Galaţi（ガラチ）、Iaşi（ヤシ）、Ploieşti（プロイエシュティ）---これらには男性複数定冠詞が付加される: Bucureştii, Galaţii, Iaşii, Ploieştii。定冠詞のこの用法は、今日では次第に廃れていく傾向にある: Bucureştii Noi（新ブカレスト）、Calea Bucureştilor（ブカレスト街）。上記の地名は単数で定冠詞を付け加える: Bucureştiul, Galaţiul, Iaşiul, Ploieştiul。そのような形態的変化の理由を探り当てるのは、困難である: 地名の形態は、地名の単数の意味と一致している。

冠詞と関係のある形態的困難は、cinema（映画）、radio（ラジオ）、studio（スタジオ）、zero（ゼロ）、verso（裏面）、などのような母音で終わる新語にある。このような単語はルーマニア語の形態体系から逸脱している: cinemá は -a で終わっているが sarmá（ロールキャベツ）みたいに女性名詞ではなく中性名詞であり、rádio, stúdio, zéro, vérso などはアクセントのない -o で終わっていながら、tablóu（絵）、cargóu（貨物船）、lingóu（インゴット）、trusóu（嫁入り道具）[cf.フランス語 tableau, cargot, lingot, trousseau]［これらは冠詞を伴うことができる］などと異なり、-u を付加することができなかった。そのような訳で、定冠詞を必要とする時の体系におけるこのような非一貫性を解決するために、文語では cinemá を cinematograful に置き換えたり、他の名詞をアクセントのない -o で終わる単語に同化させたりした; このようにして、特別な形態的型---冠詞の有無によってアクセントの位置が変わる名詞---が生まれた:rádio-radióul, stúdio-studióul など。当然のことながら、このアクセントの位置の変わる現象は、アクセントのなかった複数形にまで範囲を広げている: radióuri, studióuri など。形態面において、代名詞は現代ルーマニア語で数多くの問題を提起している。3人称単数において、男性代名詞 el や女性代名詞 ea の他に、それぞれ、dînsul, dînsa [de と ipse との複合形] が出現した。元々この代名詞は前置詞句とのみ用いられていたのであるが、今日ではモルドヴァで尚その用法が認められている: la dînsul（彼と•彼の所に)、pe dînsul（彼を)。文語において一般化した結果、文章構成法上の dînsul の用法が主語にも及び、そして最近では属格•与格にまで範囲が広がり、el と非常に似た用法を担っている。そのような訳で、3人称単数の人称代名詞として、男性の el と dînsul、女性の ea と dînsa という2つの対が誕生するという段階に至った訳であるが、両者を区別するために、dînsul, dînsa を丁寧な表現とする用法が芽生えてきている。今日では、非常に数多くの話者にとって、dînsul は尊敬の意味合い---徐々に廃れかかってはいるが、時として皮肉がこもった dumnealui と同じ尊敬の意味合いを

表すようになっている。同じことが男性複数形 dînşii、女性複数形 dînsele、両性の複数形 dumnealor についても言える。

強意の同定代名詞は、性と数によって異なる複雑な語形変化を有している: 1人称男性単数 eu însumi（私自身）、1人称女性単数 eu însămi（私自身）、1人称男性複数 noi înşine（私達自身）、1人称女性複数 noi însene（私達自身）、3人称男性複数 ei înşişi（彼ら自身）、3人称女性複数 ele înseşi（彼女ら自身）、など。口語ルーマニア語［尤も文語ルーマニア語はそうではないが］は、この複雑な形態を însăşi［又は、頻度はより落ちるが însuşi］に統一し、eu însăşi（私自身）、tu însăşi（君自身）、などと語尾を単純化している。実際問題、強意の代名詞は文語に限られ、口語では形容詞 singur［eu singur（私一人•私自身）］か副詞 chiar［chiar eu（私でさえ•私自身）］が取って代わっている。

最後に大きな問題がある。つまり、所有代名詞に言及する必要がある。現代ルーマニア語において、所有の概念を表す人称代名詞 lui の代わりに所有代名詞 său／sa（彼の•彼女の•その）が非常に幅広く用いられている。lui が大衆的であると考えられているので、それを排除しようとする傾向がある。その結果、său／sa がより「教養のある」文体的要素となり、より丁寧な表現となっている: cartea sa（彼•彼女の本）の方が cartea lui（彼の本）よりも教養のある表現であると考えられている。教師など、我々が尊敬する人達に対しては、lui よりも său を好む傾向にあり、そうすることによって所有代名詞を用いてより適切な敬意を払うことができる。

現代ルーマニア語に特有な数多くの変化が動詞にも現れている。まず最初に動詞の活用型の変化について述べなければならない: 最も重要なのは、-ea と -e の語尾の混同である---a dispărea（消える）→ a dispare、a plăcea（気にいらす）→ a place、a scădea（減少する）→ a scade、a rămînea（止まる）→ a rămîne、a ţinea（保持する）→ a ţine、a umplea（満たす）→ a umple［最後の3語は文語として完全に認められている］; fácem → făcém、báteţi［スペイン語の batimos（我々が打つ）に相当］

→ bătéţi; a bate（打つ）→ a bătea、a face（する•作る）→ a făcea［文語では認められてはいない］。他方、興味深いことに、文語の発音においてさえ、第3変化動詞［-e］の2人称複数形は、前接的弱形代名詞が添加された時、しばしば、第2変化動詞［-ea］の現在時制の時のように、語尾にアクセントがくる。dúceţi!（運んで下さい!）、しかし、ducéţi-vă!（行って下さい!）、úmpleţi!（満たして下さい!）、しかし、umpléţi-vă!（あなたのグラスを満たして下さい!）。

2つの異なる活用に属する動詞がある: a curăţa, a curăţi［共に「奇麗にする」の意］。しかし、時として両者間に少し意味の差が見られることがある: a (se) îngrija（心配させる）、しかし、a se îngriji（良く手入れする）。新語の場合、そのような形はより明らかである: a prefera, a preferi（より好む）、a succeda, a succede（継承する）、など。一般的に言って、文語ルーマニア語では、不定詞の語尾に -a を有する方がより好まれるようである: a prefera, a succeda, a curăţa, a datora など。

今日のルーマニア語において、動詞の活用語尾に関する別の問題として、直説法現在の語尾がある: 第1活用動詞 -a に対する -ez と第4活用動詞 -i に対する -esc など。これらの活用語尾を放棄する傾向が徐々に明らかになってきている: bănuieşte（彼は疑う）、destăinuieşte（彼は告白する）、bombăneşte（彼は不平を言う）に対して、それぞれ、bănuie, destăinuie, bombăne などがある。又、se conformează（彼は順応する）、consemnează（彼は記録する）、disperează（彼は絶望する）、alochează（彼は配分する）、ignorează（彼は知らない）、などの形態の他に、se conformă, consemnă, disperă, alocă, ignoră などの形態が現れている。時として両者に意味の差異があることがある: eu acord（私が与える）---eu acordez（私が調律する）。

更に、今日のルーマニア語に広範に存在する、動詞的意味を有する新しい構造の出現に注目する必要がある: a da randament（有効である）、a da în folosinţă（落成式を行う）、a transpune în viaţă（本当に成る）、a

ridica problema（問題を提供する）、a crea condiţii（条件を付ける）、a ridica nivelul（水準を上げる）、a lua pauză（休憩する）、a da（o înaltă）apreciere［高く］（評価する）、a trasa（ca）o sarcină（任務を与える）、a organiza munca／lucrul（仕事•活動を企画する）、a se înscrie la cuvînt（話す順番を決める）、a veni în întîmpinare（出迎える）、など。これらは殆どが政治用語や新聞口調である---tineretului studios i s-au creat condiţii noi de viaţă şi de învăţătură（新たな生活•勉強条件が若い学生達の思いどおりになった）、congresul...a dat o înaltă apreciere muncii perseverente şi multilaterale desfăşulate（議会は...達成された辛抱強い•多角的な仕事を高く評価した）; 又、専門用語にも現れる---a da în folosinţă（使えるようになる）、a organiza munca（仕事を企画する）---しかし、これらは日常会話の中でもしっかりと通用している。

上のような新しい動詞句は、ルーマニア語の統語的［かつ表現的］可能性を豊かにした。現代口語ルーマニア語に関する限り、動詞句を1語に縮約するという反対の傾向に言及する必要がある: a prezenta o comunicare（学会発表をする）→ a comunica、a face un referat（レポートを提出する）→ a refera、a da rebuturi（廃棄処分にする）→ a rebuta、a da un impuls（衝撃を与える）→ a impulsiona、a face un conspect（要約する）→ a conspecta、a face lectură（読む）→ a lectura、a trage concluzii（結論付ける）→ a concluziona、など。

更に、不定詞と不定分詞［ジェルンジウ］の用法の変化を強調する必要がある。この分野において、文学や外国語の構造の影響---前置詞と不定詞句---が今日益々広まっている。数十年前まで、不定詞と前置詞との結合というと、a înceta de a mai vorbi（話すのを止める）とか s-a ridicat pentru a vorbi（彼は話をするために立ち止まった）といった例に見られるように、前置詞は主として de と pentru に限られていたが、今日では la, în, prin などという前置詞も見られる: autorul se limitează la a alege două teme（その著者は2つのテーマを選ぶだけである）、s-a specializat în a

experimenta（彼［女］は実験を専門とした）、merge pînă la a contesta adevărul（彼［女］は敢えて真実を述べる）、sfîrşeşte prin a spune ...（彼［女］は〜と言い終えた）。これらは、前置詞の後に名詞を要求するというルーマニア語の典型的な文章構成法にそぐわないものである: se limitează la alegerea（彼［女］は選択するだけである）、s-a specializat în experimentarea（彼［女］は実験を専門とした）、merge pînă la contestarea（彼［女］は敢えて〜に反論する）、など。実際、これらの不定詞構文の幾つかは、ジェルンジウ［不定分詞］によって置き換えることも可能である: sfîrşeşte spunînd（彼［女］は言い終える）、s-a specializat experimentînd（彼［女］は実験を専門とした）。このような例における不定詞の使用は、一般的発話の普通の構造と文学的表現を区別するという［たいていの場合、意図的な］傾向によるものである。

ジェルンジウ［不定分詞］に関して、次のような構文の中での幅広い用法、［フランス語の影響を受けて］特に限定的用法が目につく: trebuie să fi răsunat un cîntec vorbind despre moartea unui cioban（ある羊飼の死を語った歌が響いていたに違いない）; limba literară este o realizare superioară sintetizînd posibilităţile de exprimare ale limbii întregului popor（文語は、全人民の言語の中にあって、表現の可能性を総合する、高い功績である）; このような構造もまた完全に文語的である。より広く用いられている用法は、ジェルンジウが節全体•文全体の代わりになっている構文である: răscoala a început în nordul Moldovei, din satul Flămînzi, cuprinzînd apoi centrul Moldovei şi extinzîndu-se în toată ţara（一揆が北モルドヴァのフラムンジ村から端を発し、モルドヴァの中心から全国へと広まっていった）; a murit în 1872, fiind îngropat la Mînăstirea Soveja（彼は1872年に死去し、ソヴェジャ修道院に埋葬された）。

最近になって、前置詞•接続詞•代名詞•関係副詞などによって表される統語的関係体系に著しい変化が見られ、それらが互換的に成ってきている。

特に最近の書き言葉において、前置詞を別の前置詞で置き換える傾向が明

らかに成ってきている。商業の面においては、もう数十年も前から materiale din fier（鉄製品）、produse din lapte（乳製品）、preparate din carne（肉製品）、などといった、前置詞 din を de の代わりに用いる傾向が広まっている。この現象は何も新しいことではない。しかしながら、この傾向は最近になって確実な地歩を得つつある：前置詞 de［英語の of, for に相当］は他の場合でも、例えば、目的地•使用•目的などを表す限定的構文の中で、他の前置詞に取って代わられている：articole pentru sport（スポーツ用品）、carne pentru gătit（調理用の肉）。同じような現象がここに含まれている。前置詞 pentru はかつては副詞的関係［目的•原因•関係］を表していたのだが、上記の articole pentru sport のような限定句全体に今や入り込んでいる。文法的類義性から、その機能を広めた例である。

それ故に、ある種の前置詞、特に激務に耐えている de, pe などの「意味的再解釈」、副詞的構造の限定的構造への接近化、換言すれば、前置詞句を同じ意味を有する前置詞で形成する方向への統一化が認められる。これは明確化への傾向と呼ぶことができるであろうか？ 他方、前置詞をある時代から別の時代へと更新する過程の現れであると、これらの事例をとらえることができる。このような代用は、ルーマニア語を書いたり話したりする人達によって行われた分析から生じたものである：比較研究をした結果、使用された前置詞がそれぞれの構文に適さなくなり、代用せざるを得ないと彼らは考えている。

統語的関係を表す文法的要素を意味的に分析してみると、文語における教養のある前置詞句［意味的に明瞭で機能的にも明確である］と、他方、日常会話で良く行われる一般的な前置詞句［多義•多機能の場合が多い］の対立に気付く。例えば、最近そのような競争は、a vorbi（話す）、a scrie（書く）、a spune（言う）、などといった議論の話題を指す補語•目的語の前で despre［英語の about に相当］と de［英語の of に相当］の競争が著しい。このような訳で、de が口語の中で頻繁に見られる要素であるのに対して、despre はより文語的で、より教養語で、文体的にも「知識人向き」で

あると言えよう。現状では、議論の話題を示す時には、前置詞の de を避けるという傾向が確実に地歩を得つつある: nu vorbeam numai despre ei (私は彼らだけのことを言っているのではなかった); era vorba despre viaţa care va veni după aceea (問題は今後の人生についてであった); pentru că nu putem vorbi aici despre toţi interpreţii (なぜならば、私達はここで演奏者全員について話をすることができないので)。それは間違っているという性質の問題ではなくて、一定の好み•目的の問題である: そのような構文において、despre は格式的な文語調に特有なものに成っている。

現代ルーマニア語のいろいろな面での革新は、一般的に言って、2つの相対立する傾向の結果である: 最初の革新は、教養ある人達の発話に現れ、口語に一般的に現れる構文を避けるためのものである; それは文体に形式と高尚さを与える傾向である。

数々の事実がこの傾向から生じている。再帰受動が迂言的受動に取って代わられる傾向を挙げる必要がある: la 1 februarie s-a deschis şcoala de calificare (2月1日に訓練学校が開校された)、astăzi se va vota legea pensiilor (今日年金法が通過するであろう) の代わりに、それぞれ、la 1 februarie a fost deschisă şcoala de calificare 及び astăzi va fi votată legea pensiilor と言われる。明確化が要求された結果、このような傾向が生じたのであろう。

そのような現象は、現代ルーマニア語の「文語的」性質を高め、日常的な言葉使いから遠ざけ、人工的な•より高い文体に仕上げようという傾向を示すものであると言える。現状では、現代ルーマニア語の形式［偏重］が確実に地歩を得つつある。

相反する傾向が、下から生じている。つまり、口語的構造が文語ルーマニア語に侵入しているのである。numai［英語の alone に相当］の代わりとしての doar［英語の only に相当］、astfel［英語の thus に相当］の代わりとしての aşa［英語の so に相当］、などの出現、pentru ca să［英語の in order that に相当］の代わりとしての ca să［英語の to に相当］といっ

た接続詞句や前置詞句の縮小、反対に vreau să spun（私は言いたい）の代わりとしての vreau ca să vă spun（私はあなたに言いたい）といった目的を表す表現の出現、în ceea ce privește（〜に関して）の代わりとしての în ce privește（〜に関して）の出現、関係代名詞の不変化詞としての用法の出現などは全て、現代文語ルーマニア語の構造を単純化する、口語への接近化傾向を示すものである。

現代ルーマニア語におけるこれらの2種類の革新的出来事は、口語と文語との相互交換作用がかつてよりも遥かに大きいということを証明するものである。一方において、口語ルーマニア語の「形式（偏重）化」、日常生活やジャーナリズム用語［専門用語や文芸評論をも含む］を通じての、文語の口語化といった現象が見られる。ルーマニアの最も辺鄙な村にまで届く労働者階級の教育施設•書籍•学校•ラジオ•テレビなどが、現代ルーマニア語の文語的要素の広まりに積極的に寄与している。他方、数多くの大衆語の形態や構造が共通語に徐々に染み込んできている。これらは特に、今日の社会主義文化への大衆の接近から生じている現象である。政治家や商業組合の活動を通じて、そして又、集団的に国を指導するに際して、労働者の中からいろいろな分野の人達の参加を得て、口語においても文語においても、上流階級の人達や大衆語の担い手である工場労働者•農業労働者達に発言権が与えられたからであろう。

これらの問題点に関して、次のような書物を参考にすると有益であろう：ヨルグ•ヨルダン、ヴァレリア•グツ•ロマロ、アレクサンドゥル•ニクレスク Structura morfologică a limbii române contemporane『現代ルーマニア語の形態的構造』［ブカレスト、1967年］、ヴァレリア•グツ•ロマロ Corectitudine și greșeală『正用と誤用』［ブカレスト、1972年］、N.ミハイエスク Dinamica limbii române literare『文語ルーマニア語の発達』［ブカレスト、1976年］、及び Carte despre limba românească『ルーマニア語についての本』［ブカレスト、1972年］。これらの書物はすべて、ヨルグ•ヨルダンがルーマニア語の「洗練」と呼んだ事柄を扱っている。この洗練の

問題を扱う、ルーマニア社会主義共和国アカデミー委員会も発足した。文学雑誌•文化雑誌［特にジョルジェ•イヴァシュクの編集する România literară『文学的ルーマニア』］が定期的に「言葉のコラム」や「言葉の記録」を設けて、現代ルーマニア語の様々な問題を扱っている。

上記のような研究は、むしろ厳格ではなく、時として無視された形での、口語に特有な単語•形態•構文の侵入に着目している: stăruieşte（彼は固執する）、bănuieşte（彼は疑う）、perimează（古臭くなる）、concurează（彼は競う）、inventează（彼は発明する）、などの代わりに stăruie、bănuie、perimă、concură、inventă、などといった動詞語尾の放棄; 新語の抽象名詞の前での不定数冠詞［＝不定形容詞］nişte の使用---nişte relaţii（何らかの関係）、nişte poziţii（何らかの地位）。これは、通常の語彙を避けるために用いられる新語の形式的な、そして•あるいは、大袈裟な使用と平行している: 例えば「食事をする」という場合の a lua の代わりに a servi を用いること; a face（する）の代わりに a realiza（完成する）を用いること; 文学の関係で a crea（創造する）や creaţie（創造）の使用; mulţime（多量）の代わりに multitudine を用いること、など。現代ルーマニア語を「洗練」する問題は、一人言語学者のみの仕事ではない。教養ルーマニア語を守り発達せしめるために、特に作家達を初めとして、色々な分野の知識人達によって支えられるべき問題である。

42. 結論 ロマンス諸語の中におけるルーマニア語の特異性

言語•文化•社会を関連付けて研究してきたこのルーマニア語史概説の最後に当たり、ロマンス諸語の中におけるルーマニア語の主たる特徴を考えてみたい。疑問の余地なく、最も決定的な特徴は、ダキアに齎されたラテン語の大衆的•口語的な社会•文化的状態である。ローマによる征服以前にも、ラテン語とラテン•アルファベットは、ダキア王達の宮殿に知られていたに違いないが、ダキアに齎されたラテン語は、文化との関連の程度が劣っていた。エウトゥロピウスが言うように、ex toto orbe romano（ローマ世界のあらゆる所から）来た植民者達によって良くも悪くも話されたダキアのラテン語は、ローマ帝国の他の場所で話されるラテン語とは、文化的にも社会的にもおおよそ異なっていた。既に見たように、ダキアで話されたラテン語には res（物事）、causa（原因）、gaudium（喜び）、mater（母親）、pater（父親）、などといった文学的教養語に欠ける一方で、lingula（スプーン）、lucrum（物事）、mamma（母親）、recens（最近の）、equa（雌馬）、などといった大衆語や、西ロマンス的アクセントを有する fícatum（肝臓）［ギリシア語的アクセントに従ったもの］に対して、ficátum といったラテン語のアクセント•パターンを採用したり、vet(e)ranus（退役兵）［>老人］、pavimentum（舗装）［>土地］、といった具体的な意味を有する単語を保有していることを信じるに正当な理由がある。この種のラテン語は、書くことを奨励する学校によって得をするとは限らない。それ故に、ダキアにおけるラテン語の孤立化を表していたり、文化変容の過程にある人々の社会的•領土的分裂を反映していると主張することができるであろう。文化変容は、バナト地方の都会化された地域、西トランシルバニア地方、西オルテニア地方においては強く、生活様式が優れて農業的•田園的なダキアの東北部におい

ては遅く弱かった。それ故に、ダキアのラテン語は、村と町の間に言語的差異と、より範囲は狭くなるものの、文化的差異を生んだ。ラテン語はダキアのたいていの場所において、文化的含意のない lingua franca（混成共通語）であった。

5～6世紀から始まるダキアの孤立化と共に、西ロマンス世界との接触は分断された。その時以来、ラテン語は、ビザンティウムの政治的•行政的構造並びにキリスト教によって生まれた sui generis（特殊な）ギリシア的ラテン語の中におけるビザンティウムを通じて支えられていた。歴史家ニコラエ•ヨルガ［1871～1940年］がいみじくも指摘していたように、ビザンティウムはラテン的影響の源たる「ローマの基礎」を作った［行政的見地からすると、スキティアは7世紀までラテン語の国であった］。ダキアにおいてラテン文化は、3～4世紀に広まったキリスト教という味方を得た。歴史家ヴァシレ•パルヴァン［1882～1927年］は Contribuţii epigrafice la istoria creştinismului Daco-Roman『ダキア•ローマのキリスト教の歴史に関する銘文試論』の中で、ダキアにおける271年以前のラテン的キリスト教を「論理的•歴史的必要性」であると考えた。他の歴史家達は、ローマの政府関係者達がダキアを放棄する以前にキリスト教徒がダキアに存在していたことを証明した。トラヤーヌスが齎した植民者達の中にもキリスト教徒がいたことも不可能ではない。テルトゥリアーヌスやオリゲーヌスといった、古代の作家達によって提供された証拠は、275年以前に既にキリスト教が下ドナウ河まで広まったという事実を指摘している。セクスティル•プシュカリウは、Limba română I『ルーマニア語　I』［1976年、335頁］において、「ルーマニアのキリスト教用語の田園的特徴」を指摘した。しかしながら、ダキアのラテン語は、ラテン世界との文化的関係が無いままであった；ラテン語は、ダキアでは孤立化した集団•共同体で話されていた。

上に示したように、ルーマニアの言語学者達は、ルーマニア語が派生したラテン語のこのような特徴を強調した。I.A.カンドゥレアは Straturi de cultură şi straturi de limbă la popoarele romanice『ロマンス系民族に

おける文化•言語の層』［1913年］において、ルーマニア人がその歴史を通じて発展せしめた基本的なラテン文化に由来しているという事実に注目した; O.デンスシアーヌは Păstoritul la popoarele romanice『ロマンス系民族の放牧』［ブカレスト、1913年］において、過去のルーマニア文明の牧歌的•農業的性質を強調した。セクスティル•プシュカリウは Locul limbii române între limbile romanice『ロマンス諸語の中におけるルーマニア語の位置』［ブカレスト、1920年］の中で、ルーマニア語と成ったラテン語の「粗野」を強調した: "La langue roumaine ne s'est donc conservée que dans la mesure où elle était parlée par un élément rustique."（ルーマニア語は、田園的要素によって話された範囲内でのみ保たれている)。

そのような状況下で、口語的構造がルーマニア語の文法の枠組の中で優勢であるのも、極めて自然である。Individualitatea limbii române între limbile romanice『ロマンス諸語の中におけるルーマニア語の特異性』の中で我々が示したように、ルーマニア語の主たる文法構造は、他のロマンス語程厳格でもなく複雑でもない; 他のロマンス語と異なって、放縦で、しばしば最適であり、そして含意的差異を提供している。

これらの特徴の１つは、他のロマンス語においてよりも頻度の高い「重複•反復」構文である。限定のメカニズムを分析してみると、ルーマニア語におけるその豊かさに気が付く; prietenul meu cel bun（私のこの良き友）［英語に直訳すると *friend the my the good］、casele alea marile（それらの大きな家）［英語に直訳すると *houses the those great the のように限定詞が３つもある］、などの例は、限定詞の「肥大」を証明するものである。重複化への同じ傾向は、îl văd pe el（私は彼を見る）［対格の２つの代名詞に注意］という「不連続」代名詞構文や fata pe care o iubesc（私が愛する少女)、fata al cărei tată este inginer（父親がエンジニアであるその少女）などに見られる、限定的形容詞節中の重複代名詞化の中において明らかである。ルーマニア語の目的語構文は、他のロマンス語と比較して、／＋人間／ という明らかな特徴を非常に好むことが分かる。これはちょう

ど、/＋格/がルーマニア語の接語代名詞において関与的なのと全く同じである。

以上のような事柄に、nu mi-a dat nimic（彼は私に何もくれなかった）［英語に直訳すると *he never gave me nothing］、nu a venit nimeni（誰も来なかった）［英語に直訳すると *nobody never came、cf.イタリア語 nessuno è venuto、フランス語 il n'a rien vu（彼は何も見なかった）、口語フランス語 il a rien vu］といった二重否定や、口語ルーマニア語 Ce mai faci (tu), Radu(le) ?（ラドゥ、どうかね？）、unde stai (tu) ?（君はどこにいるの？）［cf.イタリア語 Come stai? Dove vai?、スペイン語 ¿Por qué dices esto?（なぜ君はそう言うの？）、丁寧な表現として ¿Cómo está usted?（お元気ですか？）がある］、などといった、重複対置代名詞化を用いた疑問の表現などを加えると、ルーマニア語は「重複口語構造」が優勢なロマンス語である、と言うことができるであろう。

ルーマニア語において、そのような構造は厳密に非難されたことはなく、西ロマンス諸語と同じく、合理化された「文法的」文化の種類であるとされている。このことはレオ・シュピッツァーによって Bulletin Linguistique XIII［1945年］の中で、ルーマニア語の呼格の存在と発展について話をしている時に注目された:「ルーマニア語はロマンス語である；合理化され、統一されたフランス語よりも「自然の状態」により近い言語である」［37頁］。このようにして、ルーマニア語はロマンス諸語の中にあって、レト・ロマン語・サルジニア語・南イタリア諸方言と同じく、その唯一の発展軸が「言語忠節」であったロマンス語である、と分類できるであろう。

カルパチア山脈周辺とドナウ河流域のラテン語［それが変化してルーマニア語となったのであるが］が東ヨーロッパの支配的文化圏に統合されたのは、そのような条件下であった。まず最初にギリシア・スラヴ文化圏［ビザンティウム・スラヴ・近代ギリシアの文化変容が生じた時］に、そして18世紀以降、西ラテン語・ローマに志向して行った。「ロマンス的」西欧志向は、ラテン起源・ラテン的連続を認識したルーマニア人の中において、国の真正に関する

主張に好都合であった。ルーマニア語における「言語忠節」に今や「文化忠節」が加えられた。

この本の数章にわたって、16世紀に Cartea de cîntece『歌の本』や Tatăl nostru『主の祈り』などと共に始まり、17•18世紀に非ラテン的介入を経て［モルドヴァの歴史家達のグリゴレ•ウレケ、ミロン•コスティン、ディミトゥリエ•カンテミール、並びにワラキアの歴史家達によって］拡大され、18世紀中葉になってやっと全域に広まり、1830〜1840年以後に総合的に勝利を得たロマンス世界への「再編入」が数世紀にわたって歩んだ道を、我々はたどって来た。

ルーマニア語は、その歴史的•地理的困苦にも係らず、ロマンス語であるのみならず、近代ロマンス文化を有する言語でもある。それ故に、この本の結末に当たり、ラテン的文化•行政官僚、換言すれば、ラテン的西欧による我々のラテン性の放棄の完全な意味を評価することができる。世界のこの地域でラテン語が話され、他の国でのようにこの地域がローマ世界にとって「失われていない」のは、着実で強力な信念の力によって、ローマの言語［maiestas romana（ローマの威厳）］［cf. シェルバン•パパコステア Les Roumains et la conscience de leur romanité au Moyen Âge I『中世におけるルーマニア人とそのローマ性に関する意識 I』1965年、15頁以降］を何とか保つことができ、11•12世紀後に他のロマンス世界の人々と全く同じように、近代文化を再建することができた、地球上のこの狭い•孤立したラテン系共同社会の大いなる勲功である。

エウジェニウ•コセリウは、ルーマニア語のラテン性が西ヨーロッパに知られ、流布するようになったのは、自らのラテン起源を意識したルーマニア人自信の力によるものであるという事実を指摘した。ルーマニア語とルーマニア文化のラテン性は、長い困難な歴史を通じて、non pro gloria sed pro salute pugnare（栄光の為にでなく、生存の為に闘う）ことを余儀なくされたルーマニア人の仕事そのものに他ならない。

ルーマニア語を研究するということは、ラテン世界の広い異質の partes

Orientis（東部）からの移民者達や原住民達が統合された言語と文化におけるローマ世界の複雑に入り込んだ、そして時として矛盾した歴史を考慮することを意味する。それ故に、ルーマニア（語）のローマ性は、2,000年にわたるラテン語の伝統に対して忠実であるばかりでなく、ヨーロッパのロマンス世界の名声ある文化に対して同様に忠実な支持を意味する。

ルーマニア語の歴史をより良く知れば、我々はサムエル・ミクの次のような威厳のある永遠の格言を認識することができるであろう: mult iaste a fi născut român!（ルーマニア人として生まれたことは、何と素晴らしいことか!)。

主な参考文献

Academia Republicii Populare Române: Istoria României I, ブカレスト, 1960.

Academia Republicii Socialiste România: Istoria limbii române II (I. コテアーヌ編, ブカレスト, 1969).

Armbruster, A.: Romanitatea Românilor. Istoria unei idei, ブカレスト, 1972.

Banfi, Emanuele: Aree latinizate nei Balkani e una terza area latino-balcanica (Rendiconti dell'Istituto Lombardo di Scienze e Lettere 106, 1972, 185-223頁収録).

Banfi, Emanuele: Arcaismi fonetice nell'elemento latino del neogreco e la loro connessione con la fonetica dei dialetti italomeridional a vocalismo siciliano (Bollettino del Centro di Studi filologici e linguistici siciliano, XII, 1973, パレルモ, 5-17頁収録).

Bouvier, Jean Claude: Orientalité ou hyper-romanité du roumain (Dacoromania, 3, 1975-1976, フライブルク-ミュンヘン).

Brătianu, Gheorghe I.: O enigmă şi un miracol istoric: poporul român, ブカレスト, 1940.

Bahner, W.: Die lexikalischen Besonderheiten des Frühromanischen in Südosteuropa (Sitzungsberichte der Sächsischen Akademie der Wissenschaften zu Leipzig, 115, 3, ベルリン, 1970 収録).

Bartoli, M.: La spiccata individualità della lingua romena (Saggi di linguistica spaziale, トリノ, 1945, 139-151頁収録).

Candrea, I.A.: Elemente latine dispărute din limba română (大学講義録, ブカレスト, 1932).

Capidan, Th.: Aromânii. Dialectul aromâni, ブカレスト, 1932.

Caragiu-Marioteanu, Matilda: Compendiu de dialectologie română, ブ

カレスト, 1973.

Cartojan, N.: Istoria literaturii române I, ブカレスト, 1940.

Densuşianu, O.: Histoire de la langue roumaine I --- Les origines, パリ, 1901, II --- Le XVIe siècle, パリ, 1938.

Densuşianu, O.: Păstoritul la popoarele romanice, ブカレスト, 1913.

Densuşianu, O.: La vie pastorale chez les Roumains, パリ, 1914.

Densuşianu, O.: Cuvinte latine cu semantism păstoresc, ブカレスト, 1920.

Densuşianu, O.: Litratura română modernă, ブカレスト, 1943.

Diaconescu, Paula: Elemente de istorie a limbii române literare moderne, ブカレスト, 1975.

Dimitrescu, Florica: Introducere în fonetica istorică a limbii române, ブカレスト, 1967.

Dimitrescu, Florica(編): Istoria limbii române, ブカレスト, 1978.

Duţu, Al.: Coordonate ale culturii româneşti în sec. al XVIII-lea, ブカレスト, 1968.

Fischer, I.: Pan-roman sauf roumain (Revue Roumaine de Linguistique IX, 1964, 595-602頁収録).

Gheţie, I.: Istoria limbii române literare, ブカレスト, 1978.

Gheţie, I.: Baza dialectală a României literare, ブカレスト, 1975.

Gamillscheg, E.: Uber die Herkunft der Romänen (Sonderabdruck aus dem Jahrbuch der Preuss. Akad. Wissenschaften, ベルリン, 1940 収録).

Giurescu, C.C.: Formarea poporului român, クライオーヴァ, 1972.

Giurescu, C.C.: Istoria pădurii românesti din cele mai vechi timpuri pînă astăzi, ブカレスト, 1976.

Giurescu, C.C., Giurescu, D.C.: Istoria românilor din cele mai vechi timpuri pînă astăzi, ブカレスト, 1971.

Giurescu, C.C., Giurescu, D.C.: Istoria românilor I, ブカレスト, 1974; II, ブカレスト, 1976.

Goudet, Jacques: La romanité orientale. Considérations méthodologiques (Dacoromania, 3, 1975-1976, フライブルク-ミュンヘン 収録).

Graur, Al.: La romanité du roumain (Bibliotheca Historica Romaniae, Études, ブカレスト, 1965 収録).

Haneş, P.V.: Dezvoltarea limbii literare române în prima jumătate a secolului al XIX-lea, ブカレスト, 1904.

Iordan, Iorgu: Limba română actuală, ブカレスト, 1947.

Iordan, Iorgu: Limba română contemporană, ブカレスト, 1956.

Iordan, Iorgu: Importanţa limbii române pentru studiile de lingvistică romanică (Actele celui de-al XII-lea Congres de lingvistică şi filologie romanică I, ブカレスト, 1970, 67-76頁収録).

Ivănescu, Gheorghe: Istoria limbii române, ヤシ, 1980.

Lombard, Alf: La langue roumaine, une présentation, パリ, 1974.

Mancaş, Mihaela: Istoria limbii române literare: Perioadă moderna, Secolul al XIX-lea, ブカレスト, 1974.

Meyer-Lübke, W.: Rumänisch und Romanisch (Analele Academiei Române: Memoriile secţiei literare, 3, V, ブカレスト, 1930 収録).

Mihăescu, H.: Limba latină în provinciile dunărene ale Imperiului roman, ブカレスト, 1960.

Mihăescu, H.: Influenţa grecească asupra limbii române pînă în secolul al XV-lea, ブカレスト, 1966.

Mihăescu, H.: La langue latine dans le sud-est de l'Europe, ブカレスト, パリ, 1978.

Mihăilă, G.: împrumuturile vechi sud-slave în limba română, ブカレスト, 1960.

Munteanu, Şt., Ţâra V.: Istoria limbii române literare, ブカレスト, 1978.

Nandriş, O.: Phonétique historique du roumain, パリ, 1963.

Nay, André Du: The Early History of the Rumanian Language, イリノイ, 1977.

Niculesucu, Al.: Individualitatea limbii române între limbile romanice I, Contribuţii gramaticale, ブカレスト, 1965, II, Contribuţii socio-culturale, ブカレスト, 1978.

Niculesucu, Al.:Premesse sul problema dei rapporti culturali-linguistici italo-rumeni (Actele celui de al XII-lea Congres de Lingvistică şi filologie romanică II, ブカレスト, 1971, 893-904頁収録).

Oţetea, Andrei(編): Istoria poporului român, ブカレスト, 1972.

Pascu, Ştefan: Istoria României --- un compendiu, ブカレスト, 1974.

Pătruţ, I.: Studii de limba română şi slavistică, クルージュ, 1974.

Philippide, Al.: Originea românilor I, ヤシ, 1923, II, ヤシ, 1928.

Pippidi, D.M.: Contribuţii la istoria veche a României, ブカレスト, 1958.

Pippidi, D.M.(編):Dicţionar de istorie veche a României, ブカレスト, 1976.

Popescu, Emilian: Inscripţiile greceşti şi latine din secolele IV-XIII descoperite în România, ブカレスト, 1976.

Puşcariu, Sextil: Locul limbii române între limbile romanice (ルーマニア•アカデミー会員就任記念講演 XLIX, ブカレスト, 1920).

Puşcariu, Sextil: Le rôle de la Transylvanie dans le farmation et l'évolution de la langue roumain (La Transylvanie II, ブカレスト, 1938, 37-69頁収録).

Puşcariu, Sextil: Études de linguistique roumaine, クルージュ, 1937.

Puşcariu, Sextil: Limba română I, ブカレスト, 1940, cf. Vulpe

Magdalena 新編, 1976.

Puşcariu, Sextil: Cercetări si ştudii, ブカレスト, 1974.

Rosetti, Al.: Istoria limbii române, ブカレスト, 1978.

Rosetii, Al.: Thrace et latin dans l'Europe de sud-est pendant l'antiquité (Revue Roumaine de Linguistique, XXIV, 1979, 5, 431-434頁収録).

Rosetti, Al.: A propos de la place du roumain parmi les langues romanes (Beiträge zur romanischen Philologie II, 1963, 215-233頁収録).

Rosetti, Al.: Mélanges de linguistique et de philologie, コペンハーゲン-ブカレスト, 1947.

Rosetti, Al.: Mélanges linguistiques, ブカレスト, 1977.

Rosetti, Al., Cazacu, B., Onu, L.: Istoria limbii române literare, ブカレスト, 1971.

Russu, I.I.: Limba traco-dacilor, ブカレスト, 1959.

Russu, I.I.: Elemente autohtone în limba română. Substratul comun româno-albanez, ブカレスト, 1970.

Sanfeld, Kr.: Linguistique balkanique. Problèmes et résultats, パリ, 1930.

Siadbei, I.: Le latin dans L'Empire d'Orient, ヤシ, 1943.

Siadbei, I.: Arii lexicale în Romania orientală (Studii şi cercetări lingvistice III, 1957, 1, 17-23頁収録).

Siadbei, I.: Contribuţii la studiul latinei orientale (Studii şi cercetări lingvistice VIII, 1957,4, 467-491頁; II, 1958, 1, 71-91頁; IX, 1958, 175-194頁収録).

Tagliavini, C.: Originile limbilor neolatine (ルーマニア語訳アレクサンドゥル•ニクレスク, ブカレスト, 1977).

Weinreich, U.: Languages in Contact, ハーグ-パリ, 1968.

あ と が き

ルーマニア・アカデミーは、1953年以来用いられてきた正書法を、国民にアンケート調査をするなどして、1993年3月8日に改定した。今回の改定の主旨は「より平易に・より語源に忠実に」ということである。その結果、1953年以前に行われていて今回復活した正書法もある。本訳書においても早速その新しい正書法を用いるべきなのかもしれないが、原書が1981年の出版であるということ、文法の入門書でないということ、そして今回の改定が世界的に周知徹底するのに時間が掛かるであろう、などということを考慮して、原書のとおり1953－1993年の正書法を用いてある。

本書は1993年度大阪外国語大学学術情報出版の予算で出版されたものである。いろいろお世話になった委員ならびに附属図書館の係の方々に感謝申し上げる。同時にワープロのオペレーションは愚息によるものである。記して労をねぎらいたい。

著者略歴:

1927年ブカレストに生まれる。

ブカレスト大学卒業。ブカレスト大学文学博士。

現在ブカレスト大学教授，パリ大学客員教授。

主な著書:

Individualitatea limbii române între limbile romanice, Manual de lingvistica romanică，その他多数。

訳者略歴:

1943年佐渡に生まれる。大阪外国語大学文学修士。

ブカレスト大学文学博士（ロマンス言語学)。

現在大阪外国語大学教授。

主な著書:

ルーマニア語入門（泰流社)，スペイン語からルーマニア語へ（大学書林)，フランス語からスペイン語へ（大学書林)，イタリア語からスペイン語へ（大学書林)，スペイン語からカタルーニア語へ（大学書林)，など。

主な訳書:

ルーマニア民族と言語の生成（泰流社)，など。

大阪外国語大学学術研究双書10
ルーマニア語史概説

1993年11月30日発行

訳　　者　伊藤太吾（いとうたいご）

発 行 者　〒562　箕面市粟生間谷東8丁目1番1号
大阪外国語大学学術出版委員会

印 刷 所　〒531　大阪市北区中津6丁目13番20号
㈱アイジイ

ISBN4－900588－10－5

無断転載を禁ずる。

大阪外国語大学学術研究双書　既刊

1．レフ・トルストイと革命運動（1990）　エルヴィン・オーバーレンダー著
法橋和彦　監訳・解説

2．ロシア語アクセント研究（1990）　神山孝夫　著

3．社会言語学（1991）　フリチョフ・ハーガー　等著
乙政潤　訳

4．Dwelling Space in Eastern Asia（1991）　Richard ZGUSTA　著

5．ラ・アラウカーナ（第一部)(1992)　吉田秀太郎　訳

6．私の精神鑑定集（1992）　志水彰　著

7．モンタペルティ・ベネヴェント仮説　米山喜晟　著

8．古代ブルガリア語文法　イヴァン・ドブレフ　著
石田修一　訳